朝酌矢田Ⅱ遺跡
（Ａ～Ｄ区）

２０２２

島根県教育委員会

朝酌矢田Ⅱ遺跡
（Ａ～Ｄ区）

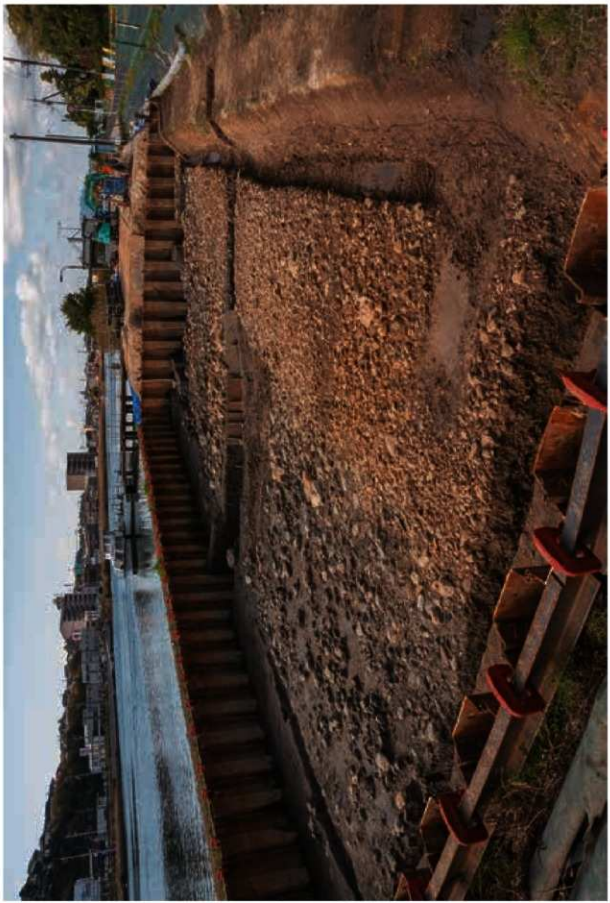
２０２２

島根県教育委員会

1．朝酌矢田Ⅱ遺跡　遠景（東から）

1.「朝酌渡」推定地と塩楯島（西から）

2. 朝酌矢田 II 遺跡から出雲国府跡方面を望む（北から）



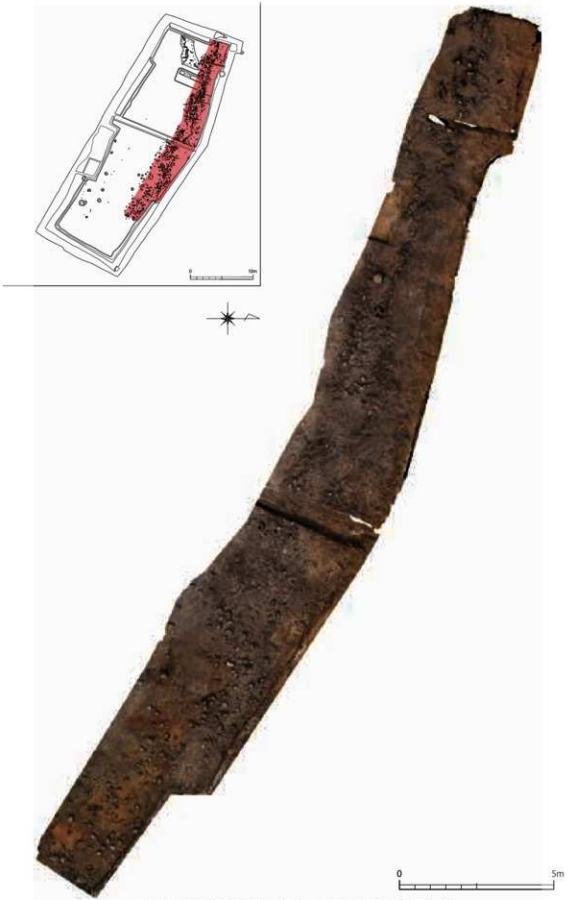
1．朝酌矢田Ⅱ遺跡Ｃ区　礫敷遺構（東から）

1．朝酌矢田 II 遺跡 C 区
出土須恵器 1

2．朝酌矢田 II 遺跡 C 区
出土須恵器 2

3．朝酌矢田 II 遺跡 C 区　作業風景（西から）

1．C 区　礫敷遺構の俯瞰オルソ図（三次元モデルより）



1．D区　礫敷遺構の俯瞰オルソ図（三次元モデルより）

序

本書は、島根県教育委員会が国土交通省中国地方整備局出雲河川事務所から委託を受けて、2019（令和元）年・2020（同2）年度に実施した斐伊川水系大橋川河川改修予定地内に所在する朝酌矢田Ⅱ遺跡の発掘調査の成果をとりまとめたものです。

朝酌町矢田地区は、奈良時代に編さんされた『出雲国風土記』に記載の明るい地域としても知られます。そのうちの1つである「朝酌渡（あさくみのわたり）」は、出雲国府から隠岐国へ通じる古代官道が大橋川を渡河する地点に設けられた渡し場ですが、これまでその実態は不明でした。

本書で報告する朝酌矢田Ⅱ遺跡では、多量の須恵器とともに奈良時代の礫敷遺構が見つかり、「朝酌渡」との関連が想定されます。また、古代官道に伴う渡し場関連施設の発見は全国でも稀であり、大変重要な成果です。今回の調査で、地域の歴史を明らかにし、古代出雲の景観を復元する上で貴重な資料を得ることができました。

本書がふるさと島根の歴史を伝える基礎資料として、学術ならびに歴史教育のために広く活用されることを期待します。

最後になりましたが、発掘調査および本書の作成にあたり、ご協力いただきました朝酌矢田地区の方々をはじめ、国土交通省中国地方整備局出雲河川事務所、松江市ならびに関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

令和4年8月

島根県教育委員会
教育長　野津　建二

例　言

1　本書は国土交通省中国地方整備局出雲河川事務所から委託を受けて、島根県教育委員会が令和元年度・2年度に実施した斐伊川水系大橋川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をとりまとめたものである。

2　本書の発掘調査対象遺跡および事業年度は下記のとおりである。
　令和元年度　発掘調査　朝酌矢田Ⅱ遺跡A・B区（松江市朝酌町1015-1外）1,600㎡
　令和2年度　発掘調査　朝酌矢田Ⅱ遺跡C・D区（松江市朝酌町1008-1・1012-3・1015-2）1,400㎡
　令和3年度　整理等作業・報告書作成

3　発掘調査は島根県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施した。現地調査は、朝酌矢田Ⅱ遺跡A・B区を廣江耕史、阿部賢治が担当し、同C・D区を岩崎孝平、阿部賢治が担当した。

4　発掘調査作業（安全管理、発掘作業員の雇用、機械による掘削、測量等）については、次の機関に委託した。
　令和元年度　株式会社庭の川島（松江市菅田町）
　令和2年度　株式会社庭の川島（松江市菅田町）

5　発掘調査および報告書作成にあたっては、次の方々から御指導をいただいた（五十音順、肩書は当時）。
　岩本　崇（島根大学法文学部 准教授）、大橋泰夫（島根大学法文学部 教授）、
　小山田宏一（奈良大学文学部 教授）、酒井哲弥（島根大学総合理工学部 教授）、
　花谷　浩（出雲弥生の森博物館 館長）

6　発掘調査に際しては、次の方々・機関から御協力、御助言をいただいた（五十音順、肩書は当時）。
　内田律雄（元島根県埋蔵文化財調査センター職員）、坂本嘉和（島根県埋蔵文化財センター 文化財主事）、平郡達哉（島根大学法文学部 准教授）、松本岩雄（島根県立八雲立つ風土記の丘 顧問）、渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）、朝酌公民館、松江市まちづくり文化財課

7　本調査に伴う自然科学分析は、次の機関・方々に委託または依頼し、その成果は第4章に掲載した。
　自然科学分析（AMS年代測定、花粉分析、樹種同定、古植生復元）
　　文化財調査コンサルタント株式会社
　自然科学分析（AMS年代測定、CHNS元素組成分析、堆積層観察、古環境復元）
　　酒井哲弥（島根大学総合理工学部 教授）

8　出土木製品の保存処理は次の機関に委託した。
　令和2年度　（一財）大阪市文化財協会
　令和3年度　（一財）大阪市文化財協会

9　本書に掲載した遺構・遺物の写真は、朝酌矢田Ⅱ遺跡A・B区は廣江が撮影し、同C・D区は岩崎が撮影した。また、掲載した遺構図・遺物実測図の作成・浄書は、各調査員・会計年度任用職員がおこなったほか、遺物の分類・鑑定等は埋蔵文化財調査センター職員の協力を得た。

10　三次元計測については、現地での計測作業、三次元モデルの作成およびオルソ図の出力を岩崎がおこなった。

11　本書の執筆は、第3章第2節と第5章第1節を廣江がおこない、その他は岩崎がおこなった。第4章については執筆者を明記した。編集は岩崎が担当した。

12　本書に掲載した遺物および実測図・写真等の資料、三次元モデルデータは島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（島根県松江市打出町33番地）にて保管している。

13　本書の編集にあたっては、DTP方式を採用した。

凡　例

1　本書で示す方位は座標北を使用し、座標値は世界測地系（平面直角座標第Ⅲ系）にもとづく。
2　本書で示す標高値はメートル表記である。標高値は東京湾平均海面（T.P.）値を使用した。
3　本書で使用した第5図は国土地理院発行の1/25,000地図（松江）を、第2・6図は国土交通省中国地方整備局出雲河川事務所から提供を受けた平面図を、第97図は島根県知事の承認を得て、松江圏都市計画図（1/2,500）を使用して作成したものである（承認番号：令和4年8月3日都第190号）。
4　本書に掲載する土層は、『新版　標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所　色票監修）にしたがって記載した。
5　本書で使用した遺構略記号は以下のとおりである。
Pit：柱穴状遺構　SB：建物（竪穴建物以外）　SD：溝　SE：井戸　SK：土坑　SX：性格不明遺構
6　本書で使用した遺物の縮尺は、以下を基本とする。
土器・陶磁器：1/3　木製品：1/3　金属器：1/1
7　本書で用いた土器の分類および編年は、以下の論文・報告書に依拠している。
（1）弥生土器
松本岩雄1991「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年 ―山陽・山陰編―』木耳社
（2）須恵器
大谷晃二1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集　島根考古学会
大谷晃二2001「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳群』平田市教育委員会
島根県教育委員会2013『史跡出雲国府跡 -9 総括編-』
（3）瓦
島根県教育委員会2009『史跡出雲国府跡6』
（4）陶磁器
九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年』
太宰府市教育委員会2000『大宰府条坊跡XV』
8　註は各章ごとに連番を振り、章末に配置した。第4章は各節ごとに連番を振り、節末に配置した。

本文目次

第１章　調査に至る経緯と経過
第１節　調査に至る経緯 …… 1
１．事業計画の概要 …… 1
２．埋蔵文化財保護部局への照会と調整 …… 1
３．法的手続き …… 3
第２節　発掘調査の経過 …… 3
１．試掘確認調査の概要（第２・３図） …… 3
２．発掘調査の概要 …… 4
３．整理作業 …… 6
第３節　調査体制 …… 7

第２章　遺跡の位置と環境
第１節　地理的環境 …… 8
第２節　歴史的環境 …… 9

第３章　調査の方法と成果
第１節　調査の方法 …… 14
１．遺跡の立地 …… 14
２．発掘調査区とグリッドの設定 …… 15
３．調査の方法 …… 15
４．三次元計測による記録と方法 …… 15
第２節　A・B区の調査 …… 17
１．調査成果の概略 …… 17
２．基本層序（第８・９図） …… 17
３．A区の遺構とその遺物（第10～13図） …… 20
４．A区の遺構外出土遺物（第14～17図） …… 20
５．B区の遺構とその遺物（第18～24図） …… 28
６．B区の遺構外出土遺物（第25図） …… 34
第３節　C区の調査 …… 35
１．調査成果の概略 …… 35
２．基本層序（第28・29図） …… 35
３．遺構とその遺物（第26・27、31～39図） …… 40
４．遺構外出土遺物（第40～46図） …… 49
第４節　D区の調査 …… 57
１．調査成果の概略 …… 57
２．基本層序（第49～52図） …… 57
３．遺構とその遺物（第47・48、53～62図） …… 58
４．遺構外出土遺物（第63～74図） …… 72

第４章　自然科学分析
第１節　朝酌矢田Ⅱ遺跡発掘調査に伴う自然科学分析 …… 87
第２節　松江市朝酌矢田Ⅱ遺跡における地質とその年代，古環境 …… 105

第５章　総括
第１節　B区の小規模古墳について …… 117
第２節　C区の礫敷遺構について …… 118
第３節　D区の礫敷遺構について …… 124
第４節　まとめ …… 126

挿図目次

第 1 図　朝酌矢田Ⅱ遺跡の位置 …… 1
第 2 図　朝酌矢田Ⅱ遺跡と試掘調査区の位置(1:3,000) …… 2
第 3 図　試掘トレンチ出土遺物実測図 …… 3
第 4 図　遺跡周辺の微地形分類図(1:60,000)(林 1991 を一部改変の上転載) …… 8
第 5 図　朝酌矢田Ⅱ遺跡と周辺の遺跡(1:25,000)… 10
第 6 図　朝酌矢田Ⅱ遺跡　調査区周辺図(1:1,000)… 14
第 7 図　A・B区　遺構全体図(1:400) …… 17
第 8 図　A区　土層図(1:100) …… 18
第 9 図　B区　土層図(1:100) …… 19
第 10図　A-2・B区　遺構全体図(1:250) …… 21
第 11図　A区　杭列実測図(1:160) …… 22
第 12図　A-2区　SD01実測図(1:80) …… 22
第 13図　A-2区　SB01・SE01実測図(1:80) …… 23
第 14図　A区　包含層 1 出土遺物実測図 1 …… 24
第 15図　A区　包含層 1 出土遺物実測図 2 …… 25
第 16図　A区　礫 1 層出土土器実測図 …… 26
第 17図　A区　包含層 2 出土遺物実測図 …… 27
第 18図　B区　1 号墳実測図(1:80) …… 28
第 19図　B区　1 号墳出土土器実測図 …… 29
第 20図　B区　2 号墳・Pit実測図(1:80) …… 30
第 21図　B区　SK01実測図(1:20) …… 31
第 22図　B区　2 号墳・SK01遺物出土位置図(1:80)…32
第 23図　B区　2 号墳出土土器実測図 …… 32
第 24図　B区　炉跡実測図(1:40) …… 33
第 25図　B区　包含層出土遺物実測図 …… 34
第 26図　C区　遺構全体図(1:125) …… 36
第 27図　C区　三次元モデルオルソ図(1:125) …… 37
第 28図　C区　土層図(1:100) …… 38
第 29図　C区　中央トレンチ西壁土層図(1:60) …… 39
第 30図　C区　ベルト 1・2 土層図(1:40) …… 40
第 31図　C区　礫敷遺構出土遺物分布図(1:150) …… 42
第 32図　C区　礫敷遺構出土須恵器実測図 1 …… 43
第 33図　C区　礫敷遺構出土須恵器実測図 2 …… 44
第 34図　C区　礫敷遺構出土須恵器実測図 3 …… 45
第 35図　C区　礫敷遺構出土須恵器実測図 4 …… 46
第 36図　C区　礫敷遺構出土須恵器実測図 5 …… 47
第 37図　C区　礫敷遺構出土須恵器実測図 6 …… 48
第 38図　C区　礫敷遺構出土遺物実測図 …… 49
第 39図　C区　礫敷遺構出土杭・木製品実測図 …… 50
第 40図　C区　包含層 1 出土須恵器実測図 …… 51
第 41図　C区　包含層 1 出土遺物実測図 …… 52
第 42図　C区　包含層 1 出土木製品実測図 1 …… 53
第 43図　C区　包含層 1 出土木製品実測図 2 …… 54
第 44図　C区　包含層 2 出土須恵器実測図 …… 55
第 45図　C区　包含層 2 出土遺物実測図 …… 56
第 46図　C区　包含層 2 出土木製品実測図 …… 56
第 47図　D区　遺構全体図(1:250) …… 58
第 48図　D区　三次元モデルオルソ図(1:300) …… 59
第 49図　D区　土層図(1:100) …… 60
第 50図　D-b5区　土層図(1:100) …… 61
第 51図　D区　中央トレンチ土層図(1:100) …… 62
第 52図　D区　トレンチ 1・2 土層図(1:40) …… 62
第 53図　D区　礫敷遺構・礫層出土須恵器分布図(1:250) …… 64
第 54図　D区　礫敷遺構・礫層出土須恵器実測図 1…65
第 55図　D区　礫敷遺構・礫層出土須恵器実測図 2…66
第 56図　D区　礫敷遺構・礫層出土須恵器実測図 3…67
第 57図　D区　礫敷遺構・礫層出土遺物実測図 …… 68
第 58図　D区　礫敷遺構・礫層出土木製品実測図 … 69
第 59図　D区　杭列実測図(1:40) …… 70
第 60図　D区　杭実測図 …… 71
第 61図　D区　Pit・土坑実測図(1:40)…… 72
第 62図　D区　埋没樹木実測図(1:40) …… 73
第 63図　D区　包含層出土須恵器実測図 …… 74
第 64図　D区　包含層出土遺物実測図 1 …… 75
第 65図　D区　包含層出土遺物実測図 2 …… 76
第 66図　D区　包含層出土木製品実測図 1 …… 77
第 67図　D区　包含層出土木製品実測図 2 …… 79
第 68図　D区　包含層出土木製品実測図 3 …… 80
第 69図　D区　包含層出土木製品実測図 4 …… 81
第 70図　D区　包含層出土木製品実測図 5 …… 82
第 71図　D区　包含層出土木製品実測図 6 …… 83
第 72図　D区　包含層出土木製品実測図 7 …… 84
第 73図　D区　包含層出土木製品実測図 8 …… 85
第 74図　D区　包含層出土銭貨実測図 …… 86
第 75図　調査区の配置 …… 87
第 76図　試料採取地点(A-2区)…… 88
第 77図　試料採取地点(C区)…… 88
第 78図　花粉分析試料採取地点断面図(A-2区)…… 88
第 79図　花粉分析試料採取地点断面図(C区)…… 88
第 80図　花粉ダイアグラム(A-2区)…… 90
第 81図　暦年較正結果:IntCal20 (A-2区) …… 90
第 82図　暦年較正 NH2 + IntCal20 (A-2区) …… 91
第 83図　花粉ダイアグラム(C区)…… 92
第 84図　暦年較正結果:IntCal20 (C区) …… 95
第 85図　暦年較正結果の分布:Bomb 21 NH2 + IntCal20 (A-2区)…… 96
第 86図　暦年較正結果の分布(C区)…… 97
第 87図　遺跡周辺の地質(鹿野ほか, 1994) …… 106
第 88図　松江層の玄武岩 …… 107
第 89図　地すべり堆積物の様子 …… 108
第 90図　D区南壁の断面 …… 109

第91図　地すべり堆積物中に発達した生痕化石…109
第92図　C区　礫敷遺構出土の須恵器変遷図（1:6）119
第93図　朝酌矢田Ⅱ遺跡の南北縦断図 …… 120
第94図　礫敷遺構の構造模式図 …… 122
第95図　礫敷遺構に見られる「単位」 …… 122
第96図　D区　礫敷遺構・礫層出土の須恵器変遷図（1:6） …… 125
第97図　遺跡の位置関係図（1:3000） …… 127

表目次

第 1 表　文化財保護法に基づく提出書類 ……2
第 2 表　三次元モデル作成表 …… 16
第 3 表　C区　非掲載遺物集計表 …… 35
第 4 表　D区　非掲載遺物集計表 …… 57
第 5 表　微化石概査結果（A-2区） …… 89
第 6 表　花粉化石組成表（A-2区） …… 90
第 7 表　年代測定結果一覧表（A-2区） …… 91
第 8 表　微化石概査結果（C区） …… 91
第 9 表　花粉化石組成表（C区） …… 92
第10表　年代測定結果一覧表（C区） …… 93
第11表　$\delta^{13}C$ 補正後，較正前の年代測定結果…112
第12表　較正した炭素14年代 …… 112
第13表　CHNS 元素分析結果 …… 113
第14表　朝酌矢田Ⅱ遺跡A・B区　出土遺物観察表 …… 130
第15表　朝酌矢田Ⅱ遺跡C区　出土遺物観察表…134
第16表　朝酌矢田Ⅱ遺跡D区　出土遺物観察表…140

図版目次

巻頭図版1　1. 朝酌矢田Ⅱ遺跡　遠景（東から）
巻頭図版2　1.「朝酌渡」推定地と塩楯島（西から）
　2. 朝酌矢田Ⅱ遺跡から出雲国府跡方面を望む（北から）
巻頭図版3　1. 朝酌矢田Ⅱ遺跡C区　礫敷遺構（東から）
巻頭図版4　1. 朝酌矢田Ⅱ遺跡C区出土須恵器1
　2. 朝酌矢田Ⅱ遺跡C区出土須恵器2
　3. 朝酌矢田Ⅱ遺跡C区　作業風景（西から）
巻頭図版5　1. C区　礫敷遺構の俯瞰オルソ図（三次元モデルより）
巻頭図版6　1. D区　礫敷遺構の俯瞰オルソ図（三次元モデルより）
図版1　1. 朝酌矢田Ⅱ遺跡　遠景（東から）
　2. 朝酌矢田Ⅱ遺跡　全景（南から）
図版2　1. A・B区　遠景（西から）
　2. A-1区　全景（東から）
図版3　1. A-1区　礫検出状況（西から）
　2. A-1区　杭列（南から）
図版4　1. A-1区　調査区南壁土層堆積状況（北から）
　2. A-2・B区　全景（北から）
図版5　1. A-2区　杭列（西から）
　2. A-2区　礫1層検出状況（西から）
図版6　1. A-2区　完掘状況（西から）
　2. A-2区　SB01（西から）
図版7　1. A-2区　SB01柱穴検出状況（南から）
　2. A-2区　SD01検出状況（東から）
図版8　1. A-2区　SE01検出状況（東から）
　2. B区　全景（上空から）
図版9　1. B区　土壙（東から）
　2. B区　土壙（西から）
図版10　1. B区　1号墳（西から）
　2. B区　2号墳（東から）
図版11　1. B区　2号墳土坑（西から）
　2. B区　Pit4（西から）
図版12　1. C区　遠景（東から）
　2. C区　全景（北から）
図版13　1. C区　礫敷遺構検出状況（東から）
　2. C区　礫敷遺構検出状況（西から）
図版14　1. C区　礫2層検出状況（南から）
　2. C区　横木1出土状況（北から）
図版15　1. C区　須恵器出土状況（礫敷遺構面、南から）
　2. C区　須恵器出土状況（礫2層面、西から）
図版16　1. C区　中央トレンチ土層堆積状況（東から）
　2. C区　同北半部土層堆積状況（東から）
図版17　1. C区　調査区東壁土層堆積状況（西から）
　2. C区　ベルト1土層堆積状況（北から）
図版18　1. C区　礫敷遺構に見られる「石列」（南から）
　2. C区　礫敷遺構に打設された杭（東から）
図版19　1. D区　遠景（東から）
　2. D区　全景（上空から）
図版20　1. D区　礫敷遺構検出状況（西から）
図版21　1. D区　完掘状況（西から）
　2. D-b5区　完掘状況（南から）
図版22　1. D区　下駄（66-4）出土状況（南から）

2．D区　中央ベルト土層堆積状況(西から)
図版23　1．D区　調査区西壁土層堆積状況(東から)
2．D区　同北半部土層堆積状況(東から)
図版24　1．試掘トレンチ出土須恵器(第3図)
2．A区　包含層1出土遺物(第14図)
図版25　1．A区　包含層1出土遺物(第15図)
2．A区　礫1層出土土器(第16図)
図版26　1．A区　包含層2出土遺物(第17図)
2．B区　1号墳出土土器(第19図)
図版27　1．B区　2号墳・SK01出土土器(第23図)
2．B区　包含層出土土器(第25図)
図版28　1．C区　礫敷遺構出土須恵器(第32・33図)
図版29　1．C区　礫敷遺構・包含層2出土遺物(第33・34・45図)
図版30　1．C区　礫敷遺構出土須恵器(第32図)
2．C区　礫敷遺構出土須恵器(第32図)
図版31　1．C区　礫敷遺構出土須恵器(第33図)
2．C区　礫敷遺構出土須恵器(第33図)
図版32　1．C区　礫敷遺構出土須恵器(第33図)
2．C区　礫敷遺構出土須恵器(第34図)
図版33　1．C区　礫敷遺構出土須恵器(第34図)
2．C区　礫敷遺構出土須恵器(第35図)
図版34　1．C区　礫敷遺構出土須恵器(第35図)
2．C区　礫敷遺構出土須恵器(第36図)
図版35　1．C区　礫敷遺構出土須恵器(第36図)
2．C区　礫敷遺構出土須恵器(第37図)
図版36　1．C区　礫敷遺構出土須恵器(第37図)
2．C区　礫敷遺構出土遺物(第38図)
図版37　1．C区　礫敷遺構出土石器(第38図)
2．C区　包含層1出土須恵器(第40図)
図版38　1．C区　包含層1出土須恵器(第40図)
2．C区　包含層1出土須恵器(第41図)
図版39　1．C区　包含層1出土遺物(第41図)
2．C区　包含層1出土陶磁器(第41図)
図版40　1．C区　包含層2出土須恵器(第44図)
2．C区　包含層2出土遺物(第45図)
図版41　1．C区　礫敷遺構出土杭・木製品(第39図)
図版42　1．C区　包含層1出土木製品(第42図)
2．C区　包含層1出土木製品(第42図)
図版43　1．C区　包含層1出土木製品(第42図)
2．C区　包含層1出土木製品(第43図)
図版44　1．C区　包含層2出土木製品(第46図)
2．C区　礫敷遺構出土種子
図版45　1．D区　礫敷遺構・礫層出土須恵器(第54図)
2．D区　礫敷遺構・礫層出土須恵器(第54図)
図版46　1．D区　礫敷遺構・礫層出土須恵器(第54図)
2．D区　礫敷遺構・礫層出土須恵器(第54図)
図版47　1．D区　礫敷遺構・礫層出土須恵器(第55図)
2．D区　礫敷遺構・礫層出土須恵器(第55図)
図版48　1．D区　礫敷遺構・礫層出土須恵器(第55図)
2．D区　礫敷遺構・礫層出土須恵器(第56図)
図版49　1．D区　礫敷遺構・礫層出土須恵器(第56図)
2．D区　礫敷遺構・礫層出土遺物(第57図)
図版50　1．D区　包含層出土須恵器(第63図)
2．D区　包含層出土須恵器(第63図)
図版51　1．D区　包含層出土須恵器(第63図)
2．D区　包含層出土土器(第64図)
図版52　1．D区　包含層出土遺物(第64図)
2．D区　包含層出土陶磁器(第65図)
図版53　1．D区　包含層出土陶磁器(第65図)
2．D区　包含層出土陶磁器(第65図)
図版54　1．D区　礫敷遺構・礫層出土木製品(第58図)
図版55　1．D区　杭(第60図)
2．D区　包含層出土木製品(第66図)
図版56　1．D区　包含層出土木製品(第66図)
図版57　1．D区　包含層出土木製品(第67図)
図版58　1．D区　包含層出土木製品(第68図)
図版59　1．D区　包含層出土木製品(第69図)
図版60　1．D区　包含層出土木製品(第69図)
図版61　1．D区　包含層出土木製品(第70図)
図版62　1．D区　包含層出土木製品(第71図)
図版63　1．D区　包含層出土木製品(第72図)
図版64　1．D区　包含層出土木製品(第73図)

本文図版目次

写真1　令和元年度調査指導(A区) …… 4
写真2　令和2年度調査指導(C区) …… 4
写真3　朝酌小学校による発掘体験(D区) …… 5
写真4　礫敷遺構の水洗作業(C区) …… 6
写真5　令和2年度現地説明会(C区) …… 6
写真6　大橋川南岸から「矢田の渡し」を望む …… 14
写真7　C区の礫1層 …… 110
写真8　穿孔貝によって礫に形成された生痕化石…111
写真9　C区ベルト1断面の泥層 …… 111
写真10　D区の地すべり堆積物に含まれる樹木…113

第1章　調査に至る経緯と経過

第1節　調査に至る経緯

1. 事業計画の概要

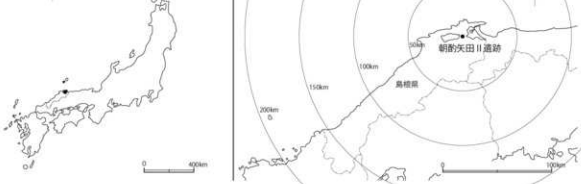
斐伊川水系では、利水の状況や過去の水害を踏まえ、洪水・高潮等による堤防決壊・浸水被害の防止や宍道湖を含む水系全川の水位上昇を低減するために、上流部、中流部、下流部、湖部の流域全体で利水・治水をおこなう必要があった。このうち、中・下流部の斐伊川放水路、上流部の尾原ダム・志津見ダムは竣工し、既に運用が開始されているところである。一方、湖部となる大橋川河川改修については、昭和57年より一部用地買収がおこなわれたものの、事業が一端中断したため、整備が進まない状況が続いていた。宍道湖と中海を接続する大橋川は、狭窄部の河川断面が小さく、沿川住民や関係自治体にとって洪水被害への危惧は常に隣り合わせであった。

こうした状況のもと、平成22年度に国土交通省により斐伊川水系河川整備計画が策定され、平成23年度から大橋川南岸において改修事業が再開された。

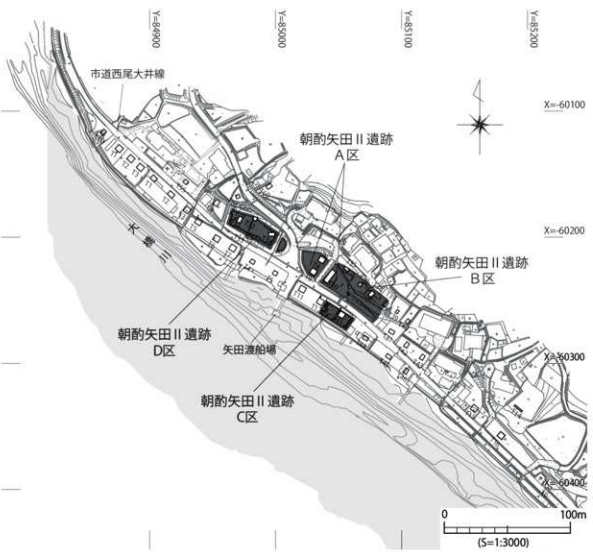
2. 埋蔵文化財保護部局への照会と調整

平成22年3月、この計画策定・事業化にあたり、国土交通省から島根県、松江市に対して開発協議があり、島根県教育委員会は埋蔵文化財について事前協議が必要の旨の意見を付した。これを受け国土交通省から島根県教育委員会に対して、事業地内の遺跡の存否について照会があった。島根県教育委員会では松江市教育委員会の協力のもと、平成22年度から南岸において踏査可能な予定地内の分布調査を随時実施し、試掘確認調査を要する要注意箇所を平成22年10月19日に回答した。北岸については、松江市教育委員会の協力を得ながら平成24年7月に福富町、平成28年5月に朝酌町矢田地区の分布調査を数次にわたっておこない、平成28年6月に回答した。

島根県教育委員会は国土交通省と協議を重ね、分布調査の結果を踏まえた試掘確認調査を平成25年11月に福富町、平成28年9月から朝酌町矢田地区において国庫補助事業により実施し、予定地内の埋蔵文化財の調査・取り扱いについて具体的な検討がおこなわれた。



第1図　朝酌矢田Ⅱ遺跡の位置



第２図　朝酌矢田Ⅱ遺跡と試掘調査区の位置（１：3,000）

第１表　文化財保護法にもとづく提出書類

遺跡の発見に関する届出（法第97条第１項）

文書番号 日付	種類	所在地	発見 年月日	発見の事情	届出者	参考事項	勧告文書番号 日付	主な 指示事項
国中整出調設第10号 H30.10.1	散布地 集落跡	松江市朝酌町 1010　外	H30.9.11	大橋川河川改修に伴う試掘確認調査	国土交通省 出雲河川事務所長	朝酌矢田Ⅱ遺跡	島教文財第180号の13 H30.10.26	発掘調査

埋蔵文化財発掘調査の報告（法第99条）

文書番号 日付	種類および名称	所在地	面積（㎡）	原因	報告者	担当者	期間
島教埋第169号 R1.5.31	散布地 朝酌矢田Ⅱ遺跡（A・B区）	松江市朝酌町 1015-1　外	1,600㎡	河川改修	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長	廣江�clear史	R1.6.17 ～ R1.11.29
島教埋第89号 R2.5.22	散布地 朝酌矢田Ⅱ遺跡（C・D区）	松江市朝酌町 1012-3　外	1,400㎡	河川改修	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長	岩﨑孝平	R2.6.1 ～ R2.11.30

埋蔵文化財発見通知（法第100条第２項）

文書番号 日付	物件名	出土地	発見者	土地所有者	現保管場所
島教文財第274号の10 R1.12.17	須恵器、陶磁器類、木製品	松江市朝酌町1015-1　外 朝酌矢田Ⅱ遺跡（A・B区）	島根県教育委員会教育長	国土交通省	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
島教文財第114号の22 R3.1.12	須恵器、石器、陶磁器、木製品	松江市朝酌町1008-1　外 朝酌矢田Ⅱ遺跡（C・D区）	島根県教育委員会教育長	国土交通省	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

終了報告

文書番号 日付	遺跡名	調査期間	面積（㎡）	提出者	提出先
島教文財第750号 R1.12.17	朝酌矢田Ⅱ遺跡（A・B区）	R1.6.17 ～ R1.11.29	1,600㎡	島根県教育委員会教育長 新田英夫	国土交通省出雲河川事務所長
島教文財第945号 R3.2.19	朝酌矢田Ⅱ遺跡（C・D区）	R2.6.10 ～ R2.12.18	1,400㎡	島根県教育委員会教育長 新田英夫	国土交通省出雲河川事務所長

試掘確認調査の結果、福富町では本発掘調査が必要な遺跡は確認されなかったが、朝酌町矢田地区においては複数の遺跡が確認されたため、本発掘調査が必要な箇所と範囲を定めた。

３．法的手続き

文化財保護法にもとづく法的手続きは第１表のとおりである。

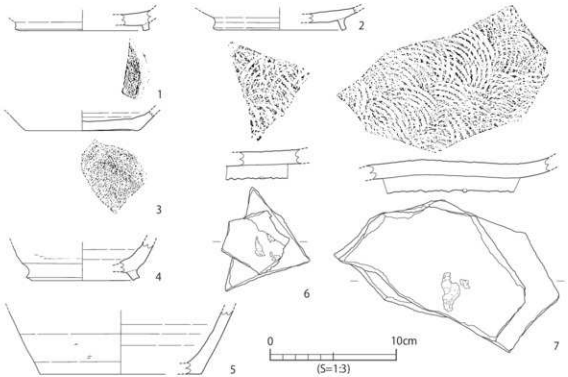
第２節　発掘調査の経過

１．試掘確認調査の概要（第２・３図）

朝酌矢田Ⅱ遺跡周辺の試掘確認調査については、平成29年度から令和３年度にかけて継続的に実施している。平成29年度に矢田渡船場から市道西尾大井線を挟んで北東側に設定したT8・T10では、須恵器などの遺物が確認されたことから本調査対象とした（A区）。また、矢田渡船場の東に隣接する水田に設定したT11～T13については、最も東側のT13で礫層中から須恵器が多量に出土したことから本調査対象とした（C区）。T12では水田耕作土の下に礫層が確認されたものの、遺物は確認されなかった。

平成30年度には、矢田渡船場から市道を挟んで北側に設定したT31～T34を実施し、須恵器を多く包含する礫層が確認されたことから本調査対象とした（D区）。矢田渡船場から北東側の微高地に設定したT38・T39では、溝状の落ち込みや須恵器が確認されたことから本調査対象とした（B区）。

以上のトレンチより出土した遺物を第３図に示した。なお、本調査時の出土遺物と接合した個体は、それぞれの調査区の報告（第３章）に含めた。１～７は全て須恵器で、1・2は高台付坏または皿で底部に回転糸切り痕を残す。３は回転糸切り後未調整の無高台皿で、器壁が大きく外傾する。4・5は



第３図　試掘トレンチ出土遺物実測図

壺の底部で、4には「ハ」の字状に開く高台が取り付く。6・7は甕の底部で、外底部に焼台に転用したと思われる別の須恵器片が溶着している。

矢田渡船場から西側にかけては、市道南側の大橋川沿岸に12箇所のトレンチを設定し、順次試掘を実施した。これらでは、基本的に無遺物の河川堆積層の上位に近世以降の水田耕作土が認められ、近世以前の遺跡は存在しないものと考えられた。よって、本調査の対象からは外れている。また、令和4年2月28日にはC区から約50m東に位置するT42・T43・T46の試掘を実施したが、遺構・遺物は確認されなかった。T40・T41・T44・T45は、今後に実施が予定されている。

2．発掘調査の概要

朝酌矢田Ⅱ遺跡A・B区

当該調査区は隣り合った一続きの地区であるが、地形が異なることからA・B区に分けて発掘調査を実施した。A区は大橋川北岸を東西に走る市道西尾大井線の北側に面する平坦地で、B区は微高地の斜面から尾根にかかる場所である。現状の標高は、A区1.3m、B区3～8mを測る。調査対象面積は1,600㎡である。現地作業は令和元年6月17日～11月29日にかけて、A-1区→A-2区→B区の順で実施した。まず、重機で造成土を取り除いた後、人力で掘削をおこなった。排土は近隣の用地に仮置き場を設けて搬出した。

調査の結果、A区では地山面の上部に礫層が堆積し、その中から古代から中世にかけての土器・陶磁器が出土した。地山面は緩い傾斜を持つがほぼ平坦であり、砂層の堆積も見られることから、以前の大橋川沿川に近い場所と考えられた。令和元年7月11日に、島根大学理工学部の酒井哲弥氏に地質の調査指導を受けた。

B区の溝については、規模は小さいが溝の脇から須恵器が出土し、西側の包含層から耳環が出土したことなどから方墳の周溝と考えられた。そのため、10月16日に島根大学法文学部の岩本崇氏による調査指導会を実施した。方墳は2基確認したが、削平により残存状態が悪く、明確な主体部は検出していない。

発掘調査支援業務は平成31年4月18日に契約締結し、令和元年10月29日にラジコンヘリで空中写真撮影を実施し、現地完了検査を11月14日におこない全ての作業が終了した。現地調査終了後、竣工検査を12月10日に埋蔵文化財調査センターにて実施した。最後に、令和元年12月24日付け島教文財第750号で島根県教育委員会教育長から出雲河川事務所所長あてに終了報告を提出した。

写真1　令和元年度調査指導（A区）

写真2　令和2年度調査指導（C区）

朝酌矢田Ⅱ遺跡C・D区

C区は市道西尾大井線の南側に面する平坦地で、大橋川護岸のすぐ裏手にあたる。以前は水田として使用されており、現状の標高は0.8 ～ 1.0mである。D区は市道の北側に面する平坦地で、矢田渡船場駐車場の向かいに位置する。現状の標高は1.5 ～ 1.9mである。調査対象面積はC区400㎡、D区1,000㎡である。発掘調査は、令和２年６月10日から９月29日にかけてD区を、10月14日から12月18日にかけてC区を実施した。以下、調査の経過順にD区から記述する。

まず年度前半に調査したD区では、以前は宅地として使用されていたことから造成土が厚く、部分的にコンクリートの基礎が残存していた。まず重機によってこれらを取り除いたが、南側の一部の基礎は市道下に入り込んでいたため、撤去が困難であった。そのため、これを避けて重機掘削をおこない、その後に人力による掘削をおこなった。

造成土の下は近世以降の水田耕作土で、その下には川砂の層が認められた。砂層を掘り下げると、調査区北側で東西に広がる古代の礫敷遺構を確認した。拳大から人頭大の礫とともに須恵器片が確認されたため、トータルステーションを用いて遺物の出土位置を記録した。令和２年８月28日に島根大学法文学部の大橋泰夫氏、９月23日に出雲弥生の森博物館の花谷浩氏を招いて調査指導会を実施した。

地山は調査区内だけでも多様な土質・土色のものが認められ、基盤層下に埋没する樹木も確認された。これらの性格を把握するため、トレンチを設けて一部深掘りをおこない、９月１日に酒井氏による調査指導を受けた。その結果、当地域一帯に北から南方向へ、複数回にわたる地すべりがあったことが明らかとなった。樹木は、その際に山側から運ばれてきたものが埋没したものであった。

調査中、８月26日に近隣の松江市立朝酌小学校の６年生８名が来跡し、発掘調査体験活動をおこなった。また、現地説明会は新型コロナウイルス感染症の影響を考慮して、11月14日に朝酌矢田自治会を対象として開催し、17名の参加を得た。

９月16日にはラジコンヘリで空中写真撮影を実施し、さらにドローンを用いて調査区全域を三次元で記録し、D区の現地作業を終えた。

年度後半に着手したC区では、湧水対策のため矢板を「コ」の字状に打設した後、調査を実施した。それでも完全に湧水を防ぐことはできないため、先行して調査区周囲に排水溝を掘削し、ポンプで24時間排水をおこなった。

まず重機で表土と造成土を取り除いた後、人力で掘削をおこなった。近世以降の水田耕作土および床土を除去すると、調査区全面に古代の礫敷遺構を検出した。遺構は幸い後世の開発や攪乱を免れ、その大部分は川砂層に覆われた状態であったため、極めて残存状態が良好であった。礫敷遺構の検出作業は、移植ゴテや草削りである程度礫表面を露出させた後、水力調整した動力式噴霧器（5MPa）を使って砂を除去した。動力式噴霧器による検出作業は、遺構にダメージを与えることなく、また礫や遺物の移動を最小限に抑えられる点で大きな役割を果たした。

写真３　朝酌小学校による発掘体験（D区）

礫敷遺構の記録においては、迅速かつ正確な記

写真4　礫敷遺構の水洗作業（C区）

写真5　令和2年度現地説明会（C区）

録、また将来の公開・活用を目的として、SfM-MVSによる三次元計測を実施した。ドローンを用いて調査区全域の三次元モデルを作成し、俯瞰オルソ図を出力・トレースすることで遺構平面図を作成した。また、中央トレンチの土層断面を対象として個別に三次元計測をおこない、土色や含有物、生痕化石などの詳細な情報を記録した。遺物については、D区の礫敷遺構と同様、礫と伴に多量の須恵器片が確認されたため、トータルステーションを用いて遺物の出土位置を記録した。

調査中、11月10日に大橋泰夫氏、11月11日に酒井哲弥氏、11月16日に花谷浩氏、12月1日に奈良大学文学部の小山田宏一氏を招聘して調査指導会を開催した。さらに、複数回におよぶ島根県・松江市、他県の文化財担当者による視察や意見交換によって、検出された礫敷遺構は『出雲国風土記』に記載される「朝酌渡（あさくみのわたり）」に関連するものである可能性が高いことが考えられた。これにより、12月23日に報道発表をおこない、12月26日に事前申込による現地説明会を開催して43名の参加を得た。

発掘調査支援業務は、令和2年4月17日に契約締結し、12月10日にラジコンヘリ・ドローンを使用して遺跡の空中写真撮影をおこない、12月18日に現地完了検査をおこなった。竣工検査は令和3年1月29日に実施した。

C区の現状については、重要遺構の発見により調査を一時中断（礫敷遺構面の検出まで実施）し、遺構を真砂土で覆って養生した上で埋め戻している。現在、国土交通省中国地方整備局出雲河川事務所とその取り扱いを協議しているところである。そのため、礫敷遺構より下層は未調査であり、一部トレンチによる深掘りで堆積状況を確認したのみである。

3．整理作業

遺物の水洗・注記・接合作業は現地調査に並行して実施し、現地調査終了後から遺物の復元や分類、実測等の整理作業をおこなうと伴に、遺構図面の整理を進めた。報告書作成にかかる作業は令和3年9月からおこない、整理した図面・写真等の記録類について総合的に検討し、遺構・遺物のトレース、遺物の写真撮影、原稿執筆、版組・編集をおこなった。

第３節　調査体制

調　査　主　体　島根県教育委員会
令和元年度事務局　島根県教育庁文化財課
　課長　萩　雅人、文化財グループリーダー　桑谷昭年、管理指導スタッフ調整監　池淵俊一
　埋蔵文化財調査センター
　所長　椿　真治、総務課長　和田　論、高速道路推進スタッフ調整監　角田徳幸、管理課長　守岡正司
調　査　担　当　者　埋蔵文化財調査センター
　調査第三課長　間野大丞、調査第三係長　中川　寧、主任　廣江耕史、臨時職員　大田晴美、原　英誉
令和２年度事務局　島根県教育庁文化財課
　課長　萩　雅人、文化財グループリーダー　田中明子、管理指導スタッフ調整監　池淵俊一
　埋蔵文化財調査センター
　所長　椿　真治、総務課長　和田　論、高速道路推進スタッフ調整監　角田徳幸、管理課長　守岡正司
調　査　担　当　者　埋蔵文化財調査センター
　調査第二課長　岩橋孝典、主任　廣江耕史、主任主事　岩崎孝平、会計年度任用職員（調査員）　阿部賢治、会計年度任用職員（調査補助員）　原　英誉
令和３年度事務局　島根県教育庁文化財課
　課長　中島正顕、文化財グループリーダー　田中明子、管理指導スタッフ調整監　池淵俊一
　埋蔵文化財調査センター
　所長　椿　真治、総務課長　坂根祐二、高速道路推進スタッフ調整監　熱田貴保、管理課長　深田　浩、調査第二課長　岩橋孝典、調査第三係長　東山信治、主任主事　岩崎孝平、会計年度任用職員（調査補助員）　阿部智子

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

本書で報告する朝酌矢田Ⅱ遺跡は、松江市朝酌町矢田に所在し、宍道湖と中海を結ぶ大橋川北岸の狭窄部に位置する。対岸との距離は140～150mで、『出雲国風土記』に記載される「朝酌渡」の川幅八十歩(142.4m)とほぼ同等であり、奈良時代から地形が大きく変わらないことがわかる。

第４図に示すとおり、本遺跡は大橋川の両岸に形成された三角州Ⅱ面上に立地し、北側には標高114mの丘陵が迫っている。三角州Ⅱ面は標高2m以下の低湿な平地で、大橋川北岸から朝酌川沿いにかけて存在した湖水(古松江湖)の堆積が継続する近世初頭頃までには形成が完了し、現在みられるような陸地景観となったと考えられる。

第４図　遺跡周辺の微地形分類図（1：60,000）（林1991を一部改変の上転載）

朝酌矢田地区は「5川合流部」と呼ばれ、朝酌川・剣先川・大橋川・天神川・馬橋川の結節地点にあたる。そのため、遺跡周辺は河川水位が上昇すると氾濫の危険性があり、近世以降は平地の一部を狭小な水田として利用している。また、当地域一帯の基盤は「松江層」と呼ばれる暗青灰色の砂岩であり、実際に試掘および本調査において広い範囲で確認している。

第2節　歴史的環境

朝酌矢田Ⅱ遺跡が位置する大橋川両岸域には、古墳時代中期以降に大型の古墳が築造されている。また古代においては、『出雲国風土記』に「朝酌促戸（あさくみのせと）」と記載され、出雲国庁から隠岐国へと通じる古代山陰道隠岐路である「枉北道（まがりきたのみち）」が縦断する。この陸路から入海（現在の大橋川）を渡河する地点に「朝酌渡」が設置され、その推定地として本遺跡周辺が想定されている。

ここでは、朝酌町から出雲国庁が置かれた意宇平野を中心として、旧石器時代から中世までの主要な遺跡を概観していく（第5図）。

旧石器時代

遺跡として確認されているものは少なく、意宇平野の西側、茶臼山周辺の低丘陵の台地上にわずかに確認されている。下黒田遺跡（69）では玉髄剥片のブロックが確認されており、山代郷南新造院跡（71）からは玉髄製のナイフ形石器が、石台遺跡（33）からサヌカイト製の大型ナイフ形石器が出土している。

縄文時代

気候の温暖化が進んだことにより縄文時代草創期以降海水面が上昇し、早期には現在の海水準に近い状態になったとされている。縄文時代前期には現在と同様の地形や植物相が成立するようになったと考えられ、宍道湖・中海も汽水域となり、弓ヶ浜や稲佐浜などの砂州が形成されるようになる。

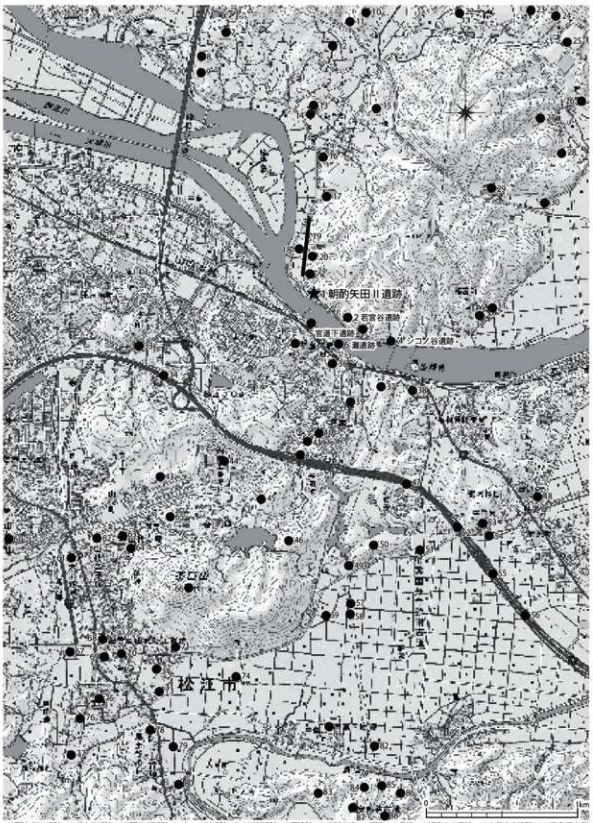
大橋川以南の遺跡としては、前期の土器が出土した竹矢町の法華寺前遺跡（54）、後期中葉の土器・石器が出土した才塚遺跡（59）が意宇平野でみられる。丘陵部の勝負遺跡（34）では、後期の住居跡も確認されている。晩期には、河口付近などに砂州、三角州が形成されるようになり、遺跡数も増加している。大橋川南岸の官道下遺跡（5）では、自然流路から後期～晩期の土器が出土している。馬橋川沿いの石台遺跡では、籾殻圧痕のついた晩期の土器や大型の打製石斧が確認されている。

大橋川北岸では、平成30年度に調査したシコノ谷遺跡（4）で早期の繊維土器が多く見つかっている。さらにサメの歯が156点確認されており、当時の漁撈の状況もうかがえる。丘陵と小規模な谷地にある朝酌菖蒲谷遺跡（21）では中期末～後期初頭の貯蔵穴が確認され、大井町九日田遺跡（26）では後期初頭を中心とする貯蔵穴23基が確認されている。福富町の松ノ前遺跡（31）では、晩期の突帯文土器と弥生時代前期前半の遠賀川式土器に籾殻が伴っており、稲作開始期の遺跡と考えられる。

弥生時代

縄文時代の終わり頃から弥生時代にかけての海面低下により、現在より2m低く砂州や三角州の陸地化が一段と進んだとされている。意宇平野東部も中海側にかけて陸地が拡大したと考えられる。

布田遺跡（55）では、前期後葉から中期にかけての集落跡で大量の土器や石器、農工具の木製品が出土している。また、中期には緑色凝灰岩を使用して管玉製作をおこなっている。夫敷遺跡（56）では



1. 朝酌矢田Ⅱ遺跡　2. 若宮谷遺跡　3. 朝酌矢田遺跡　4. シコノ谷遺跡　5. 宮道下遺跡　6. 薗遺跡　7. 廟所古墳　8. 観音山１号墳　9. 観音山２号墳　10. 九日宮古墳群　11. 渡倉横穴群
12. 龍厳古墳群　13. 旧朝酌小学校校庭古墳　14. 旧朝酌小学校前古墳　15. 朝酌上神社跡古墳　16. 朝酌岩屋古墳　17. キコロジ遺跡　18. 魚見塚古墳　19. 魚見塚遺跡
20. 朝酌横ノ谷遺跡　21. 朝酌薗第６遺跡　22. 鷹沢Ａ遺跡　23. 勝田谷窯跡群　24. 明雲窯跡群　25. 池ノ奥窯跡群　26. 九日田遺跡　27. 寺尾窯跡群　28. 岩谷窯跡群
29. 猫ヶ窪跡群　30. ババタケ窯跡群　31. 松ノ前遺跡　32. 阿羅加奇古墳　33. 石台遺跡　34. 勝負遺跡　35. 石屋古墳　36. 荒神畑古墳　37. 手間古墳　38. 竹矢岩舟古墳　39. 井ノ奥１号墳　40. 井ノ奥４号墳　41. 間内越墳墓群　42. 平所遺跡　43. 山代郷立新造院跡　44. 来美墳墓群　45. 十王免横穴墓群　46. 細田古墳群　47. オノ神遺跡　48. 的場遺跡　49. 間内遺跡　50. 上竹矢古墳群　51. 出雲国分寺跡　52. 中竹矢遺跡群　53. 出雲国分尼寺跡　54. 法華寺前遺跡　55. 布田遺跡　56. 夫敷遺跡　57. 上小坂遺跡　58. 向小坂遺跡　59. 才塚遺跡　60. 向山１号墳　61. 大庭横塚古墳　62. 山代二才塚古墳　63. 山代方墳　64. 山代原古墳　65. 狐谷横穴群
66. 茶臼山城　67. 東淵寺古墳　68. 山代郷正倉跡　69. 下黒田遺跡　70. 黒田館跡　71. 山代郷南新造院跡　72. 山代郷南新造院瓦窯跡（小無田Ⅱ遺跡）　73. 団原古墳
74. 大坪遺跡　75. 黒田畦遺跡　76. 神田遺跡　77. 出雲国造館跡（中西遺跡）　78. 岡田山古墳群　79. 岩屋後古墳　80. 御崎山古墳　81. 出雲国府跡　82. 大屋敷遺跡
83. 西百塚山古墳群　84. 古天神古墳　85. 天満谷遺跡　86. 安部谷横穴群　87. 東百塚山古墳群　88. 大草岩船古墳

第５図　朝酌矢田Ⅱ遺跡と周辺の遺跡（１：25,000）

後期前葉の水田跡が検出され、田面一区画の面積が22～39㎡であることが明らかとなっている。意宇平野中央部の上小紋遺跡(57)・向小紋遺跡(58)では後期の水田跡と水路のしがらみ遺構が確認されている。杭の加工痕からは鉄器の使用が想定され、水田耕作による稲作生産力が増加していく様子がうかがえる。後期の集落は丘陵縁辺に展開しており、丘陵部の石台遺跡や勝負遺跡のほか、魚見塚古墳(18)の墳裾において竪穴住居跡が確認されている。キコロジ遺跡(17)では、弥生時代後期の土器や漆液採集容器などがまとまって出土しており、周辺に弥生時代後期の集落跡が存在する可能性が高い。

墳墓では、大橋川南岸の低丘陵上に位置する間内越墳墓群(41)、来美墳墓群(44)、的場遺跡(48)、東城ノ前墳墓群などで四隅突出型墳丘墓が確認されている。

古墳時代

古墳と集落遺跡は、大橋川両岸から山代町、大庭町にかけて広くみられ、出雲地域の中でも大型の古墳が分布する地域である。前期には、意宇平野北部の丘陵に社日古墳(中竹矢遺跡群、52)や井ノ奥2号墳などの小規模な古墳が築かれている。大橋川北岸の朝酌菖蒲谷遺跡では、小規模な方墳の墳裾から3基の土器棺墓が検出されており、朝酌地域で知られる唯一の前期古墳である。前期末になると、茶臼山東麓に大和北部型の埴輪を備えた全長約58mの廻田1号墳(46)が築かれる。出雲最古の前方後円墳と位置付けられ、その後の出雲における首長墓の規範となった可能性が指摘されている。

中期になると、大橋川南岸では方墳の石屋古墳(35)、前方後円墳の井ノ奥4号墳(40)、前方後方墳の竹矢岩舟古墳(38)が、北岸では廟所古墳(7)、観音山1号墳(8)・同2号墳(9)が相次いで築かれる。一方、出雲国府跡下層(81)では、首長居館状の方形区画遺構が確認され、出雲国府跡や夫敷遺跡からは渡来系遺物も出土している。これらを拠点に、渡来系の土木技術を駆使して意宇平野の大規模な開発が進められた可能性が高く、大橋川両岸に大型古墳が出現する背景の1つと指摘されている。

後期に入ると、大型古墳の分布は茶臼山西麓へと移り、県内でも有数の大型古墳が築造される。6世紀前半～中頃の大庭鶏塚古墳(61)に次いで、6世紀中頃～後半になると全長94mの前方後方墳である山代二子塚古墳(62)が築かれ、この地に強大な大首長が誕生したことを物語る。この頃、意宇平野西部では東淵寺古墳(67)、御崎山古墳(80)、岡田山1号墳(78)が、大橋川北岸では魚見塚古墳が出現し、これらは山代二子塚古墳を頂点とする体制下におかれた勢力の首長墓と考えられている。7世紀初頭から前半になると、出雲地域に特徴的な形態・構造として知られる石槨式石室を埋葬施設とする向山1号墳(60)、山代方墳(63)、山代原古墳(64)、団原古墳(73)などが築かれる。大橋川北岸でも同様に、朝酌岩屋古墳(16)や朝酌上神社跡古墳(15)、旧朝酌小学校校庭古墳(13)、阿弥陀寺古墳(32)、廻原1号墳(12)などが築かれている。またキコロジ遺跡では、圭頭大刀の柄頭や漆容器など、古墳時代の遺物が東の谷筋から流れ込んだ状態で多量に出土している。

大井町には古墳のほか、岩汐窯跡群(29)をはじめとして、古墳時代後期以降須恵器を盛んに生産する大井古窯跡群が存在し、出雲地域に広く供給している。

古代

7世紀末頃には、意宇平野の南部に出雲国府(81)が置かれる。また国府の関連施設として、位置は不明であるが意宇郡家、黒田駅、意宇軍団が付随していたとされる。朝酌矢田Ⅱ遺跡の所在する大橋川北岸は島根郡に編成される。

733(天平5)年に編纂された『出雲国風土記』の記載によれば、国々を結ぶ主要官道の山陰道「正西

道」が東西に通り、出雲国府北方の十字街を起点に隠岐へと続く官道「枕北道」が北に向けて走っていたとされる。国府から「枕北道」の推定ルートを北上すると、官道下遺跡や灘遺跡(6)のある辺りで入海（現在の大橋川）に至り、対岸に渡河する必要が生じる。ここに設置された渡し場が「朝酌渡」[1]であり、官用の渡船１隻が備えられていたとされる。朝酌矢田Ⅱ遺跡周辺は、その有力な候補地と考えられている。実際に、魚見塚遺跡(19)では「枕北道」の一部とみられる道路遺構が確認されており、古代官道を復元する重要な手がかりとなっている。一方、渡し場の実態はこれまで不明であった。

「朝酌促戸」周辺の集落跡としては、朝酌橋ノ谷遺跡(20)で８世紀初頭頃の掘立柱建物が検出されている。また、朝酌菖蒲谷遺跡で８世紀代の遺物を伴う溝や加工段、掘立柱建物が検出されたほか、若宮谷遺跡(2)C区では遺物包含層から７世紀末～９世紀前半の須恵器・煮炊き具・漁撈具が出土している。これらの近辺には集落が存在した可能性が高い。

魚見塚遺跡の北方に位置するキコロジ遺跡では、８～10世紀初頭の多量の土器と伴に漆液容器や製塩土器、30点以上の墨書土器が出土しており、郷庁的な小規模官衙の存在が指摘されている。このほかの官衙関係の遺跡としては、炭化米が多量に出土した山代郷正倉跡(68)、下黒田遺跡、居宅関連では黒田畦遺跡(75)、中西遺跡(77)などがある。居館に比定される遺跡は概して台地や微高地に立地することが多く、中西遺跡では２間×２間の総柱建物や庇付きの大型掘立柱建物が見つかっており、出雲国造家との関連が指摘されている。これに対し、加工段や掘立柱建物を伴う集落遺跡は丘陵裾に立地する傾向が指摘されている。

寺院としては、日置臣目烈が建立したとされる山城郷北新造院跡(43)、出雲臣弟山建立の山代郷南新造院跡、意宇平野の北東部に位置する出雲国分寺跡(51)、出雲国分尼寺跡(53)が知られ、付近には各寺院に供給した瓦窯跡も確認されている。山代郷南新造院瓦窯跡（小無田Ⅱ遺跡、72）では瓦窯３基、出雲国分寺瓦窯跡（中竹矢遺跡群、52）では瓦窯２期、中竹矢遺跡(52)では平窯１基が確認されており、後二者は国衙系瓦屋として注目されている。その北西の丘陵斜面に位置する才ノ峠遺跡(47)では、27棟の掘立柱建物が見つかり、７世紀後半～８世紀にかけての祭祀遺物が多数出土した。また、国分寺と同笵の瓦や木簡も確認されていることから、国分寺に関連する集落と考えられている。墳墓関係遺跡の確認例は少なく、八稜鏡を蓋に使用した火葬骨壺が出土した社日古墳群（中竹矢遺跡群、52）があげられる。

中世

中世には出雲国府を中心として中世府中が展開し、出雲国府跡の上層で多くの遺物が出土している。国庁の南側には意宇川を挟んで天満谷遺跡(85)があり、12～13世紀を中心とした中国製陶磁器、国産陶器などが出土している。石台遺跡は馬橋川に隣接しており、東播系須恵器、瓦器碗など畿内方面から搬入された土器が出土し、中世の流通に関わる拠点的な集落と考えられる。館跡としては、出雲国造館跡（中西遺跡、77）において、建物や柵が確認されている。黒田館跡では、掘立柱建物、井戸、溝が検出されている。集落としては、中竹矢遺跡において掘立柱建物に12世紀の白磁碗、土師器を伴っている。墳墓としては、的場遺跡で中国製褐釉四耳壺の蔵骨器が、社日古墓（中竹矢遺跡群、52）で五輪塔をともなう墓が確認されている。

朝酌矢田Ⅱ遺跡から約200m東に所在する若宮谷遺跡では、室町時代前半期の貝塚（シジミ・サルボウ）が見つかっている。松江市内では中世におけるシジミ漁の実態を示す遺跡の事例が少なく、希少である。

古代末以降は隠岐に向かう航路として、美保関経由の水上交通が主流となり、陸路である「枉北道」は利用が減じて衰退したと考えられる。

【註】

1『出雲国風土記』島根郡条には、「朝酌促戸。東に通道あり、西に平原あり、中央に渡りあり。（中略）朝酌渡。広さ八十歩許なり。国庁より海辺に通ふ道なり。」と記載される。島根県古代文化センター編2014『解説 出雲国風土記』では、「出雲国庁から延びる枉北道は矢田の渡しから井ノ奥地区にかけての辺りで渡河することになると想定されるので、このあたりに朝酌渡が推定できる」としている。

【参考文献】

朝酌公民館2001『朝酌郷土誌』
島根県教育委員会2013『史跡出雲国府跡 -9 総括編-』
島根県教育委員会2013『西川津遺跡・古屋敷Ⅱ遺跡』
島根県教育委員会2016『魚見塚古墳・東淵寺古墳群発掘調査報告書』
島根県教育委員会2017『官道下遺跡・灘遺跡』
島根県教育委員会2021『若宮谷遺跡・シコノ谷遺跡』
島根県古代文化センター2000『出雲国風土記の研究Ⅱ 島根郡朝酌郷調査報告書』島根県教育委員会
島根県古代文化センター2004『出雲国風土記註論 島根郡・巻末条』島根県教育委員会
島根県古代文化センター2009『出雲国府周辺の復元研究』島根県教育委員会
島根県古代文化センター編2014『解説 出雲国風土記』島根県教育委員会
林正久1991「松江周辺の沖積平野の地形発達」『地理科学』第46巻第2号
松江市教育委員会2011『キコロジ遺跡発掘調査報告書』
松江市教育委員会2015『史跡出雲国分寺跡発掘調査報告書』
松江市教育委員会2018『魚見塚遺跡・朝酌苔蒲谷遺跡』
松江市教育委員会2018『朝酌橋ノ谷遺跡』
松江市2012『松江市史』史料編2 考古資料
松江市2021『若宮谷遺跡』

第３章　調査の方法と成果

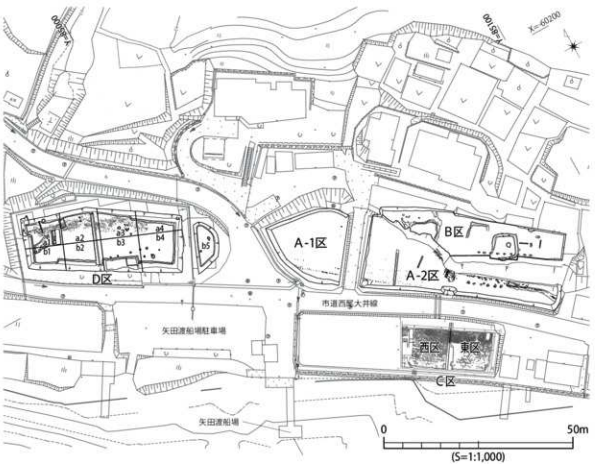
第１節　調査の方法

１．遺跡の立地

朝酌矢田Ⅱ遺跡は、松江市街を貫流する大橋川が最も河川幅員を狭める北岸に位置する。『出雲国風土記』島根郡条に「朝酌促戸」として登場する地域である。北側に迫る丘陵と河川に挟まれた狭隘地のため平地は少なく、遺跡の周辺は宅地や田畑として利用されている。沿川には渡船場「矢田の渡し」がある。

調査対象地はいずれも東西に走る市道西尾大井線に接面し、直線距離で約300m北西には「枉北道」跡が検出された魚見塚遺跡が位置する。東方には近年調査されたシコノ谷遺跡・若宮谷遺跡が、大橋川南岸には灘遺跡・官道下遺跡などがあり、縄文時代から中世に至る大橋川沿岸の様子が徐々に明らかになりつつある。

写真６　大橋川南岸から「矢田の渡し」を望む



第６図　朝酌矢田Ⅱ遺跡　調査区周辺図（1:1,000）

2．発掘調査区とグリッドの設定

本発掘調査の対象範囲は、平成29年度から平成30年度にかけて島根県教育委員会が実施した試掘確認調査の結果にもとづいて決定し、遺跡の範囲と工事対象範囲から調査区を設定した。A・B区は地形的特徴から、C・D区はA区との間に市道を挟むことからそれぞれに区を分けた。さらにA区中には宅地進入路が縦断することから、その西側をA-1区、東側をA-2区とした。

調査にあたり、B区はグリッド設定をおこなわず、出土層位を記載して遺物の取り上げをおこなった。C区は中央で二分し、西区・東区とした。D区は中央で二分した区画をさらに4区画に分け、標高の高い北半をa、南半をbとしそれぞれに連番を振った。水路で分断された東側はb5区とした。

3．調査の方法

調査対象地一帯において、試掘確認調査で確認された遺物包含層までは表土や耕作土が厚く堆積するため、バックホーを用いて取り除く必要があった。重機掘削はバケットに平爪を装着し、少しずつ漉き取るようにして面的に掘り下げた。あわせて土層観察をおこない、遺物包含層まで余裕を持たせて掘削を停止した。

その後はベルトコンベアを設置し、スコップ・ジョレンなどを用いて人力により掘削をおこなった。遺物包含層ではスコップのほか、出土する遺物の粗密に応じて適宜移植ゴテ等の道具を併用し、遺構検出にはジョレン・草削りを使用した。C区の礫敷遺構の検出作業にあたっては、遺構にダメージを与えないよう、水力調整した動力式噴霧器を用いて上面の砂を洗い流すようにおこなった。その結果、礫や遺物を動かすことなく全面検出に至り、さらに人的労力のかかる作業を大幅に短縮することができた。

掘削にあたっては適宜ベルトを設定し、土層観察をおこないながら掘り下げた。遺構の埋土掘削には移植ゴテ・草削りを使用し、基本的にベルトを設定するか半裁して土層観察をおこないながら掘り下げた。

遺物の取り上げ時には地点と層位の記録をおこない、遺構に伴うものや時期・形態のわかるものについては出土状況や座標を記録した後、通し番号を付して取り上げた。土層の記録には写真撮影のほか、必要に応じて断面図を作成した。

遺構の平面図は、コンピュータシステム株式会社の遺跡調査システム「SITE」を用いて測量し、出力後補正をおこなった。断面実測図についてはオートレベルを用いて測量をおこない、高低差のある壁面については平面図と同様に調査システムを用いて記録作成をおこなった。

遺構等の写真は、原則としてデジタルカメラで撮影し、報告書に掲載が見込まれるものについては6×7判フィルム（モノクロネガ・カラーポジフィルム）でも撮影をおこなった。調査区の全景・遠景は、ラジコンヘリとドローンを用いて撮影した。

4．三次元計測による記録と方法

令和2年度に実施したC・D区の調査では、従来の記録作業に加え、重要箇所の精密な記録および将来の公開・活用を目的として三次元計測を実施した。方法としては、SfM-MVS（Structure from Motion/Multi-View Stereo）による三次元モデルの生成後にスケール設定をおこない、オルソ図（正射投影図）を出力して必要な平面・断面図を作成した。図化作業にあたっては、適宜現地確認をおこない

ながら進めた。

記録作業は原則として、三次元計測を実施する場合でも従来の方法（手実測）を併用し、掲載図には手実測による記録物からトレースしたものを採用した。ただし、第26図（礫敷遺構・横木）、第47図（礫敷遺構・埋没樹木）、第62図（埋没樹木）は三次元モデルのオルソ図からトレースし、第29図はトレンチ断面のオルソ図と現地で手実測した礫を組み合わせて作成したものである。また、第47・48図の等高線は、三次元モデルからデジタル上で復元した0.1mメッシュの等高線を現地で校正して作成したものである。

現地作業においては、まず計測対象の周囲に専用のマーカー（対標）を複数点設置し、トータルステーションでこれを観測することで座標を取得した。壁面など垂直方向の計測対象にはコノエ付釘を打ち、これを測距することで基準の座標を得た。撮影にはCanon EOS KISS M（単焦点レンズCanon EF-M 22mm f/2 STM）を使用し、絞り優先・ISO100・RAWデータ形式にて記録した。調査区全域の三次元モデル化には、大きめの対標を作成して調査区の四隅と中央に設置した後、ドローンを使用して撮影をおこなった。撮影した写真は、18%反射率のグレーカードからホワイトバランス調整をおこない、レンズ補正および色収差除去の上JPEG形式に現像した。ドローンによる撮影はJPEG形式に限られたため、そのまま使用した。

三次元モデル作成用のソフトとしては、Agisoft社Metashape Standard（ver.1.6.3）を使用し、モデルの編集やスケール設定、オルソ図の出力にはオープンソースソフトであるCloudCompare（ver.2.11）を使用した。モデルの作成品質については、Align Photos、Build Dense Cloud、Build Meshを全て「High」でおこない、最後にTextureを付加した。

三次元モデル作成の過程と最終（内包）誤差は、第2表に示すとおりである。

第2表　三次元モデル作成表

	対象	掲載図	撮影方法	写真枚数	タイポイント数	高密度クラウドポリゴン数	3Dモデルポリゴン数	最終誤差
C区	横木1※	第26図	デジカメ	83枚	37,798点	74,646,175点	14,929,132面	1mm
	横木2※	第26図	デジカメ	9枚	4,658点	17,651,990点	3,530,325面	3mm
	調査区全域（礫敷遺構面）	第27図 巻頭図版5	ドローン	301枚	232,726点	81,505,307点	11,626,775面	9mm
	中央トレンチ西壁土層	第29図	デジカメ	102枚	60,022点	126,036,287点	25,207,160面	5mm
D区	礫敷遺構	巻頭図版6	デジカメ	274枚	1,202,578点	324,128,646点	20,418,030面	2mm
	調査区全域（礫敷遺構・礫層面）	第48図	ドローン	16枚	65,278点	14,676,184点	2,935,234面	8mm
	調査区全域（地山面）	第48図	ドローン	23枚	47,733点	18,387,557点	3,677,499面	16mm
	調査区西壁土層※	第49図	デジカメ	22枚	74,163点	58,840,030点	4,567,251面	5mm
	中央トレンチ西壁土層（地山以上）※	第51図	デジカメ	48枚	97,973点	70,796,372点	4,656,634面	12mm
	中央トレンチ西壁土層（地山以下）※	第51図	デジカメ	66枚	106,321点	105,360,076点	6,979,902面	5mm
	埋没樹木※	第62図	デジカメ	86枚	127,275点	74,774,421点	6,357,762面	2mm

※オルソ図は非掲載

第２節　A・B区の調査

１．調査成果の概略

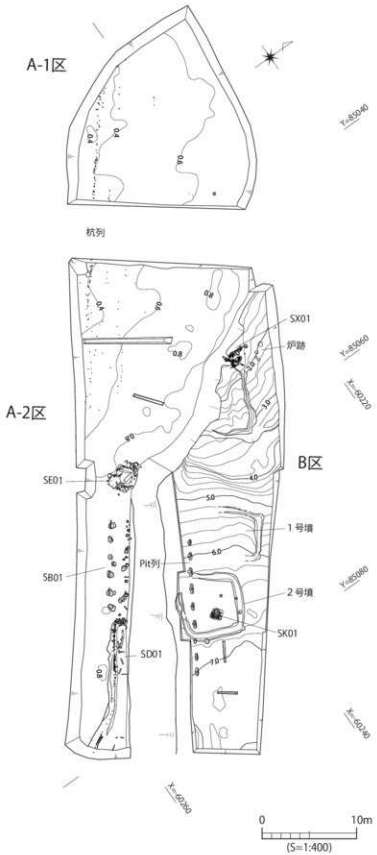
A区では、調査区東端から順に溝（SD01）、掘建柱建物（SB01）、井戸（SE01）が検出された。時期は近代から現代にかけてのものである。

B区では２基の方墳が確認されたが、いずれも盛土が削平されており明確な主体部は検出していない。出土遺物から、古墳時代後期後半の年代が考えられる。このほか、丘陵上の崖に沿ってPit列が確認されたが、古墳より新しいものである。また、調査区西側の斜面に炉跡が４箇所で確認された。

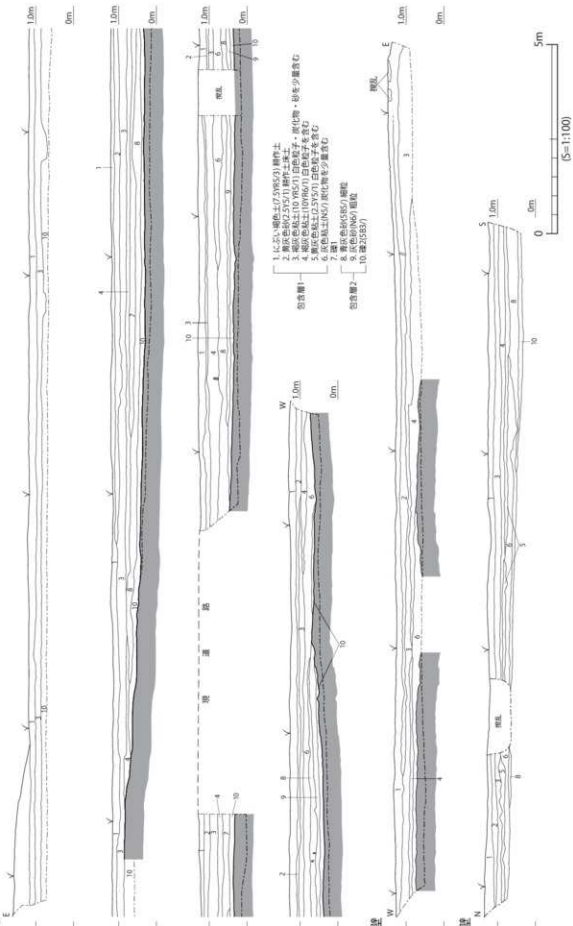
以下、これらの遺構とその出土遺物、遺構外出土遺物について記述する。遺物の詳細については巻末の遺物観察表（第14表）にまとめた。なお、遺物観察表に示す時期については、大谷編年（須恵器）を「出雲○期」、出雲国府編年（須恵器）を「第○型式」、大宰府編年（陶磁器）を「○類」[1]として記載した。

２．基本層序（第８・９図）

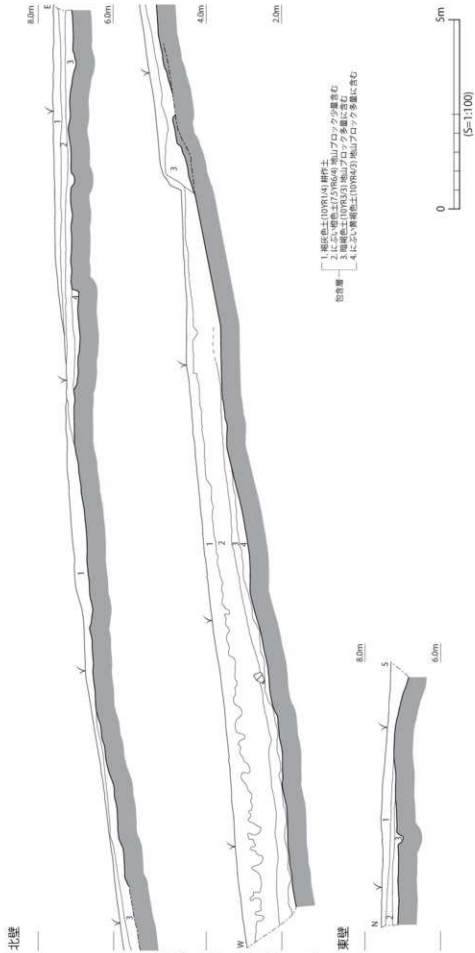
A区の基本層序は、上から水田耕作土層（１層）、褐灰色粘土層（３層）、青灰色砂層（８層）、礫２層（10層）で、基盤は松江層である。A-2区の東半分は標高0.8mを測り、西側のA-1区に比べ0.4m程高くなっている。A-2区の一部では、標高0.6～0.7m



第７図　A・B区　遺構全体図（1:400）



第8図　A区　土層図(1:100)



第9図　B区　土層図(1:100)

の高さに礫１層（7層）があり、比較的角の無い小礫が堆積している。一方、礫２層（10層）は角張った扁平な５～10㎝の礫で、地山に張り付くように一面に広がる。この礫２層は、松江層が波食を受けることで洗い出された礫が露出し、自然形成された礫層である（詳細は第４章第２節参照）。同様の層は後述するC・D区でも認められることから、当地域の低地部一帯は同じ環境下にあったことがうかがえる。A区の北側では、地山のすぐ上に粘土層（4層・6層）が堆積し、礫２層は認められない。当該範囲は元々丘陵の中にあたり、波食の影響が及ばない箇所であったためと思われる。

礫１層からは古代の須恵器がまとまって出土し、これより下位の層では古代以前の遺物が確認された。そのため、礫１層より上位を「包含層１」、下位を「包含層２」として扱う。

B区は、地山が東から西に向けて傾斜し、東側の丘陵頂部にあたる平坦面で標高8mを測る。基本層序は、耕作土（1層）、宅地造成土（2層）、遺物包含層および遺構埋土（3・4層）である。これらの層には遺物が含まれるため、「包含層」として扱う。

３．A区の遺構とその遺物（第10～13図）

杭列　A-1区からA-2区にかけて、地山に打ち込まれた径5㎝、長さ20～30㎝の杭列が検出された（第11図）。杭列の頂部は砂層に覆われていた。杭列は北西－南東方向を長軸として２列に打設され、川側が一直線上に並ぶ一方、それより山側の列にはバラつきがあり杭同士の間隔も広い。杭は丸太材の先端を加工したもので、湾曲したものも見られる。

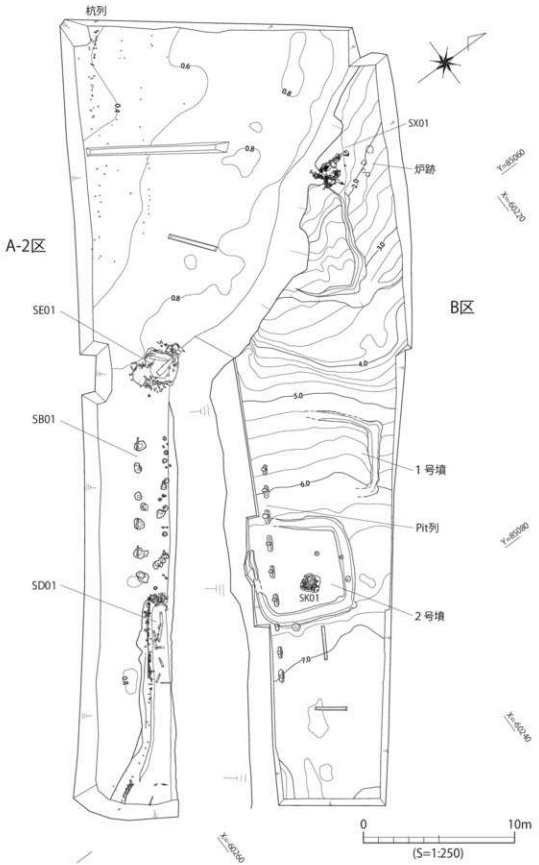
溝（SD01）　A-2区の北側は崖面がほぼ垂直に立ち上がっており、その根元に沿うように溝（SD01）が検出された（第12図）。さらに、溝の外縁に沿うように杭が打ち込まれており、板材が組み合わされた部分もある。溝は調査区外の東側にも続いている。地山から山水が湧き出しており、溝中には暗褐色粘質土がヘドロ状に堆積することから水が張っていたと思われる。溝内からガラス瓶などが出土したことから、近代以降の遺構と考えられる。

掘立柱建物（SB01）　溝の西側に、１間×５間の掘立柱建物が検出された（第13図）。南側の列には、径0.8mの土坑を渡すように長さ0.7mの丸太が長軸方向に置かれていた。丸太には丸釘が打ち込まれている。北側の列の土坑は径が小さく、南側の土坑に対応する位置には杭が２本打ち込まれ、柱を固定するようになっている。この建物のすぐ西側には井戸（SE01）があり、上端の長辺は2.2mで中に板材と礫が認められた。板材は水を汲む際の足場と思われる。これらの遺構はいずれも近代以降の時期である。

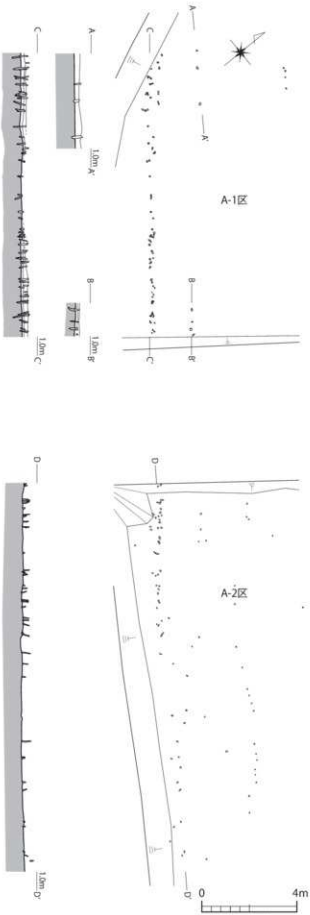
４．A区の遺構外出土遺物（第14～17図）

包含層１出土遺物（第14・15図）　礫１層より上位の層から出土した遺物である。第14図１～９は須恵器である。1・2はともに無高台の坏で底部に回転糸切り痕が残る。３は低い高台付坏、４は高台付皿である。5・8は外面に平行タタキを施す甕で、5の内面には菊花文の当て具痕が残る。6・7は外面に格子目タタキを施す甕である。９は口縁部が玉縁状の鉢で、内面に４条の擂り目が見られる。10は土錘、11は羽口の基底部で径8.2㎝、送風口の径が2.8㎝である。12は先端の搾まる形の羽口先端部である。

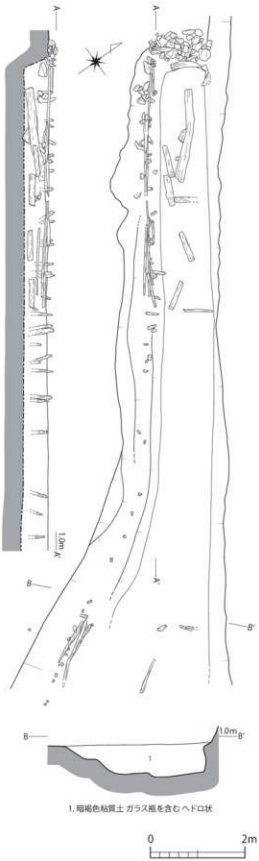
第15図１～21は陶磁器で、▲は施釉範囲を示す（以降同様とする）。1・3・5・6は白磁の椀Ⅳ類で、口縁部は玉縁状を呈する。2は白磁の椀Ⅴ類、8は青磁蓮弁文椀Ｃ群で外面に線描の蓮弁が見られ



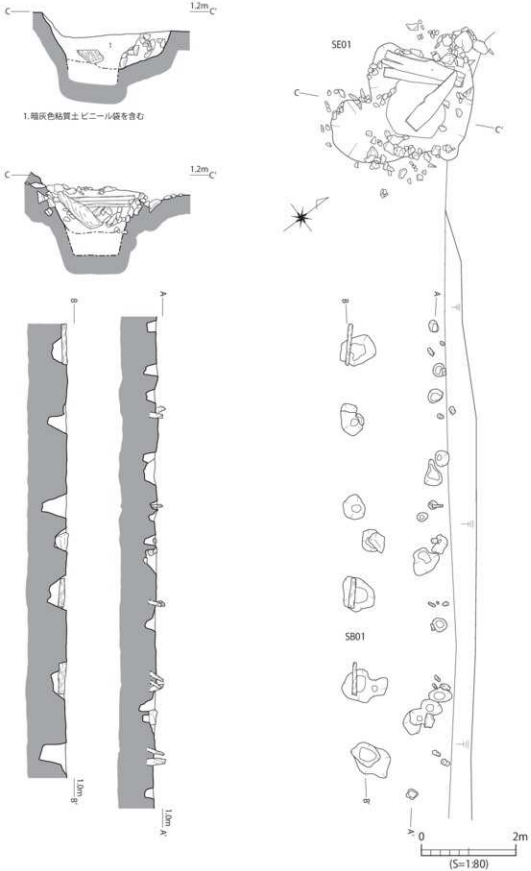
第10図　A-2・B区　遺構全体図(1:250)



第11図　A区　杭列実測図(1:160)



第12図　A-2区　SD01実測図(1:80)

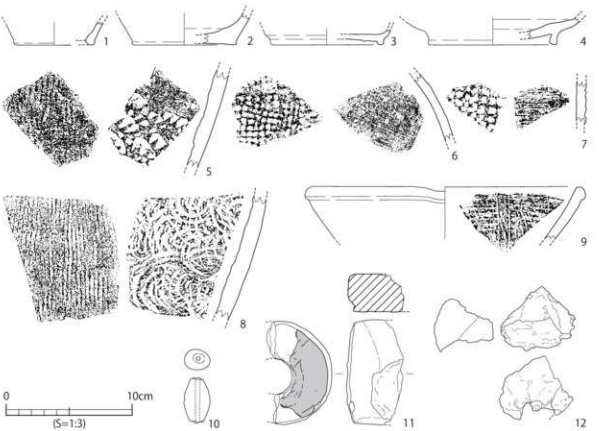


第13図　A-2区　SB01・SE01実測図(1:80)

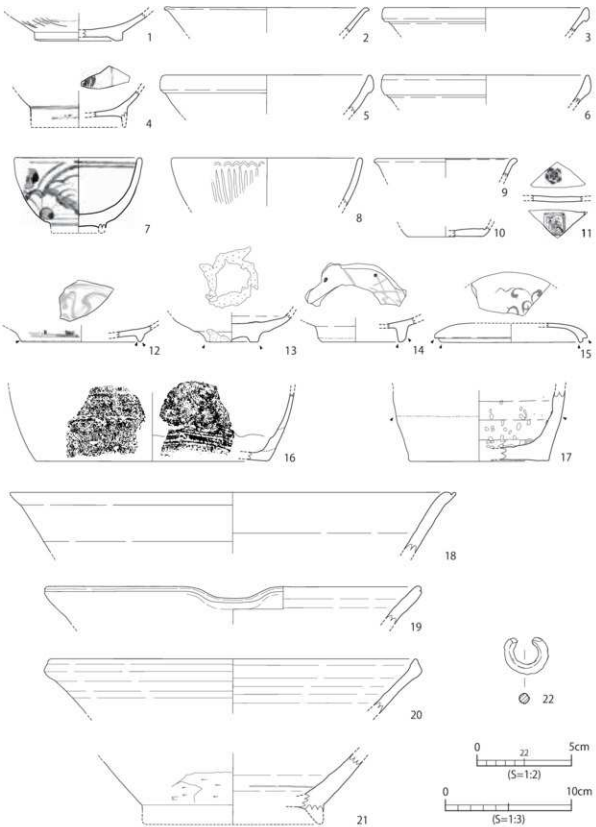
る。10は白磁皿Ⅸ類の底部で、12は中国景徳鎮窯の青花である。4・7・11は肥前系磁器、13・17は肥前系陶器で、いずれも近世に属すものである。15は布志名焼の蓋で明治時代の製品である。16は李朝の舟徳利底部で、外面にタール状の付着物が見られる。18・19は越前焼擂鉢のⅣ期と思われる。21も越前焼擂鉢の底部である。20は東播系鉢でⅡ期2段階と考えられる。22は青銅製の耳環で、錆による風化で表面が劣化している。幅2.4㎝・高さ1.9㎝のやや横長の形状である。

礫1層出土遺物（第16図）　礫1層からは主に古代の須恵器が出土し、一部攪乱箇所から中世の陶磁器が出土している。第16図1～15は須恵器である。1は輪状つまみを有する坏蓋で、2は短い高台が底部外側に取り付く坏である。3・4は脚に線状透かしを施す高坏であるが、4は貫通しない。5は貼付高台を有する壺の底部である。6は破片のため判然としないが、壺甕類の底部と思われる。7は長頸壺で、頸部は太く短く、口縁端部を短く折り返す。8～15は甕の破片である。10は口縁部外面に不整な波状文を施す。12・13は外面に格子目タタキがあり、亀山系と考えられる。16～18は青磁の碗で、17は外面に鎬の蓮弁文がある。

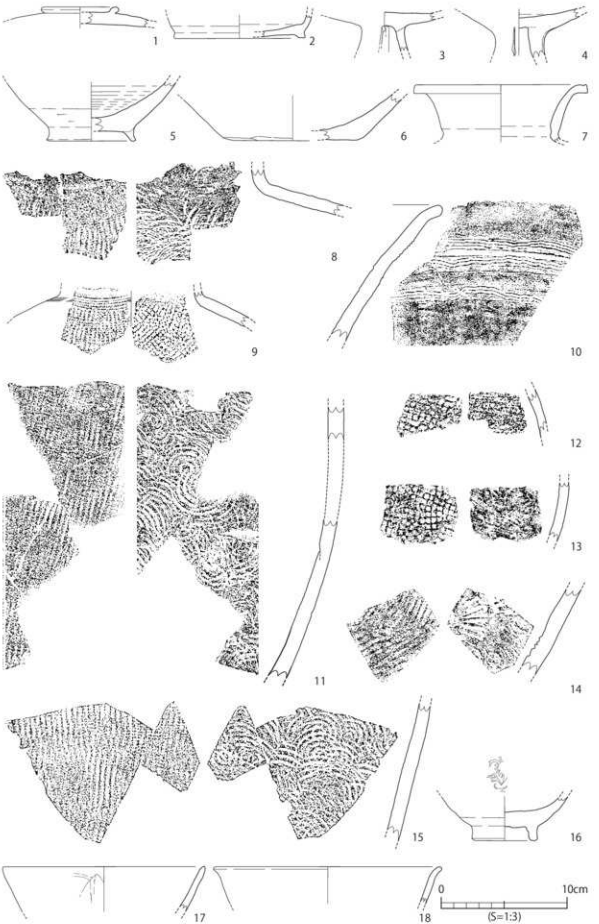
包含層2出土遺物（第17図）　礫1層より下位の層から出土した遺物である。第17図1～24は須恵器である。3は回転ヘラケズリ、4・7・8・10は回転糸切り痕を残す坏である。11・12は2方向に線状透かしを施す高坏であるが、11は貫通しない。13・14は高台付壺の底部で、13の高台は大きく外側に開く。15は長頸壺の頸部である。16～24は甕の破片で、24は内面に菊花文状のタタキを施す。25は管状土錘である。26は弥生中期後葉の甕の口縁部で、頸部内面にはケズリ調整が認められる。



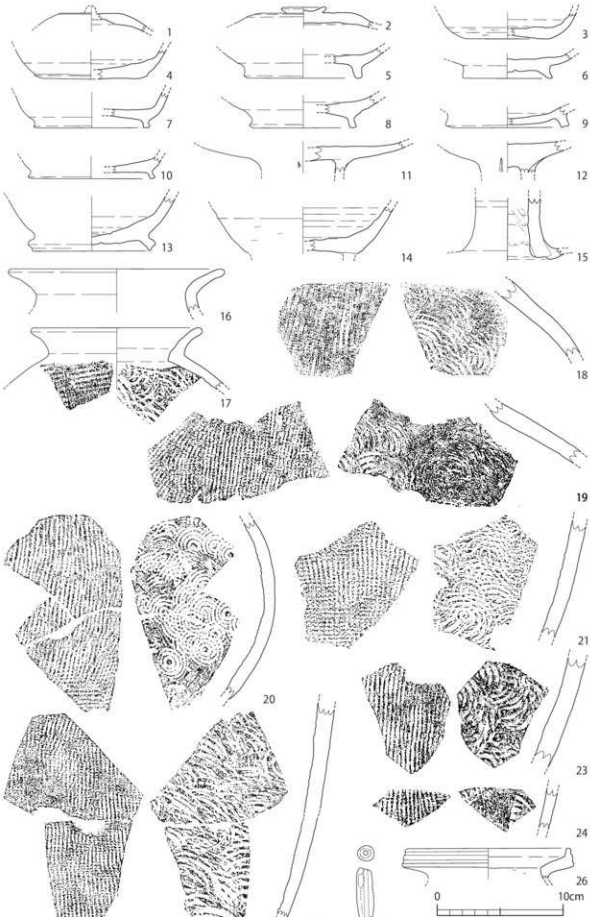
第14図　A区　包含層1出土遺物実測図1



第15図　A区　包含層１出土遺物実測図２



第16図　A区　礫1層出土土器実測図



第17図　A区　包含層２出土遺物実測図

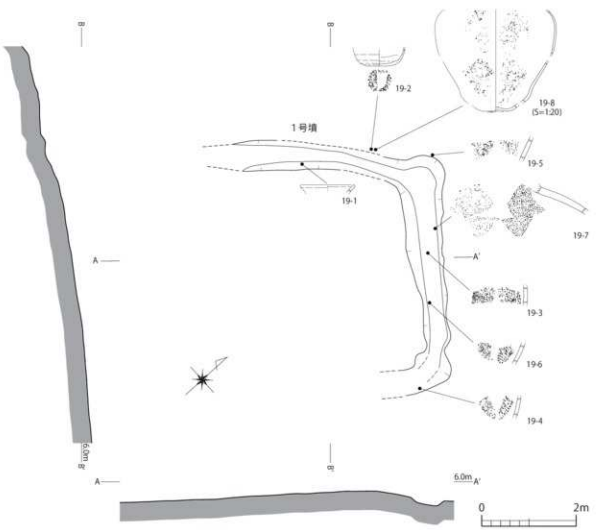
５．Ｂ区の遺構とその遺物（第18～24図）

１号墳　Ｂ区の中央部には、方墳の周溝とみられる幅1.0m、深さ0.3mの溝が「L」字状に巡る（第18図）。畑の耕作により上部が削られ、周溝基底部のみが残った状態であり、主体部は不明である。規模は一辺約5.3mを測る。周溝のコーナー付近から須恵器大甕の破片（第19図３～８）が出土している。

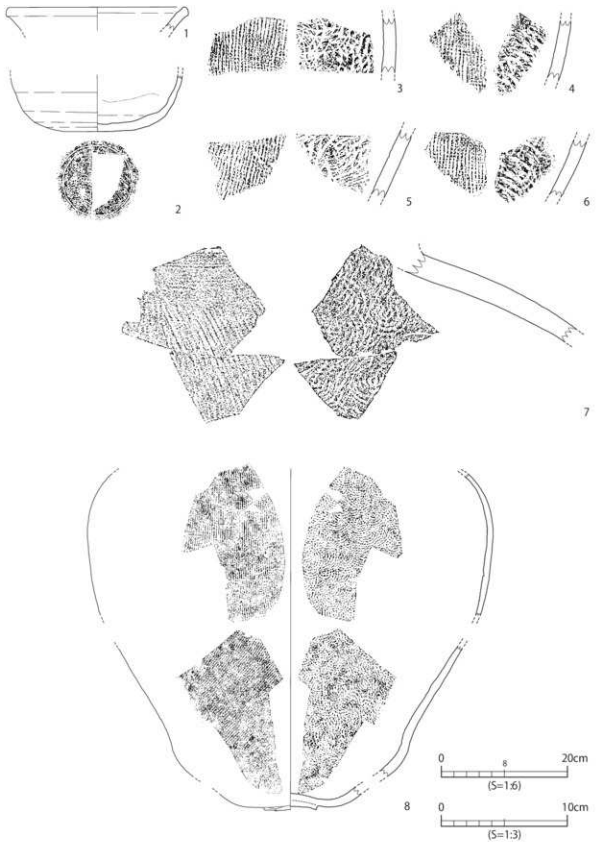
１号墳出土遺物（第19図）　１号墳の周溝からは須恵器が出土している。第19図１は長頸壺の口縁部で、外反することから出雲国府第２型式以降と思われる。２は壺の底部で、静止糸切り後に底部周縁にヘラあるいは棒状工具によるナデが円弧状に施されている。３～８は外面に平行タタキを施す甕で、同一個体の可能性もある。

２号墳・SK01　１号墳の東側に隣接して「ロ」の字状に巡る溝が検出された（第20図）。同じく方墳の周溝とみられる。周溝の幅は0.9m、深さ0.2mで、残存する周溝上端で東西長6.7mを測る。墳丘は削平されている。

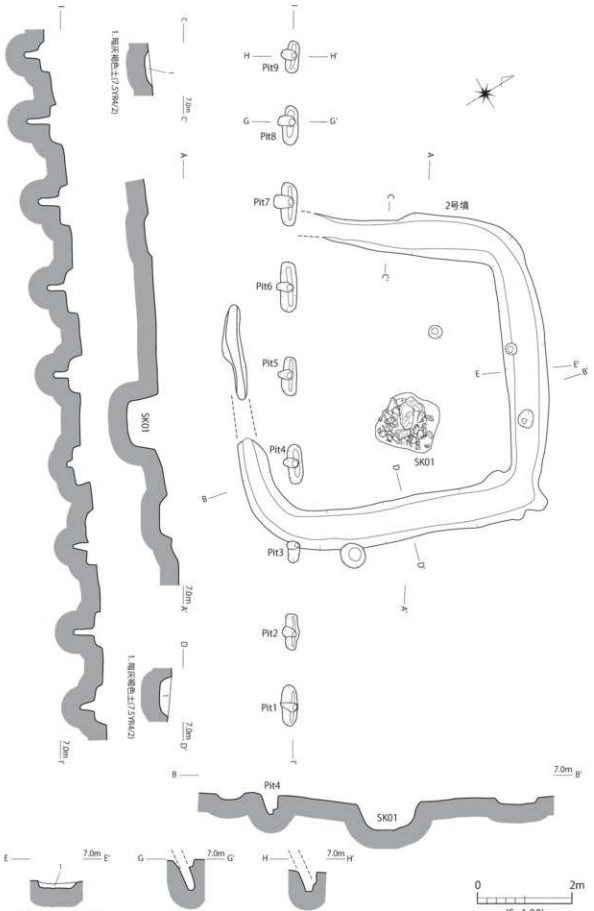
周溝の内側には一辺1.2m、深さ0.6mの正方形を呈した土坑（SK01）が認められ、大小の礫が詰まっていた（第21図）。２号墳との対応関係は不明であるが、平面位置が墳丘中心から東に外れ、周溝の軸方向ともずれている。



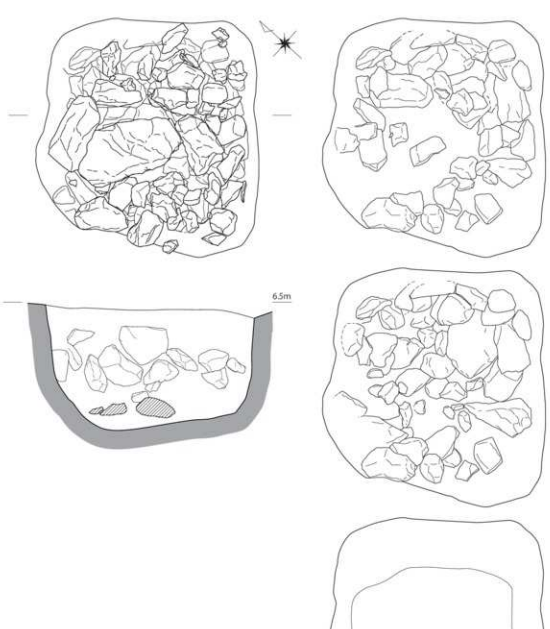
第18図　Ｂ区　１号墳実測図（1:80）



第19図　B区　1号墳出土土器実測図



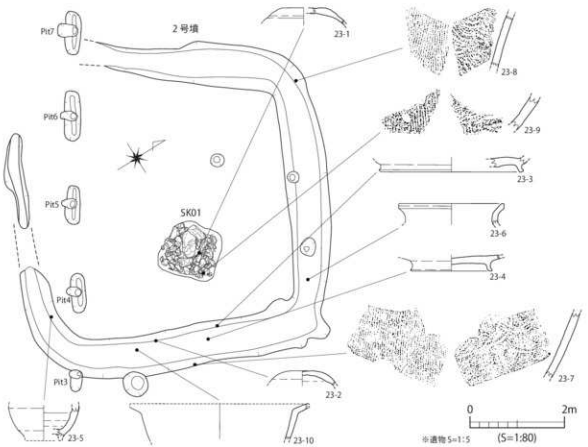
第20図　B区　2号墳・Pit実測図(1:80)



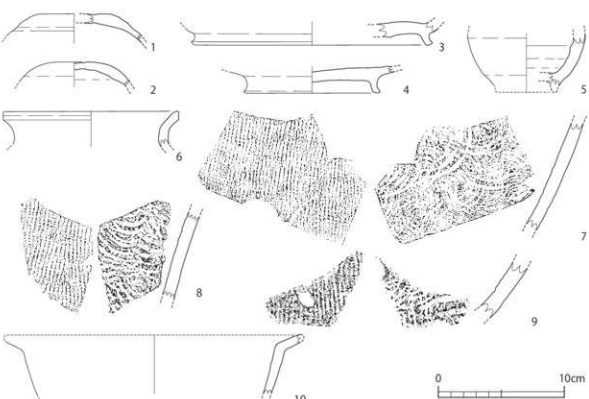
第21図　B区　SK01実測図(1:20)

2号墳・SK01出土遺物(第22・23図)　2号墳の周溝内およびSK01からは須恵器・土師器の破片が出土した(第22図)。第23図10のみ土師器で、その他は須恵器である。1・2は坏蓋で外面にヘラ切り痕が残る。3・4は皿または盤の底部、5は壺である。6～9は甕で、10は土師器の甕である。

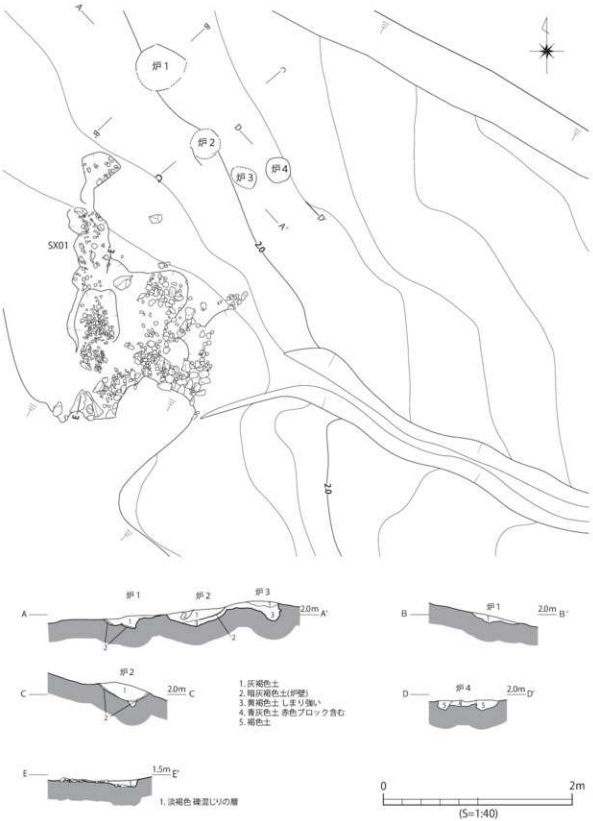
Pit列　崖の上端ラインに沿うように、1.6～1.8mの間隔で一列に並ぶピットを9箇所確認した(第20図)。ピットは楕円形に掘り込んだ後に中央部に斜めの円形ピットを重ねて掘り込む形態である。柱を立ち上げる際に斜めに入れたものと思われる。出土遺物は確認されていないが、切り合い関係、覆土から周溝よりも新しいものである。



第22図　B区　２号墳・SK01遺物出土位置図 (1:80)



第23図　B区　２号墳出土土器実測図



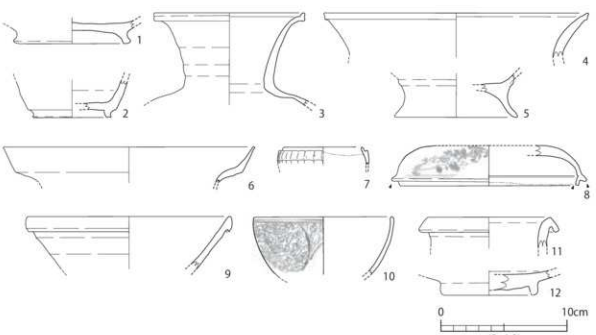
第24図　B区　炉跡実測図(1:40)

炉跡　B区の西側斜面では、炉跡が４基確認された（第24図）。炉１が径53㎝、炉２が径30㎝、炉３が径27㎝、炉４が径28㎝である。いずれも土坑内の底部と側面が被熱で暗灰褐色を呈し、覆土に赤色ブロックが混入していた。覆土を水洗したが、出土遺物は認められなかった。

性格不明遺構（SX01）　炉跡の南側には性格不明の遺構（SX01）があり、溝状の落ち込みと平坦面に小礫が散布する様な状態であった（第24図）。出土遺物は認められず、礫は拳大より小さなもので地山面に張り付くような状態であったことから、人為によるものでない可能性も残る。SX01より南側の斜面下は、地下水が自然に湧き出す環境である。

６．B区の遺構外出土遺物（第25図）

包含層出土遺物　１・２は須恵器高台付坏の底部である。３は長頸壺で、口縁端部が屈曲して垂直に立ち上がる。４は須恵器甕の口縁部である。５は土師器の脚高高台付坏で平安時代後期のものである。７～12は磁器で、７は白磁合子の身の部分である。８･10は肥前系青花の蓋と碗で、18世紀前葉から中頃にかけての時期である。９は白磁の椀Ⅳ類で、11は白磁壺の口縁部、12は青磁椀Ⅴ類の底部である。



第25図　B区　包含層出土遺物実測図

第3節　C区の調査

1．調査成果の概略

C区では、調査区全面に古代の礫敷遺構を確認し、これに伴う出土遺物も数多く確認された。礫敷の構築年代については、第5章第2節で検討をおこなっている。また、当時の入海（現大橋川）の汀線を示す状況証拠が得られ、古代の景観を復元する上でも重要な成果となった。なお、本調査区は全面調査には至っておらず、現在遺構の取り扱いを協議している段階である。調査は一部を除き礫敷遺構の検出までにとどめ、養生の上埋め戻している。

第3表　C区　非掲載遺物集計表

C　区	須　恵　器			土　師　器	
器　種	包含層1	礫敷遺構	包含層2	包含層1	礫敷遺構
蓋	2 (39)	6 (65)	0	0	0
坏・皿	10 (90)	68 (490)	3 (11)	1 (3)	2 (5)
坏・皿（高台付）	3 (22)	14 (213)	0	0	0
蓋または坏	0	1 (89)	0	0	0
高坏	0	0	0	0	0
壺	10 (263)	53 (1165)	0	0	0
甕	78 (2918)	434 (16626)	6 (195)	0	0
壺・甕・瓶類	1 (57)	20 (825)	0	0	0
不明	39 (335)	345 (2093)	3 (7)	0	14 (101)
合計	143 (3724)	941 (21566)	13 (243)	1 (3)	16 (106)

※弧括内は重量(g)

以下に、検出遺構とその出土遺物、遺構外出土遺物について記述する。器種・時期等が不明確な小片については全て掲載できなかったため、第3表に非掲載遺物の総点数と重量を示した。掲載遺物の詳細については、巻末の遺物観察表（第15表）にまとめた。なお、遺物観察表に示す須恵器の時期については、大谷編年を「出雲○期」、出雲国府編年を「第○型式」として記載した。

2．基本層序（第28・29図）

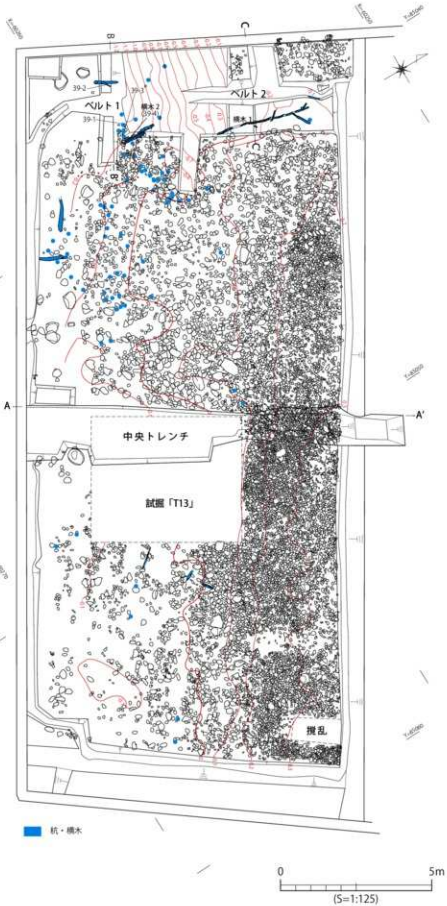
C区の基本層序は、上層から水田耕作土および床土層（2・3層）、灰色砂層（6層）、礫敷遺構、砂層・粘質土層（9～11層）、礫2層（12層）、地山（13層）という堆積状況である。全ての層位で遺物が出土したことから、礫敷遺構以上を「包含層1」、以下を「包含層2」として扱う。

C区は元々水田であったため、しまりの弱い耕作土および床土（2・3層）が50cm以上堆積する。床土は赤褐色を呈し、角張った礫が多く含まれていることから、北側の基盤層を削り出し整地したもの思われる。調査区の南壁付近には、水田に伴う杭が東西方向に確認され、2～6層にかけて打たれていた。出土遺物から、水田は近世以降のものである。

暗オリーブ灰色砂層（6層）は川砂の純層であり、中世の木製品や陶磁器類のほか、流れ寄せられた木片等が含まれる。

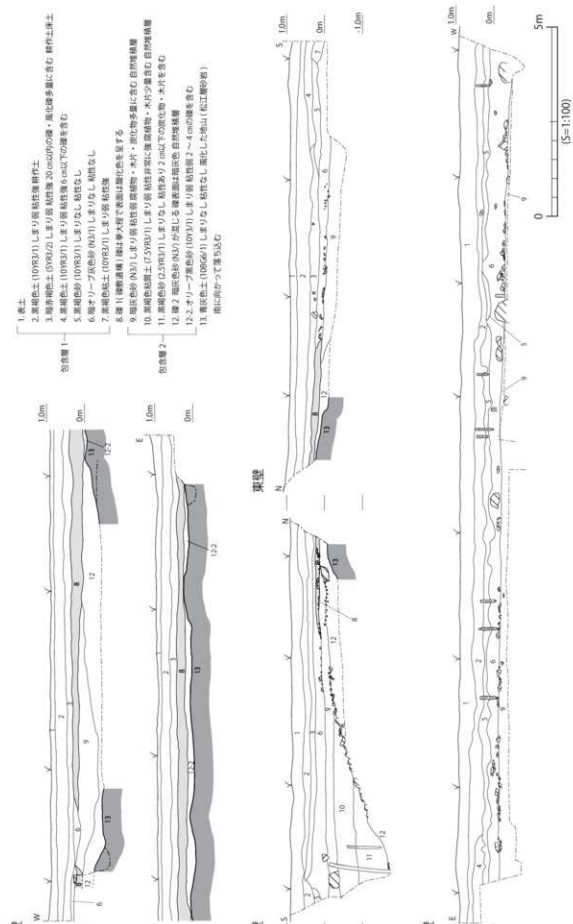
礫敷遺構は、6層の砂層に全面が覆われた状態であった。遺構の詳細は後述するが、調査区の北側と南側で様相が異なっており、小礫が隙間なく敷設された北側の範囲を礫1層（8層）とした。それ以南は礫がまばらで「層」として括り難かったため、6層に含めて個別に礫を記録した。ただし、8層と6層底の礫は一連のものであり、両者をあわせて礫敷遺構として扱う。

礫敷遺構より下層[2]は、暗灰色砂層（9層）、黒褐色粘質土（10層）、黒褐色砂層（11層）と続くが、いずれも自然堆積によるものである。さらにその下層の礫2層（12層）も自然に形成されたもので、基盤の松江層（13層）とともに南側ほど傾斜が強くなっている。

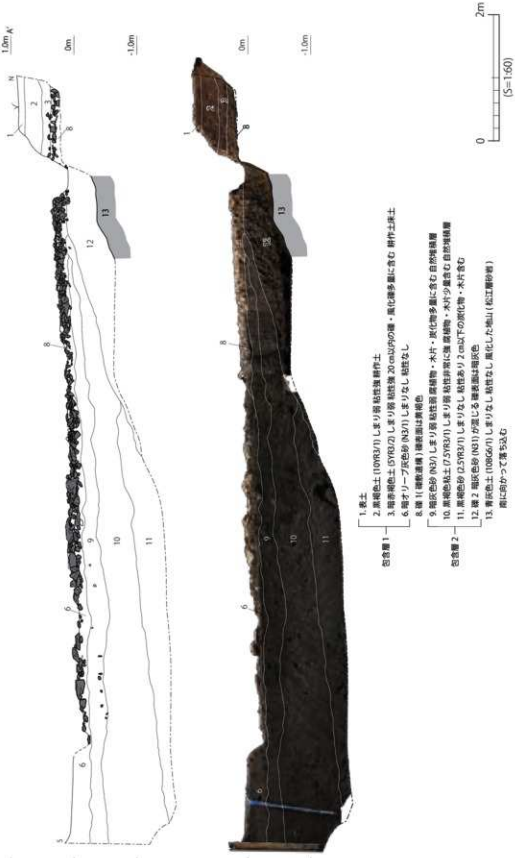


第26図　C区　遺構全体図(1:125)

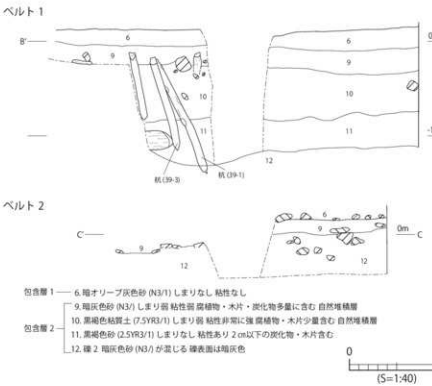
第27図　C区　三次元モデルオルソ図 (1:125)



第28図　C区　土層図（1:100）



第29図　C区　中央トレンチ西壁土層図(1:60)



第30図　C区　ベルト1・2土層図(1:40)

3．遺構とその遺物（第26・27、31～39図）

礫敷遺構　調査区内の東西約24m、南北10mの範囲で礫敷遺構が検出された（第26・27図）。その残存状態は極めて良好で、平成29年度の試掘トレンチ箇所を除けばほぼ当時の状態を保っている。後世の開発が及ばなかったこと、また今日まで遺構の全面が川砂層で覆われていたことが影響していると思われる。

礫敷遺構は、4～5度の角度をもって川側になだらかに傾斜する。用いられている礫は松江層が包含するデイサイトが主で、今も付近の山々で普遍的に見られるものである。このことから、礫は近くの丘陵から採集・運搬されたものと考えられる。なお、調査区西端の標高約0m以南には礫が認められず、攪乱を受けた形跡もないことから、当該範囲には元々礫が敷設されていなかった可能性が高い。

礫敷遺構の様相は、調査区の北半（山側）と南半（川側）で大きく異なっている。北半では拳大ほどの礫が隙間無く敷き詰められているのに対し、南半の礫は人頭大以上で密度も粗い。調査区南端では、一抱えほどある大振りの礫が点的に見られる。また、礫の色調にも顕著な違いが認められ、北半では酸化鉄色、南半では還元色を呈する（第27図）[3]。色調の違いは当時の入海の汀線を示す状況証拠の1つであり、標高0～10cm前後以下が水面下であった可能性が高い（詳細は第4章第2節参照）。

礫敷遺構に接する上下両層は自然堆積の砂層であり、盛土などは伴わない。礫敷の直下に不等沈下を防ぐ胴木や敷葉・敷粗朶等の基礎資材があるか否かは現時点で不明であるが、少なくとも深掘りしたトレンチ内では確認されていない。

礫敷遺構には多量の須恵器片が混在し、礫下に入り込む状況が随所で確認された（図版15-1）。須

恵器片はほとんど摩滅しておらず、北側は小片で南側ほど破片が大きい傾向があり、礫のサイズと比例している。出土遺物は圧倒的に須恵器が多く、土師器は数える程度である。また、出土位置の近い個体が接合するものの、完形に復元できるものはほとんどない。以上の特徴から、選択的に須恵器が持ち込まれ、現地で破砕し礫と同じ扱いで投入されたと考えられる。また須恵器片と同様に、無造作に礫に埋もれた状態で須恵質の土馬が1点出土した（第38図4）。祭祀の執行を示すような出土状況ではないため、須恵器の採集時に混入したものと考えられる。その他、礫敷遺構面には種子類が散布的に確認され、中でも桃種の多さ（91点確認）が目立った（図版44-2）。

木杭　調査区南半では、礫敷遺構面に打設された状態の木杭が多数認められた（第26図）。確認できるものだけで60本以上あり、礫に埋もれているものも含めれば相当数に上ると思われる。杭は総じて頂部を礫敷遺構面の高さに揃え、下層に深く入り込んでいる。結果的に、礫敷遺構下層の粘質土に支持されることで堅固に固定されており、一部をサンプルとして取り上げる際も一苦労であった。そのため、当時も一度打設した杭をそのまま抜くことは困難であり、後から追加することはあっても古い杭の抜き取りまではおこなっていないと推察する。

杭は礫の色調が変化する標高0m付近に集中するが、その分布は西側に偏在している。調査区西端のベルト1断面で杭の打設状況を一部確認することができ、長さ約1.3mの杭が礫2層まで達していることがわかった（第30図）。これらの一部を取り上げて図化し（第39図1～3）、さらに計13点のAMS年代測定を実施した（分析結果の詳細は第4章第1節参照）。

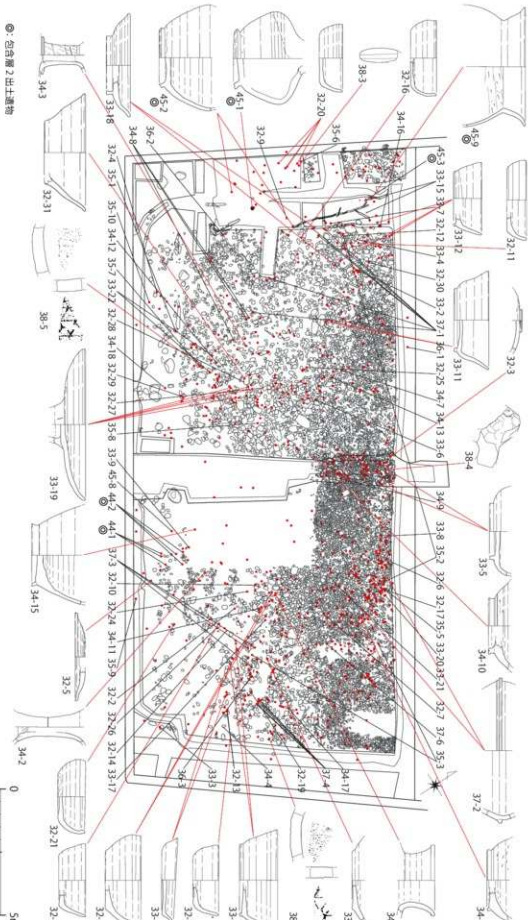
杭は礫敷遺構の土木工事に伴うものであることは疑いない。その性格としては、全体の様相が不明であるため即断はできないが、礫の洗掘・吸出しの防止、消波といった機能が想定される。ただし、分布の偏在性を積極的に評価すれば、舟杭あるいは桟橋等の構造物の一部といった可能性も否定できない。

横木　調査区西端で、横木状の木材を2箇所で確認した（第26図横木1・2）。両者が検出された箇所は、礫敷遺構と同一レベルであるものの、礫がほとんど敷設されていない範囲である。

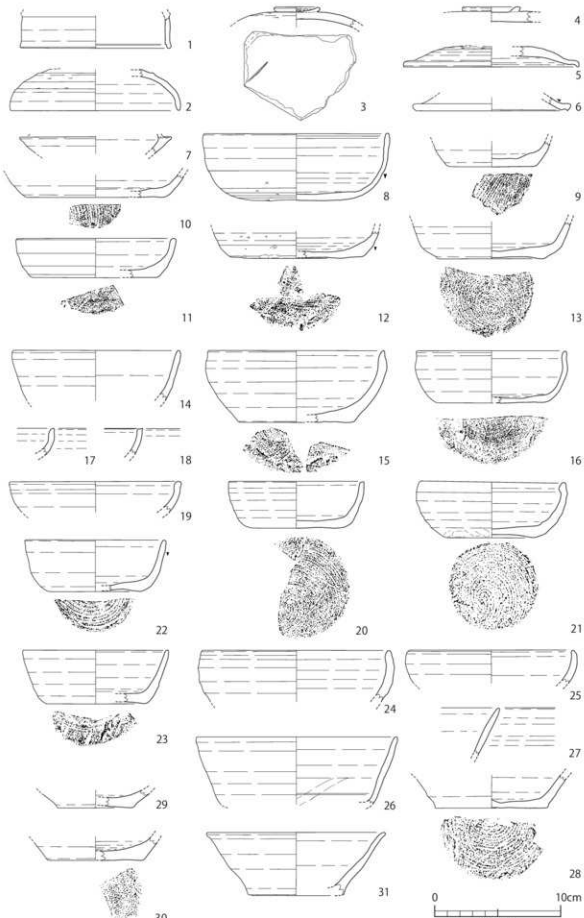
横木1は明らかに杭とは異なり、長さ3.2mの細長い材に抉りを設け、そこに別材を斜めに嵌め込んだ状態で出土した。用途不明であるが、礫敷の沈下を防ぐ基礎材、あるいは何らかの構造物の一部である可能性がある。その南側延長線上にある横木2は、横木1とおおよそ並行に横たわった芯持材である。ただし、横木1よりも径が太いため、折れた杭の一部である可能性もある。横木2の一部は取り上げて図化している（第39図4）。

礫敷遺構出土遺物（第31～39図）　第31図は、礫敷遺構および包含層2に伴う出土遺物の位置を示したものである。第32～37図は全て礫敷遺構に伴って出土した須恵器である。なお、変色や圧着痕などから重ね焼きの状況がわかる個体については、断面に▼を付した。この上端以下が重なりの範囲であることを示す。次節以降も同様とする。

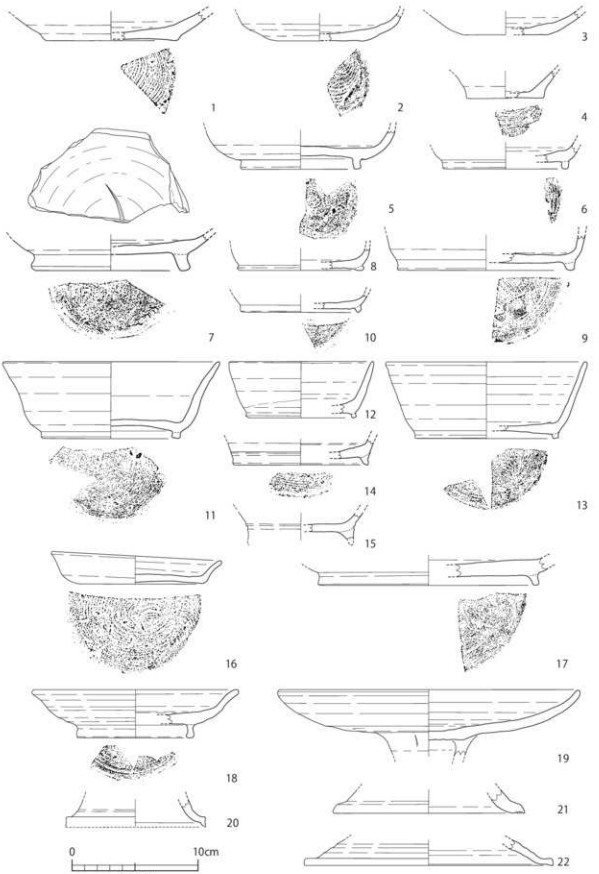
第32図1～6は坏蓋で、1は傾斜変換点の外面と口縁端部内面に明瞭な段を持つタイプで、大谷編年出雲1期に位置付けられる。3はボタン状つまみを有し、内面に「－」状のヘラ記号が施されている。5・6は口縁端部を折り返すものである。6の傾斜変換点の外面には色調が変化するラインがあり、焼成時にはこの上に別個体が重なっていたことがわかる。7～31は無高台の坏で、8～12の底部には静止糸切り痕が残る。8・12・22の外面には重ね焼きによる変色が認められる。15～21は口縁端部が外側に屈曲するもので、27～31は器壁が大きく外傾するものである。



第31図　C区　礫敷遺構出土遺物分布図 (1:150)



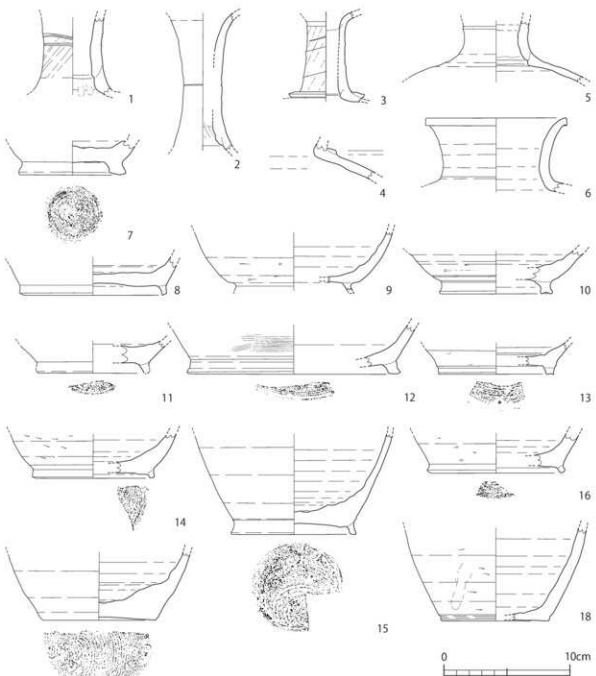
第32図　C区　礫敷遺構出土須恵器実測図1



第33図　C区　礫敷遺構出土須恵器実測図2

第33図1～4は無高台の坏または皿で、いずれも出雲国府第6型式以降と考えられる。5～15は高台付坏で、底部切り離し技法は5が回転ヘラ切り、9が静止糸切り、12を除くその他が回転糸切りである。7は高台がやや「ハ」の字状に開き、内面中央には「×」状のヘラ記号が施される。14・15の高台は底部最外縁に取り付く。16～18は皿で、18の高台は高くしっかりしており、体部から口縁部にかけて大きく外反する。内底部のみ使用により平滑になっている。19～22は高坏である。19の坏部は静止糸切り痕が残り、脚部には3方向の線状透かしが貫通する。

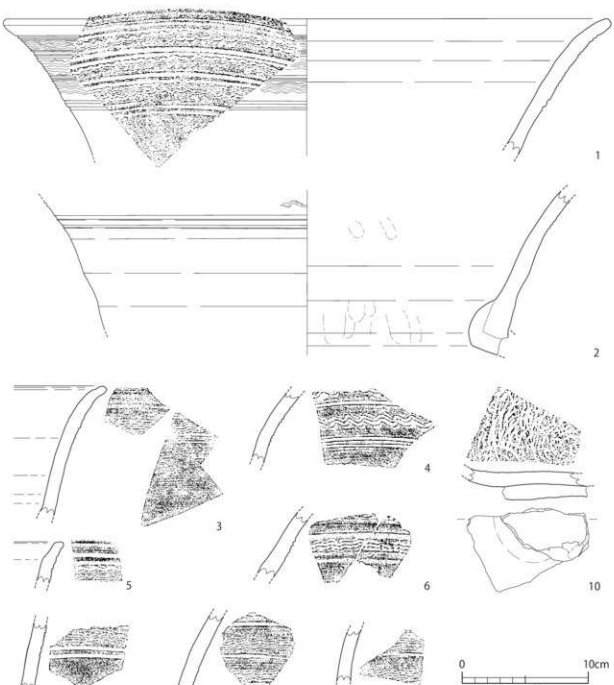
第34図1～6は長頸壺である。3・4は胴頸部境に貼付突帯を廻らす。6は太く短い頸部で、口縁端部は面取りされ下端にやや突出する。8～16は高台付きの壺、17・18は無高台の壺である。17の内面は、胎土を覆うほど著しく被灰している。



第34図　C区　碓敷遺構出土須恵器実測図3

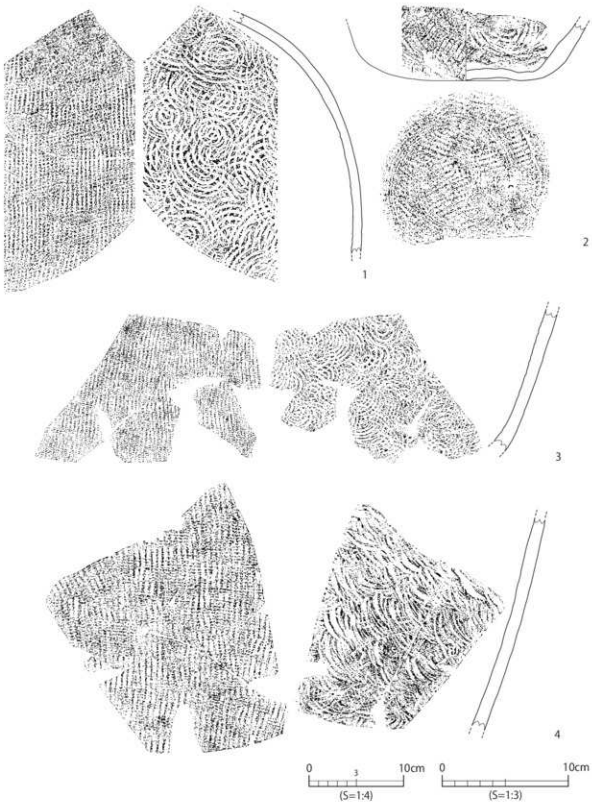
第35図は全て甕である。１～９は頸部から口縁部にかけての破片で、いずれも波状文を施す。10は甕の底部に焼台と思われる別個体が溶着したものである。第36図も甕の胴部・底部の破片である。

第37図1・3は壺甕類の底部であるが、横瓶の可能性も残る。2は平瓶で、胴部最大径のところに貼付突帯を廻らせる。4・5は横瓶である。5は口縁部高が低く横長長胴で、口縁部を除いてナデを施さず、内面に当て具痕・外面に平行タタキ痕が明瞭に残る。こうした特徴は坂本編年Ⅲ類の小型横瓶に該当することから（坂本2012）、出雲6b期～出雲国府第２型式にかけてのものと考えられる。6は鉄鉢形土器の口縁部で、端部を内面に折り返すようにナデつける。



第35図　C区　礫敷遺構出土須恵器実測図4

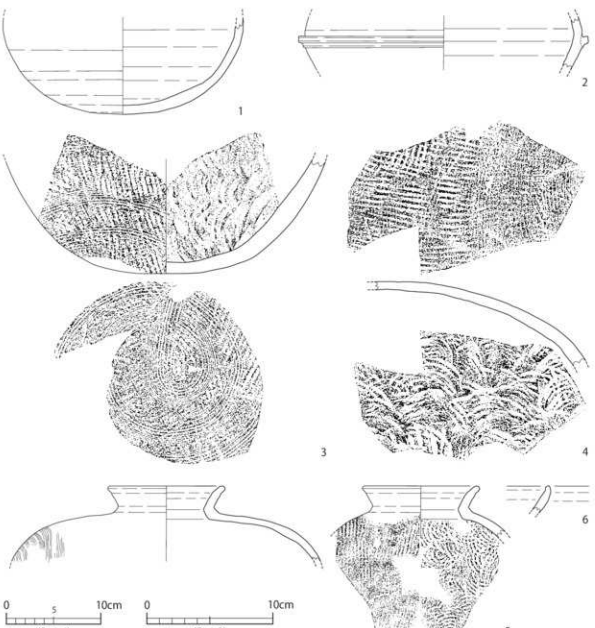
第38図1は土師器の二重口縁の甕で、古墳時代前期前葉のものと考えられる。2は土師器の甕で、口縁はやや外反気味に広がるが内面は直線的である。胴部は、肩が張らず下膨れの形状が予想される。4は須恵質の土馬で、頭部から胴体部にかけて残存し、割れやすい端部は欠損している。破面はやや摩滅しているが、全体的にナデによる調整が認識できる。目は刺突、たてがみは粘土塊のつ



第36図　C区　礫敷遺構出土須恵器実測図5

まみ上げで表現されている。脚部は別作りで、胴体部の高い位置から貼り付けられている。5・6は出雲国分寺補修期の平瓦で、ともに凸面には出雲国府分類格子タタキ８（島根県教育委員会2009）が施されている。7は黒曜石の石核、8・9は剥片である。10は頁岩製と思われる石鏃で、一部欠けた箇所を再成形している。

第39図１～３は礫敷遺構に打設されていた木杭で、径7㎝前後の芯持材に下端のみ削り加工を施した簡易な作りである。1は残存長128㎝を測り、一部に樹皮が残る。2は残存長106㎝を測り、枝が切り落とされ、下端は鋭角を呈する。3も下端を刃物で鋭角に尖らせて使用している。4は横木2とした木材で、芯持材の表裏を手斧等によって平らに成形し、下端をカットして尖らせている。建築部材から横木あるいは杭に転用した可能性がある。5は薄い板状木製品で、弱い抉りを持ち端部に穿孔が2箇所施される。部材の一部あるいは荷札木簡の可能性があるが墨書は確認されない。6は箸である。



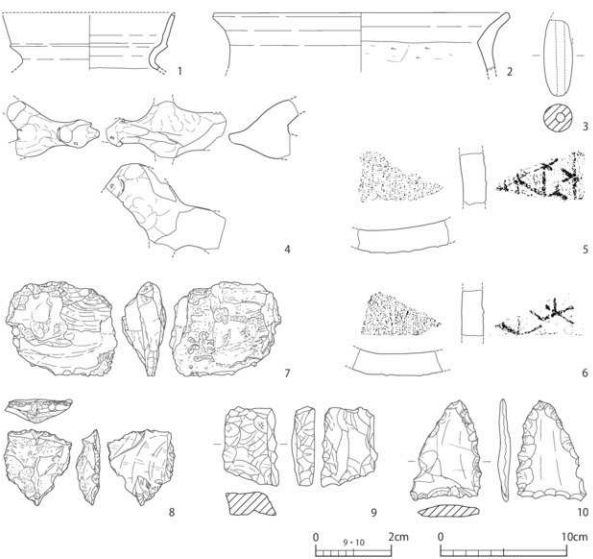
第37図　C区　礫敷遺構出土須恵器実測図6

4．遺構外出土遺物（第40～46図）

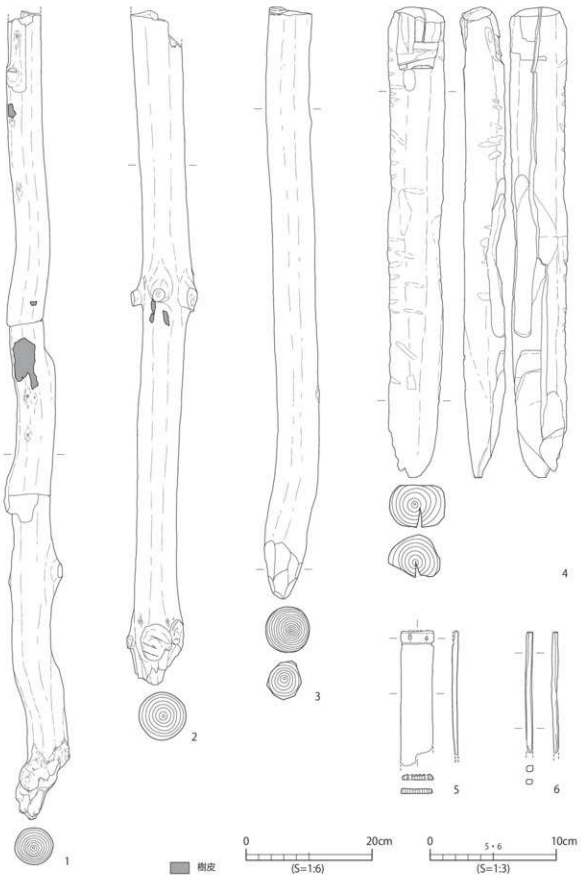
包含層1出土遺物（第40～43図）　礫敷遺構より上位の層から出土した遺物で、第40図が須恵器、第42・43図が木製品である。

第40図1・2は坏蓋で、1は傾斜変換点の外面と口縁端部内面に明瞭な段を持つ。3～7は無高台の坏である。5・6には底部やや上に重ね焼きにより色調が変化するラインが認められる。7は体部が大きく外傾し、外底部に回転糸切り痕、内部に回転ナデが明瞭に残る。8～12は高台付きの坏または皿である。8は高台がやや長く「ハ」の字状を呈する。10はやや外傾する直線的な器壁で、台形状の高台が底部最外縁に取り付く。13・14は高坏の脚部、15・16は長頸壺である。17は壺の底部であるが、底部の一部と外面に降灰が付着しているため、窯内で転倒したものと思われる。

第41図1・2は須恵器の鉢である。1は把手を持ち、底部に櫛状工具でカキ目が施されている。外面には平行タタキが明瞭に残るが、内部は当て具痕がケズリとナデで消されている。口縁端部は面取りされる。3・4は弥生土器の甕である。3の口縁は「く」の字状を呈し、短く外反気味に開く。4の内面は頸部までケズリが施される。5は土師器の甕で、口縁端部がわずかに外側へ突出する。6は土師器高坏の坏部と思われ、薄造りで緩やかに湾曲して立ち上がる。7は中膨れの管状土錘である。



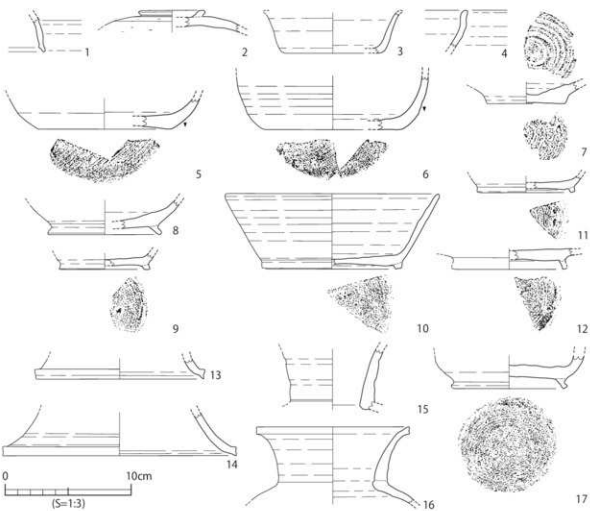
第38図　C区　礫敷遺構出土遺物実測図



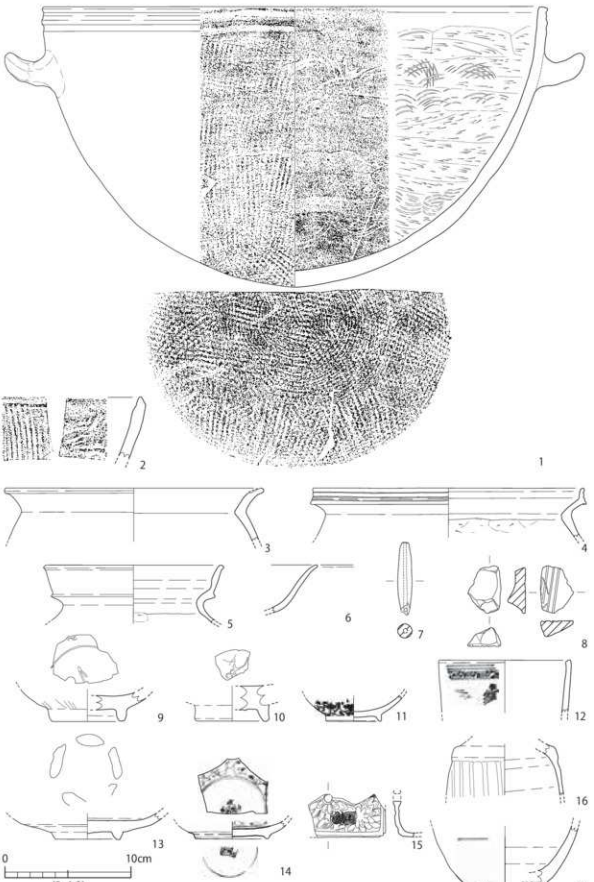
第39図　C区　礫敷遺構出土杭・木製品実測図

8は砂岩製の砥石で、3面使用し、うち1面には刃先を当てたような細く浅い筋状の使用痕が残る。9・10は龍泉窯系の青磁碗で、9の外面には片彫蓮華文、内部に圏線が描かれる。11・12は肥前系磁器の碗である。13は朝鮮白磁の皿で、内底部の5箇所に砂目が残る。14～17は肥前系磁器である。

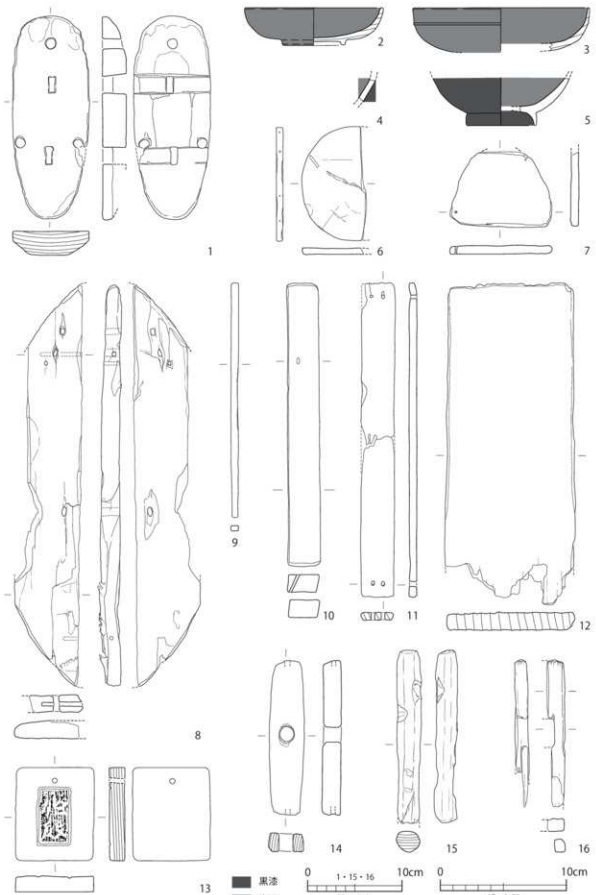
第42図1は丸形をなす露卵下駄の台である。2～5は漆器である。2・3は皿で、内外とも赤漆が塗布される。2の底部は生地が露出しているが、すり減ったことによるものと思われる。3の口縁下には弱い段状の突帯が廻る。4は外面に黒漆、内面に赤漆が塗布される小片で、皿または椀の体部の可能性がある。5は高台が先細りする椀で、外面に黒漆、内面に赤漆が塗布される。6は曲物の底板で、外縁に目釘孔が4箇所確認される。8は桶または樽の底板と考えられる。外縁が弧を描き、側面に目釘孔が2箇所確認される。また、釘孔のような穿孔が数箇所確認され、うち1箇所は目釘孔を壊していることから、転用された可能性がある。10は幅2.5cmの棒状木製品で、斜め方向に穿たれた釘孔が1箇所確認される。11は板状木製品で、両端部に径2mmの穿孔が2箇所ずつ確認される。12は幅10cm、厚さ1.4cmを測る板状木製品である。10～12はいずれも用途不明だが、部材の可能性がある。13は方形の板状木製品で、片面に焼き印が施されるが文字は判読し難い。中央上部に径4mmの孔が穿たれ、ここに紐を通した荷札の可能性が考えられる。14は棒状木製品で、中央に径1.2cmの孔が穿たれ、両端部面には釘孔が確認される。15は断面形が円形に加工された棒状木製品である。4箇所の刳込みのような凹みが見られるが、加工によるものかは判然とせず、用途は不明であ



第40図　C区　包含層1出土須恵器実測図



第41図　C区　包含層１出土遺物実測図



第42図　C区　包含層1出土木製品実測図1

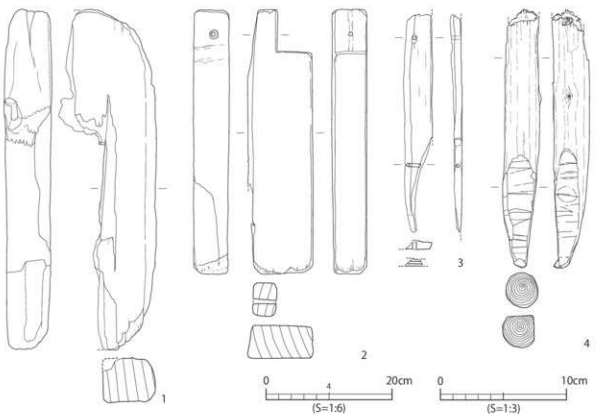
る。16は棒状木製品で、ホゾ穴のような刳込みが認められることから部材の一部と思われるが、欠損部が多く用途は不明である。

第43図1は欠損が多く全容を把握し難いが、弧を描く側縁の形状から長楕円形をなすものと思われる。また、破断部にホゾ穴状の方形の刳り込みが見られることから部材の可能性が考えられるが、用途は不明である。2は部材と思われる板状木製品で、片端に作られたホゾに横方向から径5㎜の孔が穿たれている。また、ホゾ近くには当たり痕が認められる。3は端部と側面を欠損するため全容が不明だが、端部近くに径2㎜の孔が穿たれた板状木製品である。側面に目釘が残存することから曲物の底板の可能性が考えられる。4は芯持材の下端を鋭利な刃物で尖らせた杭である。

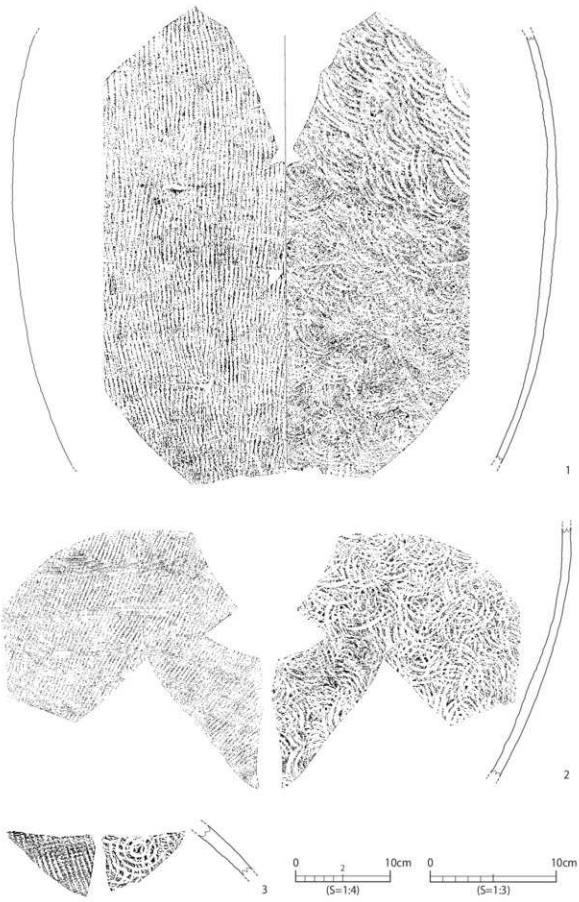
包含層2出土遺物（第44～46図）　礫敷遺構より下位の層から出土した遺物である。

第44図1～3は須恵器甕の胴部で、いずれも外面に平行タタキ、内面に当て具痕が明瞭に残る。1は長胴形に見えるが、歪みで変形したものである。

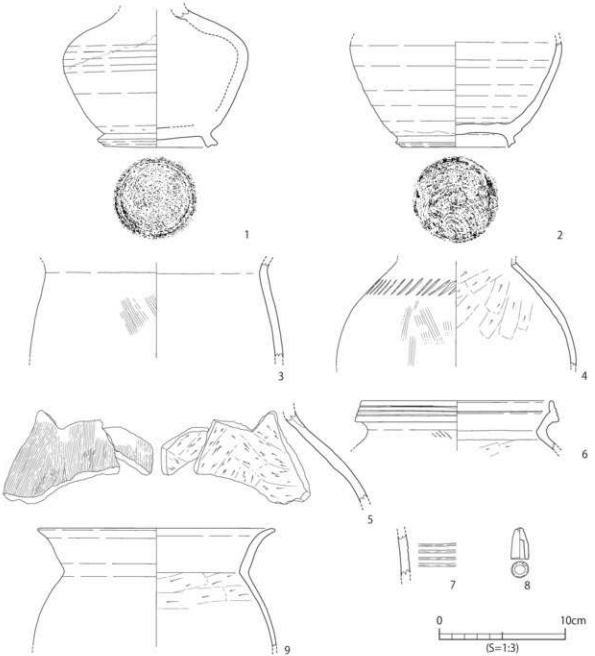
第45図1・2は須恵器の長頸壺で、底部切り離し技法は1が回転ヘラ切り、2が回転糸切りである。両者とも高台は「ハ」の字状に開き、胴部最大径が大きく張り出し丸くおさまる。これらの特徴から、出雲国府第1～2型式の時期が考えられる。3～7は弥生土器である。3・4は甕で、4の外面にはハケ調整がなされ、肩部には列点文が施されている。5は壺と思われ、外面はハケ、内面はケズリによる調整である。6は口縁部に凹線文、頸部に列点文を施した甕である。7は多重のヘラ描直線文が施された壺または甕の小片である。8は弓筈と思われる骨角器である。外面は極めて平滑で、断面は鋭利な刃物で加工したような形跡がある。9は全体的に薄造りの土師器の甕で、内面は頸部までケズリ調整が施されている。この甕は礫敷が希薄な調査区西端で、レベル的には礫敷遺構より若干低い位置で出土した。



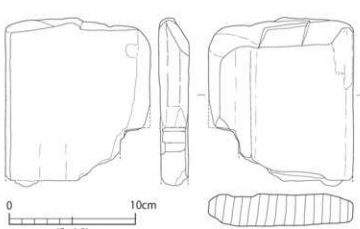
第43図　C区　包含層1出土木製品実測図2



第44図　C区　包含層2出土須恵器実測図



第45図　C区　包含層2出土遺物実測図



第46図　C区　包含層2出土木製品実測図

第46図1は端部が鋭角に成形され、手斧を使用したような加工痕が認められる板状木製品である。側面に方形の抉り部分があることから、建築部材の可能性が考えられる。

第４節　D区の調査

１．調査成果の概略

D区では、調査区北側の限られた範囲に礫敷遺構を検出し、これに伴う出土遺物から７世紀後葉～８世紀第１四半期のものと考えられた。なお、構築年代の検討は第５章第３節でおこなっている。調査区南東側では杭列やPit列が確認されたが、いずれも近世以降のものと想定される。また、古代の汀線の復元に有効な資料が得られたほか、地形の形成過程も明らかとなった。

第４表　D区　非掲載遺物集計表

D　区	須　恵　器		土　師　器	
器　種	包含層	礫敷遺構・礫層	包含層	礫敷遺構・礫層
壺	3(82)	6(115)	0	0
坏・皿	5(59)	8(71)	0	0
坏・皿（高台付）	2(127)	5(637)	0	0
蓋または坏	17(131)	15(144)	0	0
高坏	8(135)	3(50)	0	0
高坏か	1(18)	2(45)	0	0
甕	0(0)	17(1774)	0	0
甕	2(69)	1(63)	0	0
壺・甕・瓶類	86(4104)	88(4161)	0	0
不明	60(454)	52(649)	14(156)	15(176)
合計	184(5179)	197(7709)	14(156)	15(176)

※弧括内は重量(g)

以下、これらの遺構とその出土遺物、遺構外出土遺物について記述する。器種・時期等が不明確な小片については全て掲載できなかったため、第４表に非掲載遺物の総点数と重量を示した。掲載遺物の詳細については、巻末の遺物観察表（第16表）にまとめた。なお、遺物観察表に示す須恵器の時期については、大谷編年を「出雲○期」、出雲国府編年を「第○型式」として記載した。

２．基本層序（第49～52図）

D区は元々宅地だったこともあり、現代の造成土（1・2層）が厚く堆積し、攪乱も一部深くまで及んでいる。その下層には近世の水田耕作土（3・4層）、中世の木製品を多量に含む砂層（8～10層）、古代の須恵器を多く含む黒色砂層・礫層（11・12層）と続く。礫層（12層）は、風化した地山面が波食の作用を受けることによって自然形成されたもので、A区・C区でいうところの「礫２層」にあたる。それより下位は地山（松江層）である。

地山面はほぼ水平で、切ったかのような平坦面が広がる。一方、調査区北側にはわずかな段丘が存在し、平坦面より0.4～0.5m高い。こうした地形も、波食によって表面が均されることでできた自然地形である（詳細は第４章第２節参照）。また、地山面は調査区域だけでも多様な土質・土色のものが認められ、特に調査区西半では土色が明確に分かれる東西方向のラインが検出された（第48図２）。このことから、溝や人為的な盛土等の可能性を考慮して下層確認用のトレンチ（第51図、第52図トレンチ1）を設定したが、遺物は全く確認できず人為的な痕跡も認められなかった。結果的に、これらは複数回の地すべりや土石流によるものであることが判明し、山側から南方向に急角度で土砂が流下した状況が明らかとなった[4]。第51・52図の14層以下の土層が縦方向に伸びるのはそのためである。

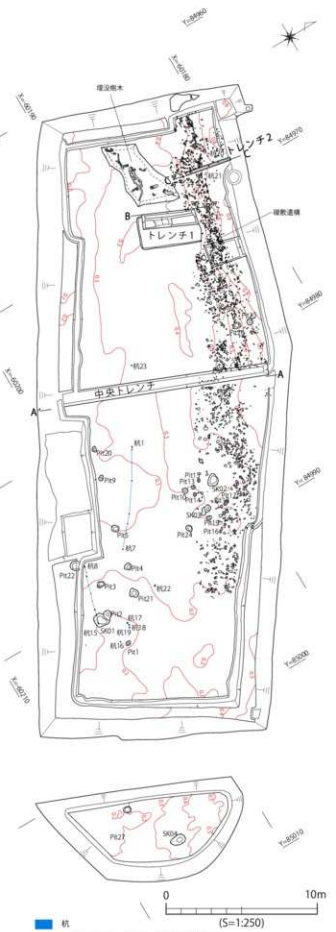
なお、礫敷遺構（7層）および礫層（12層）より上位の層では遺構が検出されなかったが、多くの遺物を含むため「包含層」として扱う。

3．遺構とその遺物（第47・48、53～62図）

礫敷遺構　調査区北側で、幅約2m、長さ約32mにわたって礫敷遺構（7層）が確認された（第47図・第48図1）。調査区西半の残りは良好であるが、調査区東半は宅地の攪乱により礫が乱されている。礫敷遺構の南北断面（第49図西壁、第52図トレンチ2）を見ると、段丘斜面から頂部平坦面にかけて敷設されているのがうかがえる。

本遺構を人工物と見做す根拠は次のとおりである。①礫は拳大～人頭大で大きさにばらつきがあり、山礫（和久羅山デイサイト）が主体である。②須恵器片が礫下にも入り込んでいる。③礫敷直下（地山面）で出土した須恵器片と、礫敷直上で出土した須恵器片が接合する。④出土遺物は圧倒的に須恵器が多く、土師器はほとんどみられない。以上から、河川の運搬作用等による堆積ではなく、礫と須恵器片による人工的な構築物と判断される。

礫は付近の丘陵から産出されるもので、近場から採集・運搬したことがうかがえる。礫に混ぜられた須恵器片は大きくても手のひらサイズで、出土位置の近い個体同士でいくつか接合するものの、完形近く復元できるものはない。礫敷構築時に須恵器を意図的に破砕し、礫と同じ扱いで投入している可能性が高い。須恵器は7世紀後葉～8世紀第1四半期におさまる時期のものであることから、礫敷は限られた期間で一挙に構築されたと考えられる。また、礫層（12層）が包含する遺物もこの時期の須恵器片が多く、破片が散布的に出土する状況から、礫敷遺構の初築に



第47図　D区　遺構全体図（1:250）

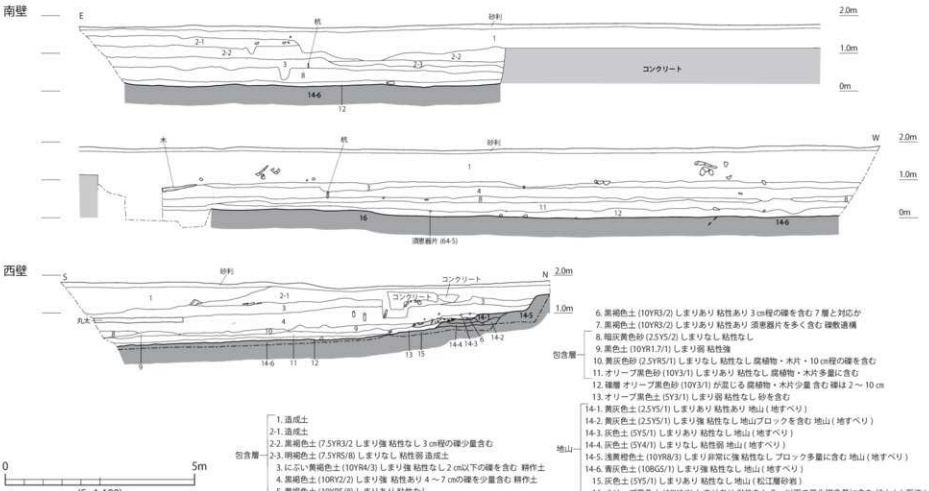
第48図　D区　三次元モデルオルソ図（1:300）

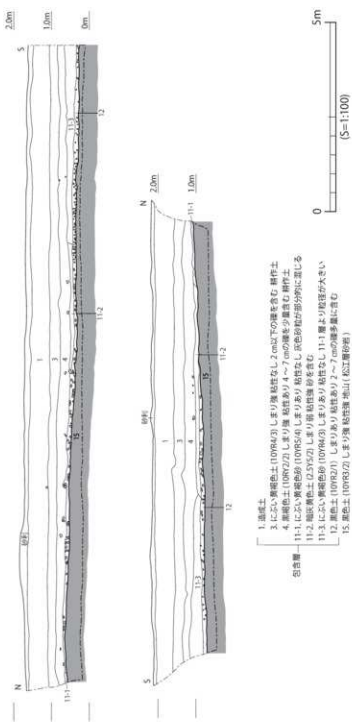
近い時期の地表面と想定される。

第53図は、礫敷遺構および礫層（12層）に伴う須恵器の出土位置を示したものである。礫敷遺構の西半分では甕・瓶類といった大型器種が伴うのに対し、東半分では坏・皿・高坏・壺などの小～中型の器種が多く見られる。このように比重の近い器種で出土位置がまとまる傾向は、所によって須恵器の採集ポイントが若干異なることを示している[9]。すなわち、礫敷の構築単位を反映している可能性がある。

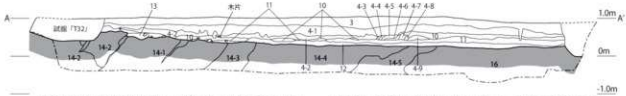
礫敷遺構直上からは中世の陶磁器も出土していることから、長期間に渡って露出していたことが想定される。また、礫敷遺構の上位には黄褐色土（5層）が堆積するが、これは中世以降に北側の地山を削り出して段丘上を整地した層と思われる。つまり、礫敷が敷設された段丘面は、古代から中世にかけて修繕を繰り返しながら使用されたと考えられる。近世には、さらに北側を開削して平坦面を拡張しており、水田として利用している（3・4層）。

第49図　D区　土層図(1:100)





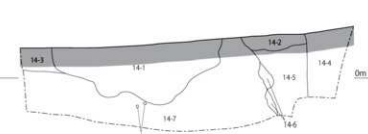
第50図　D-b5区　土層図(1:100)



3. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまり強 粘性なし 2 cm以下の礫を含む 耕作土
4-1. 黒褐色土 (10YR2/2) しまり強 粘性あり 4 ～ 7 cmの礫少量含む
4-2. 黒色土 (10YR1.7/1) しまり弱 粘性強 耕作土床土
4-3. 黒褐色土 (10YR3/1) しまり弱 粘性強
4-4. 黒褐色土 (10YR3/2) しまり弱 粘性強 10 層の砂少量含む
4-5. 黒褐色土 (10YR2/2) しまり弱 粘性強
4-6. 黒褐色砂 (10YR3/1) しまりあり 粘性なし 腐植物・木片少量含む
4-7. 黒褐色土 (10YR2/2) しまり弱 粘性強
4-8. 黒褐色土 (10YR3/1) しまり弱 粘性強 11 層の砂少量含む
4-9. 黒褐色土 (10YR3/2) しまり弱 粘性あり 10 層の砂多量に含む
10. 黄灰色砂 (2.5YR5/1) しまりなし 粘性なし 腐植物・木片・10 cm程の礫少量含む
11. オリーブ黒色砂 (10Y3/1) しまりあり 粘性なし 腐植物・木片多量に含む
12. 礫層 オリーブ黒色砂 (10Y3/1) が混じる 腐植物・木片少量含む 礫は 2 ～ 10
13. にぶい黄褐色土 (10YR5/3) しまり弱 粘性強 15 cmの礫含む 地山の流土
14-1. 黒褐色土 (10YR3/2) しまり弱 粘性強 地山 (地すべり)
14-2. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) しまりあり 粘性強 地山 (地すべり)
14-3. 黄褐色土 (2.5Y5/3) しまりあり 粘性強 地山 (地すべり)
14-4. 赤褐色土 (5YR4/6) しまり強 粘性強 地山 (地すべり)
14-5. 青灰色土 (5B6/1) しまり強 粘性強 10 cmの礫含む 地山 (地すべり)
16. オリーブ黒色土 (10YR3/1) しまりあり 粘性なし 7 cm以下の風化礫多量に含む 地山 (土石流)

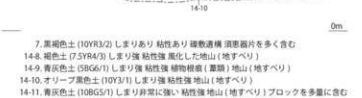
第51図　D区　中央トレンチ土層図 (1:100)

トレンチ 1



14-1. 緑灰色土 (5G6/1) しまり非常に強い 粘性あり 4 ～ 10 cmの地山ブロック多量に含む 地山 (地すべり)
14-2. 黒褐色土 (10YR3/2) しまり非常に強い 粘性あり 地山 (地すべり)
14-3. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり非常に強い 粘性あり 地山 (地すべり)
14-4. オリーブ灰色土 (2.5GY6/1) しまり強い 粘性なし 2 ～ 4 cmのブロック多量に含む 地山 (地すべり)
14-5. にぶい褐色土 (7.5YR5/4) しまり強い 粘性強い 地山 (地すべり)
14-6. 黒褐色土 (7.5YR2/2) しまり強い 粘性強い 14-7 が 14-5 に入り込んだもの
14-7. 黒色土 (7.5YR1.7/1) しまりあり 粘性強い 樹木片を含む 地山 (地すべりによる変形)

トレンチ 2



7. 黒褐色土 (10YR3/2) しまりあり 粘性あり 礫敷遺構 頂面器片を多く含む
14-8. 褐色土 (7.5YR4/3) しまり強 粘性強 風化した地山 (地すべり)
14-9. 青灰色土 (5BG6/1) しまり強 粘性強 植物根痕 (葦跡) 地山 (地すべり)
14-10. オリーブ黒色土 (10Y3/1) しまり強 粘性強 地山 (地すべり)
14-11. 青灰色土 (10BG5/1) しまり非常に強い 粘性強 地山 (地すべり) ブロックを多量に含む
15. 青灰色土 (5B5/1) しまり非常に強い 粘性なし 地山 (松江層砂岩)

第52図　D区　トレンチ 1・2 土層図 (1:40)

礫敷遺構・礫層出土遺物（第54～58図）　先述したように、礫敷遺構と礫層（12層）は同一時期の面と考えられることから、両者の出土遺物をあわせて掲載する。また、その直下（地山面）から出土した遺物も一括性が高いことから、同様に含める。そのほとんどは須恵器で、一部縄文～弥生時代の土器・石器も含まれている。第54～56図は全て須恵器である。

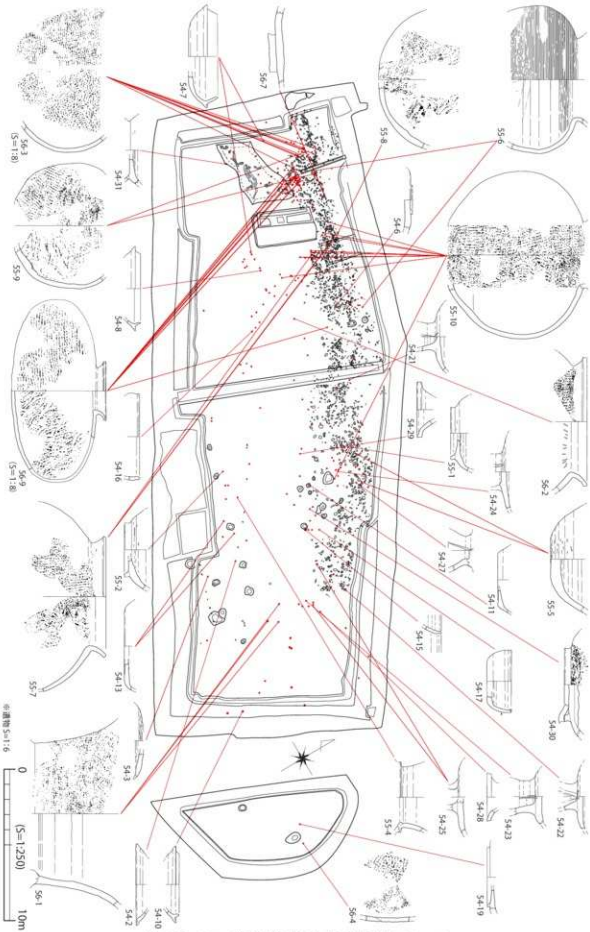
第54図1～6は坏蓋で、2は端部にかえりを持つ。5は算盤玉状つまみ、6は輪状つまみを有する。7～10は古墳時代の蓋坏で、7の外面には重ね焼きによる接着痕が認められる。11～14は坏または皿の底部で、11・12には回転糸切り痕、13・14には静止糸切り痕が残る。15・16は口縁端部が短く屈曲する坏である。17は口縁端部がわずかに屈曲する坏で、口縁内側に重ね焼きによって接着した別個体の一部が残存する。また、中央よりやや上の体部外面にも接着痕と色調が水平に変化するラインがあることから、少なくとも3段以上に重ねて焼かれたことがわかる。18～20は高台付皿で、底部に回転糸切り痕を残す。21～29は高坏で、22はヘラ切りによる透かしを持ち、坏部にもヘラ切り痕が線状に残る。その他にはいずれも線状透かしが施されている。30・31は高台付の壺底部で、30の外底部には溶着した別個体の一部が残り、内底部は降灰に厚く覆われている。

第55図1～6は壺で、4は胴頸部境に貼付突帯を廻らす長頸壺である。7～10は壺または甕であるが、9は提瓶の可能性も残る。いずれも櫛状工具による横方向のカキ目が施されている。

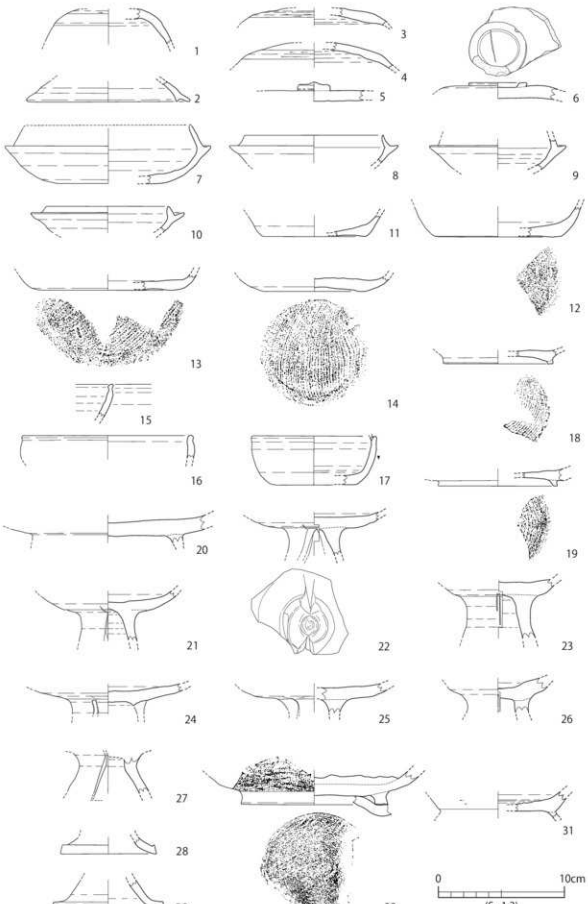
第56図1は波状文を施す甕である。2は横瓶または甕で、胴頸部境内面に縦長の当たり痕があり、当て具の柄等が接触した痕と思われる。4・5は格子目タタキを施す亀山系の甕、6は擂鉢である。7・8は焼台が溶着した甕の底部である。9は口縁部高が低く長胴の横瓶で、口縁部を除いてナデを施さず、内面に当て具痕・外面に平行タタキ痕が明瞭に残る。こうした特徴は坂本編年Ⅲ類の小型横瓶に該当することから（坂本2012）、出雲6b期～国府第2型式にかけてのものと考えられる。

第57図1は胴頸部境に1条のヘラ描直線文を施す弥生前期前半の壺である。2は弥生後期後葉の甕である。3は薄手の土師器甕で、口縁部は「く」の字状を呈する。4は龍泉窯系青磁の皿で、高台脇まで施釉され外底部は露胎である。5は褐釉陶器のミニチュア碗で、産地は中国福建省、年代観は12～13世紀頃と推定される。6～12は石器で、7の磨石には使用痕が認められる。8～11の材質は黒曜石で、8は微細剥離痕のある剥片、10は基部が平坦な石鏃で正三角形に近い形態である。

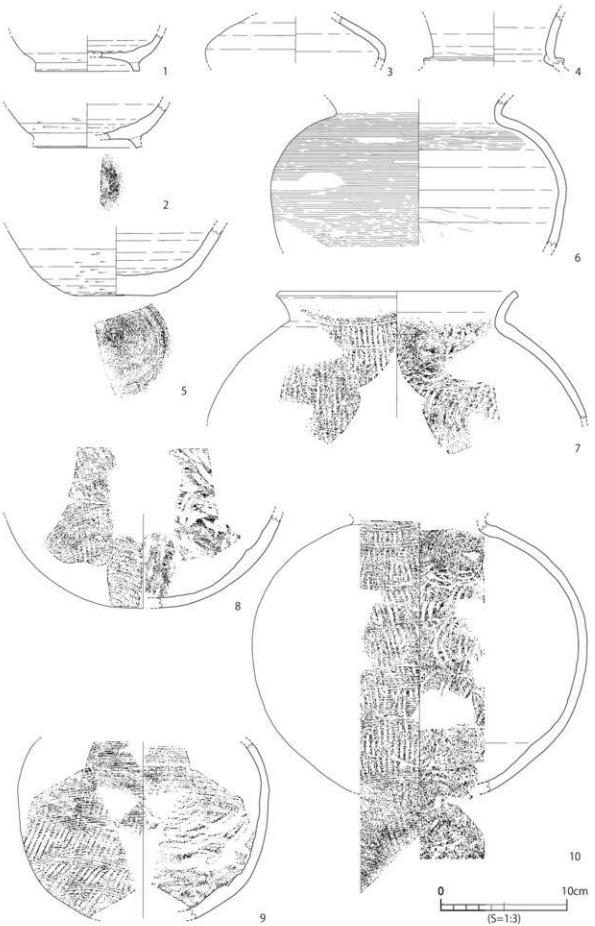
第58図は木製品である。1は呑口式の刀子の柄木で、両端部は弓なりに丸みを持ち、外面の一部に塗布された黒漆が残存する。2は欠損しているが、「コ」の字状を呈し、方形に刳り込まれた中央部には貫通する径2㎜の孔が2つ穿たれている。部材の一部と思われる。3は破損部分が多く全容が把握し難いが、中抜きの方形を呈すようで、端部は足状に作り出されている。4は板状木製品で、ホゾ状に加工された箇所があることから部材の一部の可能性がある。5はノミ痕と鋸によって方形に成形され、加工痕が顕著に認められる。8は板状木製品で、割れ面近くに被熱痕のある半円形の浅い窪みが2箇所認められる。火鑽臼の可能性が考えられるが、欠損するため判然としない。9は曲物の底板と考えられるが、曲線状に並ぶ3個の釘孔が2列認められる。部材の一部あるいは転用品の可能性も考えられる。10は端部がやや細る板状木製品で、中心に釘孔が5箇所並び、うち3箇所には木釘が残存する。12は箸状木製品で、両端が欠損する。13は板状木製品で、上部は丸みを付けて面取りし、下端は割れが入っている。側面には対となる刳り込みが上・中・下の3箇所あり、上と下の面には縛り痕が認められる。上部の刳り込みと下端近くの表面には浅い溝を作っている。また、上半部の表面に刃物傷が認められることから、人形の可能性が考えられる。



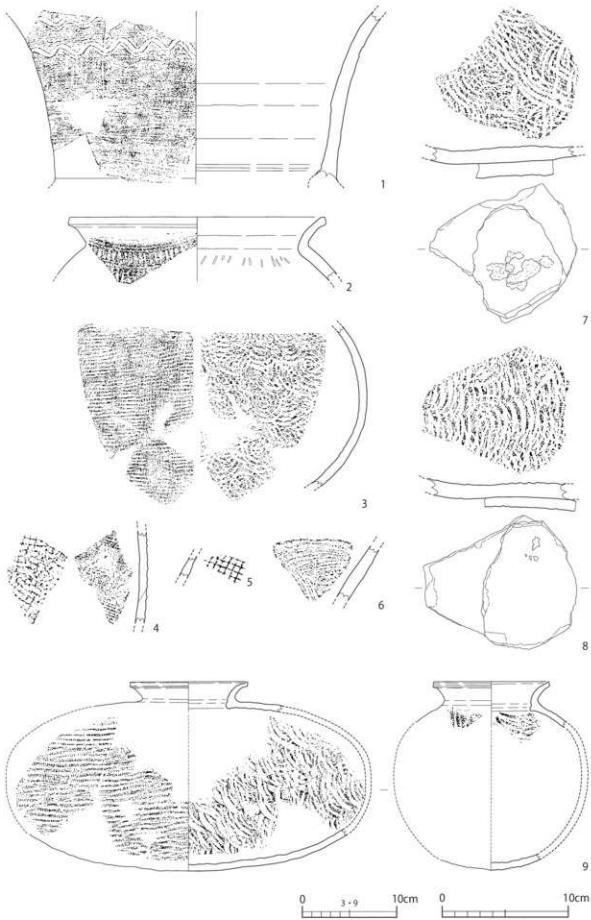
第53図　D区　礫敷遺構・礫層出土須恵器分布図（1:250）



第54図　D区　礫敷遺構・礫層出土須恵器実測図1



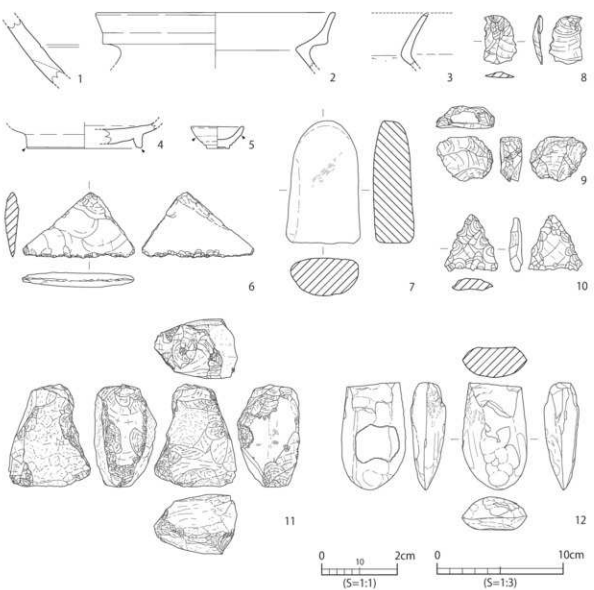
第55図　D区　礫敷遺構・礫層出土須恵器実測図2



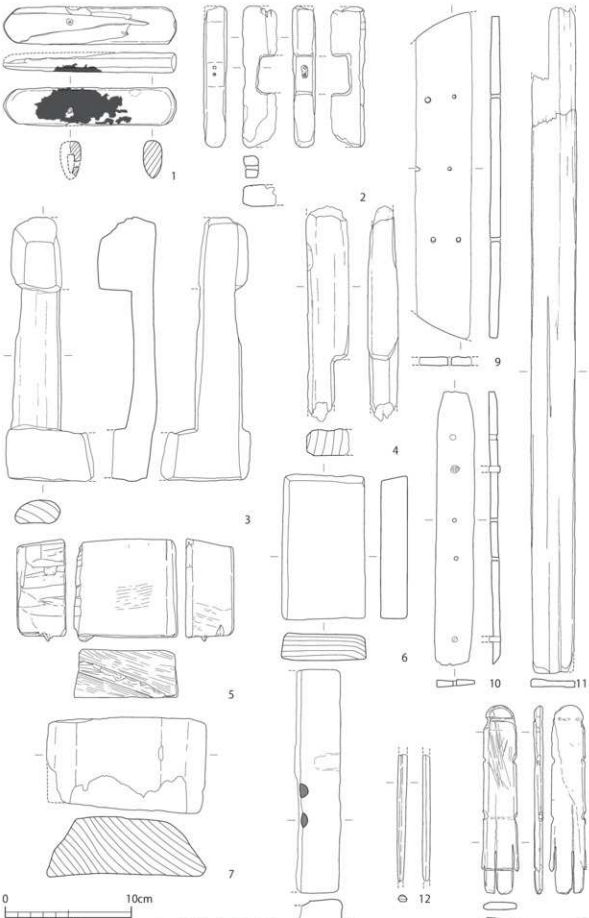
第56図　D区　礫敷遺構・礫層出土須恵器実測図3

杭列　調査区南東側では、東西方向に並ぶ杭列が2列確認された（第59図）。2列の軸方向は揃わないが、杭はいずれも4-2層（耕作土床土）より上位から打ち込まれ、地山まで到達する。北側の杭列（杭1～7）は間隔が広く、南側の杭列（杭8～15）は狭い。いずれも、近世の水田に伴う杭列と考えられる。

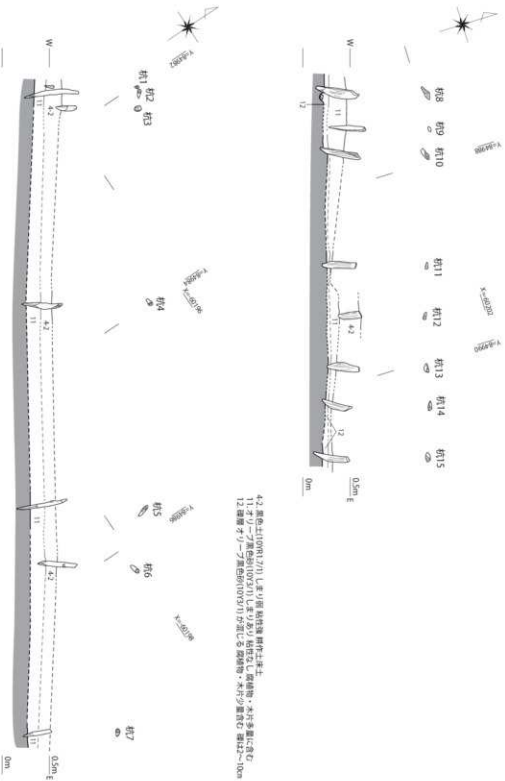
取り上げた杭は第60図に示した。杭2・杭5・杭18・杭20は芯持材を加工したもので、杭5・杭18には一部樹皮が残る。下端はいずれも鋭利な刃物で面取りし尖らせている。杭2の上端部は炭化しており、下端部には潰れ痕が認められる。杭8は丸太材を鋸引きした材の端部を鋭角にカットしている。柱材から杭に転用した可能性がある。杭18・20は下端のみ粗く削って尖らせている。杭21は角材の下端が節の部分で折れて鋭角をなす。上端面にはホゾのような方形の浅い刳り込みが施される。また、釘が2本打ち込まれており、上端近くの釘は貫通して折れ曲がっている。釘がどの時点で打たれたかは不明だが、建築部材から杭に転用したものと思われる。杭はいずれも近世以降のものと考えられる。



第57図　D区　礫敷遺構・礫層出土遺物実測図



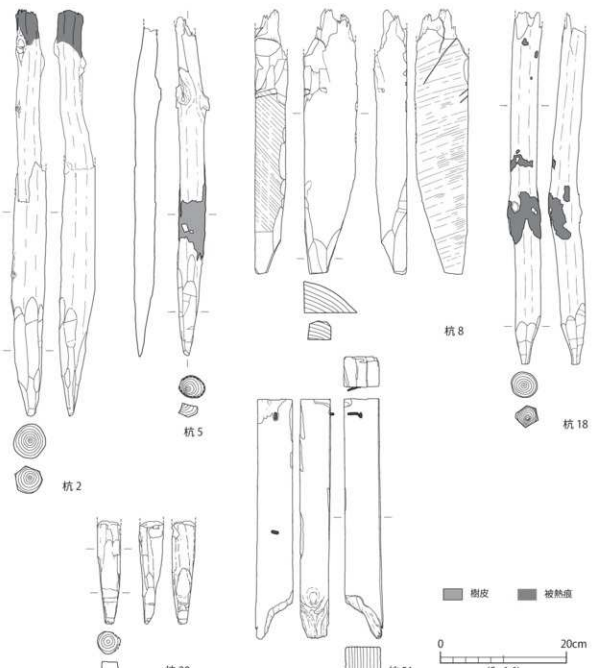
第58図　D区　礫敷遺構・礫層出土木製品実測図



第59図　D区　杭列実測図(1:40)

Pit・土坑　地山面にはPitが27、土坑が4基検出された（第61図）。いずれも遺物を伴わず時期は不明である。調査区北半のPit・土坑は狭小で浅いため、植物根等による攪乱と思われる。南東側のPitはおおよそ東西方向に並ぶが、建物であるかは不明である。南側の杭列（杭8～15）と軸方向が同じであることから、近世の水田耕作に伴うものである可能性がある。

埋没樹木　地山の土質・土色が変化する箇所を深掘りしたところ、埋没樹木が確認された（第62図）。樹木は地すべりに伴って北側の丘陵から押し流され、終着したところでそのまま埋没したものと思われる。周囲に遺物は確認できなかった。この樹木のAMS年代測定を実施したところ、縄文時代中期という年代が得られた（第4章第2節）。よって、地すべりはこれに近い時期に起こったことが想定される。



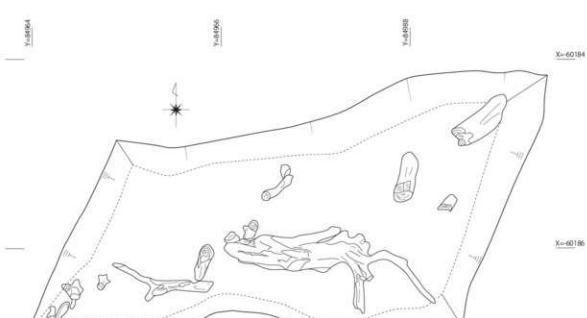
第60図　D区　杭実測図

第61図　D区　Pit・土坑実測図 (1:40)

4．遺構外出土遺物（第63～74図）

包含層出土遺物（第63～74図）　礫敷遺構および礫層（12層）より上位の層から出土した遺物で、第63図が須恵器、第65図が陶磁器、第66～73図が木製品、第74図が銭貨である。

第63図1～6は坏蓋で、5は端部にかえりを持ち、6は内側に折り返すように強く屈曲する。いずれも出雲国府第1～2型式のものである。7～17は坏で、8～12は口縁端部が短く屈曲する。底部切り離し技法は、12・13・17は回転糸切り、14は静止糸切り、16は回転ヘラ切りである。15・16の底部にはヘラ記号が施されている。18～22は皿である。23・24は高坏で、いずれも線状透か



第62図　D区　埋没樹木実測図(1:40)

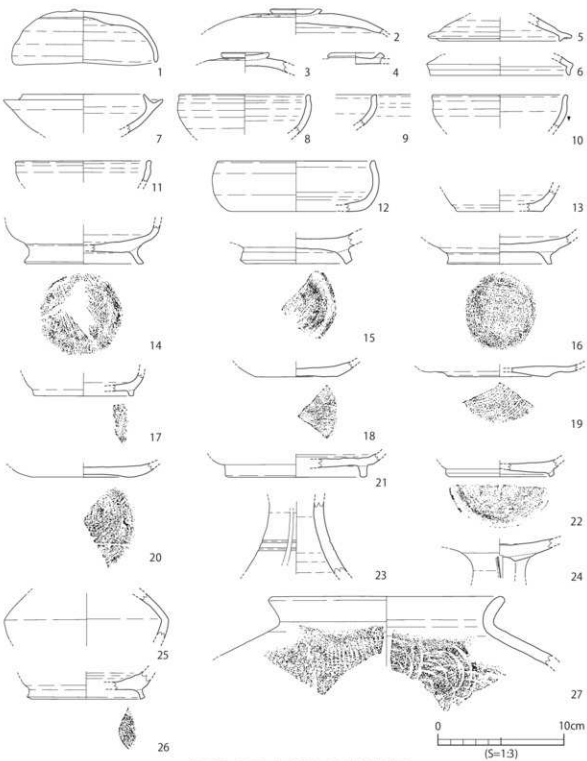
しを施す。25・26は壺で、25は胴部最大径が「く」の字状に屈曲するものである。

第64図1～7は須恵器甕で、口縁部外面には波状文と沈線が施されている。8は土師器の坏または皿で、底部には回転糸切り痕が残る。10は器種が判別し難いが、弥生土器の器台の可能性がある。ヘラ切りによる透かしが施され、その切り口は鋭角になっている。11は不明土製品で、内面にはヘラ状工具によるナデ・刺突痕が残る。12～17は土錘で、18は土製支脚、19は土師器把手である。20は平瓦であるが、内外両面とも摩滅が著しい。21は石匙が一部欠損したものである。22は黒曜石製の石鏃で、全長に対して茎が短い逆V字形を呈するものである。23は石鏃の未成品である。

第65図1は肥前系磁器の広東碗で、外面に若松文、内底部に岩に波涛文が描かれている。2は中国景徳鎮窯系青花の碗で、内外面に染付、高台内には「正」銘がある。3は瀬戸美濃系磁器の端反形碗、4は肥前系磁器の丸形碗で高台外面に二重圏線が描かれる。6は中国龍泉窯系青磁の碗で、口縁部外面に二重圏線が描かれる。7～13は陶器で、7は青地のボテボテ茶碗である。10は備前焼の擂鉢で、15世紀代のものである。11は肥前系唐津の甕で、内外面を格子目タタキで成形している。この甕は水田耕作土中に埋められた状態で、中からウイスキーの蓋が確認されたことから近代まで使用していたことがわかる。12は肥前系陶器の壺で、胴部外面に溶着痕が認められる。13は幕末～明治の行平蓋で、内面に墨書「松浦」銘がある。

第66図1～3は漆器である。1はやや大振りな椀で、底面を除いて黒漆が塗布されている。見込み部分は使用により擦り減っている。底部はもともと高台であったものを削り取って平底として使用した可能性がある。2は椀の口縁部、3は小皿で、ともに内外面に黒漆が塗布されている。4は丸形の露卯下駄の台で、後歯のホゾ部分が一部残っている。5は連指下駄の破片である。歯は擦り減って薄くなっている。6は下駄の破片と思われ、目に相当する孔が穿たれている。また、一部が炭化

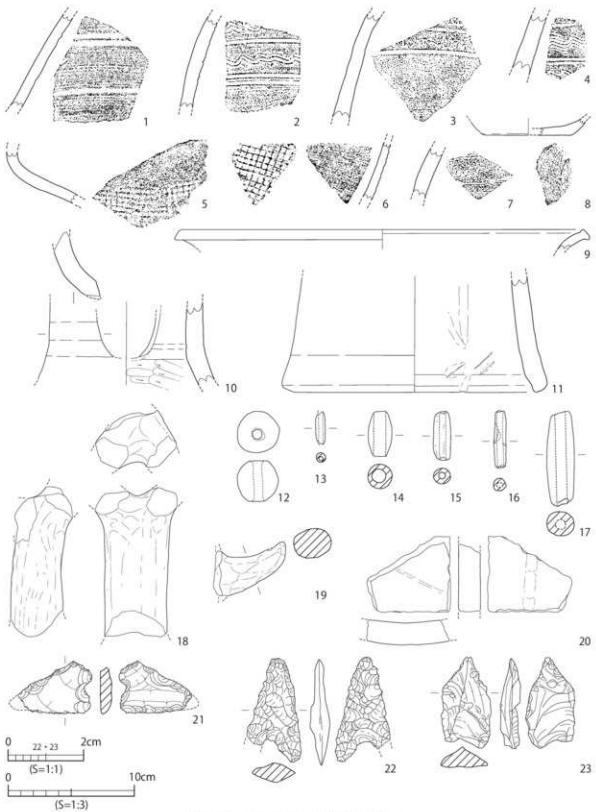
している。7は連歯下駄の歯の可能性がある破片で、斜め方向の孔が穿たれている。8は破損部が多いが、連歯下駄の踵側と思われる。4㎜ほどの歯が残っている。9は破片であるが、破断部に推定径12㎜の孔が斜め方向に穿たれている。これを目とする下駄の一部の可能性がある。10はホゾ穴状の刳り込みが見られる破片で、用途不明であるが、部材の一部になる可能性がある。11・14は曲物の底板で、11には径3㎜前後の孔が認められる。12は曲物の側板で、片面に斜め方向の切込みが施されている。また、木釘が2本打ち込まれ、径2㎜の孔が1つ見られる。13も曲物の側板で、片面



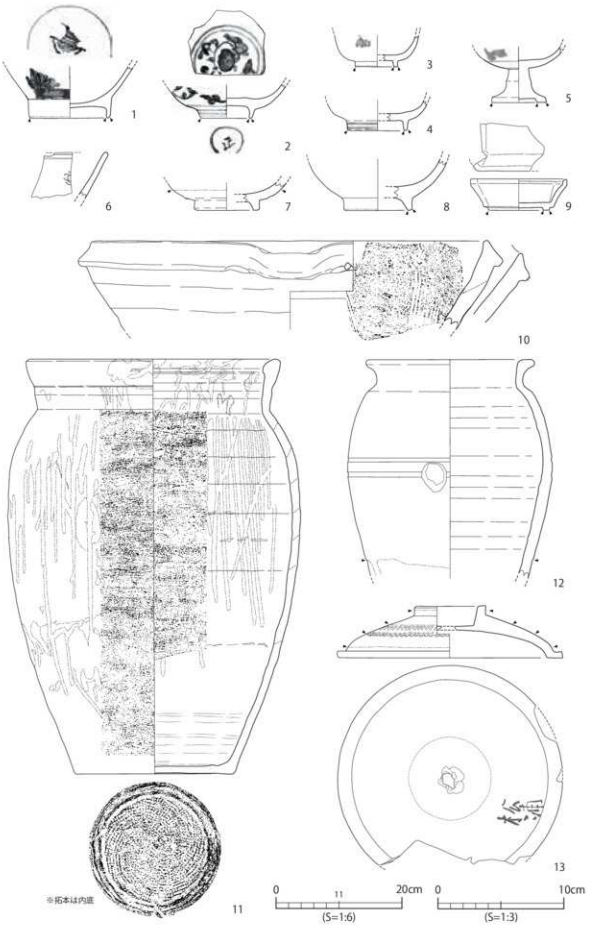
第63図　D区　包含層出土須恵器実測図

に縦・斜め方向の切込み、破断部には釘孔と思われる孔が確認できる。15は円弧の側縁を呈し、破断部に円形の孔が認められることから桶蓋の可能性がある。16は桶または樽の底板で、径1.5㎜の目釘孔が穿たれている。

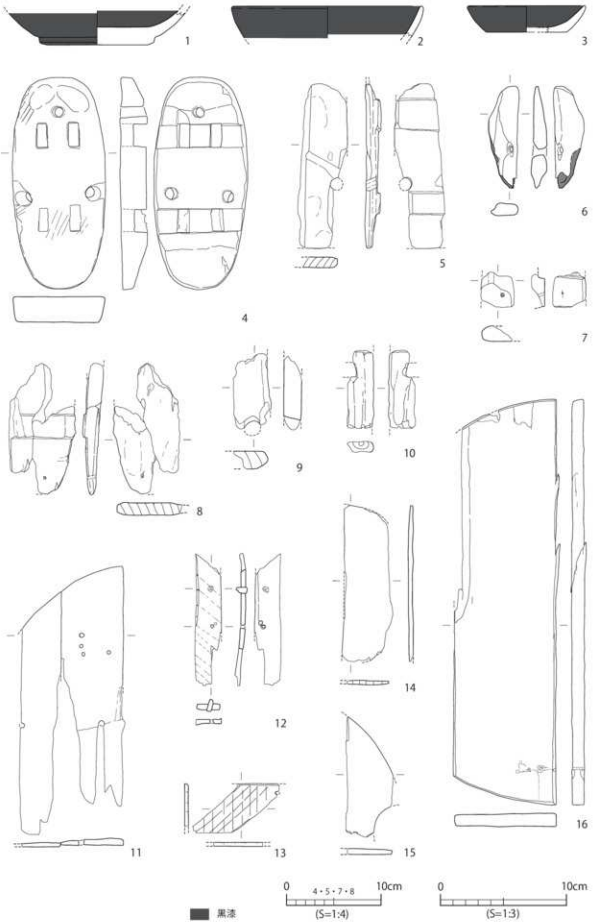
第67図1は厚さ2㎝の側縁が円盤状の用途不明木製品で、破断部に推定径7㎜の穿孔が確認でき



第64図　D区　包含層出土遺物実測図1



第65図　D区　包含層出土遺物実測図2



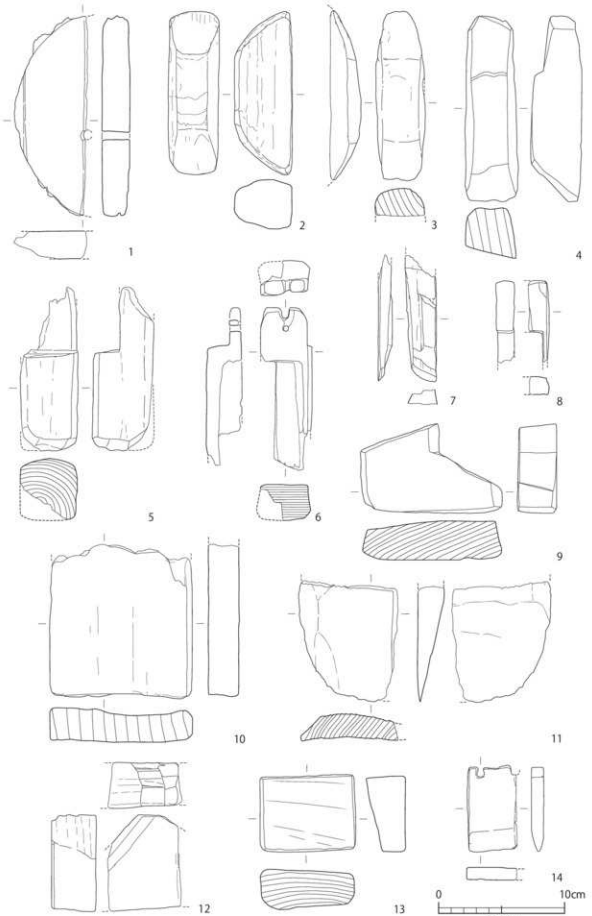
第66図　D区　包含層出土木製品実測図1

る。2・3は把手状をなす用途不明木製品で、断面形は丸みのある台形状を呈する。部材の一部あるいは栓の頭部の可能性がある。4は一部に抉りによる段が見られるが、明確な加工であるか判然とせず用途不明である。5は芯持材を加工した部材の端部で、断面は隅丸方形をなし、他材との接合部となる方形の刳り込みを作っている。6は長方形の刳り込みのある刳物である。破損しているが、刳り込みは深さ1.8cmで、推定幅4cm、長さ8.5cm以上となる。断面形はやや下膨れの形状を呈し、板状となっている上部に「U」字状の抉りと穿孔が施される。7は表裏が割れている用途不明の破片で、側面が鋭角になるよう加工されている。8は「L」字状の抉りをもつ破片で、破損状況からホゾ穴部分と思われる。部材の一部の可能性がある。9は厚さ3cmの用途不明板状木製品で、一部が欠損するが本来は五角形に成形されていたものと思われる。11は破損しているが、現状の側縁は円弧をなし、厚みは端部に向かって薄くなる。用途不明だが、鋤先の可能性が考えられる。12は鋸とノミ状工具によって成形され、鋸引き面に沿う目当て線が認められる。13は方形の板状木製品で、鉋状の刃物によって片側がやや薄くなるよう加工されている。14は厚さ1cmから下端部が細る板状木製品で、破断部に径6mmの穿孔が2箇所施される。

第68図1は杓子で、柄の部分で切断されている。転用品の可能性がある。2は短い刃の先が波打っている杓子で、柄の端部に弱い突起が認められる。本来は刃部・柄部とも長かったものを短くして使用した可能性がある。3はヘラ状木製品で、柄部分が欠損する。4は抉り込みのある棒状木製品で、ほぼ全面が炭化している。5は側面に「コ」の字状の刳り込みが2箇所施された部材である。6は細い角棒状木製品で、端部をカットして尖らせ、「コ」の字状と三角形状の小さな刳り込みが施される。用途は不明であるが、部材の一部の可能性がある。7は斜め方向に切断加工した痕が残る破片で、側面は割れている。8は建築部材である。大・小の長方形のホゾ穴が穿たれており、小穴内にはホゾ部分が残っている。9は棒状木製品で、20cmほどの長さがホゾ状に加工されている。建築部材の一部と考えられる。10は現存長20.3cmを測る板状木製品で、6×8mmの方形の孔が穿たれている。11は棒状木製品で、端部近くに丸みのある刳り込みをもつ。建築部材と考えられる。

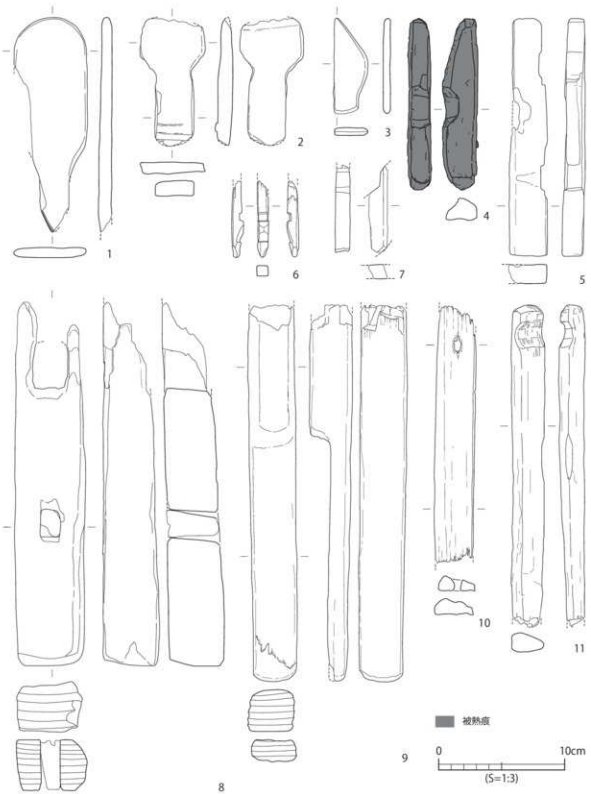
第69図1は棒状木製品で、断面形が六角形の太い部分と四角形のホゾ状部分からなる。ホゾ状部分を他材に差し込む部材と思われる。2は樹皮が残る芯持材を使用した棒状木製品で、上端部は面取りされ、下端部を鋭角に削る。3・5は芯持材を使用した棒状木製品で、一端は面取りされ、一端をホゾ状に作り出している。柄または部材と考えられる。4は厚い板状部分と細い棒状部分からなる。板状部分は多角形の平面形をなすようだが、破損部が多いため全容を把握し難い。6は芯持材を用いた柄である。ホゾ状の差し込み部に亀裂がみられ、楔が打ち込まれていたものと思われる。7は一端がホゾ状になった棒状木製品で、両端側から径5mmの孔が穿たれている。部材の可能性がある。8～12は楔状木製品で、9は鋭角の端部に潰れ痕が認められる。10は端部が炭化しており、杭の可能性もある。14はヘラ状木製品で、端部近くに径2mmの小孔が穿たれている。15は端部に対となる小さな抉りをもつ棒状木製品で、結束具あるいは緊縛具の可能性が考えられる。16は棒状木製品で、上端は段を作って圭頭状に加工し、下端は鋭く削って尖らせている。17は端部に対となる抉りをもつ棒状木製品で、形状的に15に類似する。18・20は板状木製品で、丸みをもつ両端部の破断面に穿孔が認められる。19は棒状木製品で、細くなる両端部に径3mmほどの孔が穿たれている。

第70図1は用途不明の板状木製品で、釘が3本打ち込まれている。2は折敷の側板破片で、結束用の樹皮が残存する。3は浮子と考えられる板状木製品で、丸みをもつ両端部に径2mmの孔が穿たれ

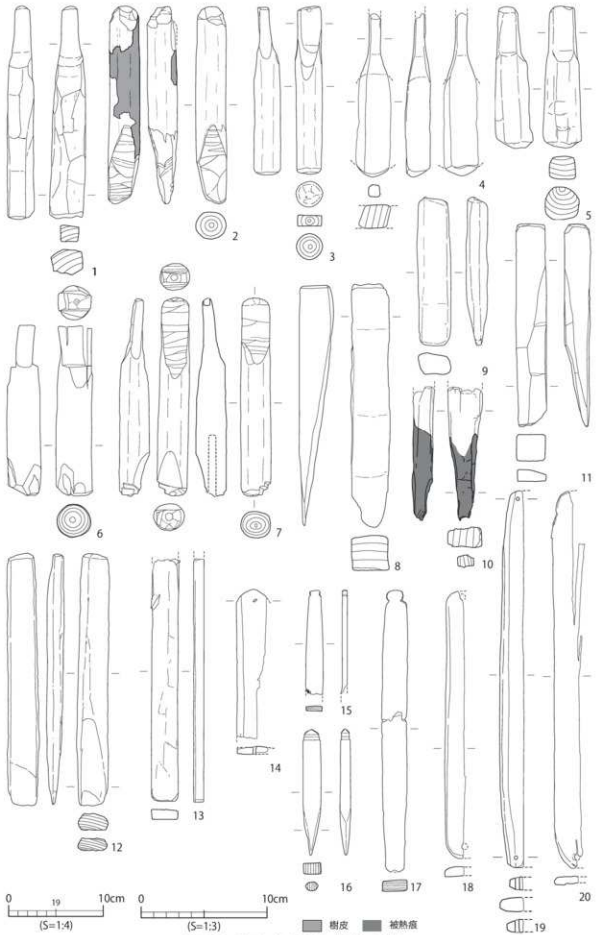


第67図　D区　包含層出土木製品実測図2

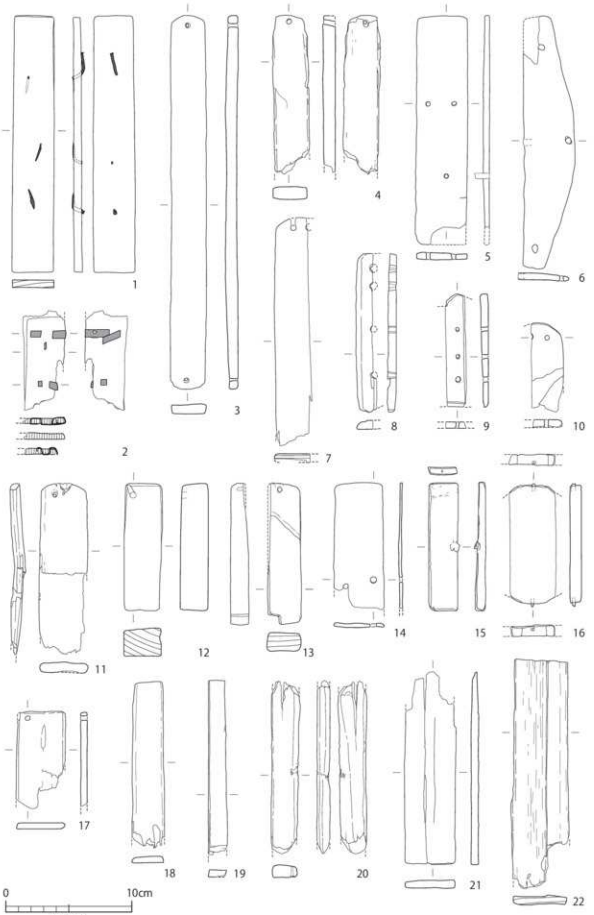
ている。4は端部に穿孔が施された板状木製品で、形状的に3と類似していることから浮子の可能性がある。5は釘孔が3箇所穿たれた板状木製品で、うち1箇所には木釘が残存している。6は板状木製品で、外縁と両端部近くの3箇所に穿孔が施されている。また、側面中央には目釘が残存している。7～17は穿孔がある板状木製品で、用途は不明である。11は端部に2箇所の穿孔が認めら



第68図　D区　包含層出土木製品実測図3



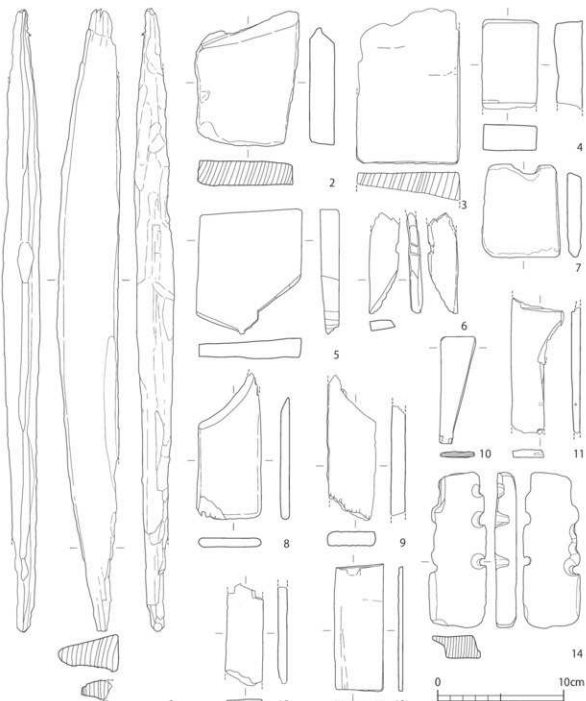
第69図　D区　包含層出土木製品実測図4



第70図　D区　包含層出土木製品実測図5

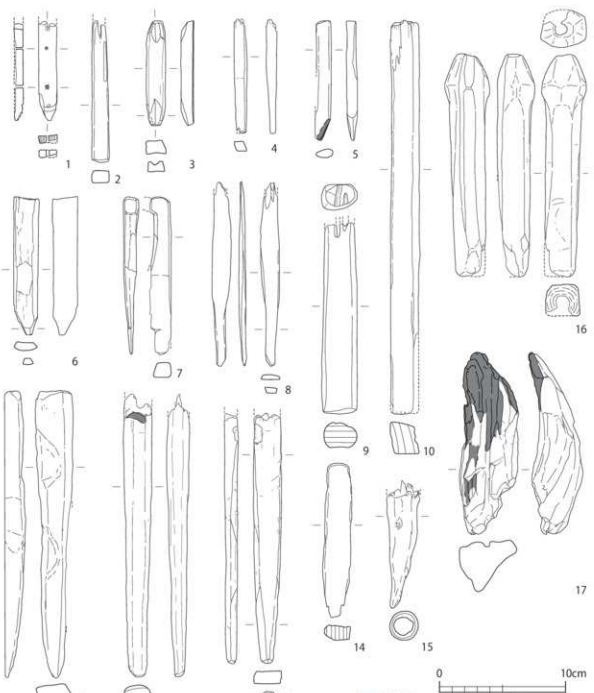
れるが、うち1つは貫通しない。12は端部に径5㎜の木釘が残存している。13はホゾ穴状の抉りをもち、端部に目釘孔が認められる。16は多角形状を呈し、両端部側面に目釘が残存している。箱物の底板と考えられる。18～22は用途不明の板状木製品である。20は側面近くに径2㎜の孔がある。21の破断部側の端部は鋭角に加工されている。

第71図1は長さ50cm弱を測る棒状木製品で、片側の縁は緩やかな円弧を描き、両端部は先細る。建築部材からの転用の可能性がある。2～13は用途不明の板状木製品である。2は表裏から削って一方の端を鋭角に加工している。6は端部が鋭角に加工され、側面に弱い刳り込みが見られる。14は火鑽臼で、表裏あわせて5箇所の火鑽孔が残る。



第71図　D区　包含層出土木製品実測図6

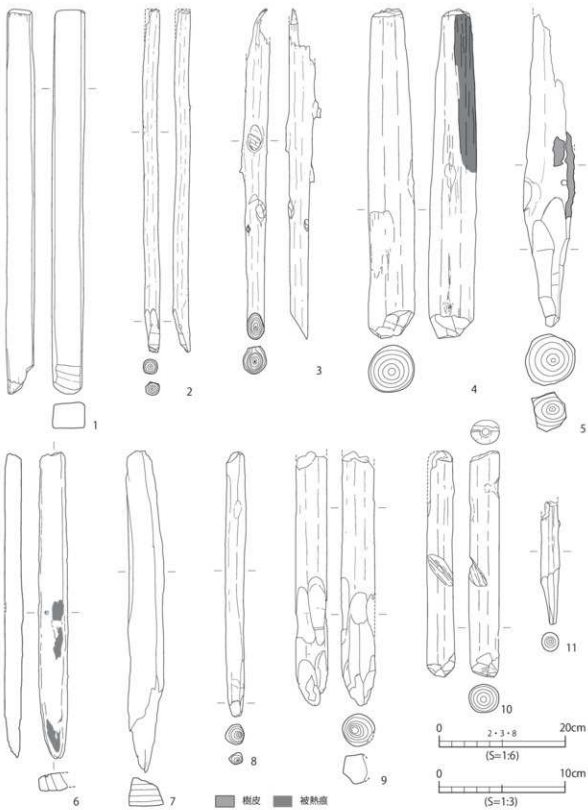
第72図1 ～ 10は用途不明の棒状木製品である。1は端部が鋭角に加工され、中心に径1㎜の穿孔が4箇所並ぶが、端部近くのものは貫通しない。3は尖らせた両端部に縦方向の切れ込みが入る。5は尖った端部が炭化しており、燃えさしの可能性がある。6は縦割りした竹の端部を削って尖らせている。7の側面は浅い刳り込みのある鉤手状をなすが、ホゾ穴または飾り孔が破断した部分とも考えられ、部材からの転用品の可能性がある。10は板状の材を縦割して角棒状にしている。11は楔状木製品で、表面と側面に浅い凹みが認められるが、使用によるものか判然としない。12・13は端部に向かって細くなる棒状木製品で、部材あるいは柄の可能性が考えられる。16は芯持材を方形に成形して面取りした用途不明の棒状木製品で、上部は膨らみをもつ多角形状に加工している。中



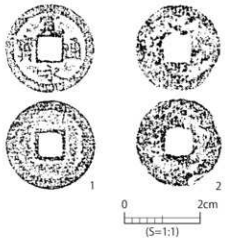
第72図　D区　包含層出土木製品実測図7

心部が空洞となっているが、人工的なものか自然によるものか判然としない。17は加工物か自然のものか用途も不明だが、一部が炭化した木片である。

第73図は杭状木製品である。1は先端を一方向からカットして成形しており、部材からの転用の可能性がある。3は芯持材の節を落とし、先端を一方向からカットしている。4は芯持材の両端を鈍



第73図　D区　包含層出土木製品実測図8



第74図　D区　包含層出土銭貨実測図

角に削って加工しており、一部に焼け焦げ痕が認められる。6には径3㎜の浅い孔が1箇所認められ、一部炭化している。9は芯持材を利用したもので、鋭角に加工された端部から7㎝ほどのところを抉るように浅く削っている。10は下端が鈍角に加工され、上端の中心に径5㎜の穴が穿たれている。この穴は、中央の鋸による切れ込み部分まで約10㎝続いており、ここに棒状のものが差し込まれた柄の可能性が考えられる。11は芯持材の下端を鋭く削って尖らせたものである。

第74図1は寛永通宝である。2は両面が摩滅しており、判読不能である。

【注】

1　碗の分類名を示す際は、大宰府編年に準拠して「椀」を使用した。

2　礫敷遺構の掘削を最小限にとどめるため、次の場所で下層の状況を確認した。①調査区周囲に設けた排水用の溝、②礫敷が希薄な調査区西端、③中央トレンチ。なお、③は平成29年度の試掘トレンチ「T13」の端に合わせて設定した。

3　調査区中央部北半の礫敷については、中央トレンチ掘削前に部分的に三次元計測（デジタルカメラによる）をおこない、後から全体の三次元モデル（ドローン撮影による）に合成している。第27図中の当該範囲のみ調子が異なるのは、こうした撮影方式・環境・データ形式等の違いによるものである。実際は、この部分の礫も両隣の色調に近い一連の遺構面である。

4　酒井哲弥氏の調査指導による。

5　ここでいう違いとは、地域をまたぐものではなく、同一窯跡群内における違い（窯や灰原単位）を想定している。

【参考文献】

出雲市教育委員会2010『矢野遺跡』
上田秀夫1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2　貿易陶磁研究会
大谷晃二1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集　島根考古学会
大谷晃二2001「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳群』平田市教育委員会
小野正敏1982「15・16世紀の染付碗・皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2　貿易陶磁研究会
九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年』
坂本豊治2012「第6節 須恵器からみた中村1号墳」『中村1号墳』出雲市教育委員会
島根県教育委員会1999『姫原西遺跡』
島根県教育委員会2004『五反配遺跡』
島根県教育委員会2009『史跡出雲国府跡6』
島根県教育委員会2013『史跡出雲国府跡 9 総括編』
島根県教育委員会2019『平ノ前遺跡』
島根県教育庁古代文化センター2006『島根県における弥生時代・古墳時代の木製品集成』
太宰府市教育委員会2000『太宰府条坊跡XV』
成瀬晃司1997「江戸遺跡出土資料による時期碗・皿の変遷 ―文様・銘款を中心に―」『東京大学構内遺跡調査研究年報1 1996年度』
備前市教育委員会2003『備前窯詳細分布調査報告書』
八雲村教育委員会2001『前田遺跡（第Ⅱ調査区）』

第4章　自然科学分析

第1節　朝酌矢田Ⅱ遺跡発掘調査に伴う自然科学分析

文化財調査コンサルタント(株)　渡辺正巳

はじめに

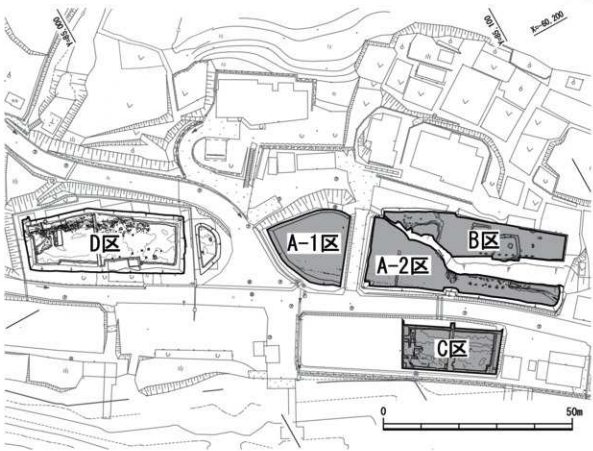
本報は文化財調査コンサルタント株式会社が、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターからの委託を受け、令和元年度(A-2区)、2，3年度(C区)に朝酌矢田Ⅱ遺跡で実施・報告した自然科学分析委託報告書を再編したものである。A-2区では調査時に検出された杭列の年代を明らかにすることと、遺跡内での水田耕作を確認することを目的として、花粉分析、AMS年代測定を行った。C区では調査時に検出された杭ほかの年代及び樹種を明らかにし、「礫敷遺構」の時期解明の資料とすることと、遺跡内での古植生を明らかにする目的で、AMS年代測定、花粉分析、樹種同定を実施した。

遺跡は、島根県東部の松江市朝酌町矢田地内に位置し、1級河川斐伊川水系大橋川北岸の沖積地に立地する。

1. 分析試料について

第75図に調査区の配置を示し、第76図にA-2区での試料採取地点、第77図にC区での試料採取地点を示した。

A-2区での分析試料は、埋蔵文化財調査センターとの協議の上、文化財調査コンサルタント(株)

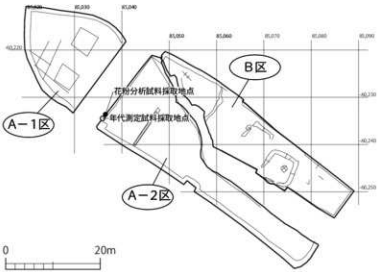


第75図　調査区の配置

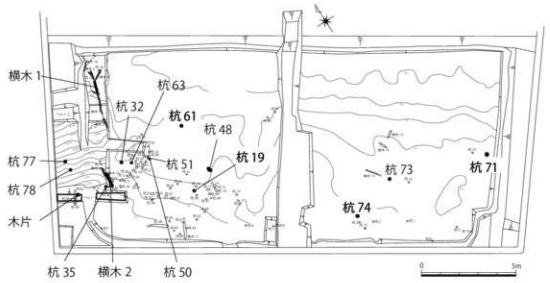
が採取した。A-2区での花粉分析試料採取地点の断面図を第78図に示す。また、年代測定試料は、第78図中の「灰色砂層」に打ち込まれ、上端を「黄灰色粘土層」に切られた状態で2列に並んで出土した杭列である。

C区での花粉分析試料と、年代測定及び樹種同定試料のうち杭35・63・77・78及び木片は埋蔵文化財調査センターとの協議の上、文化財調査コンサルタント(株)が採取した。その他の試料は同センターにより採取・保管されていた試料から御提供を受けた。第79図に、C区での花粉分析試料採取地点の断面図を示す。

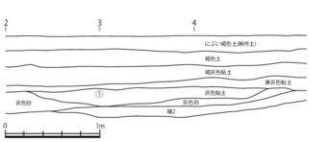
使用した平面図及び断面図は、同センターより御提供を受けた原図をもとに作成した。



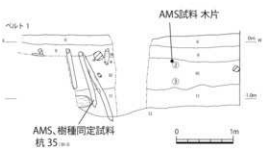
第76図　試料採取地点（A-2区）



第77図　試料採取地点（C区）



第78図　花粉分析試料採取地点断面図（A-2区）



第79図　花粉分析試料採取地点断面図（C区）

2. 分析方法

1)微化石概査方法

花粉分析用プレパラート及び花粉分析処理残渣を顕微鏡下で観察し、花粉(胞子)、植物片、微粒炭、珪藻、植物珪酸体、火山ガラスの含有状況を5段階で示した。

2)花粉分析方法

渡辺(2010a)に従って実施した。花粉化石の観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて実施した。原則的に木本花粉総数が200粒以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。また中村(1974)に従ってイネ科花粉を、イネを含む可能性が高い大型のイネ科(40ミクロン以上)と、イネを含む可能性が低い小型のイネ科(40ミクロン未満)に細分した。

3)AMS年代測定方法

塩酸による酸洗浄の後に水酸化ナトリウムによるアルカリ処理、更に再度酸洗浄を行った。この後、二酸化炭素を生成、精製し、グラファイトに調整した。^{14}C濃度の測定にはタンデム型イオン加速器を用い、半減期:5568年で年代計算を行った。暦年代較正にはOxCal ver. 4.4 (Bronk Ramsey, 2009)を利用し、INTCAL20 (Reymer et al., 2020)及びBomb21 NH2 (Hua et al. 2021) を用いた。

4)樹種同定方法

顕微鏡観察用永久プレパラートは、渡辺(2010b)に従い作成した。作成した永久プレパラートには整理番号を付け、文化財調査コンサルタント(株)にて保管・管理をしている。顕微鏡観察は、光学顕微鏡下で4倍～600倍の倍率で行った。同定した分類群ごとに最も特徴的な試料について、顕微鏡写真撮影を行うとともに、島地ほか(1985)の用語に基本的に従い、記載を行った。

3. 分析結果(A-2区)

朝酌矢田Ⅱ遺跡では同じ分析項目でも、調査区毎に目的が異なった。このため、調査目的に対する分析結果を明瞭にするために、調査区毎に分析結果を示した。また、重複する内容については、後者(C区)では割愛した。

1)微化石概査結果

微化石概査結果を第5表に示す。

花粉の検出量は極めて多く、植物珪酸体、珪藻も多く検出された。一方、微粒炭、植物片、火山ガラスの検出量はやや少なかった。

2)花粉分析結果

分析結果を花粉化石組成表(第6表)と花粉ダイアグラム(第80図)に示す。花粉ダイアグラムでは、分類ごとに百分率(百分率の算出では、木本花粉総数を基数にしている。)を算出し、分類群ごとに異なるハッチのスペクトルで表している。また左端に、分類群ごとの割合を示す「総合ダイアグラム」

第5表　微化石概査結果(A-2区)

試料 No.	花　粉	微粒炭	植物片	珪藻	植物珪酸体	火山ガラス
1	◎	△	△	○	○	△

凡例　◎：十分な数量が検出できる　○：少ないが検出できる　△：非常に少ない
△×：極めてまれに検出できる　×：検出できない

を、右端に分類群ごとに含有量（湿潤試料1g中の粒数）の変化を示す「粒数ダイアグラム」を配置している。

花粉・胞子化石群集の特徴として、草本・藤本（特に草本）の割合が高く、木本花粉の割合は18%ほどであった。木本花粉ではマツ属（複維管束亜属）が43%を占め、コナラ亜属が23%、アカガシ亜属が14%と続く。草本・藤本花粉、胞子では、イネ科（40ミクロン未満）、イネ科（40ミクロン以上）が100%を超えるほか、ガマ属、カヤツリグサ科、ヨモギ属が20%近い出現率を示す。また、栽培種であるソバ属が僅かに検出された。

3）AMS 年代測定結果

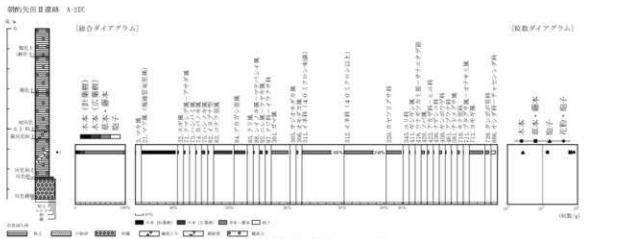
測定結果を第81・82図、第7表に示す。

第7表には、試料の詳細、前処理方法、$\delta^{13}C$ 値と4種類の測定年代を示している。第81図には IntCAL20（Reymer et al., 2020）を用いた暦年較正結果、第82図には Bomb21 NH2 (Hua et al.,

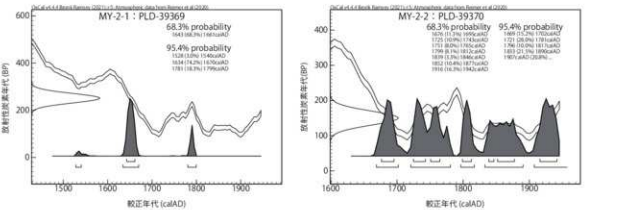
第6表　花粉化石組成表（A-2区）

類群名		A-2区
木本花粉		
5	Podocarpus	マキ属	1	0.4%
21	Pinus (Diploxylon)	マツ属（複維管束亜属）	100	42.6%
32	Cryptomeria	スギ属	5	1.3%
71	Carpinus-Ostrya	クマシデ属－アサダ属	5	2.1%
73	Corylus	ハシバミ属	1	0.4%
74	Betula	カバノキ属	4	1.7%
75	Alnus	ハンノキ属	10	4.3%
82	Fagus japonica-type	イヌブナ型	4	1.7%
83	Quercus	コナラ亜属	54	23.0%
84	Cyclobalanopsis	アカガシ亜属	33	14.0%
85	Castanea	クリ属	1	0.4%
88	Castanopsis-Pasania	シイノキ属－マテバシイ属	3	1.3%
92	Ulmus-Zelkova	ニレ属－ケヤキ属	9	3.8%
97	Moraceae-Urticaceae	クワ科－イラクサ科	7	3.0%
301	Typha	ガマ属	49	20.9%
305	Alisma	サジオモダカ属	1	0.4%
306	Sagittaria	オモダカ属	4	2.6%
311	Gramineae(<40)	イネ科（40ミクロン未満）	287	122.1%
312	Gramineae(>40)	イネ科（40ミクロン以上）	569	242.1%
320	Cyperaceae	カヤツリグサ科	44	18.7%
345	Liliaceae	ユリ科	1	0.4%
411	Rumex	ギシギシ属	2	0.9%
414	Schizaeaceae-Pteridaria	ウチワカエデ節－サナエタデ節	1	0.4%
420	Fagopyrum	ソバ属	10	4.3%
422	Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科	5	2.1%
430	Caryophyllaceae	ナデシコ科	2	0.9%
450	Ranunculaceae	キンポウゲ科	8	3.4%
461	Cruciferae	アブラナ科	3	1.3%
581	Hydrocotyle	チドメグサ属	2	0.9%
710	Cardueae	キク亜科	7	3.0%
711	Ambrosia-Xanthium	ブタクサ属－オナモミ属	1	0.4%
712	Artemisia	ヨモギ属	40	17.0%
720	Cichorioideae	キンポウゲ亜科	12	5.1%
886	Aspid.-Aspide	オシダ科－ナヤセシダ科	13	5.5%
898	MONOLATE-TYPE-SPORE	単条溝胞子	13	5.5%
899	TRILATE-TYPE-SPORE	三条溝胞子	21	8.9%
木本（花粉）総			164	7.8%
木本（広葉樹）			131	9.8%
草本・藤本			1050	78.8%
胞子			47	3.5%
総数			1,332	
含有量（粒数/g）			781,561	

左2ミカラント乾燥、及び等



第80図　花粉ダイアグラム（A-2区）



第81図　暦年較正結果：IntCAl20（A-2区）

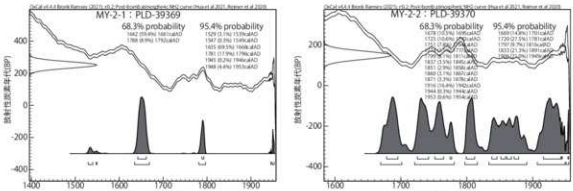
2021) とINTCAL20 (Reymer et al., 2020) を用いた暦年校正結果を示した。また、第81・82図ともに確率分布とσ、2σの構成範囲を示している。

4. 分析結果（C区）

1）微化石概査結果

微化石概査結果を第8表に示す。

花粉の検出量は多く、植物片、珪藻も多く検出された。一方、微粒炭、植物珪酸体、火山ガラスの検出量は少なかった。



第82図　暦年較正 NH2 + IntCal20（A-2区）

第7表　年代測定結果一覧表（A-2区）

試料										
試料No.	調査区	出土地点（遺構ほか）	状況	重量 (g)	前処理	δ ^{13}C (‰)	δ ^{13}C補正無年代 (yrBP ± 1σ)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1σ)	^{14}C年代 (yrBP ± 1σ)	測定番号
MY2-1	A-2 区	灰色粘土層内	杭 (木片)	0.906	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム :1.0N, 塩酸:1.2N)	-24.98 ± 0.25	251 ± 20	251 ± 20	250 ± 20	PLD-39369
MY2-2	A-2 区	灰色粘土層内	杭 (木片)	0.436	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム :1.0N, 塩酸:1.2N)	-28.62 ± 0.21	210 ± 20	150 ± 20	150 ± 20	PLD-39370

試料	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲（IntCal 20）		^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲（Post-bomb 21 atmospheric NH2 IntCal 20）	
試料No.	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
MY2-1	1643-1661 cal AD (68.3%)	1528-1540 cal AD (3.0%) 1634-1670 cal AD (74.2%) 1781-1799 cal AD (18.3%)	1642-1661 cal AD (59.4%) 1788-1792 cal AD (8.9%)	1529-1539 cal AD (3.1%) 1547-1549 cal AD (0.3%) 1635-1668 cal AD (69.5%) 1781-1796 cal AD (17.9%) 1945-1946 cal AD (0.2%) 1948-1953 cal AD (4.4%)
MY2-2	1676-1695 cal AD (11.3%) 1725-1743 cal AD (10.9%) 1751-1765 cal AD (8.0%) 1799-1812 cal AD (8.1%) 1839-1846 cal AD (3.3%) 1852-1877 cal AD (10.4%) 1916-1942 cal AD (16.3%)	1669-1702 cal AD (15.2%) 1721-1781 cal AD (28.0%) 1796-1817 cal AD (10.0%) 1833-1890 cal AD (21.5%) 1907-　cal AD (20.8%)	1678-1695 cal AD (10.7%) 1725-1742 cal AD (10.6%) 1751-1764 cal AD (7.8%) 1774-1777 cal AD (1.1%) 1799-1811 cal AD (8.1%) 1837-1845 cal AD (3.5%) 1851-1858 cal AD (2.9%) 1869-1867 cal AD (3.1%) 1871-1878 cal AD (3.3%) 1916-1942 cal AD (16.4%) 1944-1944 cal AD (0.3%) 1953-1954 cal AD (0.6%)	1669-1701 cal AD (14.8%) 1720-1781 cal AD (27.5%) 1797-1816 cal AD (9.7%) 1833-1891 cal AD (21.3%) 1906-1949 cal AD (21.0%)

第8表　微化石概査結果（C区）

調査地点	試料 No.	花粉	微粒炭	植物片	珪藻	植物珪酸体	火山ガラス
ベルト 1	2	○	△×	◎	◎	△×	△×
	3	◎	△×	◎	◎	△×	△×

凡例　◎：十分な数量が検出できる　○：少ないが検出できる　△：非常に少ない
△×：極めてまれに検出できる　×：検出できない

2）花粉分析結果

分析結果を花粉化石組成表（第9表）と花粉ダイアグラム（第83図）に示す。

花粉・胞子化石群集の特徴として、花粉・胞子化石含有量はやや少なかった。木本花粉の割合が70％を占め、草本・藤本花粉が20％程度、胞子が10％ほどであった。

木本花粉ではアカガシ亜属が25％程度、マツ属（複維管束亜属）、スギ属が20％程度、コナラ亜属が10％程度を示す。草本・藤本花粉、胞子では、イネ科（40ミクロン以上）が15％程度、イネ科（40ミクロン未満）が8％程度を示す。

3）AMS 年代測定結果

測定結果を第10表、第84図に示す。第84図にはINTCAL20（Reymer et al., 2020）を用いた暦年較正結果を示した。

4）樹種同定結果

樹種同定結果を第10表に示す。以下に、記載を行うとともに、代表的な試料（下線）の顕微鏡写真を節末図版に示す。

(1) マツ属（複維管束亜属）*Pinus* (sub. *Diploxlon*) sp.

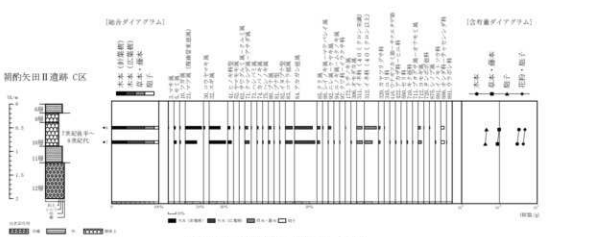
試料№：杭48(W22012604)、杭50(W22012605)、杭61(W22012607)

記載：構成細胞は仮道管、放射仮道管、放射柔細胞、垂直樹脂道及び水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞からなる。早材から晩材への移行はやや急で、晩材の幅は広い。放射仮道管には鋸歯状肥厚が認められる。放射組織は単列であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を示す。エピセリウム細胞は薄壁である。垂直樹脂道は晩材部

第9表　花粉化石組成表（C区）

	調査地点	ベルト1			
	BOX No.	2		3	
3	Podocarpus	マキ属	1	0.5%	0.0%
5	Abies	モミ属	4	1.8%	7 3.2%
10	Tsuga	ツガ属	2	0.9%	3 1.4%
25	Pinus (Diploxylon)	マツ属（複維管束亜属）	47	21.6%	33 15.2%
30	Sciadopitys	コウヤマキ属	4	1.8%	0 0.0%
32	Cryptomeria	スギ属	32	14.7%	48 22.1%
41	Cupressaceae type	ヒノキ科型	7	3.2%	11 5.1%
52	Myrica	ヤマモモ属	1	0.5%	0 0.0%
62	Pterocarya-Juglans	サワグルミ属－クルミ属	2	0.9%	0 0.0%
71	Carpinus-Ostrya	クマシデ属－アサダ属	9	4.1%	13 6.0%
73	Corylus	ハシバミ属	1	0.5%	0 0.0%
74	Betula	カバノキ属	4	1.8%	2 0.9%
75	Alnus	ハンノキ属	1	0.5%	2 0.9%
80	Fagus	ブナ属	8	3.7%	5 2.3%
81	Fagus crenata type	ブナ型	1	0.5%	1 0.5%
82	Fagus japonica type	イヌブナ型	1	0.5%	2 0.9%
83	Quercus	コナラ亜属	21	9.6%	20 9.2%
84	Cyclobalanopsis	アカガシ亜属	52	23.9%	59 27.2%
85	Castanea	クリ属	9	4.1%	8 3.7%
88	Castanopsis-Pasania	シイノキ属－マテバシイ属	2	0.9%	0 0.0%
92	Ulmus-Zelkova	ニレ属－ケヤキ属	8	3.7%	1 0.5%
94	Celtis-Aphananthe	エノキ属－ムクノキ属		0.0%	1 0.5%
97	Moraceae-Urticaceae	クワ科－イラクサ科		0.0%	1 0.5%
172	Aesculus	トチノキ属	1	0.5%	0 0.0%
306	Sagittaria	オモダカ属		0.0%	2 0.9%
311	Gramineae(>40)	イネ科（40ミクロン未満）	16	7.3%	17 7.8%
312	Gramineae(<40)	イネ科（40ミクロン以上）	35	16.1%	23 10.6%
320	Cyperaceae	カヤツリグサ科	5	2.3%	5 2.3%
345	Liliaceae	ユリ科	1	0.5%	0 0.0%
416	Echinocaulon-Persicaria	ウナギツカミ節－ヤナギタデ節		0.0%	1 0.5%
422	Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科		0.0%	2 0.9%
580	Umbelliferae	セリ科		0.0%	1 0.5%
710	Cardueoideae	キク亜科		0.0%	3 1.4%
711	Ambrosia-Xanthium	ブタクサ属－オナモミ属		0.0%	1 0.5%
712	Artemisia	ヨモギ属	7	3.2%	10 4.6%
720	Cichorioideae	タンポポ亜科	1	0.5%	0 0.0%
871	Davallia	シノブ属	1	0.5%	0 0.0%
881	Pteridaceae	イノモトソウ科		0.0%	2 0.9%
888	Aspid.-Asplo.	オシダ科－チャセンシダ科	10	4.6%	11 5.1%
891	Polypodiaceae	ウラボシ科		0.0%	1 0.5%
898	MONOLATE-TYPE SPORE	単条溝胞子	6	2.8%	10 4.6%
899	TRILATE-TYPE SPORE	三条溝胞子	13	6.0%	7 3.2%
木本（花粉）		67	31.0%	102	32.6%
木本（広葉樹）		121	38.7%	115	36.7%
草本・藤本		65	20.8%	65	20.8%
胞子		30	9.6%	31	9.9%
総数		313		313	
含有量（粒数/g）		4,729		4,272	

※より小カウント数値、百分率



第83図　花粉ダイアグラム（C区）

第10表　年代測定結果一覧表（C区）

試料					前処理	$\delta^{13}C$ (‰)	$\delta^{13}C$補正暦年代 (yrBP±1σ)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲		測定番号
試料No.	調査区	出土地点 (遺構ほか)	種類	重量(g)						1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲	
杭19	C西区	網代遺構	生木 イスノキ	[illegible]	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N）	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
杭22	C西区	網代遺構	生木 イスノキ	[illegible]	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N）	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
杭27	C西区	ベルト1 網代遺構	生木 クスノキ科	[illegible]	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N）	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	C西区	網代遺構	生木 マツ属 (複維管束亜属)	[illegible]	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N）	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	C西区	網代遺構	生木 マツ属 (複維管束亜属)	[illegible]	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N）	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
杭51	C西区	網代遺構	生木 (イスノキ)	[illegible]	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N）	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
杭61	C西区	網代遺構	生木 マツ属 (複維管束亜属)	[illegible]	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N）	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
杭64	C西区	網代遺構	生木 [illegible]	[illegible]	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N）	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
杭71	C東区	網代遺構	生木 コナラ節	0.43	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N）	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
杭73	C東区	網代遺構	生木 ヒノキ属	[illegible]	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N）	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
杭74	C東区	網代遺構	生木 コナラ節	[illegible]	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N）	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
杭77	C西区	[illegible]	生木 クリ	[illegible]	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N）	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
杭78	C西区	[illegible]	生木 クリ	0.13	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N）	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
横木1	C西区	網代遺構	生木 クヌギ節	[illegible]	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N）	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
横木2	C西区	網代遺構	生木 [illegible]	[illegible]	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N）	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
種実1	C区	網代遺構直上	種実 モモ核	[illegible]	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N）	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
種実2	C区	網代遺構直上	種実 モモ核	[illegible]	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N）	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	C西区	ベルトI [illegible]層	生木 ムクノキ	[illegible]	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N）	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

に分布し、チロソイドが見られる。分野壁孔は窓状であることなどから、マツ属（複維管束亜属）と同定した。

(2) ヒノキ属 *Chamaecyparis* sp.

試料No.：杭73(W22012609)

記載：構成細胞は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の幅は広い。樹脂細胞は主に移行部に認められる。分野壁孔は明瞭なヒノキ型であることなどから、ヒノキ属と同定した。

(3) コナラ節（コナラ属コナラ亜属）*Quercus* (sect. *Prinus*) sp.

試料No.：杭71(W22012608)、杭74(W22012610)

記載：大きい円形ないしだ円形の道管が単独で１～２列に配列する環孔材である。孔圏外では非常に小さい道管が、単独で放射状に配列する。小道管はやや角ばっている。道管にはチロースがよく発達し、道管せん孔は単せん孔である。また、孔圏道管の周りには周囲仮道管が存在している。放射組織は同性ですべて平伏細胞からなり、多数の極めて低い単列放射組織と極めて幅の広い広放射組織からなる、典型的な複合型である。軸方向柔細胞は１ないし２細胞幅の単接線状柔組織を形成している。以上の組織上の特徴から、コナラ属コナラ亜属コナラ節と同定した。

(4) クヌギ節（コナラ属コナラ亜属）*Quercus* (sect. *Cerris*) sp.

試料No.：横木1(W20121501)

記載：円形ないし楕円形のやや大きい道管が単独で１～３列かそれ以上に配列する環孔材である。孔圏外では径を急激に減じたほぼ円形の小道管が、単独で放射状に配列する。小道管は厚壁である。道管せん孔は単せん孔であり、一部の道管内腔にはチロースが認められる。孔圏道管の周りには周囲仮道管が存在している。軸方向柔細胞は単列ないし数細胞幅の短接線状柔組織を形成し、目立つ。放射組織は同性ですべて平伏細胞からなり、多数の低い単列放射組織と極めて幅の広い広放射組織からなる、典型的な複合型である。道管放射組織壁孔は柵状を示す。以上の組織上の特徴から、クヌギ節（コナラ属）と同定した。

(5) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc.

試料№：杭77(W20121506)、杭78(W20121507)

記載：大きい円形ないし楕円形の道管が単独で２～３列かそれ以上に配列する環孔材である。孔圏外の道管は小さく、放射状からやや火炎状に配列する。道管せん孔は単せん孔である。道管内腔にはチロースが顕著に認められる。孔圏道管の周りには周囲仮道管が存在する。軸方向柔細胞は単接線状に配列するのが認められる。放射組織は平伏細胞からなる単列同性型である。以上の組織上の特徴からクリと同定した。

(6) ムクノキ *Aphananthe aspera* (Thunb.) Planchon

試料№：木片(W20121505)

記載：小さい道管が、単独ないし放射方向に２～３個連続して散在状に分布する散孔材である。道管せん孔は単せん孔である。道管内腔に着色物質を含むものが多い。軸方向柔組織は接線方向に数～１０細胞程度の帯状配列を示す。放射組織は１～４細胞幅で、両端に直立細胞を複数持つ異性型である。以上の組織上の特徴から、ムクノキと同定した。

(7) クスノキ科 Lauraceae

試料№：杭35(W20121504)

記載：中庸の径で円形ないし楕円形の道管が単独ないし２～３個放射方向に複合して年輪内に均等に分布する散孔材である。道管の分布数は少ない。道管せん孔は単せん孔である。軸方向柔細胞は周囲状である。道管側壁の壁孔は対列状～階段状を示す。木部繊維は極めて厚壁である。放射組織は異性で、１～２細胞幅である。平伏細胞、直立細胞、方形細胞の３種類がすべて存在し、典型的である。放射柔細胞は厚壁である。以上の組織上の特徴から、クスノキ科と同定した。

(8) イスノキ *Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.

試料№：杭19(W22012602)、杭32(W22012603)、杭51(W22012606)

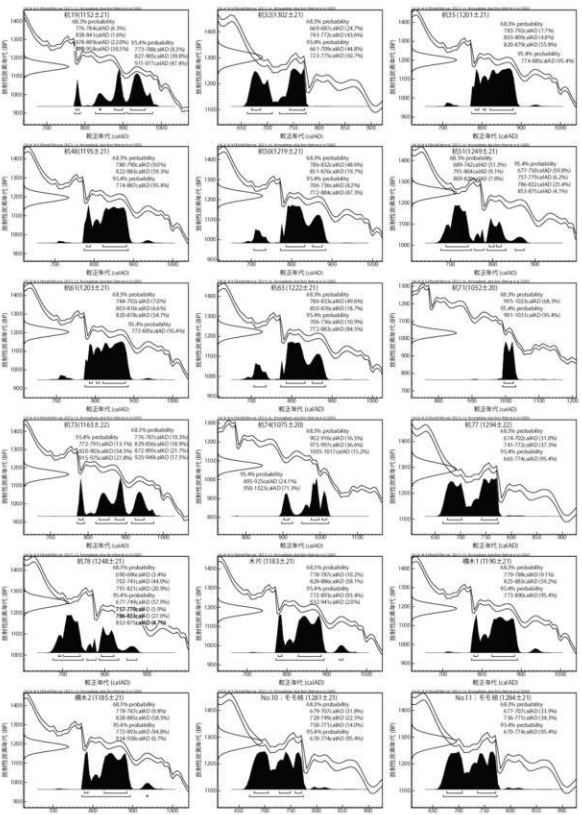
記載：小さくやや多角形を帯びた道管が、ほとんど単独で散在状に非常に多く分布する散孔材である。道管せん孔は階段せん孔で、Barの幅は広い。放射組織は異性型で１～３細胞幅で、２細胞幅のものが多い。軸方向柔細胞は１細胞幅で、接線方向にほぼ一定間隔で規則的に配列している。軸方向柔細胞中に結晶が認められるものがある。以上の組織上の特徴から、イスノキと同定した。

(9) サカキ *Cleyera japonica* Thunb.

試料№：杭63(W20121503)

記載：非常に小さな道管が、ほぼ単独で年輪内に均等に多数分布する散孔材である。道管の形状は角張っているものが多い。道管せん孔は階段せん孔で、バーの数は多い。木部繊維は非常に厚壁である。軸方向柔細胞は散在状である。放射組織は単列異性型である。また、平伏細胞、直立細

腔、方形細胞の３種類がすべて存在する。放射柔細胞は厚壁である。以上の組織上の特徴から、サカキと同定した。



第84図　暦年較正結果：IntCal20（C区）

(10) サカキ類似 cf. *Cleyera japonica* Thunb.

試料№：横木2(W20121502)

記載：年輪幅がやや広く、接線方向に圧縮を受け一部が変形している。小さいか、非常に小さい道管が単独あるいは放射（あるいは接線）方向に２個複合し、年輪内に均等に分布する散孔材である。道管の分布数はやや少ない。道管せん孔は階段せん孔で、道管側壁の壁孔は対列～階段状を示す。木部繊維は極めて厚壁である、放射組織は異性で、1～2細胞幅である。また、平伏細胞、直立細胞、方形細胞の３種類がすべて存在する。以上の組織上の特徴はサカキに類似するが、断定に至らないことから「類似」に止めた。

5. A-2区杭列の時期について

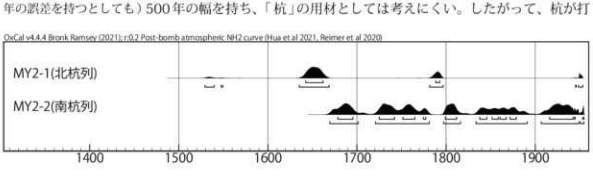
第85図に示したように、MY2-1が 1,529 cal AD以降(2 σ)、MY2-2が1,669 cal AD以降(2 σ)の年代を示した。両年代値には重なりがあるものの、MY2-1がやや古く、MY2-2がやや新しい値を示す。共に小径木の杭であることから、年輪の内外による伐採年代の誤差は考えにくく、MY2-1は中世後半以降に、MY2-2は江戸時代以降に伐採、利用されたものと考えられる。2時期に渡る杭列の可能性が高いが、同時期に２列に打たれた杭列の可能性も若干残る。

また、年代測定試料は灰色砂層から検出されているが、後述のように上位の灰色粘土層が古代～中世の時期の耕作土と推定されることから、更に上位の黄灰色粘土層より上から打ち込まれた杭列であることが分かる。

6. C区礫敷遺構の時期について

同一の樹幹でも髄と辺材で、測定年代には数百年以上の差が認められることがある。これは、幹が成長した時点で取り込まれた炭素を基に、年代値を測定していることに起因する（樹齢千年の大木では、髄と辺材で1000年の差が生じる）。一方、杭材に樹齢数百年の大木を用いることはごくまれで、樹齢数年～数十年の樹幹が主で、精々樹齢百年程度までの樹幹を用いたと考えられる。

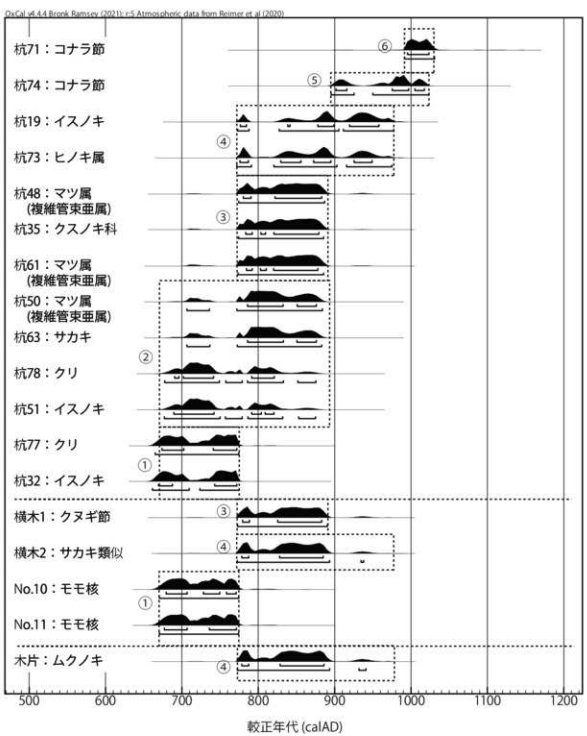
第86図に暦年較正結果一覧を示す。２σで661 ～ 1031 cal AD とおよそ500年の幅に18試料の年代値が収まった。１試料ごとに見ると、最大でおよそ200年、最小で40年の幅（誤差）を持つ。また、暦年較正値（２σ）の範囲から、おおよそ６つのグループ（図中①～⑥）に分けられる。最も新しい年代が樹皮直下で、古い年代を髄と考えると、最も新しい年代値が得られた杭71の991-1031 cal ADが、礫敷遺構に杭が打たれた時期に最も近いことになる。しかし、得られた年代測定結果は（200年の誤差を持つとしても）500年の幅を持ち、「杭」の用材としては考えにくい。したがって、杭が打



第85図　暦年較正結果の分布：Bomb 21 NH2 + IntCal20（A-2区）

たれた時期が複数回あると考えることが妥当であり、杭71が最も新しい時期に打たれた杭であったと考えられる。

礫敷遺構が造られた時期について、木片（772-941 cal AD）は礫敷遺構の下位から採取されており、礫敷遺構が造られる前に埋まったものである。従って、木片を含むグループ④の時期以前に礫敷遺構が造られたとは考えにくい。一方、グループ②、③はグループ④との重なりが多く、グループ④と同時期を示すと考えることができる。また、グループ①の4試料はグループ④と数年の重なりを持つ。杭32・77については、伐採年はこれより後であり、グループ④の杭と同時期に打たれたとし



第86図　暦年較正結果の分布（C区）

ても矛盾は無い。種実1、2は何れもモモの核であり、本来単年で形成され、そのものの持つ誤差は少ないはずである。モモの核が礫敷遺構に至った過程は不明であるが、採取から数年内、あるいはそれ以上に時間が経過したと考えるのが妥当であろう。以上のことから、礫敷遺構はグループ④の示す773～938 cal ADの範囲で、かつグループ②，③との重複範囲である773～875 cal AD、更にグループ①の示す最終年774 cal ADからさほど離れない時期（8世紀第4四半期前後か）に造られた可能性が高い。

杭の打たれた複数の時期について、グループ④の杭19・73は暦年較正の幅が広いことから、グループ⑤の杭74と共に、重複する895～975 cal AD頃に打たれた可能性もある。また、グループ⑤の杭74は、今回年代測定を行った杭の中では単独で打たれた可能性のほか、グループ⑥の杭71と共に重複する991～1023 cal AD頃に打たれた可能性もある。

7. 古植生

1）A-2区内での農耕について

灰色粘土層について、耕作土の可能性が示唆されたことから、花粉分析を実施した。前述のように、イネを多く含むイネ科（40ミクロン以上）花粉が242％と高率で検出されたほか、水田雑草を含むガマ属、サジオモダカ属。オモダカ属、イネ科（40ミクロン未満）、カヤツリグサ科が多く検出されるほか、裏作作物であるソバ属も検出された。このことから、同層が水田耕作土であった可能性が指摘できる。ただし、灰色粘土層は見かけ3mほどの広がりしかなく、水田耕作度としてはやや狭い感がある。したがって、水田に隣接する湿地であった可能性も否定できない。

2）A-2区灰色粘土層の堆積年代と周辺地域の森林植生

マツ属（複維管束亜属）が高率を占め、コナラ亜属、アカガシ亜属がこれに次ぐ。このような木本花粉化石群集は、中海・宍道湖地域では弥生時代以降中世にかけて認められる（渡辺・中川, 2013）。背後の山地、あるいは大橋川対岸丘陵での照葉樹林の開発が進み、アカマツやナラ類を主要素とする里山が広がっていたと考えられる。

3）8世紀頃の朝酌矢田Ⅱ遺跡周辺の古植生（C区花粉分析結果から）

今回の分析試料（層準）は、出土遺物等から7世紀後半～8世紀代の堆積物と考えられており、年代測定結果からもほぼ同時期の年代が得られた。大橋川対岸の灘遺跡では「同時期の可能性がある（「平安時代以前」の）堆積物」が分析されているが、今回の分析試料は、従来より堆積時期範囲が絞り込まれていた。このことは、大橋川流域の古環境を推定する上で重要である。

(1) 灘遺跡との比較

灘遺跡では、西川津遺跡との比較からⅢ帯を8世紀後半～9世紀後半の時期を示すものと考えていた（渡辺, 2017）。灘遺跡のⅢ帯ではアカガシ亜属とスギ属の高率での出現が特徴であった。更に上位のⅡ帯に入るとマツ属（複維管束亜属）が増加し、スギ属、アカガシ亜属が減少傾向を示すようになる。

今回の分析ではアカガシ亜属の出現率が最も高く、マツ属（複維管束亜属）、スギ属が同程度の出現率を示すが、マツ属（複維管束亜属）は増加傾向を、スギ属は減少傾向を示しており、灘遺跡のⅡ帯（下部のb亜帯）に対比される。Ⅱ帯b亜帯が今回の年代測定結果である8世紀第4四半期頃の植生を示すとすれば、（灘遺跡を含め、）従来の年代観を変更する必要が生じる。つまり、西川津遺跡周辺

と比べ、朝酌矢田Ⅱ遺跡周辺の開発時期が早かったものと考えられる。ただし、大橋川南岸の灘遺跡と大橋川北岸の朝酌矢田Ⅱ遺跡とは集水域が全く異なり、花粉化石群集にも差が認められる可能性もある。

(2) 森林植生

周辺の丘陵上、嵩山・和久羅山山系や対岸の茶臼山山地（小畑，1974）にはカシ類を主要素とする照葉樹林が分布し、モミやスギ、ヒノキ、マツ類を混淆する場所もあったと考えられる。また、モミやヒノキは、更に背後の北山山地や湖南山地高所で温帯針葉樹林を成していた可能性もある。大橋川北岸の調査地近辺では谷が浅く、急峻な地形が迫っており、スギの生育できる地形環境が限られている。一方、対岸では谷も深く、小規模な扇状地も発達しており、スギの生育できる地形環境が整っている。ここで検出されたスギ属花粉の多くは、僅かに検出されるサワグルミ属-クルミ属やニレ属-ケヤキ属、エノキ属-ムクノキ属、トチノキ属などとともに、対岸の谷筋に発達した渓畔林や扇状地末端に発達した湿地林からもたらされた可能性が高い。

一方、今回の分析で堆積時期が明確になったことで、西川津遺跡に比べマツ属（複維管束亜属）の増加が早い時期から生じたことが明らかになった。マツ属（複維管束亜属）にはクロマツ、アカマツとこれらの雑種が含まれる。いずれも「痩せ地」に生育し、伐採後の二次植生として発達することがある。また、クロマツは塩害に強いことから海岸林を成すことが多く、アカマツは「里山」の主要な構成要素となっている。一方、マツ属（複維管束亜属）の増加は森林伐採などの開発に伴うアカマツ林の拡大とも考えられている。今回マツ属（複維管束亜属）が増加傾向を示すことは、近辺で何らかの開発行為が行われ、アカマツ林が拡大したものと考えられる。ただし後述のように、ここでの開発行為には新田開発は含まれなかったものと考えられる。「朝酌促戸」や「枉北道」、「鄙」を造成するための開発であったかもしれない。

(3) 岸部近くの植生

イネ科（40ミクロン未満）やカヤツリグサ科花粉が検出され、大橋川の岸辺にはアシ原やマコモの群落のほか、ウキヤガラなどのホタルイ類が生育していたと考えられる。ただし、これらはさほど高率にはならず、水面は解放的であったと考えられる。また、オモダカ属などの湿性植物も検出され、大橋川に流入する河川沿いの淡水域に生育していたと考えられる。さらに、ヨモギ属など比較的乾燥地を好む分類群も検出され、やや乾燥した場所に分布していたと考えられる。

また、イネを含むイネ科（40ミクロン以上）花粉も検出されるが、20%程度に止まる。調査地が水田であった可能性は低い。また遺跡近辺では丘陵が大橋川に迫っており、水田を開発する面積も限られている。イネ科（40ミクロン以上）の多くは、大橋川対岸や上流に広がった水田からもたらされた可能性が高い。

8. まとめ

朝酌矢田Ⅱ遺跡で実施した花粉分析、年代測定、樹種同定の結果から、以下の事柄が明らかになった。

1．A-2区での年代測定及び花粉分析の結果、杭列について以下の知見が得られた。

① 2列の杭列について、中世後半以降と江戸時代以降の異なる時期に打たれた杭列の可能性が示唆された。ただし、同時期に2列の杭列として打たれた可能性も残る。

② 黄灰色粘土層より上位から打ち込まれたことが明らかになった。

2．A-2区での花粉分析結果から、灰色粘土層が古代から中世の時期に堆積したと推定できた。また、水田耕作土の可能性が高いことが分かった。ただし、見かけの幅が狭いことから、水田に隣接した湿地であった可能性も否定できない。

3．C区の杭の年代測定の結果からは、礫敷遺構は8世紀第4四半期前後の構築と考えられた。この値は、出土遺物からの推定時期（8世紀第2四半期～8世紀末）の範疇に収まる。

4．対岸の灘遺跡では西川津遺跡との花粉帯対比から、今回の分析層準対比層を8世紀後半～9世紀後半以降の堆積としていた。今回の一連の分析結果から、堆積時期が100年程度遡る可能性が指摘できた。また、このことから西川津遺跡周辺と比べ、朝酌矢田Ⅱ遺跡周辺の開発時期が早かった可能性が指摘できる。

5．C区での花粉分析結果を基に、8世紀第4四半期頃の朝酌矢田Ⅱ遺跡周辺の古植生を推定した。特筆すべき事柄は以下の通りである。

① マツ林の拡大が水田開発に起因したとは考えにくく、「朝酌促戸」や「枕北道」、「郷」の造成などに起因した可能性が指摘できた。

② 遺跡近辺での水田の分布が認められなかった。大橋川対岸や、上流に水田が広がっていたものと考えられる。

6．樹種同定の結果、10分類群を同定した。杭材としてマツ属（複維管束亜属）、ヒノキ属、コナラ属（コナラ節、クヌギ節）、クリ、ムクノキ、クスノキ科、イスノキ、サカキ等が用いられていた。近辺に生育していた樹木を選択せずに「杭」として利用していたと考えられ、これらの樹木が近辺に生育していたものと考えられる。

【引用文献】

小畑浩（1974）地形分類図 松江．島根県．

島地　謙・佐伯　浩・原田　浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造．276p．，文永堂，東京．

中村　純（1974）イネ科花粉について、特にイネを中心として．第四紀研究，13,187-197．

Bronk Ramsey, C. (2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

Hua, Q., Turnbull, J. C., Santos, G. M., Rakowski, A. Z., Ancapichún, S., De Pol-Holz, R., Hammer, S., Lehman, S. J., Levin, I., Miller, J. B., Palmer, J. G., & Turney, C. S. M. (2021). Atmospheric Radiocarbon For The Period 1950–2019. Radiocarbon pp 1–23 doi:10.1017/rdc.2021.95

Reimer, P., Austin, W., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R., Friedrich, M., Grootes, P., Guilderson, T., Hajdas, I., Heaton, T., Hogg, A., Hughen, K., Kromer, B., Manning, S., Muscheler, R., Palmer, J., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R., Richards, D., Scott, E., Southon, J., Turney, C., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A., & Talamo, S. (2020). The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0–55 cal kBP). Radiocarbon, 62.

渡辺正巳(2010a)花粉分析法．必携 考古資料の自然科学調査法．174～177．ニュー・サイエンス社，東京．

渡辺正巳(2010b)木質遺物（埋没樹木）樹種同定．必携 考古資料の自然科学調査法．194～198．ニュー・サイエンス社，東京．

渡辺正巳・中川寧(2013)山陰の木製品の樹種と植生について．木製品から見た古代のくらし，37-48．，島根県古代文化センター．

渡辺正巳（2017）灘遺跡における古環境変遷．斐伊川水系大橋川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘報告書，1,101-113．島根県教育庁埋蔵文化財調査センター．

樹種図版1

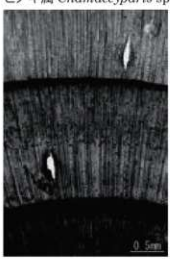
マツ属（複維管束亜属）*Pinus* (sub. *Diploxlon*) sp.：杭48(W22012604)

横断面

接線断面

放射断面

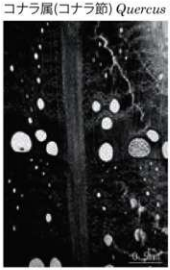
ヒノキ属 *Chamaecyparis* sp.：杭73(W22012609)


横断面

接線断面

放射断面

コナラ属(コナラ節) *Quercus* (sect. *Prinus*)sp.：杭71(W22012608)


横断面

接線断面

放射断面

樹種図版2

クヌギ節（コナラ属コナラ亜属）*Quercus* (sect.*Cerris*) sp. ： 横木1(W20121501))

横断面

接線断面

放射断面

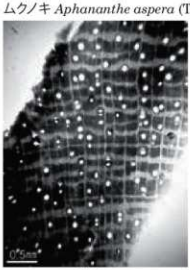
クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc.：杭78(14C-5(W20121507))

横断面

接線断面

放射断面

ムクノキ *Aphananthe aspera* (Thunb.) Planchon：木片(W20121505))



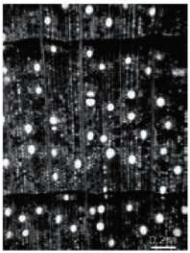
横断面

接線断面

放射断面

樹種図版3

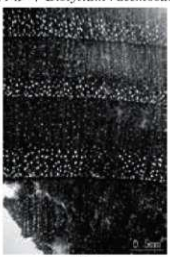
クスノキ科 Lauraceae：杭35(W20121504))


横断面

接線断面

放射断面

イスノキ *Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.：杭19(W22012602)


横断面

接線断面

放射断面

サカキ *Cleyera japonica* Thunb.：杭63(W20121503))

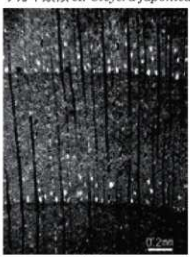
横断面

接線断面

放射断面

樹種図版4

サカキ類似 cf. *Cleyera japonica* Thunb.：横木2(W20121502)



横断面

接線断面

放射断面

第2節　松江市朝酌矢田Ⅱ遺跡における地質とその年代，古環境

島根大学総合理工学部・地球科学科　酒井哲弥

1. はじめに

この報告では，遺構の地質調査結果，ならびに年代測定，CHNS元素組成分析の結果に基づいて，地層の形成過程や古環境変化について述べる．これまでの地質調査により，この遺跡の周辺には，中新統松江層（例えば 鹿野ほか，1994），中新世火山岩である和久羅山安山岩またはデイサイトの分布が知られている．D区では松江層の砂岩のほか，地すべり堆積物が見られた．地すべり堆積物の内部には，樹木の化石も見られた．地すべりの発生年代を推定するために，炭素14年代測定を実施した．地すべり堆積物の上位には，平坦面を隔てて砂質シルト層が重なる．砂質シルト層（D区11層）について，CHNS元素分析を実施し，その古環境の復元を試みた．C区においては人為的に敷き詰められたと推定される礫が見られた．これらの礫の特徴，産状を紹介し，その由来について議論する．なお，現地においてはD区，C区の順で遺構の観察を行なったこと，さらにはC区の方がより新しい時代の遺構であることから，D区，C区の順で結果について述べることとする．

2. 方法

1）現地地質調査

基盤として露出した地質について，堆積物については地層を構成している物質の粒径，含有物の記載を行った．火山岩については，岩石の種類の判別とその産状を観察した．D区においては地すべり堆積物が確認されたため，その特徴の観察を行なった．地すべり堆積物のトップはほぼ水平に切られていた．地すべり堆積物のトップが平坦になった原因（自然によるものか？それとも人の手によるものか？）を探るために，平坦面の上下の地層の観察を丁寧に行なった．C区においては，礫層とその下位層について，堆積物記載を実施した．

2）炭素14年代測定

ここでは2試料について，炭素14年代法による年代測定を実施した．年代測定は加速器分析研究所に依頼して，AMS法にて実施した．1つ目の試料として，D区の炭質物を多く含む黒灰色の砂質シルト層（9層）の年代測定を行った．黒色の見た目から有機物を多く含むと判断されるため，堆積物そのものの分析を実施した．

もう1つの試料として，地すべりの発生年代を推定するため，D区の地すべり堆積物に含まれていた樹木化石の年代測定を行った．分析用試料は地すべり堆積物に埋没していた樹木化石の表面から採取した．

3）CHNS元素分析

年代測定を実施した黒灰色の砂質シルト層の下位層（11層）に対して，CHNS元素分析を実施した．現地で採取した試料のうち，ゴルフボール大の試料をほぐして，4箇所から1g弱を分取し，そこから約15mgをとって分析した．植物片がところどころに含まれていたが，それらを全て除いて分析した．分析は島根大学保有の有機微量分析装置EA1108（FISONS社製）を使用し，島根大学・地球科学科・

三瓶良和教授に依頼した.

4)C区における礫の鑑定

C区の礫1層の礫の特徴ならびにその鑑定を行った.礫の多くは表面が白色を示していた（すでに風化を受けていた）ため，具体的に礫の鑑定のできないものが多かった.このため，現地での発掘作業に影響のない範囲で礫をハンマーで割り，その内部の特徴から礫の鑑定を行った.また，白色の礫の由来を知るために，周囲の谷に見られる礫の確認も行った.

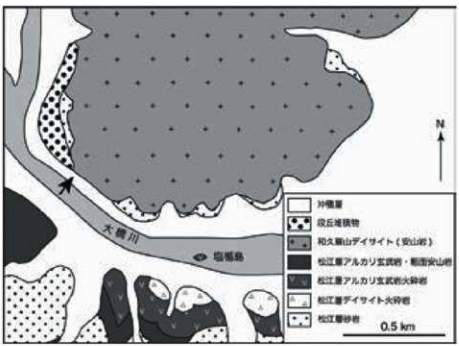
3. 結果

1)遺跡周辺と基盤の地質について

鹿野ほか(1994)の地質図によると，遺跡の北に広がる山には和久羅山安山岩，またはデイサイト（以下，和久羅山デイサイト，または単にデイサイトと記述する：佐藤ほか(2011)参照）が広がる.遺跡の東には，地質図では黄色で示される松江層の砂岩が分布することとなっている（第87図）.大橋川を挟んだ南には，松江層の玄武岩類が分布する.

2)D区の層序

D区の北西端では，中新世の時代の地層である松江層の砂岩，東部では玄武岩が確認された.その間に，地すべり堆積物が調査区内に広がることが確認された.これらの堆積物のトップは平坦面で切られており，その上位に砂質シルト層が重なる.



※矢印が遺跡のおよその位置を示す.

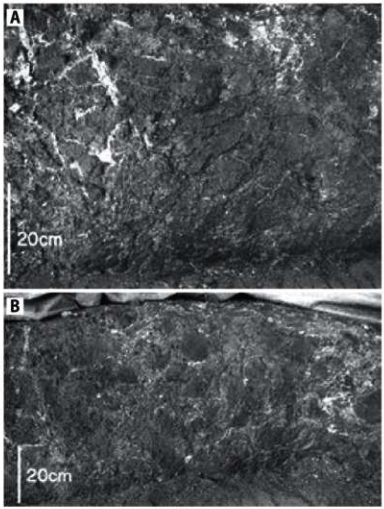
第87図　遺跡周辺の地質（鹿野ほか，1994）

2.1) 松江層砂岩

松江層砂岩は淡緑色の細粒砂岩からなる．この砂岩は，調査区内では北西縁のごく狭い範囲にしか分布しないため，粒径以外の詳しい特徴を知ることはできなかった．

2.2) 松江層玄武岩

これは次に述べる地すべり堆積物の分布範囲の東に広がる．黒色または茶～赤褐色の玄武岩が主体で，それらはブロック状に破砕されている（第88図）．これはすでに強く風化を受けており，手で砕くことができる程度に軟らかい．赤褐色のブロック（第88図B）は，溶岩が噴出をした際，高温状態で酸化することによって色が変化したものである．一部の玄武岩ブロックの間を熱水から沈殿したと思われる白色の物質が埋める．これも強風化を受けているため，もとの物質が何であるかは不明である．



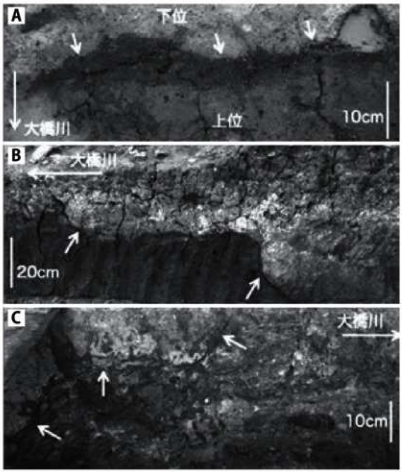
第88図　松江層の玄武岩

A: 黒色のブロック状に破砕を受けた玄武岩．ブロックの間を埋める白色の物質は，熱水からの沈殿物と推定される．B: 赤褐色の玄武岩ブロック．

2.3) 地すべり堆積物

この堆積物を特徴づけるのは，(a) 白色のブロックとその間を埋める淡褐色または灰白色のシルト層，(b) 黒色のシルト層，(c) 褐色または淡褐色のシルト中に礫や白色ブロックが混在した層である（第89図）．基盤の表面では，(a)，(b)，(c) の層がそれぞれシャープな境界で隔てられている．中央トレンチ断面でみると，それぞれの地層の境界は山側に傾斜し，少しうねりが見られる（第89図B, C）．また黒色のシルト層は，その上位にも下位の地層にも入り込む様子が見られる（同図A）．この特徴は，地すべりが定置した時，黒色のシルト層が流体としての特徴を持っていたことを示す．(a)，(c) の層では，泥質な物質の周りに礫サイズのブロックや礫が散在している（同図B, C）．(a) に含まれるブロックは角礫状で，円摩を受けていない．場所によって，角礫状のブロックがジグソーパズル状に割れた構造を示す．白色のブロックは，強い風化を受けた松江層の玄武岩ないし和久羅山デイサイトであると推定される．

泥質堆積物の中に散在するブロックや礫は，それが定置した時には，すでに泥の中に取り囲まれていたことを意味する．すなわち，これはぶよぶよの泥に含まれた状態でブロックや礫が停止したことを意味する．ここに見られる地層の境界が山側にゆるく傾く特徴は，土石流や地すべり土塊が，すで



第89図　地すべり堆積物の様子
A: 調査区の基底面に見られた地すべり堆積物（平面）．白い部分がより下位の堆積物で，薄い茶色の部分がより上位の堆積物である．黒い部分は地すべりのすべり面であると推定される．
B, C: 中央トレンチに見られた地すべり堆積物の断面図．矢印の部分がすべり面で，地すべり土塊がすでに停止していた土塊の上にのし上げたことを記録．

に停止している堆積物にのし上げることで形成されることが知られている（例えば，田近ほか，2016）．(a) にはほとんど摩耗されていないブロックが含まれていることから，強い風化を受けた火山岩類が破壊を受けて，その直後に停止したことを意味する．このことを踏まえると，(a) は地すべりの堆積物であると解釈される．(b) はすべり面を構成する物質であろう．一方，(c) には円摩をうけたブロックとデイサイトの礫が含まれる．これはより長い距離の運搬を経たことを示す．この特徴から，(c) は土石流堆積物と解釈される．

2.4) 黒灰色砂質シルト層（塩性湿地堆積物）（11層）とその基底の平坦面（波食棚）

地すべり堆積物の上に黒灰色の砂質シルト層（11層）が重なるが（第90,91図），その基底面は平坦で，地すべり堆積物のトップが切られている（第90図）．この平坦面の上には中礫サイズ（4 ～ 64 ㎜）から大礫サイズ（64 ～ 256 ㎜）（最大で長軸の長さが200㎜程度）の礫が散在する．また，この面より下位に向かって，生物の巣穴化石（生痕化石）も頻繁に見られる（第91図）．巣穴化石の直径は1 ～ 1.5cm程度であり，その大きさから，甲殻類または貝類の巣穴であると思われる．この堆積物にはヨシのものと思われる植物の根の化石も多い．根痕は下位の地すべり堆積物の中にも伸びている．

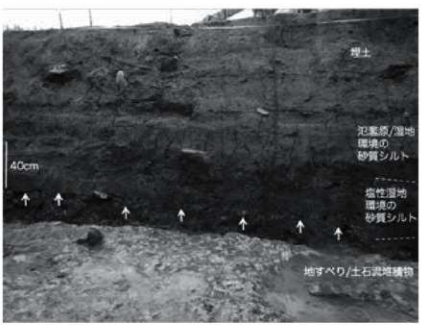
平坦面に重なる黒灰色の砂質シルト層（11層）は，掘削後しばらく時間を経た露出面では，黄褐色を呈するが，新鮮な堆積物は黒灰色を示す．4）で述べるように，この部分の化学分析からは，硫黄の含有が確認された．この層には，バクテリア由来の黄鉄鉱が含まれると推定される．それが風化を受けて二次的に形成された，ジャロサイトと呼ばれる鉱物が，黄褐色の色の原因であると解釈される．CHNS元素分析結果の部分で詳しいことは述べるが，この地層は海水の影響を受けた環境（この場合汽水環境）の堆積物であると解釈される．ヨシの根痕の存在から塩性湿地の堆積物と解釈される．

上記のことや遺跡の周囲に淡水の川がないことを踏まえると，地すべり堆積物トップの平坦面は，汽水環境下で形成された侵食面であると解釈される．最も可能性の高い解釈として，波浪による侵食

で形成された波食棚が挙げられる．すなわち大橋川で発生する波浪による侵食でできた波食棚という解釈である．大橋川の南岸の塩楯島の周囲には狭いながらも波食棚が発達する．強い風化を受け，もろくなった松江層の岩石が，波食棚の形成の下地にあると言って良いであろう．

2.5) 灰色砂質シルト層（湿地または氾濫原堆積物）(9層)

この砂質シルト層は黒灰色の砂質シルト層（11層）の上に水平に重なる（第90図）．この層には植物の根の化石が多く見られる．また，下位の黒灰色のシルト層のように，切り出されてから時間の経った露頭表面は黄褐色を示さない．このことから，海水の影響をほぼ受けない場で堆積した地層であると判断される．すなわち，これは湿地または氾濫原の堆積物であると解釈される．その上に重なる堆積物は乱雑に礫が含まれることから，埋土であると判断される．



第90図　D区南壁の断面
白矢印が地すべり堆積物のトップで，写真手前側の白い部分の表面がその延長．地すべり堆積物のトップが平坦面であることがわかる．

2.6) C区の礫1層

C区の北縁部分で現在の水際にほぼ平行に，かつほぼ平坦に礫が並ぶ様子が確認された（礫1層）．礫は円礫から亜角礫が多い．サイズは中礫から大礫サイズのものが目立つ．礫の並びに特に方向性は見られない．しかし，礫の上面の高さはよく揃っているように見える（写真7右側）．礫の表面は白色を示すが中心部は黒灰色から灰色を示す．これらの礫は和久羅山デイサイトであることがわかった．周囲の丘陵谷底にも，この地点の礫と同様，白く風化した表面を持つデイサイトが

第91図　地すべり堆積物中に発達した生痕化石
地すべり堆積物中に発達した生痕化石．白矢印が生痕化石の例である．黒い細長い線は根の化石（根痕）である．

見つかった.

礫1層の北側部分はほぼ平坦であるが，そこから大橋川に向かって礫層は続き，ゆるやかに標高を下げる．そこでは礫の配列はランダムに見える．その部分では，礫の上面の高さも揃っていない（写真7左側）．標高の高い部分の礫とは異なり，礫の表面の白い部分が薄くなり，礫内部のあまり風化を受けていない，灰色の部分が見えているものがある．一部の礫には穿孔貝による生痕化石が見られる（写真8）．この解釈については，4.考察で述べる．

礫1層の下位には，次に述べる砂質シルト層および泥層（C区9～11層）を挟んで，中礫から大礫サイズからなる礫の散在する面が広がっている（礫2層）.

2.7) C区の泥層

C区の最も大橋川寄りの地点においては，礫1層の下位に砂質シルト層ならびにシルト層が堆積している（写真9）.最下部の砂質シルト層（11層）には細礫サイズ（2～4 ㎜）の礫も混じり淘汰が悪い．その上には細粒なシルト層（10層）が挟まれる．この内部には木片が多く含まれる．さらに上位に再び砂質シルト層（9層）が重なる．ここには上からの植物の根の化石や生痕化石が見られる．最上部10㎝の薄い褐色の部分は植物の根の化石等によって，地層が大きく乱されている．これらの地層には大きく人為的に改変された痕跡は認められない．よって，礫1層より下位の泥層は自然の状態で形成された堆積物であると判断される.

3)　年代測定結果

年代測定結果を表11，表12に示す．得られた炭素14年代値はIntCal20較正曲線（Reimer et al., 2020）を用いて，OxCalv4.4較正プログラム（Bronk Ramsey, 2009）を使用して較正年代を計算した.

写真7　C区の礫1層
標高の低い川側には表面が摩耗を受けて灰色を示す礫が点在する.

写真8　穿孔貝によって礫に形成された生痕化石

※スケールは75cm

写真9　C区ベルト1断面の泥層

3.1)D区黒灰色砂質シルト層（9層）

この試料については，試料を超純水の中に入れ，超音波で分散させた後，ふるいにかけて根等の混入物を除去した．ふるいを通過した土を乾燥させた試料に対して，酸処理により不純物を化学的に取り除いた．その後、超純水で中性になるまで希釈し，乾燥させたものを測定用の試料とした．

δ^{13}Cの値が-22.96±0.26‰（第11表）とC3植物の値よりもやや高く（-27‰前後），C4植物（-12‰前後）や水生付着生物の値（-10‰前後）より大幅に小さい．推定の域を出ないが陸上由来の炭化物に水際に映えるヨシなどのイネ科植物や水生付着生物の遺骸が混入した試料を測定したものと考えられる．測定の結果は較正年代（2σ）で，AD 977-1030年の年代（第12表），すなわち平安時代の年代が得られた．

3.2)樹木化石の年代

樹木化石の表面付近から得た試料について，表面の付着物を除去した後に，酸・アルカリ処理を行なった後に，分析用試料の処理を実施した．δ^{13}Cの値は-28.97±0.25‰と典型的なC3植物の値を示した（第11表）．得られた年代値では，誤算範囲が広く（第12表），2σでの誤差の範囲はおおよそ5,282-4,961年前である．この年代測定は，地すべりの発生年代を推定するためのものであること．年代の誤差範囲のうちの最も古い年代以降に地すべりは発生したと判断できることから，地すべりはBC 3,250年以降に発生したと判断される．

写真10に示すように，この樹木化石は内部までほぼ炭化しているように見える（年代測定用試料は，添木のされているものから採取）．しかし，この樹木は泥質な堆積物に埋もれていたことから，埋没時には還元的な環境が維持されていた可能性が高い．材としての保存状態も見かけ上，良いことから，この樹木が枯死してまもなく埋もれた（＝地すべりが発生した）可能性が高いと考えられる．

第11表　δ^{13}C補正後，較正前の年代測定結果

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C (‰) (AMS)	δ^{13}C補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC (%)
IAAA-200586	朝酌-1	島根県松江市朝酌町1010　採取地点:トレンチ　深度:1m	有機質シルト	HCl	-22.96 ± 0.26	1,040 ± 20	87.81 ± 0.23
IAAA-200587	朝酌-2	島根県松江市朝酌町1010　採取地点:トレンチ　深度:1m	炭化物	AAA	-28.97 ± 0.25	4,450 ± 20	57.48 ± 0.17

第12表　較正した炭素14年代

測定番号	δ^{13}C補正なし		暦年較正用(yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-200586	1,010 ± 20	88.17 ± 0.23	1,044 ± 21	956calBP - 930calBP (68.3%)	973calBP - 920calBP (95.4%)
IAAA-200587	4,510 ± 20	57.01 ± 0.17	4,448 ± 24	5265calBP - 5243calBP (8.6%) 5238calBP - 5188calBP (22.8%) 5120calBP - 5115calBP (1.6%) 5054calBP - 5025calBP (14.3%) 5014calBP - 4976calBP (20.9%)	5282calBP - 5164calBP (41.0%) 5139calBP - 5098calBP (8.7%) 5086calBP - 4961calBP (45.8%)

4）CHNS元素分析結果（第13表）

D区黒灰色砂質シルト層（11層）の分析結果から判断される内容を以下に示す．

・全炭素濃度（TC）は平均1.13%であり，砂質シルトとしては濃度が高く有機物の影響の大きい場所であったことを示している．範囲は0.94 ～ 1.31%であり，均質ではない．この場所は大橋川に隣接しているが，当時は流れが淀みやすい場所であったことを反映していると思われる．

・C/N比（全有機炭素濃度/全窒素濃度）は平均20.1であり，高等植物（草・水草を含む）の影響が大きいがプランクトン・藻類も含まれる．値の範囲は15.8 ～ 26.5であり，均質ではない．

・全硫黄濃度（TS）は平均1.24%であり，砂質シルトとしては濃度が高く，明らかに海水の影響があったことを示している。値の範囲は0.73 ～ 1.65%であり，均質ではない。

・C/S比は平均1.03であり，貧酸素的な水域環境を示している．値の範囲は0.60 ～ 1.78であり，かなり貧酸素的な環境からやや酸素供給のあった底質を示唆する．浅いが水の循環が悪く，停滞した水域であった可能性がある．

写真10　D区の地すべり堆積物に含まれる樹木

第13表　CHNS元素分析結果

No.	Sample Name	TN (%)	TC (%)	TH (%)	TS (%)	C/N (wt ratio)	C/S (wt ratio)
1	Yada2D-1	0.049	1.31	0.18	0.73	26.5	1.78
2	Yada2D-2	0.060	0.94	0.17	1.10	15.8	0.85
3	Yada2D-3	0.046	0.98	0.17	1.65	21.4	0.60
4	Yada2D-4	0.077	1.28	0.23	1.46	16.7	0.88
	平均値	0.058	1.13	0.19	1.24	20.1	1.03

分析を行なった試料は1つの試料からさらに分取したものである．
TN:全窒素濃度，TC：炭素濃度，TH：全水素濃度，TS：全硫黄濃度

4. 考察

ここでは，4-1）C区の礫1層の由来について，4-2）汀線とその変化の2点について考察する．

4-1）C区の礫1層ならびに礫2層の由来について

C区において見つかった礫1層は，人為によるものと考えられ，自然のものではないと考えられる．よって，礫1層を「礫敷遺構」とするのは妥当である．その理由は以下の点に基づく．

・礫そのものは上記でも触れたように，和久羅山デイサイトの礫が主体である．その表面には白く風化した部分が残されている．これは礫となってから長期にわたり，運搬を経ていない，すなわち風化を受けて脆くなった部分が，礫が運搬される際の堆積物同志の衝突などにより削ぎ落とされる作用が起きていないことを示している．それを踏まえると，C区の礫は周囲の丘陵の谷の出口などにあった礫がこの場に人為的に持ち込まれた可能性が高い．

・大橋川の北岸において，波浪の影響を受けて礫が運搬・配列をしたのであれば，沖に向けて礫の平らな面を傾けて配列する覆瓦構造が一部に発達するはずである（例えば，青野，2009）．しかし，ここにはそれが発達しない．

・遺構の北側部分の，最も標高の高い部分の礫はその上面もよく揃っているように見られる．自然の状態で堆積した礫であれば，その上面が揃う必要はない．

・この地点は先にCHNS元素分析を行なったD区に近接しており，そこからは閉鎖的な水域の環境が復元されている．また礫の上位には砂層が重なることから，その当時，そもそも波浪の影響を大きく受ける場ではなかったと判断される．よって，この場所の礫が波浪や潮汐の影響で運ばれてくる可能性は低いと考えられる．

礫2層については，部分的な観察であったため，厳密な意味で，自然由来のものか，人為的なものかの判断はできない．しかし，そのすぐ上位の堆積物が自然由来のものであることを踏まえると，現状では自然由来の礫層と扱うのが妥当である．

4-2）D区とC区における汀線の位置について

汀線の位置を厳密に決定することは難しい．それは，日々の潮位変動に加えて，より長期の潮位変動も存在するためである．松江周辺での潮汐に伴う潮位差は30cm程度であるが，冬季の低潮位が-20cm，夏季の高潮位は+45cm程度に達する（気象庁ホームページ）．すなわち，海面の高さは約65cmの幅の中で変動している．

堆積物中の黄鉄鉱（硫黄）含有量はしばし，堆積環境の復元にも利用され，過去の汀線の決定に利用されるケースもある（例えば 白神，1985）．泥の中に含まれる硫黄の起源は海水であり，それは硫酸還元バクテリアによって，微小な黄鉄鉱として泥の中に固定される．黄鉄鉱（硫黄）を利用して過去の汀線を決定する場合には，黄鉄鉱（硫黄）を含む堆積物の上限がおよその汀線と扱われる．

D区における過去の汀線の指標として，2-4）で述べた黒灰色砂質シルト層（11層）のトップ（標高50～60cm）が挙げられよう．その上位の層（9層）のTSは測定していないが，黄鉄鉱の風化物であるジャロサイトの痕跡が認められないことから，硫黄の含有量は含まれたとしても極めて低いと見ることができる．先の年代測定の結果から，9層の炭素14年代はAD 977～1,030年である．測定試料が標高0mよりも高いところから得られていることを踏まえると，その当時の海面が現在よりもやや高かったことを示す．このことは平安時代とその前後で海水準が現在よりも高かったことと矛盾しな

い（例えば，豊島（1978））．

C区における汀線の位置を厳密に決定することは難しい．1つの可能性として，礫敷遺構において礫の表面が白く，あまり摩耗していないものが卓越する部分と，摩耗したものが目立つ部分の境界（標高0～10cm前後）が挙げられる．C区礫敷遺構の年代は8世紀後半を中心とする時期と推定されている．摩耗した礫が見られる南側の部分では礫のトップの高さがバラバラである．礫は陸側から投げ入れられたり，一度，敷き詰められた礫が波によりわずかに再移動して堆積した可能性，人が歩くことなどで水底がかく乱された際に，礫が向きを変えた可能性などが考えられる．水中では，波浪の影響により，弱いながらも礫の摩耗が進むことが考えられる．また，摩耗した礫とともに，穿孔貝による生痕化石の見られる礫が散在する．このことも摩耗した礫の目立つ部分が水中にあった可能性を示す．表面の摩耗していない礫の分布の下限は上記で述べたD区で検出された汀線の痕跡よりも低い位置にあり，かつ大橋川寄りの位置にある．このことは，奈良時代から平安時代の海水準の上昇を記録したものと解釈される．

C区とD区の調査から，奈良時代から平安時代にかけてのわずかな海水準の上昇が復元された．現代においても，地球温暖化の進行に伴う海水準上昇により，汀線付近では波浪などから，侵食作用・人口構造物へのダメージが問題となっている．そのことを踏まえると，奈良時代から平安時代の海水準の上昇に伴い，C区礫敷遺構などの工作物の水没，侵食作用による人工改変地の破壊など，さまざまな被害を当時の人々が被ったことが想像される．

4-3) D区波食棚の形成のタイミングについて

D区においては，明瞭な波食棚の存在が確認され，波食棚の上には礫が散在する．この礫は，侵食によって，基盤に含まれていた硬い岩石部分が洗い出されたものと解釈される．こうした礫は海進ラグと呼ばれる（例えば，村越，1999）．こうした礫が波食棚の上に現れるようになると，その礫が研磨剤の役割を果たして，さらに侵食を進める．このような波食棚を形成する作用は，一般的に海進期に発生しやすい（例えば，田村・増田，2004）．

D区では，地すべり堆積物の内部に樹木化石が確認された．この樹木は基盤面の高さで切られたように高さを揃えることから，波食の影響を受けている．また，D区礫敷遺構（7世紀後葉から8世紀第1四半期）は，波食棚の上に存在する．つまり，波食棚が形成されたタイミングは，BC 3,250年の地すべり以降，古代以前と解釈される．ただし，上記で述べたように，波食棚の形成が海進期に発生しやすいこと，今よりも海水準の高かった縄文時代中期頃の堆積物が波食棚の上にないことを踏まえると，奈良時代から平安時代にかけての海進期に発達した可能性も残る．

5. まとめ

ここで行なったD区ならびにC区に露出した地層の観察，炭素14年代測定，CHNS元素分析の結果，以下のことが明らかとなった．

・D区の基底部には中新世の時代の岩石である松江層の砂岩と玄武岩の分布が確認された．玄武岩は破砕を受けてブロック状になったものが主体である．

・D区の基盤の広い範囲を占めるのが地すべり堆積物である．風化を受けた白色のブロック状の物質が多く含まれるが，それらは松江層の玄武岩または和久羅山デイサイト（安山岩）が強風化を受け

たものと推定される．そこに含まれる樹木の炭素14年代測定結果から，地すべりの発生はBC 3,250年以降であることが示された．しかし，樹木の保存状態が比較的良いことから，地すべりの発生年代は樹木が枯死した年代と大きな差はないものと推定される．

・D区の地すべり堆積物のトップは削り取られて平坦面を作り出している．この平坦面から地すべり堆積物中に生痕化石が発達することを踏まえると，この平坦面は自然の状態で，浅い水域で形成された波食棚であると解釈される．波食棚はBC 3,250年以降，古代以前に形成されたものと解釈される．ただし，古代の海水準上昇に伴って発達した可能性も残る．

・D区の平坦面の上位に重なる黒色砂質シルト層（11層）のCHNS分析の結果から，これが海水の影響下で，かつ閉鎖的な水域の環境で堆積したことが示された．さらに、海水の影響を受けていない9層の炭素14年代値はAD 977 - 1030年（2σ）である．

・C区に見られる礫1層は，人為によるものと考えられる．標高の低い南側部分は水中にあったと解釈され，敷かれた礫が再移動したり，人為的に投げ入れられたものと推定される．礫2層は自然の状態で堆積したものと推定される．

・D区における古代の汀線は黒色砂質シルト層（11層）のトップ（標高50 ～ 60cm）で，C区における汀線の位置は白い表面が摩耗をしていない礫と摩耗を受けた礫が見られ，かつ穿孔貝の生痕化石の見られる礫が点在する部分との境界付近（標高0 ～ 10cm前後）であると解釈される．

・C区とD区の汀線の位置が異なること，さらに年代測定等の結果から，奈良時代から平安時代にかけて海水準が上昇したと解釈される．

【参考文献】

青野宏美,2009, 河床礫と海浜礫の長軸方向の定向配列. 岐阜聖徳学園大学紀要, 教育学部編, 48, 1-15.

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

鹿野和彦・山内靖喜・高安克已・松浦浩久・豊　遙秋(1994), 松江地域の地質．地域地質研究報告(5万分の1地質図幅), 地質調査所, 126p.

気象庁ホームページhttps://www.data.jma.go.jp/gmd/kaiyou/db/tide/suisan/suisan.php?stn=SK&ys=2022&ms=10&ds=01&ye=2022&me=10&de=15&S_HILO=on&LV=DL#hilo

村越直美, 1999, 海進ラグ堆積物としての貝殻層：上部更新統下総層群木下層の例．地質学論集, 54, 55-64.

Reimer, P.J. et al. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP), Radiocarbon 62(4), 725-757.

白神 宏, 1985, Fe2S含有量からみた広島平野沖積層の堆積構造. 地理学評論, 58A, 631-644.

田近　淳・大津　直・乾　哲也, 2016, 成層した降下火砕堆積物からなる地すべり移動体の内部構造と形成過程：石狩低地東縁，厚幌1 遺跡の例．地質学雑誌, 122, 23-35.

田村　亨・増田富士雄, 2004, 多数の年代値を入れた波浪卓越型堆積シーケンスの研究 – 千葉県九十九里浜平野と宮城県仙台平野の完新統から得られた最近の成果 – 地学雑誌, 113, 1-17.

佐藤大介・松本一郎・亀井淳志, 2011, 島根県松江市，和久羅山デイサイトの岩石記載と全岩化学組成．地質学雑誌, 117, 439-450.

豊島吉則, 1978, 山陰海岸における完新世海面変化. 地理学評論, 51, 147-157.

第5章　総括

朝酌矢田Ⅱ遺跡では、縄文時代から近世に至るまでの遺物が確認されたことから、当地域周辺において人々が継続的に活動してきたことがうかがえる。その中でもとりわけ、古代の遺構・遺物がまとまって確認されたことが特筆される。

本章では、まず第1節にB区で確認された古墳について、第2・3節に古代の主要な遺構について遺物との対応関係を踏まえながらまとめる。その上で、第4節で当該地域における遺跡の変遷と画期を整理し、結びにかえたい。

なおC区については、既述のとおり調査を一時中断している状況であるため、全容解明に至っていない。また、今後周辺域の調査が予定されているため、全ての調査を経た上で総合的に検討する必要がある。それでも、現段階での位置付けを示すことには一定の意義があろう。本章では一部想定の域を出ないものの、現時点で考え得る範囲で評価をおこない、課題を整理することとしたい。

第1節　B区の小規模古墳について

山陰地域においては、古くから一辺20m前後の古墳が「小規模古墳」として取り扱われてきた（山本1971など）。朝酌矢田Ⅱ遺跡B区で確認した方墳は、一辺7mと極めて小規模なものである。調査区内では2基確認されたが、いずれも盛土が削平されているため主体部は不明であり、周溝の基底部を残すのみである。

松江市域において、小規模方墳を含む古墳群が多々見受けられるため、以下に列挙する。まず朝酌矢田Ⅱ遺跡の西方に位置する朝酌菖蒲谷遺跡では、前期の方墳が調査されており、その墳裾から土師器壺を使用した土器棺墓が3基確認されている。朝酌地域で確認されている中では最も古く、唯一の前期古墳である。上浜弓3～5・7・9号墳は一辺5～9mで、時期は古墳群中で調査済みの2号墳が後期、古墳群全体としては中期から後期にかけて形成されている。この他、西川津町の金崎古墳群8・11号墳、菅田19・20号墳、八色谷2・3号墳、祖師分長池古墳が挙げられ、いずれも中期から後期にかけての時期である。西津田町には論田1・2号墳があり、周辺に横穴群も見られる。東津田町の喰ヶ谷1号墳は、横穴式石室を主体部とする後期古墳である。八雲町では、26基からなる増福寺古墳群中の14基が一辺10m未満の方墳である。これらの時期も中期から後期にかけてである。西尾町では、米坂古墳群30基のうち12基の小規模方墳が調査されており、時期は中期から後期である。6・10・11号墳は、一辺10mに満たない。大井町のイガラビ古墳群は、8基の小規模な横穴式石室を主体部とする。3号墳は一辺6mの方墳で、周溝が斜面上部側に「コ」の字状に廻る。時期は終末期（7世紀前半）である。

朝酌矢田Ⅱ遺跡B区で確認された2基の方墳は、出土した須恵器片から古墳時代後期後半と考えられ、規模や周溝などの諸要素は米坂古墳群に類似する。古墳時代終末期の類例は少ないものの、イガラビ古墳群を含め、西尾・朝酌・大井の大橋川北岸地域に見られる古墳群のあり方に一定の共通性が認められることは注意される。

第２節　C区の礫敷遺構について

１．構築年代と存続期間（第92図）

礫敷遺構の構築年代を推定する有効な資料として、出土遺物と打設杭がある。

まず構築年代の上限であるが、礫敷遺構より下位の包含層２（自然堆積土～礫２層直上）からは、出雲国府第２型式の特徴を持つ須恵器が出土している。よって、礫敷の敷設は少なくとも８世紀第２四半期以降と考えられる。

礫敷遺構に伴う出土遺物は須恵器が圧倒的に多く、時期的なまとまりがある。第92図は、形態的特徴からある程度時期のわかる須恵器をまとめ、出雲国府編年案（島根県教育委員会2013）の型式別に示した変遷図である。全体としては出雲国府第２～５型式のものが主で、第６～７型式のものも僅かに認められる。また、礫敷遺構面では須恵器片のほか、平瓦の破片も２点確認されており、いずれも出雲国分寺補修期のものである。以上より、出土遺物から推測される礫敷の構築年代は、出雲国府第３～４型式、暦年代でいえば８世紀第２四半期から８世紀末の中で捉えられる。

礫敷遺構に打設された木杭13点のAMS年代測定結果からは、「８世紀第４四半期前後の構築」という結論が導かれている（第４章第１節）。打設杭は礫敷遺構の土木工事に伴うものであり、少なくとも最初に打設された杭群は礫敷の初築に伴うものと考えてよいだろう[1]。

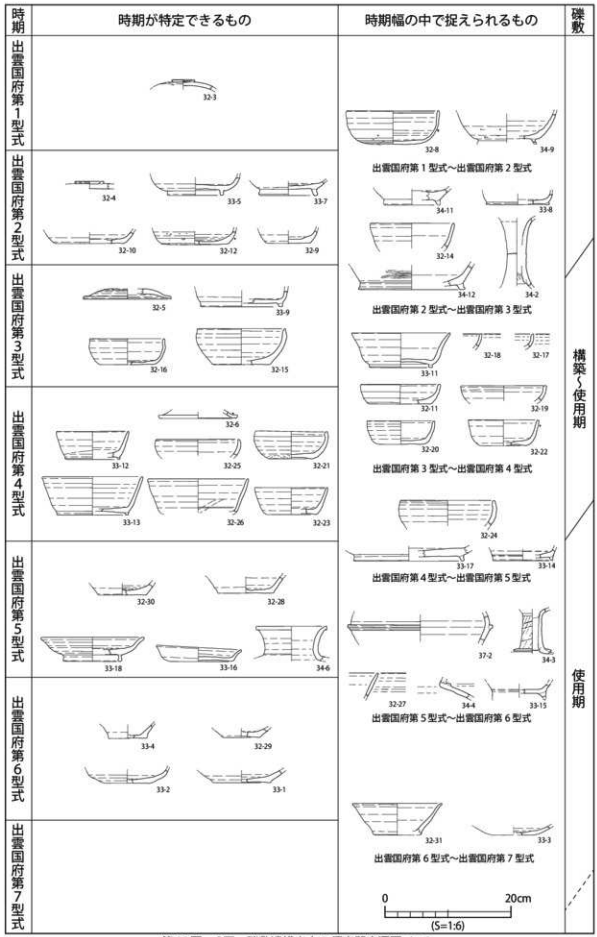
以上を総合すると、礫敷は８世紀第２四半期から８世紀末までに構築された可能性が高く、より限定すれば８世紀後半を中心とする時期が想定される。

次に廃絶時期について検討する。礫敷遺構面で認められた遺物のうち、最も新しいものは出雲国府第６～７型式の特徴を持つ須恵器であるが、数的には僅かである。大井の須恵器生産が縮小する時期であることを考慮しても、これ以降物量的・比率的に増加する土師器が見られないことは注意される[2]。このことから、礫敷は10世紀前半以降の早い段階でその機能を終え、維持管理されなくなったと考えられる[3]。礫敷遺構は全面が砂層に覆われていた状況から、環境の変化によって砂に埋没したことが廃絶の直接的要因と考える。

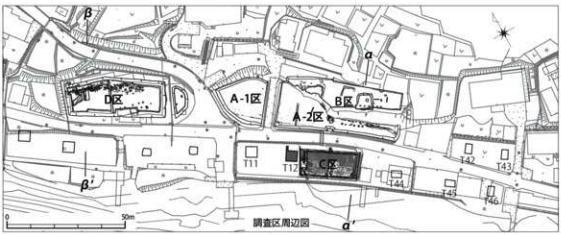
２．推定規模（第93図）

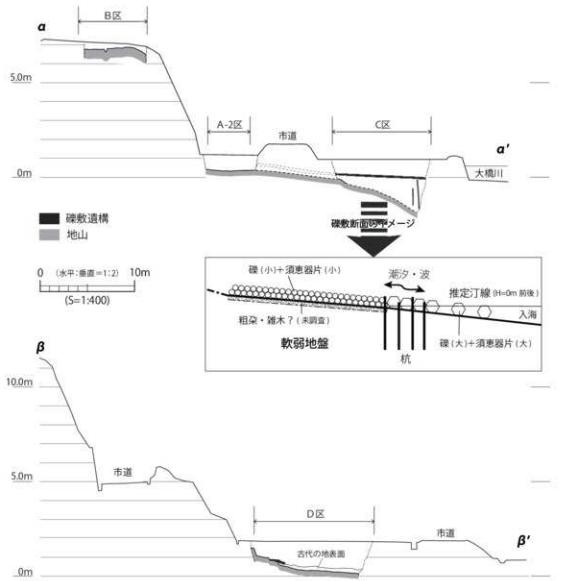
礫敷遺構は調査区外にも続いているが、その範囲は過去に実施した試掘確認調査の結果からおおよそ推測することができる（第93図）。まずC区より西側については、隣接するT12で礫層が確認されており、C区礫敷遺構と同一レベルであることから一連のものである可能性が高い。T11以西の大橋川沿岸部の試掘トレンチでは、遺構・遺物ともに確認されず自然堆積層が続くのみである。よって、礫敷遺構の西端はT11からT12の間にあるか、もしくはそこから内陸側に方向を変えている可能性がある。一方C区の東側については、T42・T43・T46で遺構・遺物が確認されなかったことから、礫敷遺構はこれより西側で終息している。今後予定されているT44・T45の試掘調査の実施によって、より具体的な規模が明らかになるだろう。

以上により、現時点で考え得る礫敷遺構の推定規模を示せば、東西長は最短31m～最長73mと予想される。南北長については検討材料が少なく今後の調査（特に現市道部分）を待つ必要があるが、本遺跡A-2区で確認された「礫１層」（18頁、第８図７層）はC区に接続する礫敷遺構の可能性がある[4]。



第92図　C区　礫敷遺構出土の須恵器変遷図（1:6）





第93図　朝酌矢田Ⅱ遺跡の南北縦断図

3．構造的特徴（第94図）

第94図は、礫敷遺構の構造を示した模式図である。主な特徴は次のとおりである。①4～5度の傾斜角をもって川側に緩やかに下降する。②調査区北半と南半で礫のサイズ・密度・色調が異なる。③標高0m付近に杭が打設される。④礫敷遺構に接する上下両層はいずれも自然堆積による砂層である。⑤調査区西端の標高約0m以南は礫の敷設が希薄である。

礫敷の性格を考える上で最も重要となるのが④の要素である。すなわち、杭の打設を除く他の土木工法や構造物（地盤改良、盛土、版築、築堤など）を伴わないことを意味する。なお、礫敷直下における基礎資材（胴木、雑木、敷葉・敷粗朶など）の存否については現時点で不明であるが、少なくとも深掘りしたトレンチ内では確認されていない。

検出した杭は60本以上あり、総じて杭頂部を礫敷遺構の高さに揃え下層に深く入り込んでいる。杭は礫の色調が変化する標高0m付近に打設されているが、その分布は西側に偏在している。年代測定した18点の試料のうち13点が西区で採取されたものであるが（88頁、第77図）、これらには全て8世紀後半を中心とする年代が与えられている（第4章第1節）。つまり、西側に集中する杭・横木には時期的なまとまりがあり、礫敷の初築年代に近いものと考えられる。

4．水域の復元（第93・94図）

礫の色調は北半で酸化色、南半で還元色を呈し、その境界は標高0m前後である。酒井哲弥氏の現地観察によって、こうした礫の諸特徴やその他の状況証拠から、奈良時代における水域の汀線が明らかとなった（第4章第2節）。すなわち、当地域沿岸部における8世紀後半段階の汀線は標高0～10cm前後であり、それ以下が水面下であった可能性が高い。

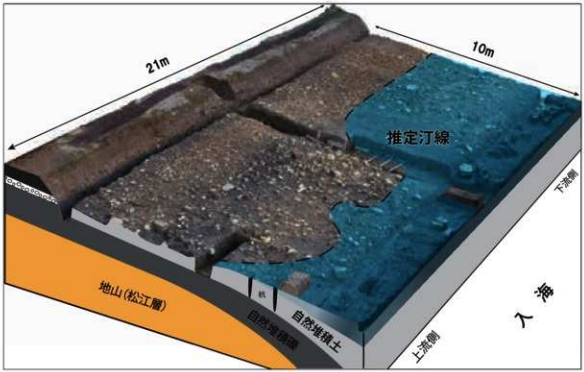
5．礫敷遺構に見られる「単位」（第95図）

古墳の墳丘盛土などと同様に、礫敷遺構にも礫の大小や密度などに一定のまとまり（＝「単位」）が認められる。例えば、小さな「単位」は一回の運搬量と相関があるだろうし、大きな「単位」は構築段階や作業時の区割りなどに関係することが予想される。

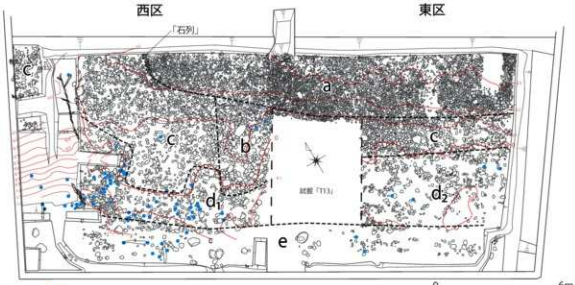
第95図は、礫や杭などの諸様相から判断される大きな「単位」を示したものである。これらの違いが意味することは、上述した当時の水域とあわせて考えることで理解可能である。まず陸地部である「a」には最も丁寧に小礫が敷かれる一方、水面下にあたる「e」には大振りの礫が無造作に投げ入れられたようなあり方を示す。その中間である「c」・「d」は、潮汐による汀線の変動域と考えられる。つまり、礫が酸化色を呈する「c」は年間を通じて陸地であることが多く（「準陸地部」と表現する）、還元色を呈する「d」は水面下にあることが多かった干出部と想定できる（「準水域」と表現する）。なお、「b」は比較的大サイズの礫が密度高く敷設された陸地部で、南側にやや張り出している。

杭は、準水域である「d」（さらにいえば「d1」）に集中する。注目したいのは、西区の「c」が南側に張り出す箇所である。ここは礫が酸化色を呈し、等高線の巡りからもわかるように若干高いが、この僅かな高まりの外縁（「コ」の字状）に杭が集中するのである。このことから、杭は水際に沿って打ち込まれたことがわかる。

礫敷遺構には、形の揃った礫が丁寧に並ぶ特徴的な箇所（＝「石列」）が見受けられる。「石列」は「a」のエリアの西端に認められ、周囲より一回り大サイズの礫が6個直線的に並び、他よりやや深く埋め



第94図　礫敷遺構の構造模式図



「単位」	礫			杭※	遺物量	標高	当時の環境
	サイズ	密度	色調				
a	小	高	酸化色	なし	最多	0.2m以上	陸地部
b	中～大	高	酸化色	僅か	多	0～0.2m	陸地部
c	小～中	中	酸化色	僅か	やや少	0～0.2m	準陸地部
d1	小～中	やや低	還元色	最多	やや多	-0.1～0m	準水域
d2	小～中	低	還元色	少	やや少	-0.1～0m	準水域
e	大	点的	還元色	少	少	-0.1m以下	水域

※本調査で確認できたもの

推定汀線

第95図　礫敷遺構に見られる「単位」

られている。これらは「a」のエリアを敷設する際の指標や作業区割りを示したものと思われ、組織的・効率的に作業がおこなわれたことを傍証する。

以上のように、礫敷の構築は当時の汀線の位置と密接に連動しており、小エリアごとの環境によってかけられた労力が異なっている。すなわち、礫敷遺構がその機能を果たす上で最も重要な空間が「a」のエリアであったと推察する。なお、調査区西端は礫が敷設されず、杭・横木が偏在し、土師器甕（56頁、第45図9）が出土するなどやや異質な状況である。他のエリアとは機能が異なる可能性がある。

6．出土遺物

礫敷遺構に伴う出土遺物には、次のような特徴がある。①圧倒的に須恵器の破片が多く、その中でも壺甕類の占める割合が高い。これに対し土師器片は僅かである。②出土位置の近い個体が接合するものの、出土量の割には完形に復元できるものはない。③須恵器片は摩滅していないことから、割れた位置から大きく動いていない。④須恵器片が礫下に入り込む状況が随所で認められる。⑤溶着したものや歪みの強いものも複数認められる。⑥墨書を伴う遺物は確認されていない。

以上の特徴から、須恵器は意図的に持ち込まれたものであり、現地で破砕の上礫と同じ扱いで投入されたと考えられる。また②や⑤・⑥などから、窯内あるいは灰原等から直接採集されたものであることは容易に想像がつく。つまり、礫敷遺構出土の須恵器は消費を経て投棄されたものではなく、生産段階で生じた廃損品を当該地まで運搬し、土木資材として利用した結果である。当遺跡の東方には須恵器生産地として知られる大井があり、こうした資材の確保には困らなかっただろう。

この他には土錘が出土していることから、『出雲国風土記』に記載されるような当時の人々の生業も垣間見える。

7．小結

護岸遺構や堤防遺構といった沿岸部の施設において、礫敷はあくまで地盤補強を目的とした基礎構造の1つであることが多い[5]。しかし、本遺構上には盛土や構造物が存在せず、堤防等の付随施設も認められない。よって、礫敷面＝使用面であった可能性が高い。また、第93図中のイメージ図に示すように、礫敷は軟弱な湿地帯であった沿岸部の土地を利用可能にする目的で敷設されたもので、浸水することを前提とした土木工事であったと考えられる。

以上から、本遺構は沿岸部の施設として合理性の高い構築物であるといえ、港津に類する機能を持っていたと想定できる。具体的には、船着き場や荷揚げ場、舟の係留場など様々な可能性が考慮されるが、舟が着岸するには底が浅い点が気がかりである。想定の域を出ないが、現段階では舟の陸揚げ施設の可能性を考えている。第95図に立ち返れば、「c」あるいは「d」のエリアに陸揚げした舟が置かれ、最も丁寧に整備された「a」は引き舟などの作業エリアとして、または人が歩行する場として機能したのではなかろうか。水上交通上の拠点にはこうした舟揚げ場が存在し、木造舟の保管やメンテナンスがおこなわれていたはずである[6]。ただし、洗掘を防ぐ粗朶沈床といった護岸施設の可能性も残るため、今は可能性の提示にとどめておきたい。

礫敷遺構は調査区外にも続いており、多くの労働力を要する土木工事であったことは想像に固くない。また、その構造は用途に見合った合理的なもので、礫の敷設作業にあたっては組織的・効率的になされていることは先述したとおりである。このことから公的性格の強さが看取され、多くの資源と

労働力を投入できた古代国家の指揮によるインフラ整備と評価できよう。

以上に加えて、礫敷遺構は『出雲国風土記』の成立からほどなくした時期の所産であること、また歴史地理学的研究の成果とも整合することから、「朝酌渡」に直接関係する施設あるいはその一帯を改修した港津施設である可能性が高い。いずれにせよ、C区周辺が水上交通の拠点として機能していたことは疑いない。

廃絶の要因としては、海水準変動によって水域が上昇し砂地化が進んだことが挙げられる。8世紀から12世紀にかけて現在より約1mほど海水面が上昇したことが知られており（ロットネスト海進）、廃絶時期の検討結果とも矛盾しない。

第3節　D区の礫敷遺構について

1．構築年代と存続期間（第96図）

第96図に示すとおり、礫敷遺構および同時期に露出していた礫層に伴う須恵器は、出雲国府第1～2型式のものが主である。このことから、礫敷は7世紀後葉から8世紀第1四半期に敷設されたものと考えられる。また、礫敷遺構面には出雲国府第4型式以降の須恵器や中世の陶磁器が認められることから、古代以降も継続的に使用されたことがうかがえる。調査区北側の丘陵法面を削平し、礫敷遺構がかかる僅かな段丘の平坦面を北側に拡張していったのだろう。

2．出土遺物

礫敷遺構に伴う出土遺物は、前述したC区の傾向と共通する。対称的なのは、摩滅して丸みを帯びた須恵器片が多い点である。これは、遺構の露出期間の長さが影響したものと思われる。また、比重の近い器種で出土位置がまとまる傾向があることから（64頁、第53図参照）、礫敷構築時の作業単位によって須恵器採集地点が若干異なる（同じ大井の中でも採集した窯や灰原が異なる）可能性がある。

木製品で特筆されるのは、表面に黒漆が塗布された刀子の柄木（69頁、第58図1）である。出土位置は礫敷遺構直下の地山面であることから、礫敷の初築年代に近いものと考えられる。同町のキコロジ遺跡では、黒漆塗りの圭頭大刀柄頭や漆液容器、漆塗り椀など古墳時代後期から10世紀初頭の漆関係遺物がまとまって出土しており、漆工がおこなわれていたことがわかっている（松江市教育委員会2011）。漆の科学分析を経ていないため断定できないが、当柄木もキコロジ遺跡周辺で製作された可能性が想定される。

3．小結

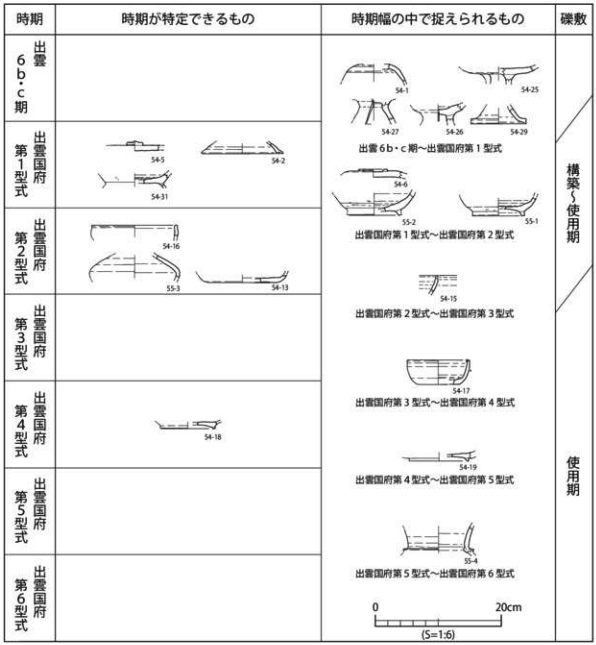
D区は北側の丘陵から伸びる尾根裾に位置し、礫敷遺構のすぐ北側は急勾配となっていたことが現地形からも容易に想像できる（第93図）。一方、南側には古代の旧地表面と思われる平坦な礫層が広がり、そのまま水域まで続いていたことが予想される。この平坦面には明確な遺構は認められず、ヨシ類の植物根の痕跡が無数に確認されている。このことから、当時はヨシ類が繁茂しており土地利用されていなかった可能性がある。

礫敷は、波食によって自然形成された段丘の斜面から頂部にかけて敷設されている。付近の丘陵から運搬した礫に須恵器片を混ぜて敷設する点はC区の礫敷と共通するが、地山を覆う程度の簡易的

なものであり、幅も狭いことから大きな労働力を伴うものではない。古代官道に見られるような、側溝や波板状凹凸面、盛土といった他の土木工法も認められない。

以上の状況から、水域と丘陵間のわずかな平坦面に手を加えることで、人が歩ける環境の維持を企図した構築物であったと想定する。本遺跡から約300m北西には「枉北道」跡を検出した魚見塚遺跡があり、南接する朝酌菖蒲谷遺跡では「枉北道」と同時期に存在した道路遺構[7]が確認されている。D区礫敷遺構はこれら道路遺構と同時期の所産であることから、少なからず縦横に人が往来するような環境にあったことが想定される。

C区礫敷遺構は平安期の海水面上昇によって廃絶したが、D区礫敷遺構は中世においても北側に拡張されながら継続的に使用されている。つまり、上昇後の水面はこれを超えるものではない。当時の人々は、環境の変化に対応する形で段丘平坦面の拡張をおこなっていったのだろう。以上の想定は、古環境の復元を目的とした自然科学分析の結果（第4章第2節）とも矛盾しない。



第96図　D区　礫敷遺構・礫層出土の須恵器変遷図（1:6）

第4節　まとめ

1．古代交通から見た朝酌矢田Ⅱ遺跡

魚見塚遺跡で検出された「枕北道」の一部とされる古代の道路遺構(SF100)は、Ⅰ期(7世紀末～8世紀中頃)、Ⅱ期(8世紀後半以降)、Ⅲ期(時期不明)の3時期に分けられ、Ⅰ期に最大推定幅4.5mあった道路がⅡ期には幅2.5mと大幅に縮小されている(松江市教育委員会2018b)。こうした状況について、報文では「8世紀後半～9世紀初頭に道路が縮小することは他の七道駅路と共通することで、隠岐国への交通もこの段階で再編された可能性」が指摘されている[8]。

朝酌地域では、8世紀後半に古代官道が縮小化する中、片や沿岸部では大規模にインフラ整備が進められる実態が明らかとなった。こうした相反する現象は、やはりこの時期に隠岐に向かう陸路・航路の再編があったことを示すものだろう。水上交通自体は古代以前から交通の一翼を担っていたと思われるが、奈良時代に入ると国家プロジェクトとして陸路の整備と拡充が図られ、陸上交通が主体となる。しかし長期的な道路の維持管理には無理があったことから、結果的に古代官道は現実的に管理可能な規模まで縮小し、利用が減じていく。そこで相対的に水上交通が活発化し、再び主要な交通手段に転じていったと考えられる。その転換期が奈良時代末の時期にあったと想定する。

中世に入ると、『出雲国風土記』に船の係留の記載のある七類浦・雲津浦などに替わり、美保関が一躍西部日本海海域の中心的な港湾に成長することが知られる。「美保関」の初出史料は宝治2(1248)年とされるが(松江市2016)、既に古代には美保関経由の水上交通が主流となりつつあり、徐々に拠点的な港湾として影響力を増していったものと思われる[9]。

2．画期の設定

朝酌矢田Ⅱ遺跡周辺の遺跡を俎上に載せ、遺跡の消長や環境変化、水陸両交通の観点から画期を設定する。

1期(古墳時代後期後半～終末期)　隠岐に至る陸上交通路が意識され始め、「枕北道」の前身にあたる原初的な主要ルートが形成されていく時期と想定される。古墳時代後期後半になると、魚見塚古墳がそれまでの前半期の墓域(西尾町周辺)からかけ離れた大橋川北岸に築かれ、これ以降、横穴式石室・石棺式石室を持つ古墳が後の「枕北道」沿線に築かれるようになる。明らかに交通網を意識した古地形態の変化であり、この頃から後の「枕北道」にあたる原道が形成されていった可能性がある。また、キコロジ遺跡ではこの頃から大規模集落が営まれていることも示唆的である。

遺跡例:朝酌矢田Ⅱ遺跡B区(1・2号墳)、手間古墳、魚見塚古墳、朝酌岩屋古墳、朝酌上神社跡古墳、旧朝酌小学校校庭古墳、旧朝酌小学校前古墳、阿弥陀寺古墳、廻原1号墳、キコロジ遺跡など。

2期(7世紀末～8世紀中頃)　「枕北道」をはじめとする陸上交通網が整備される時期である。国家主導による主要官道の敷設と同時に、これに接続する小道路など小地域単位でのインフラ整備も各地で進められたと考えられる。朝酌矢田Ⅱ遺跡D区の礫敷遺構が敷設されたのも当該期であることから、こうした画期の中で捉えられる。

遺跡例:魚見塚遺跡(道路遺構SF100-Ⅰ期)、朝酌菖蒲谷遺跡(道路遺構SF25、掘立柱建物)、朝酌橋ノ谷遺跡(掘立柱建物SB101)、朝酌矢田Ⅱ遺跡D区(礫敷遺構)、キコロジ遺跡など。

3期(8世紀後半頃)　交通体系の再編が図られ、交通主体が陸路から水上交通へと転換する時期であ

る。古代官道が縮小し衰退する一方、水上交通の拠点が整備される。なお、この頃の入海汀線は標高0～10cm前後と推定され、今より約50～60cm低い環境である。

遺跡例：魚見塚遺跡（SF100-Ⅱ期）、朝酌矢田Ⅱ遺跡C区（礫敷遺構）、キコロジ遺跡など。

4期（10世紀前半以降）　沿岸部に築かれたC区礫敷遺構が砂に埋もれ廃絶する時期である。海水面の上昇という環境変化によるもので、それまでの沿岸一帯が砂地化した可能性が高い。入海汀線は、D区11層上面である標高約50～60cmまで上昇したと考えられる。

5期（12世紀以降）　D区礫敷遺構の平坦面が北側に拡張されながら継続的に使用される。

遺跡例：朝酌矢田Ⅱ遺跡D区、若宮谷遺跡（中世後期の貝塚）など。

3．朝酌矢田Ⅱ遺跡の評価

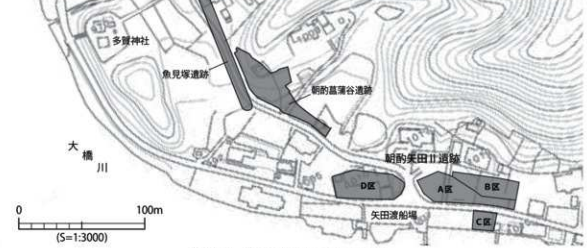
本遺跡の重要性は、次の観点から評価できよう。

①古代における土木技術や手工業生産の実態把握につながること。礫敷遺構の調査により、その構造とインフラ整備の様相が明らかとなった。また、礫敷遺構に伴う出土遺物（特に須恵器）は、消費地よりむしろ生産地としてのあり様に近い。このことから、前節2で若干言及したように、大井における窯業生産の一端を間接的に示す資料になり得る。

②特定時期における環境変動が明らかになったこと。当該地域における古代の入海汀線が判明したことは、朝酌地域にとどまらず、古代出雲の景観・環境を広域的に復元する上で貴重な成果である。

③『出雲国風土記』の記載を傍証する結果となったこと。今回発見された「朝酌渡」に直接関連する可能性の高い施設と魚見塚遺跡をあわせて考えれば、当該地は国庁から千酌駅に至る「枉北道」が入海を渡河する場所であった蓋然性が高い。文献の記述が発掘調査により確かめられた貴重な調査事例といえる。また、古代官道に伴う渡し場関連施設の調査は全国的にも前例に乏しく、意義深い[10]。

④地域の中で変遷が捉えられること（第97図）。当該地区には、古墳時代から古代にかけての遺跡が色濃く分布し、広く調査が進んでいる。今回新たに発見された遺構も、周辺遺跡とあわせて評価することができる。その上で、先述したように、地域における画期の抽出が可能である。



第97図　遺跡の位置関係図（1:3000）

朝酌矢田Ⅱ遺跡は、道路遺構が見つかった魚見塚遺跡・朝酌菖蒲谷遺跡、古代の建物跡が検出された朝酌橋ノ谷遺跡やキコロジ遺跡など、同町内で発見された遺跡群とあわせて、地域固有の歴史を構成する重要な遺跡の１つであり、その価値は極めて高いものといえる。

ただし、一部は断片的な調査にとどまるため、C区礫敷遺構下層の状況や広がり等は未だ明らかでない。朝酌矢田Ⅱ遺跡の発掘調査は調査区を分けて引き続きおこなわれるため、今回得られた情報を端緒として、遺構の具体像と古代朝酌郷の景観を明らかにしていく必要がある。

【注】

1　杭は初築時のほか、修繕や拡張あるいは別の用途で後から追加打設された場合も考えられる。実際に、自然科学分析では複数の時期に分かれる結果となり、11世紀頃まで散発的に杭の打設があったことがうかがえる。こうした状況は、出土須恵器の時期的推移および物量と連動している。すなわち、杭の年代測定結果は礫敷遺構の構築年代および使用期間を反映する蓋然性が高い。

2　本遺跡から大橋川を挟んだ南岸に位置する官道下遺跡・灘遺跡では、流路跡から古代の須恵器が多量に出土している一方、土師器はほとんど見られない（島根県教育委員会2017）。また、須恵器は７世紀後半から10世紀初頭までのものがまとまっており、壺甕類が圧倒的に多いという。こうした傾向はC区礫敷遺構と通じるところがあり、示唆に富む。

3　杭の年代の下限は10世紀末～11世紀前半であることから、遺物が示す時期とは若干開きがある。ただし全試料中１～２点のみであること、杭の少ない調査区東側に単独で分布することなどから、他の杭群とは用途が異なる可能性がある。いずれにせよ、礫敷は古代のうちに廃絶し、中世には砂層下に埋没している結論には変わりない。

4　A-２区で確認された「礫１層」のレベルは0.6～0.7mで、C区礫敷遺構の延長上にある。また、上から「礫１層」→「自然堆積砂層」→「礫２層」→「松江層」という層序もC区と同様である。さらに、それぞれの層で出土している遺物の年代もC区の状況と矛盾しない（A-２区の礫１層は一部攪乱を受けているため、中世の陶磁器が混入する）。

5　本遺構の時期に近い類例を一部挙げると、まず岡山市百間川米田遺跡では河道に沿った船曳用の可能性のある道路遺構が確認されているが、その基礎構造には礫・盛土・割木杭・敷粗朶が用いられている。同遺跡では10世紀後半の護岸遺構と堤防遺構も検出されており、ともに敷葉・敷粗朶・杭列を伴う。岐阜県可児市帷田遺跡では８世紀代の堤防遺構が確認されており、挽大の礫や直立杭・横木・雑木・盛土で構成される。そのほか、大阪府久米田池の堤には木葉、福岡県池田遺跡の堤には木片の敷設が認められるが、小山田宏一氏はこれらについて「地盤補強工法または補強盛土工法の補強材」としている（小山田2020）。やや時代を遡るが、岡山市津寺遺跡では６世紀末～７世紀代の護岸遺構が確認されており、杭列（直立杭・斜杭）のほか、盛土や横木、格子状の枝組・敷粗朶を伴う。韓国の金海市官洞里遺跡では５～６世紀の栈橋が検出されており、軟弱地盤上には梯木状に木材を敷設した後、礫で基礎固めをおこなっている。さらに、船着き場には荷運び用の道路遺構が接続する。以上の事例から、こうした資材は上位の構造物を支持するための地盤補強材としての役割が強いといえる。

6　木造舟の維持管理において、「フナクイムシ」による腐食被害は古今東西を問わず最も厄介な問題の１つだろう。その名の通り、海面に浮遊する流木や木造舟の底に巣食うことで腐食・沈没の要因となる貝の一種である。実際に、本調査区の包含層や礫敷遺構面には流れ寄せられた木片が多数認められたが、その表面には無数の孔が穿たれ、貝殻の一部が残存したものも確認された。酒井哲弥氏の調査指導によってこれらが「フナクイムシ」の生痕化石と認定されたことから、当地域周辺がその生息環境下にあったことは確実である。当然、腐食被害を回避するには舟を陸揚げして保管する必要があるため、こうした施設が存在していても不思議ではない。遺構の性格を証する直接の根拠にはなり得ないが、遺跡を取り巻く環境を示す重要な要素の１つだろう。

7　朝酌菖蒲谷遺跡で検出された道路遺構（SF25）は、魚見塚遺跡の道路遺構と直行する幅2.5mの狭小な道路である。カーブを描くことから官道の可能性は低いものの、「杜北道」の枝道のような役割を持つ可能性が指摘されている（松江市教育委員会2018b）。さらに、この道路の平坦面からは８世紀前半の須恵器小片が多量に出土しており、D区礫敷遺構に一部通じるところがある。

8　中央集権国家が主導した前期駅路に対し、８世紀終わりから９世紀初めの間に造られた後期駅路では、路線の変更や規模の縮小がおこなわれたと考えられている（近江2006）。

9　美保関町の仏谷寺が所蔵する木仏5体（重要文化財）は9世紀から10世紀後半にかけての作とみられており（美保関町1986）、本文の見解と矛盾しない。

10 令和2～3年度に発掘調査された兵庫県姫路市登り田遺跡では、溝の一部から古代の護岸施設が検出され、『播磨国風土記』飾磨郡条に登場する「美濃里麻潮（みのさとおみしお）」に関係する可能性が指摘されている（兵庫県教育委員会2020・2021）。播磨国府系瓦や墨書土器、土馬といった遺物のほか骰粗朶や杭列も検出されており、官衙的性格が強いという。時期的にも性格的にも本遺跡と近似することから注目される。

【参考文献】

近江俊秀2006『古代国家と道路』青木書店
岡山県教育委員会1995『津寺遺跡2』
岡山県教育委員会2002『百間川米田遺跡4』
小山田宏一2020「東アジアにおける原の辻遺跡船着場突堤の土木技術」『令和2年度東アジア国際シンポジウム　土を盛り、石を築く－土木・建築技術にみる東アジアの交流－』長崎県埋蔵文化財センター
三江文化財研究院2009『金海官洞里三国時代津址』
島根県教育委員会1993『八色谷古墳群』
島根県教育委員会2013『史跡出雲国府跡 -9 総括編-』
島根県教育委員会2017『官道下遺跡・灘遺跡』
島根県古代文化センター2000『出雲国風土記の研究Ⅱ 島根郡朝酌郷調査報告書』島根県教育委員会
島根県古代文化センター2004『出雲国風土記註論 島根郡・巻末条』島根県教育委員会
島根県古代文化センター2022『山陰における古代交通の研究』島根県教育委員会
兵庫県教育委員会2020『登り田遺跡発掘調査説明会資料』
兵庫県教育委員会2021『ひょうごの遺跡』103号
松江市教育委員会1978『史跡金崎古墳群』
松江市教育委員会1981『喰ヶ谷古墳群』
松江市教育委員会1990『新田遺跡・朝酌荒神谷遺跡・イガラビ遺跡・イガラビ古墳群・池ノ奥古墳群・池ノ奥C、D遺跡』
松江市教育委員会1993『上浜弓1号墳他発掘調査報告書』
松江市教育委員会1994『論田4号墳発掘調査報告書』
松江市教育委員会1999『遅倉横穴群・米坂古墳群他』
松江市教育委員会2011『キコロジ遺跡発掘調査報告書』
松江市教育委員会2018a『朝酌幡ノ谷遺跡』
松江市教育委員会2018b『魚見塚遺跡・朝酌菖蒲谷遺跡』
松江市2016『松江市史』通史編2 中世
美保関町1986『美保関町誌』上巻
八雲村教育委員会1982『増福寺古墳群発掘調査報告書』
山本清1971「小規模古墳について」『山陰古墳文化の研究』山本清先生退官記念論集刊行会

第14表　朝酌矢田Ⅱ遺跡A・B区　出土遺物観察表

土器・土製品・金属製品

挿図番号	写真図版	地区	出土地点	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調		胎土	焼成	調整・文様	時期	備考
14－1	24	A-1	黄灰色砂層	須恵器	坏		(6.0)	(1.8)	外:灰白色 内:灰白色	N8/ N8/	砂粒含まず	良好	外:回転ナデ、回転糸切り 内:回転ナデ	第4型式	
14－2	24	A-1	褐灰色粘土層	須恵器	坏		(8.0)	(2.5)	外:明青灰色 内:明青灰色	5PB7/1 5PB7/1	砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ、回転糸切り 内:回転ナデ	第3型式以降	
14－3	24	A-1	灰色粘土層	須恵器	高台付坏		(8.3)	(1.2)	外:明青灰色 内:青灰色	5PB3/1 5PB6/1	砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ、回転糸切り 内:回転ナデ、ナデ	第3～4型式	
14－4	24	A-1	黄灰色砂層	須恵器	高台付皿		(10.0)	(2.2)	外:灰色 内:灰色	N5/ N5/	気泡あり 砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:ナデ	第5型式以降	
14－5	24	A-1	褐灰色粘土層	須恵器	甕			(7.8)	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	砂粒含む	良好	外:平行タタキ 内:菊花文タタキ		
14－6	24	A-1	褐灰色粘土層	須恵器	甕			(5.4)	外:灰白色 内:灰白色	5Y8/1 5Y8/1	砂粒少量含む	軟質	外:格子目タタキ 内:横方向のカキ目		亀山系
14－7	24	A-1	黄灰色砂層	須恵器	甕			(3.5)	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	砂粒少量含む	良好	外:格子目タタキ 内:横方向のカキ目		勝間田系
14－8	24	A-2	にぶい褐色土層	須恵器	甕			(10.0)	外:黒褐色 内:灰色	7.5YR3/1 N6/	砂粒含む	良好	外:平行タタキ 内:同心円当て具痕		外:自然釉
14－9	24	A-1	黄灰色砂層	須恵器	擂鉢	(21.3)		(4.2)	外:灰白色 内:灰白色	N8/ N8/	砂粒含む	やや軟	外:回転ナデ 内:横方向のカキ目、4条の擂り目		
14－10	24	A-1		土製品	土錘	3.7	2.1	2.1	黒色	N1.5/	砂粒少量含む	良好	ナデ		重量11g
14－11	24	A-1	褐灰色粘土層	土製品	羽口	8.3		3.0	にぶい黄橙色	10YR6/3	砂粒多く含む	良好			
14－12	24	A-2	灰色粘土層	土製品	羽口				赤灰色	2.5YR4/1					溶着物付着
15－1	25	A-1	黄灰色砂層	白磁	碗		(6.2)	(2.2)	外:灰白色 内:灰白色	5Y7/ 5Y7/	白色2.5Y8/1 気泡あり	良好	内・外:施釉	碗Ⅳ類	櫛描き文様
15－2	25	A-1	黄灰色砂層	白磁	碗	(16.0)		(2.0)	外:灰白色 内:灰白色	10Y8/1 10Y8/1	白色N8/ 黒色粒子含む	良好	内・外:施釉	碗Ⅴ類	
15－3	25	A-2	黄灰色砂層	白磁	碗	(16.0)		(1.9)	外:白色 内:白色	N9/ N9/	白色N9/	良好	内・外:施釉	碗Ⅳ類	
15－4	25	A-1		磁器	広東碗			(2.0)	外:透明釉、呉須 高台内:鉄釉 内:透明釉、呉須		白色N9/	良好	ロクロ成形、染付 見込:寿文 高台脇:花繋文		肥前系
15－5	25	A-2	黄灰色砂層	白磁	碗	(16.2)		(3.1)	外:灰白色 内:灰白色	10YR8/2 10YR8/2	灰白色 10YR8/2	良好	内・外:施釉	碗Ⅳ類	
15－6	25	A-2	黄灰色砂層	白磁	碗	(16.1)		(2.3)	外:灰白色 内:灰白色	2.5Y8/2 2.5Y8/2	灰白色 2.5Y8/2	良好	内・外:施釉	碗Ⅳ類	
15－7	25	A-2	褐灰色粘土層	磁器	碗	(10.0)		(5.6)	外:透明釉 内:透明釉、呉須		灰白色N8/	良好	ロクロ成形、染付、草花文	東大Ⅵa期1750～60年代	肥前系
15－8	25	A-1	褐灰色粘土層	青磁	碗	(14.8)		(3.8)	外:明緑灰色 内:明緑灰色	7.5GY7/1 7.5GY7/1	灰白色10Y8/1	良好	外:施釉、櫛描き蓮弁文 内:施釉		
15－9	25	A-2	黄灰色砂層	青磁	皿	(10.9)		(1.5)	外:緑灰色 内:緑灰色	7.5GY6/1 7.5GY6/1	灰白色N7/	良好	内・外:施釉		
15－10	25	A-1	褐灰色粘土層	白磁	皿		(5.9)	(0.8)	外:灰白色 内:灰白色	5GY8/ 5GY8/	白色N8/ 黒色粒子含む	良好	内・外:施釉	口禿口縁Ⅸ類1c	
15－11	25	A-2	灰色粘土層	磁器	皿			(0.4)	外:透明釉、呉須 内:透明釉		白色N9/	良好	ロクロ成形、染付、銘二重角「渦福」、五弁花	18C前半代	肥前系
15－12	25	A-2	にぶい褐色土層	青花	皿		(9.6)	(1.0)	外:透明釉 内:青料、透明釉		白色N8/	良好	ロクロ成形 見込:渦状唐草文、高台畳付面取り	16C前半代	中国景徳鎮窯
15－13	25	A-1	黄灰色粘土層	陶器	皿	4.2		(3.3)	外:灰釉 内:灰釉		灰白色5Y7/1	良好	ロクロ成形、兜巾	1620～1650年代	肥前系 砂目14×4
15－14	25	A-1	褐灰色粘土層	陶器	皿		(5.4)	(1.9)	外:黄釉 内:色絵、黄釉		淡黄色 2.5Y8/3	良好	ロクロ成形、上絵付 見込:草文	幕末～明治20年代前半	口縁2×2あり
15－15	25	A-1	褐灰色粘土層	陶器	蓋	(11.2)		(1.5)	外:色絵、黄釉 内:黄釉		淡黄色 2.5Y8/3	良好	ロクロ成形、唐草文色絵(緑 茶 黄土色)、釉下彩	明治30年代後半～	布志名焼
15－16	25	A-2	にぶい褐色土層	陶器	舟徳利		(18.4)	(5.6)	外:褐釉 内:褐釉		褐色 7.5R1.7/1	良好	タタキ成形 外:カキ目か 内:青海波押え		李朝か、布目のタール状付着物
15－17	25	A-2	褐灰色粘土層	陶器	甕		(11.2)	(5.6)	外:鉄釉 内:鉄釉		明灰色5YR6/6	良好	ロクロ成形 外:回転糸切り	17C後半代	肥前系
15－18	25	A-2	灰色粘土層	陶器	擂鉢	(35.4)		(4.8)	外:明赤褐色 内:明赤褐色	2.5YR5/6 2.5YR5/6	白色粒子含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	Ⅳ期	越前焼

挿図番号	写真図版	地区	出土地点	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調		胎土	焼成	調整・文様	時期	備考
15−19	25	A-1	黄灰色砂層	陶器	擂鉢	(30.0)		(3.0)	外:褐灰色 内:褐灰色	7.5YR4/1 7.5YR4/1	白色砂粒含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	Ⅳ期	越前焼
15−20	25	A-2	黄灰色砂層	陶器	鉢	29.0		(4.2)	外:灰白色 内:灰色 灰白色	N7/ N5/ N7/	砂粒含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	Ⅱ期	東播系
15−21	25	A-2		陶器	擂鉢			(4.6)	外:灰色 内:灰色	N6/ N5/	砂粒含む	良好	外:回転ナデ、横方向のヘラケズリ 内:回転ナデ		越前焼
15−22	25	A-2	にぶい褐色土層	金属製品	耳環	幅 2.4	高さ 1.9	厚さ 0.5							重量5g
16− 1	25	A-2	礫1層	須恵器	蓋			(1.6)	外:灰白色 内:灰白色	N7/ N7/	砂粒含む	良好	外:回転ヘラケズリ後ナデ 内:ナデ	第1～2型式	輪状つまみ
16− 2	25	A-2	礫1層	須恵器	高台付坏		(10.2)	(1.8)	外:灰色 内:灰色	N5/ N6/	砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ、回転糸切り 内:回転ナデ	第4～5型式	
16− 3	25	A-1	礫1層	須恵器	高坏			(3.1)	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:ナデ		線状透かし2方向
16− 4	25	A-2	礫1層	須恵器	高坏			(3.9)	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:磨滅著しい		線状透かし(非貫通)3方向
16− 5	25	A-1	礫1層	須恵器	壺		(6.4)	(4.7)	外:灰色 内:灰色	N6/ N5/	砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ、ヘラケズリ後ナデ、回転ヘラ切り後ナデ 内:回転ナデ	出雲6b-c期～第1型式	
16− 6	25	A-1	礫1層	須恵器	不明		(9.4)	(3.7)	外:灰色 内:灰色	N6/ N7/	砂粒含む	良好	外:回転ナデ、回転糸切り後板状工具によるナデ 内:磨滅著しい		
16− 7	25	A-2	礫1層	須恵器	長頸壺	13.5		(4.6)	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	第5～6型式	
16− 8	25	A-2	礫1層	須恵器	甕			(3.5)	外:灰色 内:灰褐色	N4/ 7.5YR6/2	砂粒含む	良好	外:回転ナデ、平行タタキ 内:回転ナデ、同心円当て具痕		
16− 9	25	A-2	礫1層	須恵器	甕			(2.8)	外:灰白色 内:灰白色	N7/ N7/	砂粒少量含む	良好	外:平行タタキ、沈線4条、ナデ 内:格子目タタキ、ナデ		
16−10	25	A-2	礫1層	須恵器	甕			(10.8)	外:灰色 内:灰色	N4/ N4/	砂粒含む	良好	外:回転ナデ、ナデ、3条の櫛描き波状文 内:回転ナデ		
16−11	25	A-2	礫1層	須恵器	甕			(21.9)	外:灰白色 内:灰色	N7/ N6/	砂粒含む	良好	外:平行タタキ 内:同心円当て具痕		
16−12	25	A-2	礫1層	須恵器	甕			(3.8)	外:橙白色 内:橙白色	5YR8/4 5YR8/4	砂粒少量含む	軟質	外:格子目タタキ 内:横方向のカキ目		亀山系
16−13	25	A-1	礫1層	須恵器	甕			(4.7)	外:灰白色 内:灰白色	7.5YR8/2 7.5YR8/2	砂粒少量含む	軟質	外:格子目タタキ 内:横方向のカキ目		亀山系
16−14	25	A-2	礫1層	須恵器	甕			(6.9)	外:灰色 内:灰色	N4/ N6/	砂粒含む	良好	外:やや幅広の平行タタキ 内:同心円当て具痕、放射状タタキ		
16−15	25	A-2	礫1層	須恵器	甕			(10.9)	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	砂粒少量含む	良好	外:平行タタキ 内:同心円当て具痕		
16−16	25	A-1	礫1層	青磁	碗		(4.7)	(3.6)	外:灰オリーブ色 内:灰オリーブ色	5Y5/2 5Y5/2	浅黄橙色 10YR8/4	良好	内+外:施釉		
16−17	25	A-2	礫1層	青磁	碗	(15.9)		(3.6)	外:明オリーブ灰色 内:明オリーブ灰色	2.5GY7/1 2.5GY7/1	灰白色N7/	良好	内+外:施釉蓮弁文		
16−18	25	A-2	礫1層	青磁	碗	(17.6)		(2.9)	外:オリーブ褐色 内:オリーブ褐色	2.5Y4/3 2.5Y4/3	明赤灰色 10R7/1	良好	内+外:施釉		
17− 1	26	A-1	灰色砂層	須恵器	蓋			(1.5)	外:明青灰色 内:明青灰色	5B8/1 5B8/1	砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ、ヘラケズリ後ナデ 内:回転ナデ	出雲6b-c期	
17− 2	26	A-1	礫2層	須恵器	蓋			(1.7)	外:灰色 内:灰色	N7/ N7/	砂粒含む	良好	外:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内:回転ナデ、ナデ	第1型式	
17− 3	26	A-2	礫2層	須恵器	坏		(5.6)	(2.0)	外:灰色 内:灰色	N7/ N7/	砂粒含む	良好	外:回転ナデ、回転ヘラケズリ 回転ヘラ切り 内:回転ナデ		
17− 4	26	A-1	礫2層	須恵器	坏		(7.0)	(2.3)	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ、回転糸切り 内:回転ナデ	第2型式以降	
17− 5	26	A-1	礫2層	須恵器	高台付坏		(8.7)	(2.4)	外:青灰色 内:灰白色	5B6/1 N7/	砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ、ナデ	第1～2型式	
17− 6	26	A-1	灰色砂層	須恵器	高台付坏		(6.8)	(2.0)	外:青灰色 明青灰色 内:明青灰色	5PB5/1 5PB7/1 5PB7/1	砂粒を少量含む	良好	外:回転ナデ、ヘラケズリ後ナデ 内:回転ナデ、ナデ	第1型式	
17− 7	26	A-1	礫2層	須恵器	高台付坏		(8.8)	(2.8)	外:青灰色 内:青灰色	5B6/1 5B6/1	砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ、回転糸切り 内:回転ナデ	第2型式	
17− 8	26	A-2	礫2層	須恵器	高台付坏		(7.2)	(2.5)	外:灰色 内:灰色	N6/ N7/	砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ、回転糸切り 内:回転ナデ	第2型式	
17− 9	26	A-1	黄灰色砂層	須恵器	高台付坏		(8.8)	(1.6)	外:灰色 内:灰色	N4/ N6/	砂粒を少量含む	良好	外:回転ナデ、平行タタキ後回転ナデ 内:調整不明	第2型式	

挿図番号	写真図版	地区	出土地点	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調		胎土	焼成	調整・文様	時期	備考
17-10	26	A-1	礫2層	須恵器	高台付坏		(9.4)	(1.7)	外:明青灰色 内:青灰色	5B7/1 5B5/1	砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ,回転糸切り 内:回転ナデ	第2型式以降	
17-11	26	A-2	礫2層	須恵器	高坏			(2.5)	内外:淡赤橙色 灰色	2.5YR7/4 N6/	砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:ナデ		線状透かし(非貫通2方向か
17-12	26	A-1	灰色砂層	須恵器	高坏			(2.5)	外:青灰色 内:灰白色	5PB5/1 N7/	砂粒を含む	良好	外:回転ナデ 内:ナデ		線状透かし2方向
17-13	26	A-1	礫2層	須恵器	壺		(9.2)	(4.4)	外:灰色 内:灰色	N7/ N7/	砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ,回転糸切り後ナデ 内:回転ナデ	出雲6b-c期～第1型式	
17-14	26	A-1	礫2層	須恵器	壺			(3.7)	外:灰色 内:灰色	N7/ N7/	砂粒多く含む	良好	外:ヘラケズリ,回転ナデ 内:回転ナデ		貼付高台剥離
17-15	26	A-1	礫2層	須恵器	長頸壺			(4.7)	外:灰色 内:灰色	N7/ N7/	砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ		
17-16	26	A-1	礫2層	須恵器	甕	(16.8)		(3.5)	外:明青灰色 内:明青灰色	5PB7/1 5PB7/1	砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ		
17-17	26	A-1	礫2層	須恵器	甕	(12.9)		(4.9)	外:灰色明青灰色 内:明青灰色	N5/ 5PB7/1 5PB7/1	砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ,平行タタキ 内:回転ナデ,同心円当て具痕		
17-18	26	A-2	礫2層	須恵器	甕			(5.9)	外:灰色 内:灰色	N7/ N7/	砂粒含む	良好	外:平行タタキ 内:同心円当て具痕		
17-19	26	A-2	青灰色砂層	須恵器	甕			(4.8)	外:灰白色 内:青灰色	7.5Y7/1 5PB6/1	砂粒含む	良好	外:平行タタキ 内:同心円当て具痕,ナデ		
17-20	26	A-1	礫2層	須恵器	甕			(14.1)	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	砂粒少量含む	やや軟	外:平行タタキ 内:同心円当て具痕		
17-21	26	A-2	青灰色砂層	須恵器	甕			(9.4)	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	砂粒少量含む	良好	外:平行タタキ 内:同心円当て具痕		
17-22	26	A-2	礫2層	須恵器	甕			(17.3)	外:褐灰色 内:褐灰色	5YR5/1 5YR6/1	砂粒含む	良好	外:平行タタキ 内:同心円当て具痕		
17-23	26	A-1	礫2層	須恵器	甕			(8.7)	外:灰白色 内:灰白色	10YR8/2 10YR7/1	砂粒少量含む	やや軟	外:平行タタキ 内:同心円当て具痕		
17-24	26	A-1	礫2層	須恵器	甕			(3.3)	外:灰白色 内:明褐灰色	N7/ 5YR7/1	砂粒少量含む	良好	外:平行タタキ 内:菊花文タタキ		
17-25	26	A-1	灰色砂層	土製品	管状土錘	4.3	1.4	1.4	暗灰黄色	2.5Y5/1	砂粒含まず	良好	ナデ		重量7g
17-26	26	A-1	礫2層	弥生土器	甕	(6.7)		(2.5)	外:灰褐色 内:褐灰色	7.5YR5/2 10YR5/1	砂粒含む	良好	外:口縁部2条の凹線,ナデ 内:ナデ,ヘラケズリ	弥生中期後葉	
19-1	26	B	1号墳周溝	須恵器	長頸壺	(13.8)		(2.0)	外:赤灰色 内:赤灰色	7.5R5/1 7.5R5/1	砂粒多く含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	第2型式以降	
19-2	26	B	1号墳周溝外	須恵器	壺			(4.5)	外:灰赤色 内:赤橙色	10R4/3 10R4/3	砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ,静止糸切り後回転ナデ 内:回転ナデ	第2型式以前	自然釉付着
19-3	26	B	1号墳周溝	須恵器	甕			(4.3)	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	砂粒少量含む	良好	外:平行タタキ 内:同心円当て具痕		
19-4	26	B	1号墳周溝	須恵器	甕			(4.8)	外:灰色 内:灰色	N4/ N6/	砂粒少量含む	良好	外:平行タタキ 内:同心円当て具痕		
19-5	26	B	1号墳周溝	須恵器	甕			(5.3)	外:灰色 内:灰色	7.5Y6/1 7.5Y6/1	砂粒少量含む	良好	外:平行タタキ 内:同心円当て具痕		
19-6	26	B	1号墳	須恵器	甕			(4.5)	外:黒灰色 内:灰色	N4/ N6/	砂粒少量含む	良好	外:平行タタキ 内:同心円当て具痕		
19-7	26	B	1号墳周溝	須恵器	甕			(7.2)	外:灰色 内:灰色	7.5Y5/1 7.5Y6/1	長石少量含む	良好	外:平行タタキ 内:同心円当て具痕		
19-8	26	B	1号墳周溝	須恵器	甕		(16.0)	(53.4)	外:灰褐色 内:灰褐色	5YR6/2 5YR6/2	砂粒少量含む	良好	外:平行タタキ 内:同心円当て具痕		底部に焼台が溶着
23-1	27	B	SK01	須恵器	蓋	(2.3)			外:灰色 内:灰色	N5/ N5/	砂粒少量含む	良好	外:ヘラ切り後ナデ,回転ナデ 内:回転ナデ		
23-2	27	B	2号墳周溝	須恵器	蓋			(2.0)	外:灰色 内:灰色	10YR7/1 10YR7/1	砂粒少量含む	良好	外:ヘラ切り後ナデ,回転ナデ 内:回転ナデ		
23-3	27	B	2号墳周溝	須恵器	高台付皿		(18.6)	(1.8)	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	黒色(鉄分)粒子含む	良好	外:回転ナデ,回転糸切り後ナデ 内:回転ナデ	第4型式以降	盤か
23-4	27	B	2号墳周溝	須恵器	高台付皿		(8.4)	(2.1)	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ,回転糸切り後ナデ 内:回転ナデ	第5～6型式	
23-5	27	B	2号墳周溝	須恵器	壺		(4.6)	(4.4)	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ		
23-6	27	B	2号墳周溝	須恵器	甕か	(13.7)		(2.9)	外:褐灰色 内:褐灰色	7.5YR4/1 7.5YR4/1	砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ		高坏脚部の可能性もあり

挿図番号	写真図版	地区	出土地点	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調	胎土	焼成	調整・文様	時期	備考
23－7	27	B	2号墳周溝	須恵器	甕			(7.1)	外:黄灰色 内:黄灰色	長石含む	良好	外:平行タタキ 内:同心円当て具痕		
23－8	27	B	2号墳周溝	須恵器	甕			(6.7)	外:灰色 内:灰色	N7/ N7/	良好	外:平行タタキ 内:同心円当て具痕		
23－9	27	B	SK01	須恵器	甕			(4.5)	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	良好	外:平行タタキ 内:同心円当て具痕,回転ナデ		
23－10	27	B	2号墳周溝	土師器	甕	(22.8)		(4.7)	外:にぶい黄橙色 内:にぶい黄橙色	10YR7/4 10YR7/4	石英,長石,金雲母含む	普	全面磨滅,調整不明	
25－1	27	B	暗褐色土	須恵器	高台付坏		(8.3)	(1.8)	外:灰オリーブ色～淡黄橙色 内:灰オリーブ色	5Y6/2 7.5YR8/4 5Y6/2	砂粒少量含む	中	外:回転ナデ 回転糸切り 内:ナデ	第2型式	
25－2	27	B	暗褐色土	須恵器	高台付坏		(6.5)	(3.0)	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 回転糸切り後ナデ 内:ナデ	第3～4型式	
25－3	27	B	暗褐色土	須恵器	提瓶	(12.0)		(7.4)	外:灰色、黒灰色 内:灰色、黒灰色	N7/、N4/ N7/、N4/	砂粒多く含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	第4～5型式	
25－4	27	B	にぶい橙色土	須恵器	甕	(20.8)		(3.5)	外:暗赤灰色 内:暗赤灰色	2.5YR3/1 2.5YR3/1	砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ		
25－5	27	B	暗褐色土	土師器	高台付坏		(9.6)	(3.4)	外:橙色 内:橙色	5YR6/6 5YR6/6	砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:不明	平安後期	
25－6	27	B	褐灰色土	弥生土器	甕	(19.8)		(2.9)	外:にぶい橙色 内:にぶい橙色	5YR7/4 5YR7/4	砂粒多く含む	良好	風化が著しく調整不明		
25－7	27	B	暗褐色土	口縁	合子	(6.1)		(1.5)	外:口色 内:口色	N8/ N9/	口色N9/	良好	内・外:施釉		
25－8	27	B	褐灰色土	青花	碗	(14.2)		(3.2)	外:透明釉,右回 内:口色		白色N9/	良好	ロクロ成形,染付,花唐草文	17C末葉～18C前葉	肥前系
25－9	27	B	暗褐色土	白磁	碗	(16.1)		(4.3)	外:灰白色 内:灰白色	N8/ N8/	黒色粒子含む 灰白色N8/	良好	内・外:施釉	極IV類	
25－10	27	B	褐灰色土	青花	碗	(11.0)		(4.5)	外:透明釉,右回 内:口色	N8/	口色N9/	良好	ロクロ成形,染付,唐草文	18C中葉	肥前系
25－11	27	B	暗褐色土	白磁	皿	(9.8)		(2.5)	外:灰白色 内:灰白色	7.5Y7/1 7.5Y7/1	灰白色N8/ 微細気泡混入	良	内・外:施釉		
25－12	27	B	褐灰色土	青磁	碗		(7.0)	(2.0)	外:明オリーブ灰色 内:明オリーブ灰色	2.5GY7/1 2.5GY7/1	灰白色N8/	良好	内・外:施釉	極V類	底部:施釉

第15表　朝酌矢田Ⅱ遺跡C区　出土遺物観察表

土器・土製品

挿図番号	写真図版	地区	層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調		胎土	焼成	調整・文様	時期	備考
3－1	24	試掘T13	礫層	須恵器	高台付坏か皿		(12.4)	(2.9)	外:灰色 内:灰色	5Y6/1 5Y6/1	1mm以下白色砂粒少量含む	やや軟	外:回転ナデ,回転糸切り 内:回転ナデ,ナデ	第3型式以降	
3－2	24	試掘T13	礫層	須恵器	高台付坏か皿		(10.6)	(1.8)	外:灰色 内:灰色	N7/ N7/	微細白色砂粒含む	やや軟	外:回転ナデ,回転糸切り後ナデ 内:回転ナデ,ナデ	第2型式か	
3－3	24	試掘T13	礫層	須恵器	皿		(8.9)	(1.6)	外:灰色 内:灰色	N5/ N5/	1mm以下白色砂粒多く含む	良好	外:回転ナデ,回転糸切り後未調整 内:回転ナデ	第5型式	
3－4	24	試掘T13	礫層	須恵器	壺		(6.7)	(3.1)	外:明青灰色 内:明青灰色	5B4/5 PB7/1	1mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:回転ヘラケズリ,回転ナデ 内:回転ナデ		
3－5	24	試掘T13	礫層	須恵器	壺		(12.8)	(5.1)	外:明青灰色 内:明青灰色	5B7/5 B7/	微細砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ,回転ヘラ切り 内:回転ナデ		
3－6	24	試掘T13	礫層	須恵器	甕			(1.3)	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	1mm以下白色砂粒わずかに含む	良好	外:格子状タタキ 内:同心円当て具痕		焼台付着
3－7	24	試掘T13	礫層	須恵器	甕			(1.6)	外:灰色 内:灰色	5Y5/1 N6/	1mm以下白色砂粒わずかに含む	良好	外:格子状タタキ 内:同心円当て具痕		焼台付着
32－1	30	C-西	礫敷遺構	須恵器	蓋		(11.8)	(2.6)	外:青灰色 内:青灰色	5PB6/1 5PB6/1	1mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	出雲1期	
32－2	30	C-東	礫敷遺構	須恵器	蓋		(13.3)	(3.3)	外:暗青灰色 内:青灰色	5B4/1 5B6/1	2mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ,回転ヘラケズリ 内:回転ナデ,ナデ	出雲5期	
32－3	30	C-東	礫敷遺構	須恵器	蓋	つまみ径(3.6)		(1.6)	外:明青灰色 内:明青灰色	5PB7/ 15PB7/1	1mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ,回転ヘラケズリ 内:回転ナデ後ナデ	第1型式	ボタン状つまみ,内面にヘラ記号「一」か
32－4	30	C-西	礫敷遺構	須恵器	蓋	つまみ径4.6		(1.2)	外:灰色 内:灰色	N6/ 5Y6/1	1mm以下砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:摩滅のため調整不明	第2型式	輪状つまみ
32－5	30	C-東	礫敷遺構	須恵器	蓋	(14.0)		(1.6)	外:青灰色 内:青灰色	5B5/1 5B5/1	1mm以下砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ,回転ヘラケズリ 内:回転ナデ,ナデ	第3型式	
32－6	30	C-東	礫敷遺構	須恵器	蓋		(12.0)	(1.1)	外:青灰色 　青灰色 内:青灰色	5PB5/ 15PB6/ 15PB6/1	1mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ,回転ヘラケズリ 内:ナデ,凹線	第4型式	重ね焼きにより色調異なる
32－7	30	C-東	礫敷遺構	須恵器	坏			(1.4)	外:灰白色 内:灰白色	N7/ N7/	0.5mm以下砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	出雲3～5期	
32－8	28	C-西	礫敷遺構	須恵器	坏	(14.5)	7.0	5.3	外:明青灰色 　暗青灰色 内:明青灰色	5PB7/1 5PB3/1 5PB7/1	2mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ,回転ヘラケズリ,静止糸切り 内:回転ナデ,ナデ,沈線	第1～2型式	重ね焼きにより色調異なる
32－9	30	C-西	礫敷遺構	須恵器	坏		(7.0)	(2.0)	外:灰白色 内:灰黄色	N7/ 2.5Y7/2	0.5mm以下砂粒少量含む	不良	外:回転ナデ,静止糸切り 内:回転ナデ	第2型式	
32－10	30	C-東	礫敷遺構	須恵器	坏		(11.0)	(1.8)	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	1mm以下砂粒やや多く含む	良好	外:回転ナデ,静止糸切り 内:回転ナデ	第2型式	
32－11	28	C-西	礫敷遺構	須恵器	坏	(12.6)	(10.0)	(3.1)	外:橙色 　灰褐色 内:橙色	2.5YR6/6 7.5YR5/2 5YR6/6	1mm以下砂粒少量含む	不良	外:回転ナデ,静止糸切り 内:回転ナデ	第3～4型式	
32－12	30	C-東・西	礫敷遺構	須恵器	坏		(10.4)	(2.1)	外:橙色 　緑灰色 内:橙色	2.5YR6/6 5G6/1 2.5YR6/6	3mm以下白色砂粒少量含む	やや不良	外:回転ヘラケズリ後ナデ,静止糸切り 内:回転ナデ,ナデ	第2型式	重ね焼きにより色調異なる
32－13	30	C-東	礫敷遺構	須恵器	坏		(8.6)	(3.0)	外:灰白色 内:灰色	7.5Y7/1 5Y6/1	1mm以下砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ,ナデ,回転糸切り後未調整 内:回転ナデ,ナデ	第2～5型式	内:漆付着
32－14	30	C-東	礫敷遺構	須恵器	坏	(13.4)	()	(4.0)	外:灰白色 　にぶい橙色 内:浅黄橙色 　淡赤橙色	10YR8/2 2.5YR6/4 10YR8/4 2.5YR7/4	3mm以下砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	第2～3型式	
32－15	28	C-東	礫敷遺構	須恵器	坏	(13.8)	(8.8)	5.7	外:灰白色 内:灰白色	5Y7/1 5Y7/1	2mm以下白色砂粒多く含む	やや不良	外:回転ナデ,回転糸切り 内:回転ナデ,ナデ	第3型式	
32－16	28	C-西	礫敷遺構	須恵器	坏	(12.0)	(9.0)	4.1	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	微細砂粒微量含む	良好	外:回転ナデ,ナデ,回転糸切り後ナデ 内:回転ナデ,ナデ	第3型式	
32－17	30	C-東	礫敷遺構	須恵器	坏			(2.2)	外:灰色 内:灰色	N5/ N5/	1mm以下砂粒やや多く含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	第3～4型式	
32－18	30	C	礫敷遺構	須恵器	坏			(2.1)	外:灰色 内:灰色	5Y6/1 N6/	微細砂粒微量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	第3～4型式	
32－19	30	C-東	礫敷遺構	須恵器	坏	(13.6)		(2.5)	外:灰白色 内:灰色	7.5Y6/1 5Y6/1	0.5mm砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	第3～4型式	
32－20	28	C-西	6層・礫敷遺構	須恵器	坏	(10.6)	(8.0)	3.7	外:青灰色 内:灰色	5B5/1 N5/	1mm以下砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ,回転糸切り 内:回転ナデ,ナデ	第3～4型式	内:一部被灰
32－21	28	C-東	礫敷遺構	須恵器	坏	11.3	7.0	4.4	外:灰色 内:灰色	10Y4/1 10Y5/1	1mm以下白色砂粒微量含む	良好	外:回転ナデ,回転糸切り 内:回転ナデ	第4型式	
32－22	28	C-東	礫敷遺構	須恵器	坏	(11.0)	(7.2)	4.1	外:灰色 　灰色 内:灰白色	N6/ 5Y7/1 7.5Y7/1	1mm以下砂粒少量含む	やや不良	外:回転ナデ,回転糸切り 内:回転ナデ,ナデ	第3～4型式	重ね焼きにより色調異なる

挿図番号	写真図版	地区	層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調		胎土	焼成	調整・文様	時期	備考
32−23	30	C-東	礫敷遺構	須恵器	坏	(11.4)	(8.1)	4.3	外:浅黄橙色 内:浅黄橙色	7.5YR8/4 7.5YR8/4	微細白色砂粒少量含む	やや不良	外:回転ナデ,回転糸切り後ナデ 内:回転ナデ,ナデ	第4型式	
32−24	30	C-東	礫敷遺構	須恵器	坏	(14.8)		(4.1)	外:灰白色 内:灰色	5Y7/1 5Y6/1	0.5㎜程度砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	第4〜5型式	
32−25	30	C-西	礫敷遺構	須恵器	坏	(13.0)		(2.6)	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	0.5㎜砂粒微量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	第4型式	
32−26	30	C-東	礫敷遺構	須恵器	坏	(15.9)		(5.4)	外:青灰色 内:青灰色	5B5/1 5B5/1	2㎜以下白色砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	第4型式	
32−27	30	C-西	礫敷遺構	須恵器	坏			(3.8)	外:灰黄褐色 内:にぶい橙色	10YR8/2 7.5YR6/4	1㎜以下砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	第5〜6型式	
32−28	30	C-西	礫敷遺構	須恵器	坏		(9.0)	(2.7)	外:にぶい黄橙色 内:褐灰色	10YR7/2 10YR6/1	1㎜以下黒色砂粒多く含む	良好	外:回転ナデ,回転糸切り 内:回転ナデ	第5型式	
32−29	30	C-西	礫敷遺構	須恵器	坏		(6.0)	(1.4)	外:褐灰色 内:にぶい黄橙色	10YR6/1 10YR7/2	2㎜以下黒色砂粒中量含む	良好	外:回転ナデ,回転糸切り(摩滅) 内:回転ナデ	第6型式	
32−30	30	C-西	礫敷遺構	須恵器	坏		(7.6)	(1.9)	外:灰白色 内:灰白色	7.5Y6/1 7.5Y6/1	1㎜以下砂粒やや多く含む	良好	外:回転ナデ,回転糸切り 内:回転ナデ後ナデ	第5型式	
32−31	30	C-西	礫敷遺構	須恵器	坏	(14.2)	(7.6)	5.0	外:にぶい黄橙色 内:にぶい黄橙色	10YR7/2 10YR7/2	2㎜以下黒色砂粒多く含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	第6〜7型式	
33−1	31	C-東	礫敷遺構	須恵器	坏		(8.8)	(2.0)	外:灰白色 内:暗灰色	10YR7/1 N3/	1㎜以下黒色砂粒微量含む	良好	外:回転ナデ,回転糸切り後未調整 内:回転ナデ	第6型式	
33−2	31	C-西	礫敷遺構	須恵器	皿または坏		(7.0)	(2.2)	外:灰色 内:灰色	N6/ N5/	1㎜以下砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ,ナデ,回転糸切り後未調整 内:回転ナデ	第6型式	内:全面被灰
33−3	31	C-東	礫敷遺構	須恵器	坏		(6.0)	(1.8)	外:灰白色 内:灰白色	2.5Y8/1 2.5Y8/2	5㎜以下白色砂粒微量含む	良好	外:回転ナデ,回転糸切り後ナデ 内:回転ナデ	第6〜7型式	
33−4	31	C-西	礫敷遺構	須恵器	坏		(6.0)	(2.2)	外:灰白色 内:灰白色	2.5Y8/2 2.5Y8/2	緻密	良好	外:回転ナデ,回転糸切り後未調整 内:回転ナデ	第6型式	
33−5	31	C-東・西	礫敷遺構	須恵器	高台付坏		(8.7)	(2.0)	外:青灰色 内:明青灰色	5PB6/1 5PB7/1	1㎜以下白色砂粒微量含む	良好	外:回転ナデ,回転ヘラ切り 内:回転ナデ,ナデ	第2型式	
33−6	31	C-西	礫敷遺構	須恵器	高台付坏または皿		(10.0)	(2.1)	外:灰白色 内:灰白色	5Y7/1 5Y7/1	0.5㎜砂粒微量含む	不良	外:回転ナデ,回転糸切り 内:回転ナデ,ナデ	第2〜4型式	
33−7	31	C-西	礫敷遺構	須恵器	高台付坏		(9.4)	(2.1)	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	1㎜以下砂粒少量含む	やや不良	外:回転ナデ,回転糸切り後ナデ 内:回転ナデ,ナデ	第2型式	内:ヘラ記号「×」
33−8	31	C-東	礫敷遺構	須恵器	高台付坏		(10.0)	(1.8)	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	0.5㎜砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ,回転糸切り 内:回転ナデ,ナデ	第2〜3型式	
33−9	31	C-東	礫敷遺構	須恵器	高台付坏		(13.0)	(2.6)	外:灰白色 内:灰黄色	5Y7/2 2.5Y7/2	1㎜以下白色砂粒少量含む	やや不良	外:回転ナデ,静止糸切り 内:回転ナデ,ナデ	第3型式	
33−10	31	C-西	礫敷遺構	須恵器	高台付坏または皿		(9.2)	(1.4)	外:暗青灰色 内:暗青灰色	5B3/1 5B3/1	2㎜以下白色砂粒多く、1㎜以下黒色砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ,回転糸切り 内:回転ナデ,ナデ	第3〜5型式	
33−11	28	C-西	礫敷遺構	須恵器	高台付坏	(15.6)	(10.0)	5.5	外:灰色 内:灰色	N5/ N6/	1㎜以下白色砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ,回転糸切り後未調整 内:回転ナデ,ナデ	第3〜4型式	外:自然釉
33−12	31	C-西	礫敷遺構	須恵器	高台付坏	(11.4)	(8.2)	4.5	外:灰色 内:灰色	N5/ N6/	0.5㎜砂粒やや多く含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ,ナデ	第4型式	
33−13	29	C-東	礫敷遺構	須恵器	高台付坏	(15.8)	(11.4)	6.1	外:暗青灰色 内:暗青灰色	5B3/1 5B3/1	3㎜以下白色砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ,回転糸切り後ナデ 内:回転ナデ,ナデ	第4型式	
33−14	31	C-西	礫敷遺構	須恵器	高台付坏または皿		(9.8)	(1.8)	外:青灰色 　灰白色 内:灰白色	5B6/1 N7/ N7/	1㎜以下砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ,回転糸切り 内:回転ナデ	第4〜5型式	
33−15	31	C-西	6層・礫敷遺構	須恵器	高台付坏			(2.2)	外:褐灰色 　浅黄橙色 内:褐灰色 　浅黄橙色	10YR6/1 10YR8/3 10YR6/1 10YR8/3	1㎜以下白色砂粒微量含む	良好	外:回転ナデ,ナデ,回転糸切り(摩滅) 内:回転ナデ	第5〜6型式	
33−16	29 31	C-東	礫敷遺構	須恵器	皿	13.6	10.0	1.9〜2.6	外:灰色 内:灰色	N5/ N6/	1㎜以下白色砂粒微量含む	良好	外:回転ナデ,回転糸切り後未調整 内:回転ナデ	第5型式	
33−17	31	C-東	礫敷遺構	須恵器	高台付皿		(17.4)	(2.2)	外:灰白色 内:灰白色	N7/ N7/	微細白色砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ,回転糸切り後ナデ 内:回転ナデ後ナデ	第4〜5型式	
33−18	31	C-西	礫敷遺構	須恵器	高台付皿	(15.9)	(9.0)	(3.8)	外:暗青灰色 　青灰色 内:青灰色 　青灰色	5PB3/1 5PB6/1 5B5/1 5PB6/1	3㎜程度白色砂粒微量、1㎜以下白色砂粒多く含む	良好	外:回転ナデ,回転糸切り後未調整 内:回転ナデ,ナデ	第5型式	内底部のみ平滑
33−19	32	C-西	礫敷遺構	須恵器	高坏	(24.0)		(5.3)	外:灰色 内:灰白色	N6/ 5Y7/1	1㎜程度白色砂粒含む	良好	外:回転ナデ,ケズリ,坏部静止糸切り後ナデ 内:回転ナデ		線状透かし3方向
33−20	31	C-東	礫敷遺構	須恵器	高坏か		(11.1)	(2.3)	外:明青灰色 内:青灰色	5PB7/ 15PB6/1	1㎜以下白色砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ		
33−21	31	C-東	礫敷遺構	須恵器	高坏か		(15.2)	(1.9)	外:青灰色 内:青灰色	5PB6/ 15PB6/1	3㎜以下白色砂粒多く含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ		

挿図番号	写真図版	地区	層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調		胎土	焼成	調整・文様	時期	備考
33－22	31	C-西	礫敷遺構	須恵器	高坏		(19.8)	(2.1)	外:青灰色 内:青灰色	5B5/1 5B6/1	2mm以下砂粒 多く含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ		
34－1	32	C-西	礫敷遺構	須恵器	長頸壺			(6.1)	外:青灰色 灰白色 内:青灰色 明青灰色	5B5/1 7.5Y8/1 5B5/1 5PB7/1	1mm以下白色 砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ、ナデ(ヘラ状工具)、沈線2条、絞り目 内:回転ナデ、ナデ	第1～3型式	
34－2	29 32	C-東	礫敷遺構	須恵器	長頸壺			(10.9)	外:灰色 内:灰白色	N4/ N5/	1mm以下白色 砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ、沈線1条、絞り目 内:回転ナデ、絞り目	第2～3型式	
34－3	29 32	C-西	礫敷遺構	須恵器	長頸壺			(7.2)	外:灰白色 内:灰白色	N7/ N7/	1mm以下白色 砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ、絞り目、突帯 内:回転ナデ、絞り目	第5～6型式	
34－4	32	C-東	礫敷遺構	須恵器	長頸壺			(2.9)	外:灰白色 内:青灰色	N8/5 PB6/1	1mm以下白色 砂粒微量含む	良好	外:回転ナデ、突帯 内:回転ナデ	第5～6型式	外:自然釉
34－5	32	C-西	礫敷遺構	須恵器	長頸壺			(4.9)	外:青灰色 内:青灰色	5B6/1 5B5/1	1mm以下白色 砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ、沈線1条以上 内:回転ナデ、ナデ		
34－6	32	C-東	礫敷遺構	須恵器	長頸壺	(11.0)		(5.9)	外:暗青灰色 内:青灰色	5PB4/1 5PB5/1	1mm以下白色 砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	第5型式	
34－7	32	C-西	礫敷遺構	須恵器	壺		8.4	(2.7)	外:灰色 灰白色 内:灰白色	N5/ N7/ 10YR7/1	微細白色砂粒 少量含む	良好	外:回転ナデ、回転ヘラ切り 内:回転ナデ	出雲6b・c期～第1型式	
34－8	33	C-西	礫敷遺構	須恵器	壺		(11.6)	(3.1)	外:暗青灰色 内:青灰色 浅黄色	5PB4/ 15PB5/1 2.5Y8/4	2mm以下白色 砂粒少量含む	やや不良	外:回転ナデ、回転ヘラ切り 内:回転ナデ	第2～3型式	
34－9	33	C-東	礫敷遺構	須恵器	壺			(4.6)	外:灰色 内:青灰色	N4/ 5PB6/1	2mm以下白色 砂粒少量含む	良好	外:回転ヘラケズリ、回転ナデ、切り離し技法不明 内:回転ナデ	第1～2型式	
34－10	33	C-東	礫敷遺構	須恵器	壺		(8.7)	(3.4)	外:青灰色 内:青灰色	5PB6/1 5PB6/1	2mm以下白色 砂粒少量含む	やや不良	外:回転ヘラケズリ後ナデ、回転ナデ、回転糸切り 内:ナデ、回転ナデ	第2～3型式	
34－11	33	C-東	礫敷遺構	須恵器	壺		(8.9)	(2.6)	外:青灰色 内:青灰色 暗灰色	5PB5/1 5PB5/1 N3/	微細白色砂粒 多く含む	やや不良	外:回転ナデ、回転糸切り 内:回転ナデ	第2～3型式	
34－12	33	C-東	礫敷遺構	須恵器	壺		(17.0)	(3.9)	外:灰白色 暗灰色 内:にぶい黄橙色 暗灰色	10YR8/1 N3/1 10YR7/3 N3/1	1mm以下白色 砂粒多く含む	やや不良	外:ナデ(櫛状工具)、回転ナデ、回転糸切り 内:回転ナデ、ナデ	第2～3型式	
34－13	33	C-西	礫敷遺構	須恵器	壺		(9.2)	(2.5)	外:青灰色 内:青灰色	5PB6/1 5PB6/1	1mm以下白色 砂粒少量含む	良好	外:回転ヘラケズリ後ナデ、回転ナデ、回転糸切り 内:ナデ、回転ナデ	第3～5型式	
34－14	33	C-東	礫敷遺構	須恵器	壺		(9.6)	(3.5)	外:灰白色 内:灰白色	N7/ N7/	1mm以下白色 砂粒少量含む	良好	外:回転ヘラケズリ、回転糸切り 内:回転ナデ	第2～4型式	
34－15	29	C-東	礫敷遺構	須恵器	壺		9.8	(8.0)	外:青灰色 暗緑灰色 内:紫灰色	5PB6/1 5G3/1 5P6/1	2mm以下白色 砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ後ナデ、回転糸切り 内:回転ナデ	第2～3型式か	
34－16	33	C-西	礫敷遺構	須恵器	壺		(10.3)	(3.2)	外:青灰色 内:暗青灰色	5B5/1 5B4/1	3mm以下砂粒 多く含む	良好	外:回転ヘラケズリ、回転ナデ、回転糸切り 内:回転ナデ	第2～4型式	
34－17	33	C-東	礫敷遺構	須恵器	壺		(8.9)	(5.4)	外:暗青灰色 青灰色 内:灰白色	5PB3/1 5PB6/1 5Y8/2	2mm以下白色 砂粒多く含む	やや不良	外:回転ナデ、回転糸切り後未調整 内:回転ナデ、ほか調整不明	第2型式以降	内:摩滅著しい
34－18	33	C-西	礫敷遺構	須恵器	壺		(8.5)	(7.4)	外:青灰色、灰色 内:灰白色、灰色	5B6/1、N4/1 10YR7/1、N4/1	4mm以下白色 砂粒少量含む	良好	外:回転ヘラケズリ、回転ナデ後一部ナデ、ナデ(板状工具) 内:回転ナデ	第2型式以降	
35－1	33	C-西	礫敷遺構	須恵器	甕	(48.0)		(10.8)	外:黒褐色 内:黒褐色	10YR3/1 10YR3/1	3mm以下砂粒 少量含む	良好	外:回転ナデ、沈線2条、間に波状文4条(櫛状工具)3段 内:回転ナデ		
35－2	33	C-東	礫敷遺構	須恵器	甕			13.1	外:灰色 内:灰白色	5Y6/1 2.5Y7/1	1.5mm以下砂粒 多く含む	良好	外:回転ナデ、波状文、沈線2条以上 内:回転ナデ、ナデ、同心円当て具痕		内:自然釉
35－3	34	C-東	礫敷遺構	須恵器	甕			(10.3)	外:青灰色 内:青灰色	5PB5/1 5PB5/1	3mm以下白色 砂粒多く含む	良好	外:回転ナデ、波状文4条 内:回転ナデ		
35－4	33	C-西	礫敷遺構	須恵器	甕			(5.5)	外:灰色 内:灰色	N7/ N4/	1mm以下白色 砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ、波状文2条、沈線 内:回転ナデ		
35－5	34	C-東	礫敷遺構	須恵器	甕			(3.3)	外:暗青灰色 内:灰色	5PB4/1 N6/	2mm以下砂礫 少量含む	良好	外:回転ナデ、波状文4条、沈線 内:回転ナデ		
35－6	33	C-西	礫敷遺構	須恵器	甕			(5.1)	外:暗青灰色 内:暗青灰色	5PB4/1 5PB4/1	2mm以下白色 砂粒多く含む	良好	外:回転ナデ、波状文4条、沈線 内:回転ナデ		
35－7	34	C-西	礫敷遺構	須恵器	甕			(5.4)	外:暗青灰色 内:青灰色	5B5/1 5B5/1	2mm以下白色 砂粒多く含む	良好	外:回転ナデ、波状文5条、沈線 内:回転ナデ		
35－8	34	C-西	礫敷遺構	須恵器	甕			(6.2)	外:暗青灰色 内:灰色	5PB4/1 N6/	3mm以下砂礫 多く含む	良好	外:回転ナデ、波状文5条、沈線 内:回転ナデ		
35－9	34	C-東	礫敷遺構	須恵器	甕			(4.0)	外:暗青灰色 内:暗灰色	5PB4/1 N3/	6mm以下砂礫 少量含む	良好	外:回転ナデ、波状文5条、沈線 内:回転ナデ		内:自然釉
35－10	34	C-西	礫敷遺構	須恵器	甕			(1.5)	外:明青灰色 灰白色(溶着片) 内:明青灰色 灰白色(溶着片)	5PB7/1 N8/ 5PB7/1 N8/	微細白色砂粒 多く含む	良好	外:格子目タタキ 内:同心円当て具痕、同心円当て具痕(溶着片)		別個体(焼台)が溶着
36－1	34	C-西	礫敷遺構	須恵器	甕			(19.1)	外:灰色 内:灰白色	7.5Y5/1 7.5Y7/1	1mm以下砂粒 やや多く含む	良好	外:平行タタキ後ナデ 内:同心円当て具痕		

挿図番号	写真図版	地区	層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調		胎土	焼成	調整・文様	時期	備考
36−2	35	C-西	礫敷遺構	須恵器	甕		(11.0)	(4.6)	外:灰色 内:青灰色	7.5Y6/1 5B6/1	1mm以下砂粒多く含む、2mm程度白色砂粒含む	良好	外:平行タタキ、カキ目(一部) 内:同心円当て具痕、ナデ		
36−3	35	C-東	礫敷遺構	須恵器	甕			(15.0)	外:明青灰色 内:明青灰色	5PB7/1 5PB7/1	1mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:平行タタキ 内:同心円当て具痕		
36−4	35	C-西	礫敷遺構	須恵器	甕			16.7	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	1mm以下砂粒やや多く含む	良好	外:平行タタキ 内:同心円当て具痕		
37−1	35	C-西	礫敷遺構	須恵器	壺または甕			(7.7)	外:灰色 内:青灰色	N7/5 B6/1	微細白色砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ、ナデ		横瓶の可能性もあり 内底部平滑
37−2	35	C-東	礫敷遺構	須恵器	平瓶			(4.3)	外:灰色 内:灰色	N7/ N7/	1mm以下砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ、突帯 内:回転ナデ	第5～6型式	
37−3	36	C-東	礫敷遺構	須恵器	甕			(9.0)	外:明青灰色 内:青灰色	5PB7/1 5PB6/1	3mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:平行タタキ後カキ目 内:同心円当て具痕		横瓶の可能性もあり
37−4	35	C-東	礫敷遺構	須恵器	横瓶			(6.7)	外:青灰色 内:青灰色	5PB5/1 5PB5/1	1mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:平行タタキ後カキ目 内:同心円当て具痕、ナデ		
37−5	36	C-東・西	礫敷遺構	須恵器	横瓶	(12.0)		(8.0)	外:青灰色 内:青灰色	5B6/1 5B6/1	1mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:平行タタキ後カキ目、回転ナデ 内:同心円当て具痕、ナデ	出雲6b期～第2型式	
37−6	35	C-東	礫敷遺構	須恵器	鉢			(2.1)	外:青灰色 内:灰色	5B6/1 N6/	0.5mm以下砂粒多く含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	第2～5型式	
38−1	36	C-東	礫敷遺構	土師器	甕			(4.5)	外:にぶい橙色 内:にぶい橙色	7.5YR6/4 5Y7/3	1mm以下白色砂粒、石英、黒雲母多く含む	良好	外:磨滅のため調整不明 内:磨滅のため調整不明	古墳前期前葉	
38−2	36	C-西	礫敷遺構	土師器	甕	23.4		(4.7)	外:黒色 内:暗黄灰色	N2/ 2.5Y4/2	1mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:ヨコナデ後ナデ 内:ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ	8C代	外:全面煤付着
38−3	36	C-西	礫敷遺構	土製品	管状土錘	6.1	2.3	2.2	黄灰色	2.5Y6/1	緻密	良	ナデ		孔径0.7cm重量26.3g
38−4	36	C-西	礫敷遺構	土製品	土馬				灰色	7.5Y6/1	須恵質、3mm以下白色砂粒少量含む	良	ナデ、刺突		脚部貼付
38−5	36	C-西	礫敷遺構	瓦	平瓦			2.0	凹面:灰白色 凸面:灰白色	2.5Y7/12 .5Y7/1	2mm以下白色、黒色砂粒多く含む	良	凹面:布目圧痕 凸面:出雲国府分類格子タタキ8	8C後葉	2次焼成受ける
38−6	36	C-東	礫敷遺構	瓦	平瓦			1.7	凹面:灰黄色 凸面:黄灰色	2.5Y6/2 2.5Y6/1	2mm以下白色、黒色砂粒多く含む	良	凹面:布目圧痕 凸面:出雲国府分類格子タタキ8	8C後葉	
40−1	37	C-西	排水溝中	須恵器	蓋			(2.8)	外:灰色 内:灰色	N6/ N7/	0.5mm程度砂粒微量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	出雲1期	
40−2	37	C-東	3層	須恵器	蓋	つまみ径(5.3)		(1.8)	外:明青灰色 内:明青灰色	5PB6/1 5PB6/1	1mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内:ナデ	第1～2型式	輪状つまみ
40−3	37	C-東	3層	須恵器	坏		(7.8)	(3.6)	外:灰色 内:青灰色	N6/ 5PB5/1	2mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	第3～4型式	
40−4	37	C-東	2層	須恵器	坏			(3.0)	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	1mm砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	第2型式	
40−5	37	C-西	6層	須恵器	坏		(9.0)	(2.1)	外:暗青灰色 　灰白色 内:灰色	5B3/1 10YR7/1 N6/	2mm以下砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ、静止糸切り 内:回転ナデ、ナデ	第2型式	重ね焼きにより色調異なる
40−6	37	C-西	6層	須恵器	坏		(9.2)	(3.5)	外:青灰色 　暗青灰色 内:灰色	5B6/1 5B4/1 N6/	3mm以下砂粒やや多く含む	良好	外:回転ナデ、回転糸切り後ナデ 内:回転ナデ、ナデ	第3～5型式	重ね焼きにより色調異なる
40−7	37	C-西	2層	須恵器	坏		(6.2)	(1.7)	外:淡黄色 内:淡黄色	2.5Y8/3 2.5Y8/3	1mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ、回転糸切り後未調整 内:回転ナデ	第6型式	皿の可能性もあり
40−8	37	C-西	6層	須恵器	高台付坏		(8.8)	(2.7)	外:青灰色 内:灰白色	5PB5/1 N7/	1mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ、回転ヘラ切り 内:回転ナデ、ナデ	第2型式	
40−9	37	C-東	6層	須恵器	高台付坏または皿		(7.2)	(1.3)	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	0.5～3mm砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ、回転糸切り後未調整 内:ナデ	第4～6型式	
40−10	37	C-西	1層	須恵器	高台付坏	(16.8)	(11.0)	(6.0)	外:暗青灰色 内:暗青灰色	5B4/1 5B4/1	2mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ、回転糸切り後未調整 内:回転ナデ、ナデ	第5型式	
40−11	37	C-西	排水溝中	須恵器	高台付坏または皿		(7.8)	(1.3)	外:青灰色 内:青灰色	5B6/1 5B6/1	1mm以下黒色砂粒少量と白色砂粒多く含む	良好	外:回転ナデ、回転糸切り 内:回転ナデ、ナデ	第3～5型式	
40−12	37	C-東	2層	須恵器	高台付皿		(9.2)	(1.6)	外:灰白色 内:灰白色	N7/ N7/	微細白色砂粒微量含む	良好	外:回転ナデ、回転糸切り後ナデ 内:回転ナデ、ナデ	第4型式以降	
40−13	37	C-東	6層	須恵器	高坏		(13.3)	(1.6)	外:明青灰色 内:明青灰色	5PB7/1 5PB7/1	1mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ		
40−14	37	C-東	6層	須恵器	高坏		18.5	(3.4)	外:青黒色 内:灰色	5B2/ N4/	1mm以下白色砂粒多く含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ		外:自然釉
40−15	37	C-東	3層	須恵器	長頸壺			(4.8)	外:青灰色 内:青灰色	5PB6/1 5PB5/1	2mm以下白色砂粒多く含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ		
40−16	37	C	排土	須恵器	長頸壺	(12.0)		(6.1)	外:暗青灰色 　灰白色 内:青灰色 　灰白色	5PB4/1 5Y8/2 5PB5/1 5Y8/2	2mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	第5型式	頸部内面、肩部外面に降灰

挿図番号	写真図版	地区	層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調		胎土	焼成	調整・文様	時期	備考
40－17	37	C-東	3層	須恵器	坏		9.2	(2.6)	外:灰色 内:褐灰色	N5/ 10YR5/1	1mm以下白色砂粒微量含む	良好	外:回転ナデ,回転糸切り 内:回転ナデ	第2～3型式	外:被灰
41－1	38	C-東	試掘T13埋土	須恵器	鉢	(40.4)	22.5	22.5	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	0.5～2mm砂粒多く含む	良好	外:回転ナデ,凹線2条,平行タタキ 内:回転ナデ,同心円当て具痕をケズリ・ナデで消す		鉢状
41－2	39	C-東	3層	須恵器	鉢			(5.0)	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	微細白色砂粒わずかに含む	良好	外:格子目タタキ後一部回転ナデ 内:同心円当て具痕後回転ナデ,口縁部:回転ナデ		鉢状
41－3	39	C-東	2層	弥生土器	甕	(20.4)		(4.2)	外:橙色 内:橙色	7.5YR6/8 7.5YR6/8	2mm以下白色砂粒多く含む	良好	外:摩滅のため調整不明 内:摩滅のため調整不明	弥生中期中葉	
41－4	39	C-東	排水溝中	弥生土器	甕	(21.4)		(4.0)	外:明黄褐色 内:明黄褐色	10YR6/6 10YR6/6	1mm以下砂粒多く含む	良好	外:擬凹線3条,ヨコナデ 内:ヨコナデ,ナデ,ヘラケズリ	弥生後期前葉	
41－5	39	C	6層	土師器	甕	(14.0)		(4.6)	外:浅黄橙色 内:浅黄橙色	7.5YR8/3 7.5YR8/3	1mm以下砂粒多く含む	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ,ナデ,ヘラケズリ	古墳前期前葉	
41－6	39	C-東	3層	土師器	高坏			(3.8)	外:にぶい橙色 内:にぶい橙色	7.5YR7/3 7.5YR7/4	0.5mm以下砂粒多く含む	良好	外:摩滅のため調整不明 内:摩滅のため調整不明	古墳前期前葉か	
41－7	39	C	排土	土製品	管状土錘	5.9	1.1	1.1	にぶい橙色	7.5YR7/4	砂粒ほとんど含まない	良好	ナデ		孔径0.4cm重量7.1g
41－9	39	C	6層	青磁	碗		(5.8)	(2.3)	青磁釉		灰白色		外:方形蓮弁文 内:圏線	15C中葉	龍泉窯系
41－10	39	C-東	2層	青磁	碗		(5.4)	(2.8)	青磁釉		灰褐色		内:花文か	15～16C	龍泉窯系
41－11	39	C-西	2層	磁器	丸形碗		(4.4)	(2.1)	呉須,透明釉		白色		外:蓮華唐草文	1770～1820年	肥前系
41－12	39	C-西	2層	磁器	筒形碗	(10.4)		(4.0)	呉須,透明釉		淡褐色		外:雷文,山水文	1610年～1630年代	肥前系
41－13	39	C-東	2層	朝鮮白磁	皿		5.2	(2.1)	透明釉		灰色		内:砂目×5	16C後半～17C前葉	
41－14	39	C-西	2層	磁器	皿(丸形)		(5.6)	(1.4)	呉須,透明釉		灰色		外:圏線 内:蓮華唐草文、二重圏線,五弁花高台 内銘:二重角「渦福」	1730～40年代	肥前系
41－15	39	C	表土	磁器	箱形水滴	(9.2)×(6.0)		(2.1)	呉須,透明釉		白色		外:菊花文	18C後半～19C前半代	肥前系
41－16	39	C	2層	磁器	瓶(面取徳利)			(4.0)	青磁釉		灰白色			1610～1630年代	肥前系
41－17	39	C-東	3層	磁器	瓢箪形瓶(徳利)		(6.6)	(5.3)	呉須,透明釉		灰色		外:圏線,草花文か	1650～1690年代	肥前系
44－1	40	C-東	9層	須恵器	甕			(34.0)	外:青黒色 内:暗青灰色	5B2/1 5PB3/1	4mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:平行タタキ 内:同心円当て具痕		歪みで変形
44－2	40	C-東	12層直上	須恵器	甕			(26.5)	外:灰色 内:灰色	N5/ N6/	1mm以下砂粒少量含む	良好	外:平行タタキ後ナデ 内:同心円当て具痕		
44－3	40	C	12層直上	須恵器	甕			(3.9)	外:青灰色 内:青灰色	5PB6/1 5PB6/1	1mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:平行タタキ 内:同心円当て具痕		
45－1	29	C-西	9層	須恵器	長頸壺		9.6	(11.0)	外:灰色 内:灰色	5Y4/1 7.5Y4/1	2mm以下白色、黒色砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ,回転ヘラ切り後ナデ 内:回転ナデ	第1～2型式	外:被灰
45－2	29	C-西	6層 12層直上	須恵器	長頸壺		(8.4)	(8.4)	外:青灰色 内:青灰色	5PB5/1 5PB5/1	1mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ後一部ナデ,回転糸切り 内:回転ナデ後ナデ	第2型式	
45－3	40	C-西	12層直上	弥生土器	甕			(7.3)	外:にぶい黄橙色 内:灰褐色	10YR7/2 7.5YR6/2	2mm前後砂粒多く含む	良好	外:ヨコナデ,ハケメ 内:ナデか	弥生前期	
45－4	40	C-西	12層直上	弥生土器	甕			(8.3)	外:黄灰色 内:オリーブ褐色	2.5Y4/1 2.5Y4/3	2mm以下砂粒多く含む	良好	外:ナデ,列点文,ハケメ 内:ヘラケズリ	弥生中期末～後期初頭	
45－5	40	C	12層直上	弥生土器	壺か			(7.2)	外:灰白色 内:灰色	7.5Y7/1 2.5Y7/1	1mm程度砂粒多く含む	良好	外:ナデ,ハケメ(一部ナデ消し) 内:ケズリ	弥生後期前葉	
45－6	40	C-西	12層直上	弥生土器	甕	(15.1)		(4.0)	外:淡黄色 内:灰色	5Y8/3 5Y4/1	1mm以下白色砂粒多く含む	良好	外:凹線文,ヨコナデ,列点文 内:ヨコナデ,ヘラケズリ	弥生後期前葉	
45－7	40	C-西	12層直上	弥生土器	壺または甕			(3.3)	外:灰白色 内:暗灰色	10YR8/2 N3/	2mm以下砂粒多く含む	良好	外:ナデ,ヘラ描直線文 内:ナデ	弥生前期後半	
45－9	29	C-西	9層	土師器	甕	18.5～19.5		(9.4)	外:浅黄橙色 　灰白色 内:浅黄橙色 　灰白色	10YR8/3 N8/ 10YR8/3 N8/	2mm以下砂粒少量含む	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ,ヘラケズリ	7C代	

石器・骨角器

挿図番号	写真図版	地区	層位	器種	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
38－7	37	C-東	礫敷遺構	石核か	黒曜石	7.5	8.8	3.3	221.29	
38－8	37	C-東	礫敷遺構	剥片	黒曜石	6.1	5.3	1.9	54.48	二次加工あり
38－9	-	C-東	礫敷遺構	剥片	水晶	2.1	2.0	0.6	2.61	加工痕あり
38－10	37	C-東	礫敷遺構	石鏃	頁岩か	2.8	1.8	0.3	1.6	欠損後も再成形
41－8	39	C	6層	砥石	砂岩	3.8	2.6	1.5	10.78	三面使用　一面に線状使用痕
45－8	40	C-西	12層直上	弓筈か	骨角器	高さ 2.5	端部 2.5	底径 1.4	3.0	孔径0.8cm×0.7cm,深1.5cm，極めて平滑,断面は鋭利な刃物で加工か

木製品

掲載番号	写真図版	地区	層位	種別/品目	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	径(cm)	その他の寸法(cm)	木取り	備考
39－1	41	C ベルト-1	縄紋遺構	杭	128.2			7.5×7.4		芯持材	樹皮残存
39－2	41	C ベルト-1	縄紋遺構	杭	106.6			7.7×7.9		芯持材	先端部欠内、樹皮残存
39－3	41	C ベルト-1	縄紋遺構	杭	94.4			6.8		芯持材	先端部加工、ﾁｯﾌﾟ状使用痕 建築部材を転用か
39－4	41	C 西	縄紋遺構	板木または杭 部材から転用か	74.4			8.8×6.5		芯持材	先端部加工、建築部材を転用か
39－5	41	C 東	縄紋遺構	板状木製品 部材または杭か		2.5	0.4		孔径:0.2		穿孔.2
39－6	41	C 東	縄紋遺構	箸	(9.6)	0.5	0.3～0.5				やや偏平
42－1	42	C 西	6層	調印下駄(台)	21.6	8.1	2.5			板目	敲打痕有、歯2枚
42－2	42	C 西	2層	漆皿	1.1倍 (11.0)	部高:3.0	底径 (5.0)			板目	内外:黒漆後赤漆
42－3	42	C 西	2層	漆皿	1.1倍 (14.0)					板目	内外:赤漆 外:黒漆
42－4	42	C 東	2層	皿または板							外:黒漆 内:赤漆
42－5	42	C 東	2層	漆椀			底径 (5.4)				外:黒漆(底部赤ひ) 内:赤漆
42－6	42	C 東	2層	曲物底板か			0.5	修0.0	目釘径:0.1前		目釘4
42－7	42	C 東	2層	用途不明・板状木製品	6.0	8.1	6.5		目釘孔径:0.1	板目	目釘孔.1、一部黒色に変色
42－8	43	C 東	2層	曲物 蓋または桶の底板	31.8	(5.0)	1.4		釘孔径:0.5～0.6 目釘孔径:0.2～0.3		釘孔3.,目釘孔2 底板と思われるものから転用か
42－9	43	C 東	2層	箸	18.7	0.6	0.4				
42－10	43	C 東	6層	用途不明・柾状木製品	22.5	2.5	1.5		釘孔径:0.2		釘孔.1
42－11	43	C 東	2層	用途不明・板状木製品	24.9	2.7	0.6		孔径:0.2	straight	穿孔.4
42－12	43	C 西	2層	用途不明・板状木製品	(25.5)	10.3	1.4			straight	
42－13	42	C 東	排水溝中	板状木製品	7.4	6.2	1.2		孔径:0.4	板目	穿孔.1　焼き印文字判読不能、箆札か
42－14	42	C 東	排水溝中	用途不明・柾状木製品	12.3	2.8	1.5		孔径:1.2 釘孔径:0.3		孔.1　釘孔.2
42－15	42	C 東	2層	用途不明・柾状木製品	(18.4)	2.6	2.2			板目	
42－16	42	C 西	2層	用途不明・柾状木製品 部材の一部	15.6	1.9	1.4		孔径:3.0		ホゾか
43－1	43	C 西	2層	用途不明木製品 部材か	27.0	(7.4)	3.5		孔径:7.8	straight	ホゾ孔か
43－2	43	C 東	3層	板状木製品 部材か	21.0	5.2	2.6～2.7		孔径:0.5	板目	穿孔.1　ホゾ端部付近に当たり痕
43－3	43	C 東	2層	用途不明・板状木製品	17.3	2.2	0.6		孔径:0.2 目釘径:0.15	straight	穿孔.1　目釘.1 曲物の底板と思われるものから転用か
43－4	43	C 東	6層	杭	(40.9)	5.7	5.5			芯持材	先端部加工
46－1	44	C 東	9層	板状木製品 建築部材か	(13.4)	11.6	2.6			straight	一方の端部を刃物(手斧当て)加工 ホゾ孔のようなあり

第16表　朝酌矢田Ⅱ遺跡D区　出土遺物観察表

土器・土製品

挿図番号	写真図版	地区	層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調		胎土	焼成	調整・文様	時期	備考
54－1	45	D-b3	礫面	須恵器	蓋			(2.8)	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	1mm以下砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ,回転ヘラケズリ 内:回転ナデ	出雲6b-c期～第1型式	
54－2	45	D-b3	礫面	須恵器	蓋	(13.0)		(1.6)	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	1mm以下砂粒多く含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	第1型式	
54－3	45	D-b3・b4	礫・地山面	須恵器	蓋			(1.3)	外:灰白色 内:灰白色	N7/ N7/	1mm程度砂粒やや多く含む	良好	外:回転ナデ,回転ヘラケズリ,回転ヘラ切り 内:回転ナデ		
54－4	45	D-b3	礫面	須恵器	蓋			(2.1)	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	微細砂粒やや多く含む	良好	外:回転ナデ,回転ヘラケズリ,回転ヘラ切り 内:回転ナデ		
54－5	45	D-a3	地山面	須恵器	蓋	つまみ径(2.55)		(1.6)	外:灰白色 内:灰白色	N7/ N7/	1mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ,ナデ押さえ 内:回転ナデ	第1型式	擬宝珠状つまみ
54－6	45	D-a2	礫面	須恵器	蓋	つまみ径(4.6)		(1.4)	外:灰色 内:灰色	7.5Y6/1 7.5Y6/1	1mm以下砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:ナデ	第1～2型式	輪状つまみ,つまみ内にヘラ記号「－」
54－7	45	D-a1・b1	礫・地山面	須恵器	坏	(13.2)		(4.7)	外:青灰色 内:青灰色	5PB6/1 5PB5/1	1.5mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:磨滅により調整不明瞭 内:回転ナデ	出雲3～4期	重ね焼きによる融着痕2箇所
54－8	45	D-b2	地山面	須恵器	坏	(11.0)		(2.2)	外:青灰色 内:青灰色	5PB7/1 5PB7/1	0.5mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	出雲4期	
54－9	45	D-a3	礫面	須恵器	坏			(2.7)	外:暗灰色 内:灰色	N3/ N6/	微細砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	出雲4～5期	
54－10	45	D-b4	礫面	須恵器	坏	(9.5)		(2.1)	外:灰色 内:灰色	N5/ N5/	1mm以下白色砂粒微量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	出雲5期	
54－11	45	D-a3	地山面	須恵器	坏		(8.2)	(1.6)	外:青灰色 内:浅黄色 灰色	5PB6/1 5Y8/4 N4/	微細白色砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ,回転糸切り 内:調整不明瞭	第2型式以降	内:被灰著しい
54－12	45	D-a1	礫面	須恵器	坏		(10.0)	(2.4)	外:赤灰色 青灰色 内:紫灰色	7.5YR6/1 PB6/1 5P6/1	1mm以下白色砂粒多く含む	やや不良	外:回転ナデ,回転糸切り(不明瞭) 内:回転ナデ,ナデ	第2型式以降	
54－13	45	D-b3	礫・地山面	須恵器	坏または皿		(10.0)	(1.2)	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	黒色粒まだらに混じる	不良	外:回転ナデ,静止糸切り 内:回転ナデ	第2型式	
54－14	45	D-a3・a4	礫面	須恵器	坏または皿		(8.1)	(1.2)	外:暗青灰色 内:青灰色	5PB4/1 5PB5/1	1mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ,静止糸切り 内:回転ナデ,ナデ		
54－15	45	D-a3	礫面	須恵器	坏			(2.6)	外:灰色 内:灰色	N5/ N4/	1mm以下砂粒多く含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	第2～3型式	
54－16	45	D-b2	礫面	須恵器	坏	(13.6)		(1.8)	外:灰色 内:灰色	N6/ 7.5YR6/1	1mm以下砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	第2型式	
54－17	45	D-a3	礫面	須恵器	坏	(9.8)	(6.6)	3.9	外:灰色 青灰色 内:青灰色	N4/ 5PB5/1 5PB5/1	0.5mm以下白色砂粒微量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ,ナデ	第3～4型式	重ね焼きによる融着、変色
54－18	45	D-a3	礫面	須恵器	高台付皿		(8.6)	(1.1)	外:青灰色 内:青灰色	5PB6/1 5PB6/1	2mm以下白色砂粒少量含む	不良	外:回転ナデ,回転糸切り 内:回転ナデ	第4型式	
54－19	45	D-b5	礫面	須恵器	高台付皿		(9.4)	(1.4)	外:灰白色 内:褐灰色	N7/ 10YR6/1	1.5mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ,回転糸切り 内:回転ナデ後ナデ	第4～5型式	
54－20	46	D-b4	礫面	須恵器	高台付皿			(2.2)	外:青灰色 内:青灰色	5PB6/1 5PB6/1	1mm以下白色砂粒多く含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ		盤の可能性
54－21	46	D-a3	地山面	須恵器	高坏			(4.0)	外:灰色 内:灰白色	N6/ 7.5Y7/1	1mm以下白色砂粒含む	良好	外:回転ナデ,ヘラ切り後ナデ 内:回転ナデ		線状透かし(非貫通)2方向か
54－22	46	D-a4	地山面	須恵器	高坏			(3.3)	外:青灰色 内:青灰色	5B6/1 5B6/1	1～3mm白色砂粒含む	良好	外:回転ナデ,ヘラ切り 内:回転ナデ		透かし2方向
54－23	46	D-a4	地山面	須恵器	高坏			(4.7)	外:灰色 内:青灰色	10Y5/1 5B6/1	1～2mm白色砂粒含む	良好	外:回転ナデ,ヘラ切り 内:回転ナデ		透かし2方向(一方は非貫通の線状)
54－24	46	D-a3	地山面	須恵器	高坏			(2.4)	外:灰白色 内:灰白色	N7/ N7/	1～2mm白色砂粒含む	良好	外:回転ナデ,ヘラ切り後ナデ 内:回転ナデ		透かし3方向
54－25	46	D-a3・a4	礫・地山面	須恵器	高坏			(2.3)	外:明青灰色 内:青灰色	5PB7/1 5PB6/1	5mm以下砂礫多く含む	良好	外:回転ナデ,回転ヘラケズリ 内:回転ナデ,ナデ	出雲6b-c期～第1型式	線状透かし(非貫通)2方向か
54－26	46	D-a3	地山面	須恵器	高坏			(2.8)	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	1mm程度砂粒微量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	出雲6b-c期～第1型式	線状透かし(非貫通)2方向か
54－27	46	D-a3	礫面	須恵器	高坏			(3.2)	外:青灰色 内:青灰色	5B5/1 5B6/1	1mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	出雲6b-c期～第1型式	線状透かし(数不明)
54－28	46	D-a4	地山面	須恵器	高坏		(7.6)	(1.3)	外:青灰色 内:青灰色	5PB6/1 5PB6/1	1mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ		
54－29	46	D-a3	地山面	須恵器	高坏		(8.8)	(2.6)	外:青灰色 内:青灰色	5B5/1 5B6/1	1mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ後ナデ	出雲6b-c期～第1型式	

挿図番号	写真図版	地区	層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調		胎土	焼成	調整・文様	時期	備考
54－30	46	D-a3	地山面	須恵器	杯		(11.6)	(2.6)	外:灰色 内:灰色	N6/ 7.5Y7/1	0.5～1mm程度砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ、平行タタキ後回転ナデ、回転ヘラ切り後ナデ 内:回転ナデ		内:被灰著しい、外底部に別個体の一部が溶着
54－31	46	D-b2	地山面	須恵器	杯			(2.1)	外:青灰色 内:青灰色	5PB6/1 5PB6/1	2mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内:回転ナデ	第1型式	
55－ 1	47	D-a3	礫面	須恵器	杯		(8.2)	(3.0)	外:青灰色 内:青灰色	5PB6/1 5PB6/1	1mm以下白色砂粒多く含む	良好	外:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内:回転ナデ	第1～2型式	内:被灰
55－ 2	47	D-b3	地山面	須恵器	杯		(7.8)	(3.5)	外:青灰色 内:青灰色	5PB5/1 5PB6/1	2mm以下白色砂粒多く含む	良好	外:回転ナデ、回転ヘラ切り 内:回転ナデ	第1～2型式	外底部にヘラ記号か
55－ 3	47	D-b2	地山面	須恵器	長頸壺			(3.7)	外:灰白色 内:灰白色	N7/ N7/	1mm以下砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	第2型式	外:被灰
55－ 4	47	D-b3	礫面	須恵器	長頸壺			(4.2)	外:灰色 内:灰色	N5/ N5/	1～2mm砂粒微量含む	良好	外:回転ナデ、貼付突帯 内:回転ナデ	第5～6型式	
55－ 5	47	D-a2	礫面	須恵器	杯		(6.8)	(5.2)	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	1～2mm砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内:回転ナデ	出雲5期～第2型式か	
55－ 6	48	D-a1	地山面	須恵器	壺		最大径(23.4)	(11.6)	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	0.5～1mm程度砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ、カキ目後一部ナデ 内:回転ナデ、カキ目後一部ナデ		
55－ 7	47	D-a1・a2	礫・地山面	須恵器	甕	(18.7)		(10.1)	外:暗青灰色 内:青灰色	5PB4/1 5PB5/1	3mm以下白色砂礫少量含む	良好	外:回転ナデ、平行タタキ後沈線 内:回転ナデ、同心円当て具痕		内:自然釉
55－ 8	47	D-a1・a2	礫面	須恵器	壺または甕			(7.5)	外:暗青灰色 内:青灰色	5B4/1 5PB5/1	1mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:平行タタキ後カキ目 内:同心円当て具痕		
55－ 9	48	D-a1	礫・地山面3・4層	須恵器	壺または甕		最大径(20.0)	(14.0)	外:青灰色 内:青灰色	5B5/1 5B6/1	1mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:平行タタキ後カキ目 内:回転ナデ、同心円当て具痕		提瓶の可能性も残る
55－10	47	D-a1・a2	礫・地山面	須恵器	壺または甕			(21.6)	外:暗青灰色 内:青灰色	5B4/1 5PB5/1	4mm以下砂粒少量含む	やや不良	外:平行タタキ後カキ目・沈線 内:同心円当て具痕、ナデ		
56－ 1	48	D-b4	礫・地山面	須恵器	甕			(13.6)	外:明赤灰色 内:青白色	2.5YR7/2 5PB5/1	2mm以下白色砂粒少量含む	やや不良	外:回転ナデ、波状文 内:回転ナデ、ナデ		
56－ 2	48	D-a2	地山面	須恵器	横瓶または甕	(20.2)		(5.1)	外:青灰色 内:青灰色	5PB5/1 5PB5/1	2mm以下砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ、平行タタキ後沈線 内:回転ナデ、ナデ		口縁部内面は被灰著しい
56－ 3	48	D-a1・b1	地山面	須恵器	横瓶または甕			(16.9)	外:灰白色 内:灰白色	5Y7/1 N7/	2mm以下砂粒少量含む	良好	外:平行タタキ後カキ目 内:同心円当て具痕		
56－ 4	48	D-b5	礫面	須恵器	甕			(7.1)	外:灰白色 内:灰白色	7.5YR8/1 7.5YR8/1	緻密	不良	外:格子目タタキ 内:同心円当て具痕後ハケメ		亀山系
56－ 5	48	D-b5	礫面	須恵器	甕			(1.3)	外:にぶい橙色 内:明褐灰色	5YR7/3 7.5YR7/2	緻密	不良	外:格子目タタキ 内:ナデ		亀山系
56－ 6	48	D-a2	地山面	須恵器	擂鉢			(4.1)	外:黒色 内:灰白色	7.5YR2/1 7.5YR8/1	緻密	不良	外:格子目タタキ 内:擂目3条以上		外:煤付着
56－ 7	48	D-a1	礫面	須恵器	甕			(1.3)	外:灰白色 内:灰白色	7.5Y7/1 2.5Y8/2	1mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:平行タタキ 内:同心円当て具痕		別個体(焼台)が溶着
56－ 8	48	D	礫面	須恵器	甕			(1.6)	外:明青灰色 内:明青灰色	5PB7/1 5PB7/1	2mm以下白色砂粒微量含む	良好	外:平行タタキ 内:同心円当て具痕		別個体(焼台)が溶着
56－ 9	49	D-a1・a2	礫面	須恵器	横瓶	12.4		(20.0)	外:青灰色 内:灰白色	5B6/1 N7/	2mm以下砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ、平行タタキ 内:回転ナデ、同心円当て具痕	出雲6b期～第2型式	
57－ 1	49	D-a1	地山面	弥生土器	壺			(5.0)	外:灰白色 内:灰白色	5Y7/1 5Y7/1	2mm以下砂粒多く含む	良好	外:沈線1条、ほか磨滅により調整不明瞭 内:磨滅により調整不明瞭	弥生前期前半	
57－ 2	49	D-b5	礫面	弥生土器	甕	18.8		(4.5)	外:にぶい黄橙色 内:にぶい黄橙色	10YR7/4 10YR7/4	2mm以下砂粒多く含む	良好	磨滅により調整不明瞭	弥生後期後葉	
57－ 3	49	D-b3	地山面	土師器	甕			(4.1)	外:褐灰色 内:灰黄褐色	10YR6/1 10YR6/2	1mm以下砂粒多く含む	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ	古墳前期後葉～中期前葉	磨滅・風化著しい
57－ 4	49	D	礫面	青磁	皿		9.0	(2.0)	青磁釉薄掛け		灰白色、粗い			15C後半	龍泉窯系
57－ 5	49	D	礫面	陶器	褐釉碗	(4.2)	1.8	1.8	褐釉		灰白色			12～13C	ミニチュア福建省産か
63－ 1	50	D-a1	11層	須恵器	蓋	11.1		(4.3)	外:青灰色 内:青灰色	5PB6/1 5B6/1	1mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ、ナデ 内:回転ナデ	出雲6b-c期～第1型式	頂部:ヘラ状工具による刺突痕
63－ 2	50	D	9～10層	須恵器	蓋	つまみ径(4.1)		(2.1)	外:青灰色 内:青灰色	5B5/1 5B5/1	1mm以下白色砂粒微量含む	良好	外:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内:回転ナデ、ナデ	第1～2型式	輪状つまみ
63－ 3	50	D	耕土	須恵器	蓋	つまみ径(3.8)		(1.6)	外:青灰色 内:青灰色	5PB6/1 5PB6/1	1mm程度砂粒やや多く含む	良好	外:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内:ナデ	第1型式	ボタン状つまみ
63－ 4	50	D-a2	11層	須恵器	蓋	つまみ径(4.5)		(0.9)	外:青灰色 内:灰色	5B6/1 5Y6/1	1mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:ナデ	第1～2型式	輪状つまみ
63－ 5	50	D-b1	5層	須恵器	蓋	(11.4)		(1.8)	外:灰白色 内:灰白色	2.5YR7/1 2.5YR7/1	0.5mm以下砂粒微量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	第1型式	

挿図番号	写真図版	地区	層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調		胎土	焼成	調整・文様	時期	備考
63－ 6	50	D	4層	須恵器	蓋	(11.0)		(1.5)	外:灰赤色 青灰色 内:青灰色	2.5YR6/ 5PB6/1 5PB6/1	1mm以下白色砂粒微量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	第2型式	
63－ 7	50	D-a4	11層	須恵器	坏	(9.6)		(3.1)	外:青灰色 内:青灰色	5PB6/1 5PB5/1	1mm以下砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	出雲4～5期	
63－ 8	50	D	耕土	須恵器	坏	(10.4)		(3.2)	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	1mm程度砂粒微量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	第3型式	
63－ 9	50	D-a1	試掘T31埋土	須恵器	坏			(2.5)	外:灰褐色 内:にぶい赤褐色	5YR5/2 2.5YR5/3	1mm以下砂粒多く含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	第2型式	
63－10	50	D-a1	4層	須恵器	坏	(10.8)		(2.6)	外:青灰色 内:青灰色	5B6/1 5B5/1 5B5/1	1mm以下砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	第3型式	
63－11	50	D-a4	11層	須恵器	坏	(10.6)		(1.7)	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	1mm以下砂粒微量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ、ナデ(棒状工具)	第3型式	
63－12	50	D-a2	9～10層	須恵器	無高台坏	(12.4)	(10.6)	4.0	外:灰色 内:灰褐色	N6/ 5YR6/2	1mm以下砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ、回転糸切り 内:回転ナデ	第4型式	
63－13	50	D-a1	11層	須恵器	無高台坏		(5.8)	(1.5)	外:青灰色 内:青灰色	5PB5/1 5PB5/1	1mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ、回転糸切り 内:回転ナデ	第2型式以降	
63－14	50	D-a2	9～10層	須恵器	高台付坏		9.2	(3.1)	外:灰白色 内:灰色	2.5Y7/1 2.5Y7/1	1mm以下白色砂粒微量含む	良好	外:ナデ、静止糸切り後ナデ 内:ナデ	第1型式	
63－15	50	D-b3	11層	須恵器	高台付坏		8.0	(2.5)	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	1.5mm以下砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ(棒状工具)、ナデ 内:ナデ	第1型式	底部にヘラ記号「×」、内部平滑
63－16	50	D-a3	9～10層	須恵器	高台付坏		8.2	(2.4)	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	1mm以下砂粒少量含む	良好	外:ナデ、回転ヘラ切り後ナデ 内:ナデ	第2型式	底部にヘラ記号「一」
63－17	50	D-b3	9～10層	須恵器	高台付坏		(8.0)	(1.5)	外:青灰色 内:青灰色	5B5/1 5B5/1	3mm白色砂粒、1mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ、回転糸切り 内:回転ナデ	第4型式	
63－18	50	D-b2	9～10層	須恵器	無高台皿		(6.6)	(1.1)	外:にぶい赤褐色 内:褐灰色	2.5YR5/3 7.5YR4/1	5mm白色礫微量、微細白色砂粒多く含む	良好	外:回転ナデ、静止糸切り 内:回転ナデ、ナデ	第2型式	
63－19	50	D	耕土	須恵器	無高台皿		(8.0)	(0.9)	外:青灰色 内:青灰色	5B6/1 5B6/1	1mm以下砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ、回転糸切り 内:回転ナデ、ナデ	第6型式	
63－20	50	D-a4	11層	須恵器	無高台皿		(8.2)	(1.1)	外:青灰色 内:青灰色	5PB6/1 5PB6/1	1mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:ナデ、回転糸切り 内:回転ナデ、ナデ	第2型式以降	
63－21	51	D-a2	9～10層	須恵器	高台付皿		(10.6)	(1.8)	外:灰白色 内:灰白色 にぶい褐色	10YR7/1 7.5YR8/1 7.5YR4/1	0.5mm以下白色砂粒多く含む	やや不良	外:回転ナデ 内:回転ナデ	第4型式	
63－22	51	D-b	9～10層	須恵器	高台付皿		(8.0)	(1.3)	外:灰白色 内:灰白色	2.5Y7/1 2.5Y7/1	0.5mm以下白色砂粒微量含む	やや不良	外:回転ナデ、回転糸切り 内:回転ナデ、ナデ	第4型式	
63－23	51	D	耕土	須恵器	高坏			(5.5)	外:灰白色 内:灰白色	N7/ N7/	1mm以下砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ、沈線2条 内:回転ナデ	出雲6b-c期～第1型式	線状透かし2方向か
63－24	51	D-b5	11層	須恵器	高坏			(3.1)	外:赤灰色 内:明青灰色	10YR6/1 5PB7/1	3mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ、ナデ	出雲6b-c期～第1型式	線状透かし2方向
63－25	51	D-a2	9～10層	須恵器	壺			(3.5)	外:灰色 内:灰白色	N6/ 7.5Y7/1	1mm以下砂粒微量含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ	第3型式	外:被灰
63－26	51	D	11層	須恵器	壺		(8.6)	(2.3)	外:明赤灰色 内:青灰色	2.5YR7/2 5B6/1	1mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ、回転糸切り 内:回転ナデ	第2～3型式	内:被灰
63－27	51	D-a1・a2・b1	9～10層	須恵器	横瓶または甕	(18.0)		(5.5)	外:黄灰色 内:青灰色	2.5Y6/1 5PB5/1	1mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:回転ナデ、格子目タタキ 内:回転ナデ、同心円当て具痕		外:自然釉
64－ 1	51	D-b3	11層	須恵器	甕			(7.1)	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	1mm程度白色砂粒やや多く含む	良好	外:波状文(7条1単位)、沈線、回転ナデ 内:回転ナデ		
64－ 2	51	D-b1	11層	須恵器	甕			(7.3)	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	微細白色砂粒微量含む	良好	外:波状文(2条1単位)、沈線、回転ナデ 内:回転ナデ		破面端部:棒状工具による打撃痕
64－ 3	51	D-b3	11層	須恵器	甕			(8.0)	外:灰色 内:灰褐色	N5/ 7.5Y6/1	1mm程度砂粒少量含む	良好	外:波状文(不整形)、沈線、回転ナデ 内:回転ナデ		
64－ 4	51	D-b2	11層	須恵器	甕			(4.8)	外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	1mm程度砂粒微量含む	良好	外:波状文(6条1単位)、沈線 内:回転ナデ		
64－ 5	51	D-b5	11層	須恵器	甕			(4.1)	外:暗灰色 内:灰白色	N3/ 10YR8/1	緻密	不良	外:ナデ、格子目タタキ 内:クシ目後ナデ		亀山系
64－ 6	51	D-b5	11層	須恵器	不明			(4.3)	外:暗灰色 内:灰白色	N3/ 7.5YR8/1	緻密	良好	外:格子目タタキ 内:ハケメ		亀山系
64－ 7	51	D-a1	9～10層	須恵器	甕			(3.7)	外:灰白色 内:灰白色	N7/ N7/	1mm程度砂粒少量含む	良好	外:波状文(2条1単位)、沈線 内:回転ナデ		
64－ 8	51	D-b3	9～10層	土師器	坏または皿		(7.0)	(1.3)	外:にぶい橙色 内:にぶい黄橙色	7.5YR7/3 10YR7/4	1mm以下砂粒少量含む	良好	外:回転糸切り、ほか磨滅により調整不明瞭 内:回転ナデか	10C前半以降か	
64－ 9	51	D-b2	9～10層	弥生土器	甕	32.0		(1.6)	外:灰白色 内:灰白色	2.5Y8/3 2.5Y7/4	1mm以下砂粒微量含む	良好	外:磨滅により調整不明瞭 内:磨滅により調整不明瞭		

挿図番号	写真図版	地区	層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調		胎土	焼成	調整・文様	時期	備考
64−10	51	D-b2	4層	弥生土器	不明(脚付か)			(6.7)	外:浅黄橙色 内:浅黄橙色	7.5YR8/3 7.5YR8/3	2mm以下砂粒微量含む	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ	弥生後期か	透かし(数不明)
64−11	52	D-b1	11層	土製品	不明			(9.2)	外:灰白色 内:灰白色	2.5Y8/2 2.5Y8/2	1mm以下白色砂粒少量含む	良好	外:磨滅により調整不明瞭 内:ナデ(ヘラ状工具)		
64−12	52	D-a3	9～10層	土製品	球状土錘	3.2	3.3	3.2	にぶい黄橙色	10YR7/2	3mm以下長石多く含む	良好	ナデ		孔径0.7cm、重量32.65g
64−13	52	D-a5	11層	土製品	管状土錘	2.6	1.2	0.8	明赤褐色	2.5YR5/6	1mm以下長石微量含む	良好	ナデ		孔径0.8cm 重量0.91g
64−14	52	D	排土	土製品	管状土錘	3.6	1.9	2.0	にぶい黄橙色	10YR6/4	1mm以下砂粒微量含む	良好	ナデ		孔径1.1cm、重量10.19g
64−15	52	D-b3	4層	土製品	管状土錘	3.8	1.2～1.4	1.2	にぶい黄橙色	10YR6/4	微細砂粒少量含む	良好	ナデ		孔径0.5cm 重量6.38g
64−16	52	D	1層	土製品	管状土錘	4.5	1.0	1.0	外:にぶい赤橙色 内:浅黄色 にぶい赤橙色	10R6/3 7.5Y6/3 10R6/3	微細白色砂粒微量含む	良好	ナデ 外:全面自然釉、被灰		孔径4.5cm×3.5cm 重量4.01g
64−17	52	D-b3	9～10層	土製品	管状土錘	7.6	2.2	2.0	にぶい黄橙色	10YR7/2	1mm以下砂粒少量含む	良好	ナデ		孔径0.8cm 重量30.3g
64−18	52	D-a3	9～10層	土製品	土製支脚				灰白色	2.5Y8/2	1mm以下砂粒多く含む	良好	ナデ		
64−19	52	D-a2	9～10層	土師器	把手	長さ5.8	幅3.5	厚さ2.3	外:にぶい黄橙色 内:褐灰色	10YR6/3 10YR5/1	0.5mm以下砂粒多く含む	良好	外:ナデ 内:ケズリ		
64−20	52	D	10層	瓦	平瓦	6.0	6.6	1.7	灰白色	5Y7/2	微細砂粒多く含む、2mm大褐色粒混じる	良好	磨滅により調整不明		重量26.9g
65− 1	53	D	4層	磁器	広東碗		(6.2)	(4.0)	呉須 透明釉		白色		外:若松文 内:岩に波涛文	1780～1802年	肥前系
65− 2	53	D-b1	9層	青花	碗		(4.0)	(2.7)	青料 透明釉		灰白色		外:圏線、唐草文 内:団花状唐草文 高台内銘:円に「正」	16C後半	景徳鎮窯系 アルミ砂付着
65− 3	53	D	4層	磁器	端反形碗		(3.2)	(2.5)	呉須 透明釉		白色		外:源氏香崩し	1850～60年代	瀬戸美濃系
65− 4	53	D-b4	9～10層	磁器	丸形碗		(4.4)	(2.4)	呉須 透明釉		白色		外:二重圏線	1670～80年代	肥前系
65− 5	52	D	3層	磁器	仏飯器輪高台		(4.2)	(4.4)	呉須 透明釉		白色		外:圏線、菊花文	18C代	肥前系
65− 6	53	D	1層	青磁	碗			(3.4)	青磁釉		灰色		外:二重圏線、略化花文か		龍泉窯系
65− 7	53	D-b1	1層	陶器	半球碗		(5.0)	(2.2)	緑釉(青地)		灰色			19C中葉	布志名焼
65− 8	53	D-b2	3層	陶器	呉器手碗		(5.4)	(3.9)	透明釉		淡黄褐色			1710～40年代	肥前系
65− 9	53	D-b2	3層	陶器	隅切四方皿	(7.6)	(4.8)	2.5	灰釉(半濁釉)		灰色			1870年代	布志名焼
65−10	53	D-b1	9～10層	陶器	擂鉢	(31.4)		(6.8)			灰色		内:擂り目(8条1単位)	15C代	備前焼
65−11	52	D-b1	9～10層	陶器	甕	40.6	46.4	66.0	土灰釉 鉄釉		褐色		外:回転ナデ、格子目タタキ 内:回転ナデ、格子目タタキ	19C前半代か	肥前系唐津
65−12	53	D-b2	4層	陶器	壺	(13.4)		(17.3)	鉄釉		灰褐色		外:二重圏線	18C～19C	肥前系、胴部に溶着痕
65−13	53	D-b1	3層	陶器	行平蓋	18.0	つまみ径5.8	4.1	鉄釉		淡褐色		外:蛇ノ目文 内:墨書「松浦」	幕末～明治	在地系

石器

挿図番号	写真図版	地区	層位	器種	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
57− 6	49	D-a4	地山面	刃器		5.1	8.8	1.1	41.0	
57− 7	49	D-a2	礫面	磨石		9.7	5.8	3.1	269.91	全面平滑、使用痕あり
57− 8	49	D-b2	礫面	剥片	黒曜石	3.8	2.6	1.3	5.25	微細剥離痕あり
57− 9	49	D-b1	地山面	石核	黒曜石	3.5	4.5	1.8	27.64	
57−10	49	D	礫面	石鏃	黒曜石	1.4	1.4	0.3	0.4	
57−11	49	D-a3	地山面	石核	黒曜石	8.1	6.5	4.7	269.0	
57−12	49	D-b4	礫面	石斧		8.5	5.1	2.7	159.0	
64−21		D	排土	石匙		4.2	(5.8)	0.9	22.5	
64−22		D	9～10層	石鏃	黒曜石	2.8	(1.4)	0.5	1.4	
64−23		D-b3	11層	石鏃		2.4	2.3	0.5	1.6	未製品

木製品

挿図番号	写真図版	地区	層位	種別/品目	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	径(cm)	その他の寸法(cm)	木取り	備考
58－1	54	D-a2	地山面	刀子柄木	13.8	3.0	1.5				外:黒漆残存,呑口式
58－2	54	D-b5	礫面	部材	11.3	(2.6)	2.7		孔径:0.2		穿孔2
58－3	54	D-b1	礫面	用途不明・部材か	21.0		4.5			柾目	長材の一部の可能性、ホゾ孔のような加工
58－4	54	D-b4	11層	板状木製品 部材か	(17.2)	3.3	2.3			柾目	ホゾ孔
58－5	54	D-a1	礫面	用途不明・転用材か	7.8	8.2	3.9				鋸切断による鋸痕(筋状)あり 一部に鋸切断によるバリ残存
58－6	54	D-a4	礫面	用途不明・板状木製品	11.6	6.6	2.2			板目	
58－7	54	D-a3	地山面	用途不明木製品	7.5	12.7	4.7			柾目	
58－8	54	D-b1	礫面	用途不明・板状木製品	17.8	(3.6)	2.3				火鑽孔状のコゲ、2箇所残存
58－9	54	D-a3	礫面	曲物底板か	25.9	4.4	0.85		釘孔径:0.2	板目	釘孔6
58－10	54	D-a3	礫面	用途不明・板状木製品	21.7	3.0	0.7		木釘径:0.4～0.5 釘孔:0.2・0.3		木釘3、釘孔2
58－11	54	D-b3	礫面	用途不明・板状木製品	(53.8)	3.5	0.5				
58－12	54	D-b2	礫面	箸状木製品	(10.2)	0.6	0.5				
58－13	54	D-a4	地山面	人形木製品か	20.2	2.6	0.6				縛り痕2箇所、刳り込み3箇所、刃物痕
60－杭2	55	D-a3	―	杭	64.4			5.2×5.4		芯持材	先端部加工、上端部炭化
60－杭5	55	D-a3	―	杭	53.7	4.2	3.6			芯持材	先端部加工、樹皮残存
60－杭8	55	D-b4	―	杭	(41.8)	8.4	5.0			柾目	丸太材を転用、先端部加工、鋸引き痕
60－杭18	55	D-b4	―	杭	55.8	4.3	4.1			芯持材	先端部加工、炭化した樹皮残存
60－杭20	55	D-a1	―	杭	(16.4)	6.7	3.8			芯持材	先端部加工
60－杭21	55	D-a1	―	杭	38.3	5.6	4.6			板目	釘2 ホゾ用ノミ痕、建築部材を転用か
66－1	55	D-a1	地山面	漆器椀			底径 (9.8)				内外:黒漆 高台を平底にしたか
66－2	55	D-a3	11層	漆器椀	口径 (15.0)		0.5				内外:黒漆
66－3	55	D-a1	11層	漆器皿	口径 (9.4)	底径 (6.4)	器高 2.3				内外:黒漆
66－4	56	D-a4	礫面	下駄(台)	22.4	9.8	2.8				眼3箇所、歯2枚、露卯の歯
66－5	56	D-b3	11層	連歯下駄(台)	17.4	(4.7)	1.6				眼1箇所、歯2枚残存
66－6	56	D-b3	11層	下駄か	(8.2)	(2.3)	(1.1)				眼1箇所残存か、一部炭化
66－7	56	D-b3	11層	連歯下駄の歯か	(3.3)	(3.5)	(1.6)				1か所穿孔残存か
66－8	56	D-b3	11層	連歯下駄(台)	(13.8)	(7.0)	1.7		目釘孔径:0.2		歯1枚残存、目釘孔1、鋸断か
66－9	56	D-b3	11層	下駄	(5.7)	(3.0)	1.4				推定径12㎜の眼1箇所残存
66－10	56	D-b3	11層	用途不明木製品 部材の一部か	(6.2)	(2.0)	(1.0)			芯持材	ホゾ孔か
66－11	56	D-a3	11層	曲物底板	(19.1)	(4.9)	0.5		孔径:0.3・0.4		孔2
66－12	56	D-b1	9～10層	曲物の側板	(10.4)	2.0	4.0		木釘径:0.5・0.2 孔径:0.2		木釘2、穿孔1、斜め方向の切込線残存
66－13	56	D-b1	9～10層	曲物の側板	5.5	2.5	0.3				釘孔1、綴 斜め方向の切込線残存
66－14	56	D-b5	11層	曲物底板	(12.4)	(3.8)	0.4			柾目	
66－15	56	D-b1	11層	曲物桶蓋か	(21.0)	(3.6)	0.5				1孔、酒樽の呑孔のような加工
66－16	56	D-b1	9～10層	曲物 樽または桶の底板	(32.3)	(8.2)	1.1		目釘孔径:0.1		目釘1
67－1	57	D-b1	9～10層	用途不明・円盤状木製品	(15.8)	(5.7)	2.1		孔径:(0.7)		穿孔1
67－2	57	D-a3	11層	用途不明・把手状木製品	13.1	4.6	3.9			板目	部材または栓の頭部分の破片か
67－3	57	D-b1	9～10層	用途不明・把手状木製品	(17.5)	3.8	2.4			柾目	部材または栓の頭部分の破片か
67－4	57	D-b5	11層	用途不明木製品	14.7	4.1	4.0			柾目	
67－5	57	D-b5	11層	部材	(13.0)	4.6	(4.9)			芯持材	ホゾ孔1、端部加工、方形に加工
67－6	57	D-a4	9～10層	用途不明木製品 刳物	13.0	4.1	2.9			板目	穿孔1、端部に抉り加工
67－7	57	D-b3	11層	用途不明木製品	(9.1)	(2.4)	1.1				折れ、割れが著しい
67－8	57	D-b3	11層	用途不明木製品 部材の一部か	(6.5)	1.6	1.5				L字状の抉り
67－9	57	D-b2	9～10層	用途不明木製品	7.1	11.1	3.1			柾目	
67－10	57	D-b3	11層	板状木製品 建築部材か	(12.2)	11.3	2.7			柾目	
67－11	57	D-b1	9～10層	用途不明木製品 鋤先か	(9.0)	(7.5)	1.8			柾目	
67－12	57	D-b4	11層	用途不明木製品	7.5	(5.8)	3.6			柾目	端部に刃物痕(ノミ痕)
67－13	57	D-b1	11層	用途不明・楔状木製品	(6.2)	7.6	1.8～3.2			板目	刃物痕(カンナ痕)
67－14	57	D-b2	11層	用途不明・板状木製品	6.7	(3.9)	1.0		孔径:(0.5)	板目	穿孔2
68－1	58	D-b4	9～10層	杓子	17.1	5.8	1.0			板目	柄を切断し転用したものか 端部炭化

挿図番号	写真図版	地区	層位	種別/品目	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	径(cm)	その他の寸法(cm)	木取り	備考
68－2	58	D-a4	11層	杓子	10.1	(5.1)	1.2				折れて短くなったものを再利用した可能性
68－3	58	D-b5	礫面	ヘラ状木製品	(9.6)	2.7	0.6			板目	
68－4	58	D-b3	9～10層	用途不明・棒状木製品 部材の一部か	13.7	2.7	1.8				刳り込み(端部)、ほぼ全面炭化
68－5	58	D-b3	9～10層	用途不明部材	19.0	3.0	1.6				ホゾ用の刳り込み２箇所
68－6	58	D-b1	11層	用途不明・棒状木製品 部材の一部か	(6.1)	0.9	0.8				抉りを入れ端部加工により尖る
68－7	58	D-b2	9～10層	用途不明木製品	6.8	1.1	1.1			柾目	両端部切断加工
68－8	58	D-a3	9～10層	建築部材	(23.8)	4.5	4.5		ホゾ孔小:2.2×1.6 ホゾ孔大:(3.7)×2.7	板目	ホゾ孔2(ホゾ1残存)
68－9	58	D-b3	11層	建築部材の一部か	(29.8)	3.8	3.4			板目	両端部欠損、刳り込み
68－10	58	D-a4	11層	用途不明・板状木製品 部材の一部	(20.3)	2.1	1.3		孔径:0.6×0.8		ホゾ孔1
68－11	58	D-a4	11層	建築部材の一部	(25.5)	2.6	1.8				端部付近に刳り込み
69－1	59	D-a3	9～10層	棒状木製品 部材	16.9			2.9× 2.0		柾目	面取り加工
69－2	59	D-b3	11層	用途不明・棒状木製品	(15.7)	2.7	2.2			芯持材	先端部加工、樹皮残存
69－3	59	D-b3	11層	棒状木製品 柄または部材か	13.3	2.1	2.1			芯持材	先端部に孔のような窪み
69－4	59	D-a4	11層面	用途不明木製品	(13.0)	2.7	2.0			板目	
69－5	59	D-a2	9～10層	棒状木製品 部材	11.4	3.0 (最大)	1.6～ 3.0			芯持材	先端部加工
69－6	59	D-b3	11層	柄	13.5			2.8		芯持材	把手端部に面取り加工 差し柄端部に楔を打ち込んだとみられる亀裂
69－7	59	D-a3	礫面	棒状木製品 部材か	15.7	2.4	2.4		孔径:0.4・0.5	芯持材	先端部加工、穿孔2
69－8	59	D-b3	11層	楔状木製品	19.3	3.0	2.7			柾目	一面を鋭角に加工
69－9	59	D-b3	9～10層	楔状木製品	11.7	2.6	1.7				先端潰れている
69－10	59	D-b3	11層	楔状木製品	11.7	2.7	1.7			柾目	先端部加工、ほぼ全面炭化、杭の可能性もあり
69－11	59	D-b3	11層	楔状木製品	16.1	2.4	2.0				一面を鋭角に加工、頭部に敲打痕
69－12	60	D-b1	9～10層	楔状木製品	20.0	2.3	1.3				楔状
69－13	60	D-b1	9～10層	用途不明・板状木製品	(19.6)	2.0	0.7～ 0.8			板目	削り痕
69－14	60	D-b1	11層	ヘラ状木製品	(11.9)	(2.4)	0.5		孔径:0.2		穿孔2
69－15	60	D-b3	11層	用途不明・棒状木製品	(8.3)	1.3	0.4			板目	頭部付近に両側から刳り込み 結縛具・緊縛具の可能性あり
69－16	60	D-a2	11層	用途不明・棒状木製品	10.0	1.4	0.8			柾目	先端加工、頭部付近段状に刳り込み
69－17	60	D-b2	9～10層	用途不明・棒状木製品	22.3	2.0	0.8			板目	頭部付近に両側から刳り込み
69－18	60	D-b2	11層	用途不明・板状木製品	21.2	(1.6)	0.8		孔径:(0.4)		穿孔2
69－19	60	D-a2	礫面	用途不明・棒状木製品	32.2	2.1	1.2		孔径:0.2・0.3		穿孔2
69－20	60	D-b1	11層	用途不明・板状木製品	29.0	(2.1)	0.8		孔径:(0.4)	板目	両端部面取り加工、穿孔1
70－1	61	D-b1	11層	用途不明・板材木製品	20.4	3.3	0.6		釘径:0.1～0.2	板目	鉄釘3
70－2	61	D-b4	11層	折敷	(7.5)	(3.4)	0.3			柾目	結束樹皮残存
70－3	61	D-b3	11層	板状木製品 浮子か	29.7	2.8	1.0		孔径:0.2		穿孔2
70－4	61	D-b5	11層	板状木製品 浮子か	(12.6)	2.7	1.0		孔径:0.3		穿孔1
70－5	61	D-b3	11層	用途不明・板状木製品	(18.1)	4.0	0.5		木釘径:0.3		木釘3
70－6	61	D-b3	11層	用途不明・板状木製品	20.1	4.0	0.5		孔径:0.5 木釘径:0.4		穿孔3、木釘1
70－7	61	D-b2	11層	用途不明・板状木製品	(18.2)	(2.3)	0.7		孔径:(0.4)		穿孔2
70－8	61	D-b1	9～10層	用途不明・板状木製品	12.6	(1.5)	0.6		孔径:(0.4～0.5)		穿孔4
70－9	61	D-b3	9～10層	用途不明・板状木製品	9.0	(1.6)	0.6		孔径:0.2～0.3		穿孔3
70－10	61	D-b2	11層	用途不明・板状木製品	(7.1)	2.1	0.5		孔径:0.4		穿孔2
70－11	61	D-b3	11層	用途不明・板状木製品	(13.7)	3.8	0.9		孔径:0.1・0.3		穿孔2(非貫通1)
70－12	61	D-b2	11層	用途不明・角棒状木製品	10.1	3.0	2.3		木釘径:0.5	柾目	木釘1
70－13	61	D-b3	11層	用途不明・板状木製品	(11.2)	2.6	1.5		目釘孔径:0.3	板目	各端部に目釘孔、ホゾ孔のような加工 上面欠)
70－14	61	D-a3	11層	用途不明・板状木製品	(10.1)	3.9	0.35		孔径:0.4・0.5		穿孔2
70－15	61	D-b3	9～10層	用途不明・板状木製品	10.2	2.3	0.8		孔径:0.1		穿孔(非貫通)1
70－16	61	D-b3	11層	用途不明・板状木製品 底板か	9.4	(3.6)	0.9		目釘孔径:0.2	板目	両端部側面に目釘 多角形の箱物の底板か
70－17	61	D-a2	9～10層	用途不明・板状木製品	(7.8)	3.9	0.5		目釘孔径:0.3		目釘1
70－18	61	D-a2	9～10層	用途不明・板状木製品	(13.2)	2.6	0.5				
70－19	61	D-b3	11層	用途不明・板状木製品品	(13.9)	1.4	0.6				
70－20	61	D-b3	11層	用途不明・板状木製品	(13.7)	2.1	1.0				目釘1
70－21	61	D-a3	11層	用途不明・板状木製品	15.3	4.0	0.5～ 0.6				端部加工
70－22	61	D-a3	11層	用途不明・板状木製品	(18.3)	4.6	0.8			板目	

挿図番号	写真図版	地区	層位	種別/品目	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	径(cm)	その他の寸法(cm)	木取り	備考
71－1	62	D-a2	9～10層	用途不明・棒状木製品	49.3	4.8	3.0			柾目	建築部材を転用か
71－2	62	D-b1	9～10層	用途不明・板状木製品	10.7	8.2	2.0			柾目	
71－3	62	D-b2	9～10層	用途不明・板状木製品	(12.3)	8.2	(2.2)			板目	加工痕(ノミ痕か)
71－4	62	D-b1	9～10層	用途不明・板状木製品	4.4	(7.1)	2.1				
71－5	62	D-b2	9～10層	用途不明・板状木製品	9.7	8.2	1.5				多角形状
71－6	62	D-b1	9～10層	用途不明・板状木製品	(8.0)	(2.3)	0.8				側面に切り込み
71－7	62	D-b3	11層	用途不明・板状木製品	7.5	6.2	1.2				
71－8	62	D-b3	11層	用途不明・板状木製品	(11.7)	5.1	0.7				一方の端部を弧状に加工
71－9	62	D-b1	11層	用途不明・板状木製品	(11.5)	(3.8)	1.1				
71－10	62	D-b3	11層	用途不明・板状木製品	8.5	最大2.8	0.4			板目	台形状
71－11	62	D-b1	9～10層	用途不明・板状木製品	(10.7)	4.1	0.7		孔径:(0.5) 目釘孔径:0.1(側面)		穿孔1、側面に目釘孔1
71－12	62	D-a4	11層	用途不明・板状木製品	(8.0)	2.9	0.7				
71－13	62	D-b4	11層	用途不明・板状木製品	10.2	3.9	0.3			柾目	
71－14	62	D-a3	11層	火鑚臼	12.4	4.5	1.7			柾目	火鑚孔5箇所
72－1	63	D-b1	11層	用途不明・棒状木製品	(7.9)	1.4	0.7		目釘孔径:0.1	柾目	先端部加工、目釘孔4(非貫通1)
72－2	63	D-b5	11層	用途不明・棒状木製品	(10.9)	0.9	1.0				
72－3	63	D-b1	9～10層	用途不明・棒状木製品	8.3	1.5	1.0				両先端部切り込み加工、裏は割面
72－4	63	D-b1	11層	用途不明・棒状木製品	(9.1)	1.0	0.8			板目	先端部薄く加工
72－5	63	D-b2	11層	用途不明・棒状木製品 燃えさしか	9.5	1.2	0.8				先端部加工・炭化
72－6	63	D-a1	9～10層	用途不明・棒状木製品	11.0	1.9	0.6				先端部加工、竹を6分割し作成
72－7	63	D-a2	9～10層	用途不明・棒状木製品 部材の一部か	(12.6)	1.7	1.3				ホゾ孔または釘孔の痕跡 端部方向に薄く加工
72－8	63	D-b3	11層	用途不明・棒状木製品	(14.7)	1.4	0.5				ヘラ状、刃部欠損
72－9	63	D-b2	11層	用途不明・棒状木製品	(15.2)	2.8	2.0			板目	端部に切り込み2箇所
72－10	63	D-a3	11層	用途不明・棒状木製品	(31.3)	2.9	2.0			板目	板材を角棒状に加工
72－11	63	D-b1	9～10層	用途不明・棒状木製品	22.8	3.0	1.5				使用痕のような凹みあり
72－12	63	D-a3	9～10層	用途不明・棒状木製品 部材あるいは柄か	(22.4)	202	1.8			柾目	表面丁寧に加工、端部丸く収める、一部炭化
72－13	63	D-a1	9～10層	用途不明・棒状木製品 部材あるいは柄か	19.9	2.2	1.0				端部を削り細く加工
72－14	63	D-a3	11層	用途不明・棒状木製品	7.3	2.2	1.2			柾目	先端部炭化
72－15	63	D-b5	11層	用途不明木製品 自然の枝か	(10.2)	2.4	2.4				加工痕跡無し
72－16	63	D-b1	11層	用途不明・棒状木製品	17.6	2.7～3.5				芯持材	方形に面取り、中心部分空洞
72－17	63	D-b4	9～10層	用途不明木製品	14.5	4.5	4.0				先端部炭化
73－1	64	D-a2	9～10層	杭状木製品	(30.7)	2.6	2.2				部材の先端部を加工し杭状に転用か
73－2	64	D-a4	9～10層	杭状木製品	54.4			2.3		芯持材	先端部片面加工
73－3	64	D-b4	9～10層	杭状木製品	(52.5)	3.7	4.0			芯持材	先端部加工
73－4	64	D-a1	4層	棒状木製品	26.1	3.6	3.7			芯持材	先端部加工、一部炭化
73－5	64	D-b3	9～10層	杭状木製品	(24.8)	4.0	4.1			芯持材	先端部加工で鋭く尖る、樹皮残存
73－6	64	D-a4	11層	杭状木製品	24.3	2.2	1.3		釘孔径:0.3	柾目か	釘孔1、一部炭化
73－7	64	D-b3	11層	杭状木製品	25.5	2.8	2.3			板目	割材使用
73－8	64	D-b5	11層	杭状木製品	42.0					芯持材	両端部加工
73－9	64	D-a3	11層	杭状木製品	(20.3)	2.6	2.6			芯持材	先端部加工、抉り加工あり
73－10	64	D-b5	11層	棒状木製品 柄か	(17.9)	2.4	1.9～2.2		中心部孔径:0.5	芯持材	柄内部に金属の棒を差し込んだ穴か 柄中心に鋸状の刃物による切れ込み 先端部加工
73－11	64	D-a2	9～10層	棒状木製品	(9.8)	1.5	1.5			芯持材	先端部加工

銭貨

挿図番号	写真図版	地区	層位	種別	名称	初鋳年	計測値(mm・g)					備考
							銭径(A)/銭径(B)	銭径(C)/内径(D)	孔径	銭厚	量目	
74－1		D-b2	4層	銭貨	寛永通寶	1668	23.76/23.85	18.66/18.31	5.85～5.78	1.0～1.02	2.48	
74－2		D-b1	4層	銭貨	□□□寶		22.15/23.41	不明	6.66	1.05～1.15	2.12	

朝酌矢田Ⅱ遺跡
写真図版

1. 朝酌矢田 II 遺跡　遠景（東から）

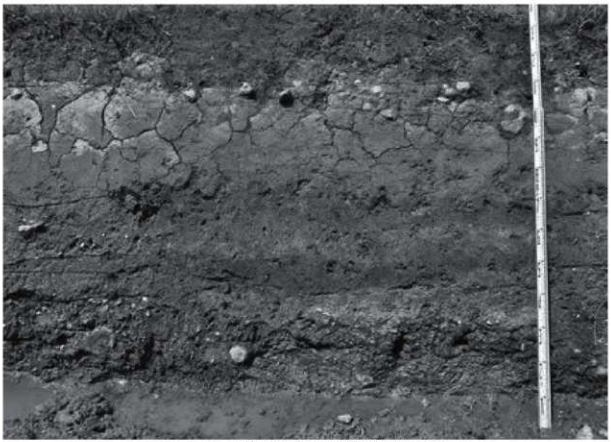
2. 朝酌矢田 II 遺跡　全景（南から）

1．A・B 区　遠景（西から）

2．A-1 区　全景（東から）

1．A-1 区　礫検出状況（西から）

2．A-1 区　杭列（南から）



1．A-1 区　調査区南壁土層堆積状況（北から）

2．A-2・B 区　全景（北から）

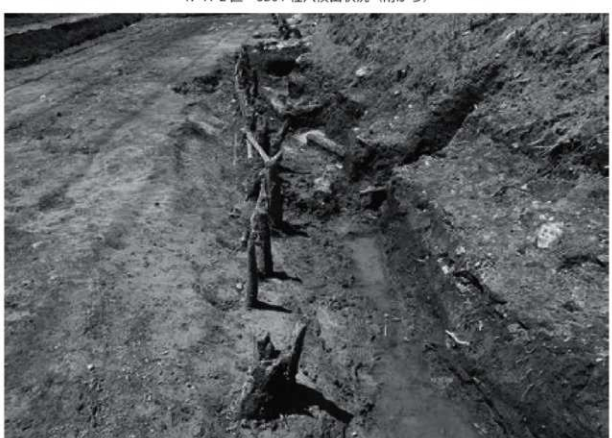
1．A-2 区　杭列（西から）

2．A-2 区　礫 1 層検出状況（西から）

1．A-2 区　完掘状況（西から）

2．A-2 区　SB01（西から）

1. A-2 区　SB01 柱穴検出状況（南から）



2. A-2 区　SD01 検出状況（東から）

1. A-2 区　SE01 検出状況（東から）

2. B 区　全景（上空から）

1．B 区　炉跡（東から）

2．B 区　炉跡（西から）

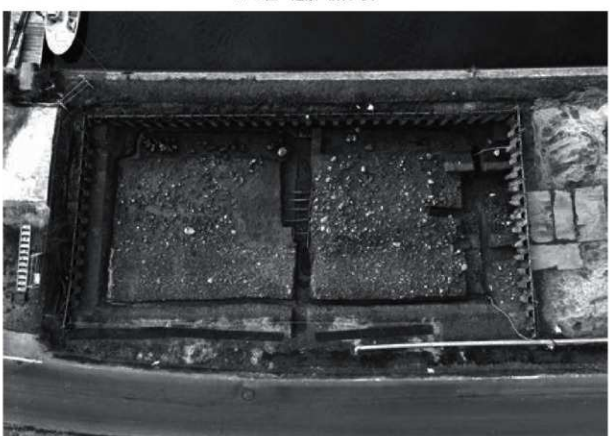
1．B 区　1 号墳（西から）

2．B 区　2 号墳（東から）

1．B 区　2 号墳土坑（西から）

2．B 区　Pit4（西から）

1．C 区　遠景（東から）



2．C 区　全景（北から）

1．C区　礫敷遺構検出状況（東から）

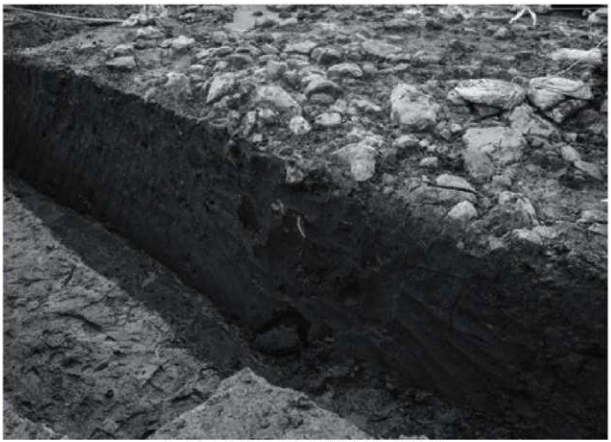
2．C区　礫敷遺構検出状況（西から）

1．C 区　礫 2 層検出状況（南から）

2．C 区　横木 1 出土状況（北から）

1．C 区　須恵器出土状況（礫敷遺構面、南から）

2．C 区　須恵器出土状況（礫 2 層面、西から）



1．C 区　中央トレンチ土層堆積状況（東から）

2．C 区　同北半部土層堆積状況（東から）

1．C 区　調査区東壁土層堆積状況（西から）

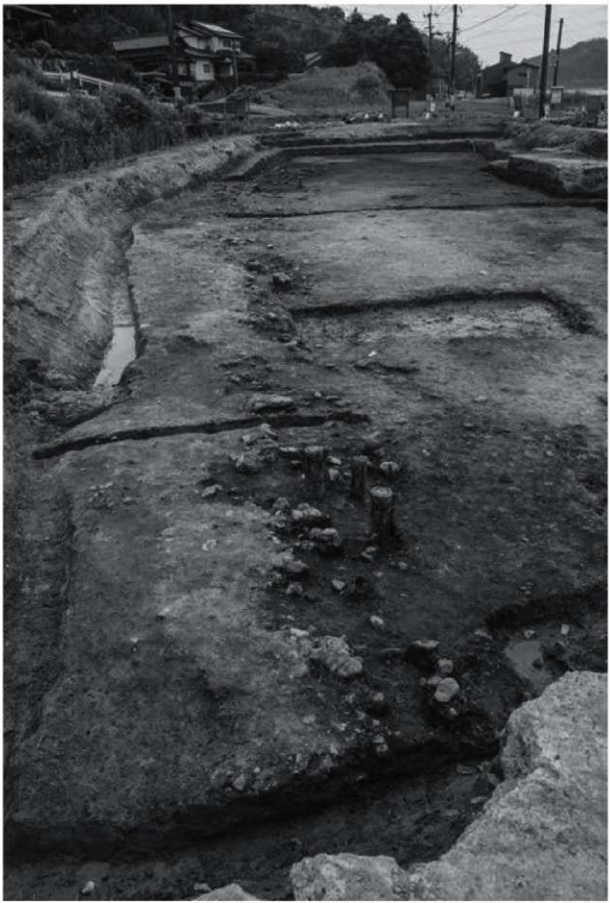
2．C 区　ベルト 1 土層堆積状況（北から）

1．C 区　礫敷遺構に見られる「石列」（南から）

2．C 区　礫敷遺構に打設された杭（東から）

1．D区　遠景（東から）

2．D区　全景（上空から）



1．D 区　礫敷遺構検出状況（西から）

1. D 区　完掘状況（西から）

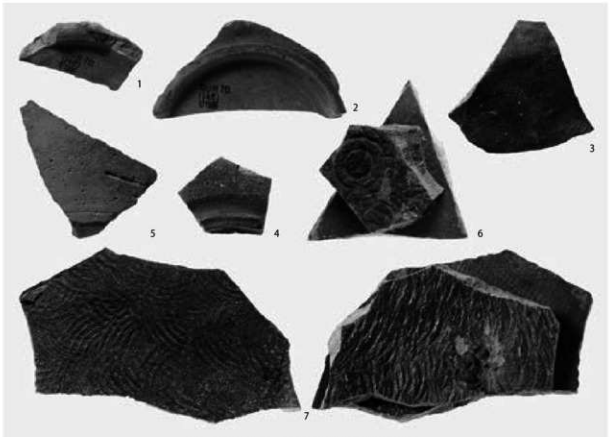
2. D-b5 区　完掘状況（南から）

1．D 区　下駄（66-4）出土状況（南から）

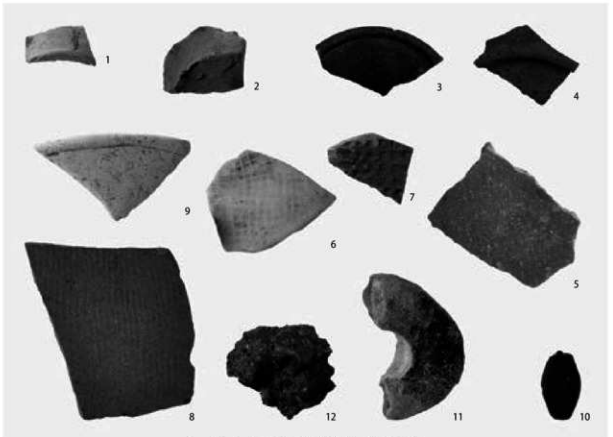
2．D 区　中央ベルト土層堆積状況（西から）

1．D区　調査区西壁土層堆積状況（東から）

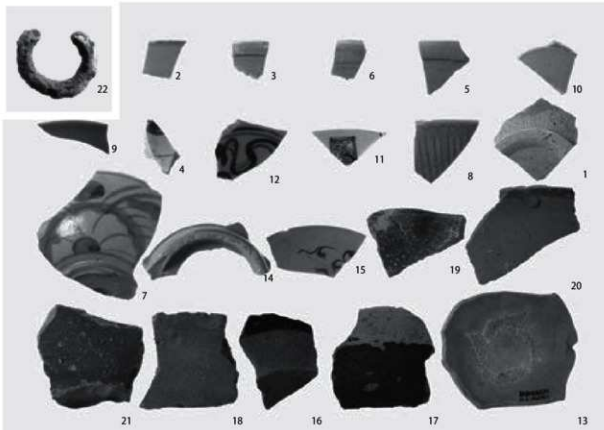
2．D区　同北半部土層堆積状況（東から）



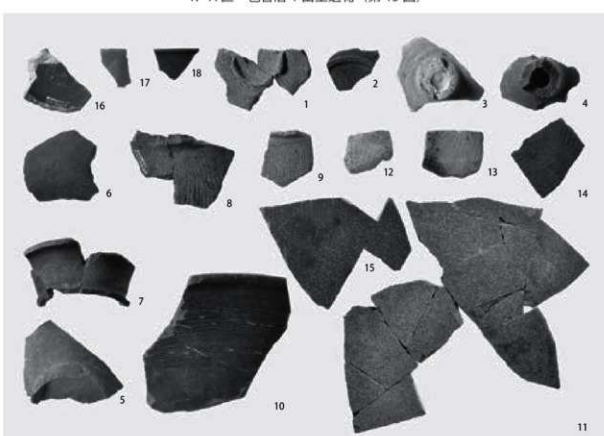
1．試掘トレンチ出土須恵器（第 3 図）



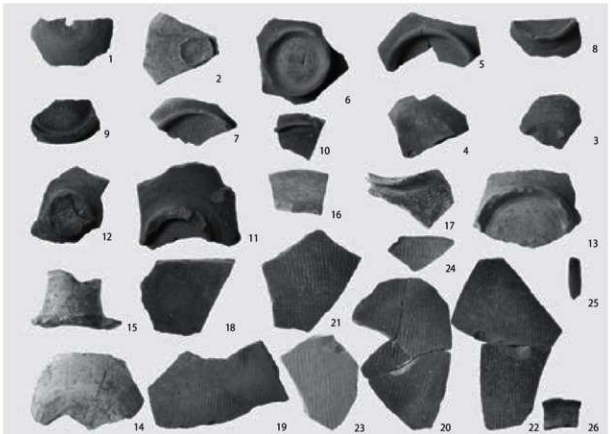
2．A 区　包含層 1 出土遺物（第 14 図）



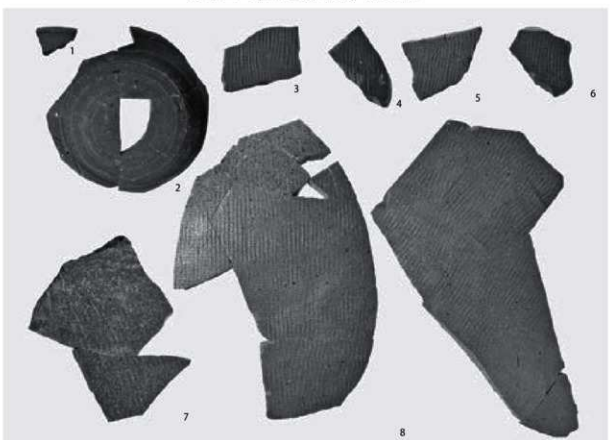
1. A 区　包含層 1 出土遺物（第 15 図）



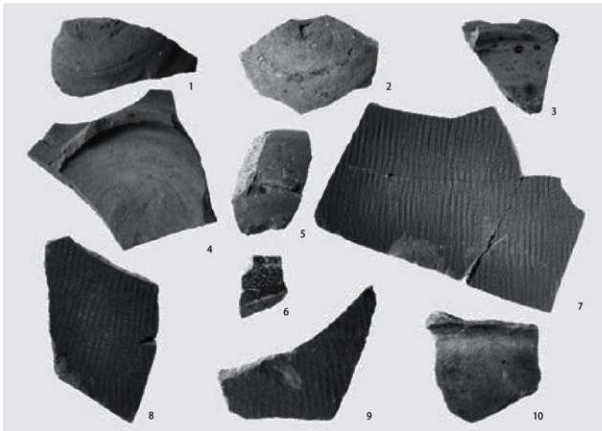
2. A 区　礫 1 層出土土器（第 16 図）



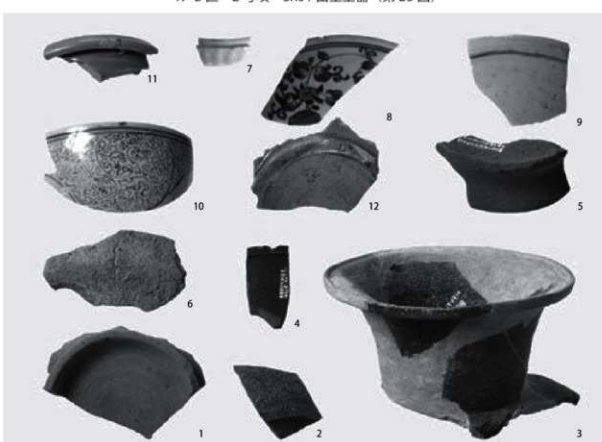
1．A区　包含層 2 出土遺物（第 17 図）



2．B区　1 号墳出土土器（第 19 図）



1．B 区　2 号墳・SK01 出土土器（第 23 図）



2．B 区　包含層出土土器（第 25 図）

32-8

32-11

32-15

32-16

32-20

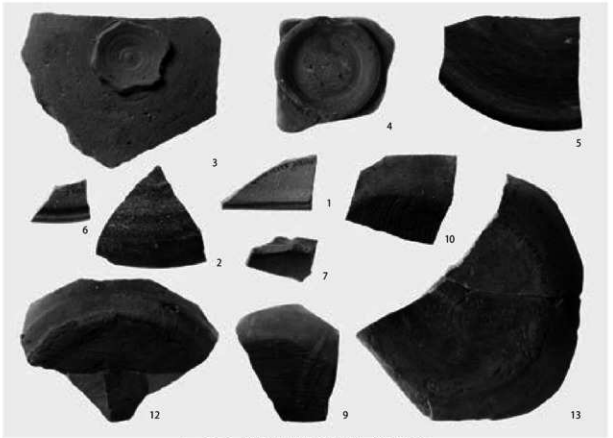
32-21

32-22

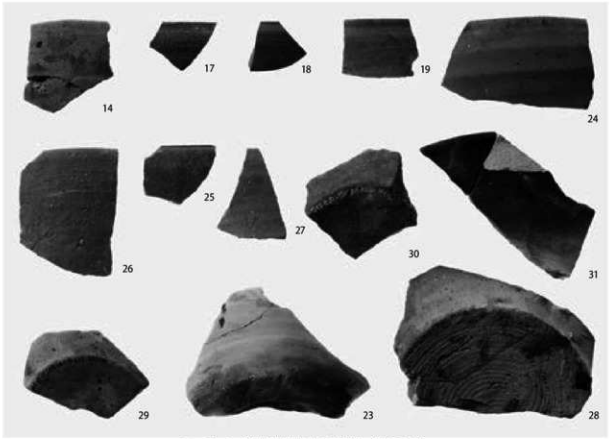
33-11

1．C区　礫敷遺構出土須恵器（第 32・33 図）

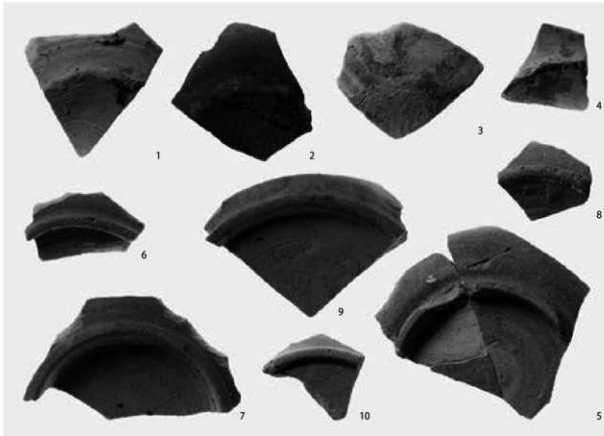
1．C 区　礫敷遺構・包含層 2 出土遺物（第 33・34・45 図）



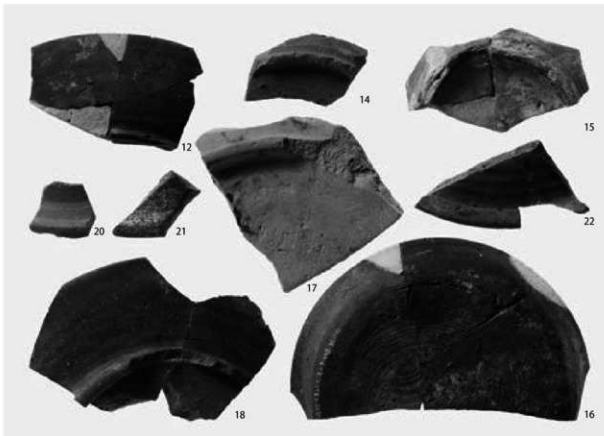
1．C 区　礫敷遺構出土須恵器（第 32 図）



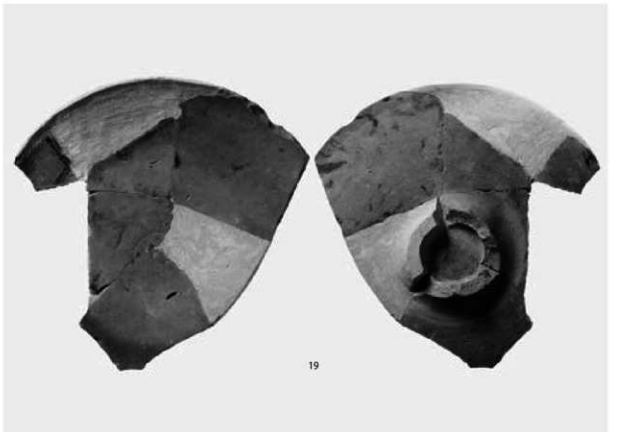
2．C 区　礫敷遺構出土須恵器（第 32 図）



1．C区　礫敷遺構出土須恵器（第 33 図）

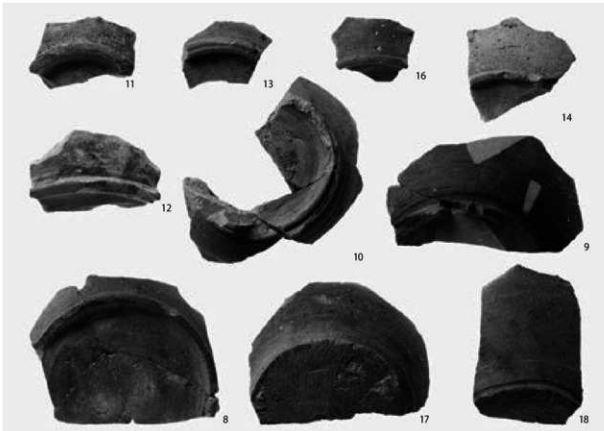


2．C区　礫敷遺構出土須恵器（第 33 図）



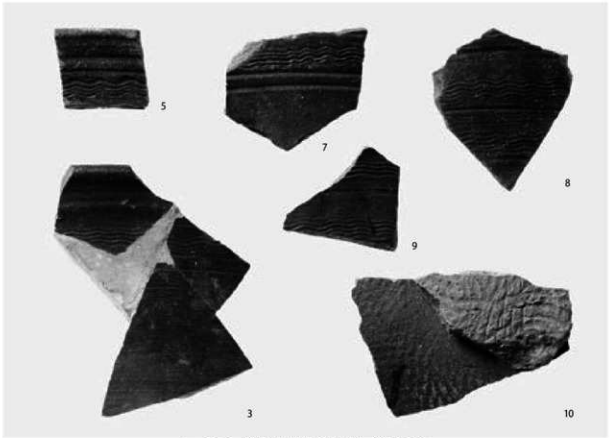
1．C 区　礫敷遺構出土須恵器（第 33 図）

2．C 区　礫敷遺構出土須恵器（第 34 図）

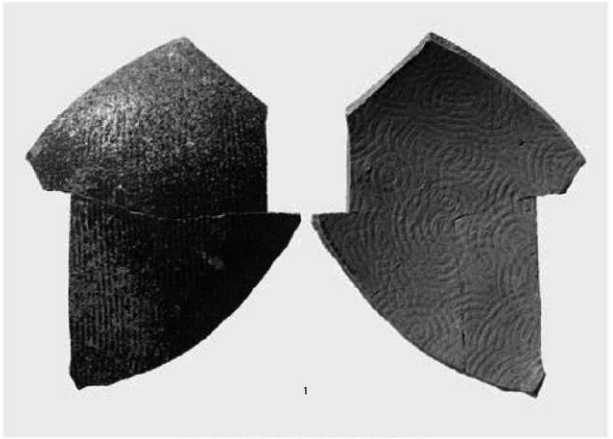


1. C区　礫敷遺構出土須恵器（第 34 図）

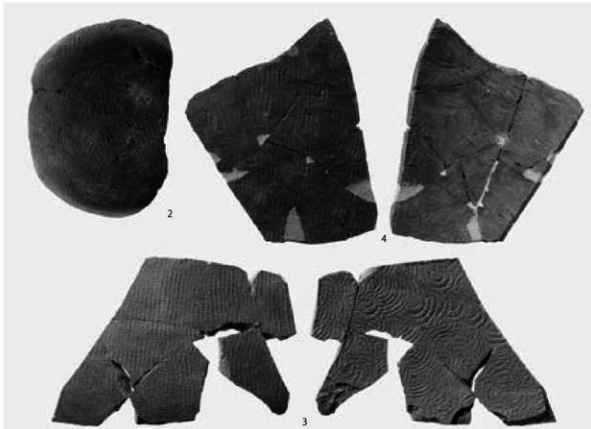
2. C区　礫敷遺構出土須恵器（第 35 図）



1．C 区　礫敷遺構出土須恵器（第 35 図）



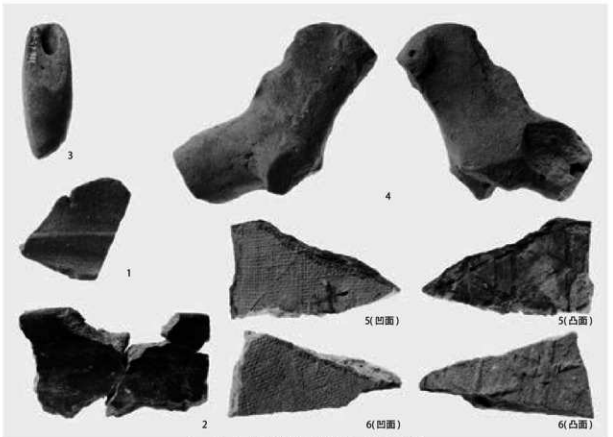
2．C 区　礫敷遺構出土須恵器（第 36 図）



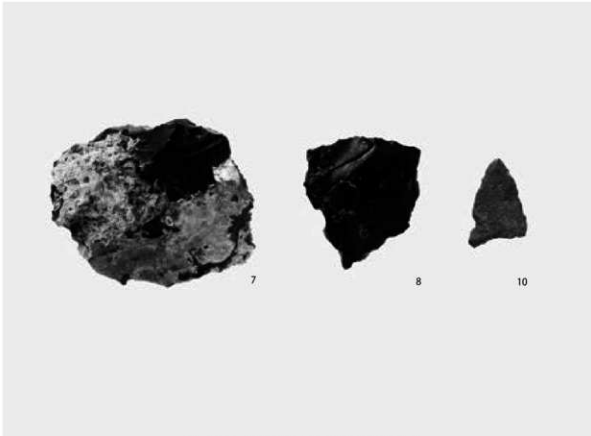
1．C 区　礫敷遺構出土須恵器（第 36 図）

2．C 区　礫敷遺構出土須恵器（第 37 図）

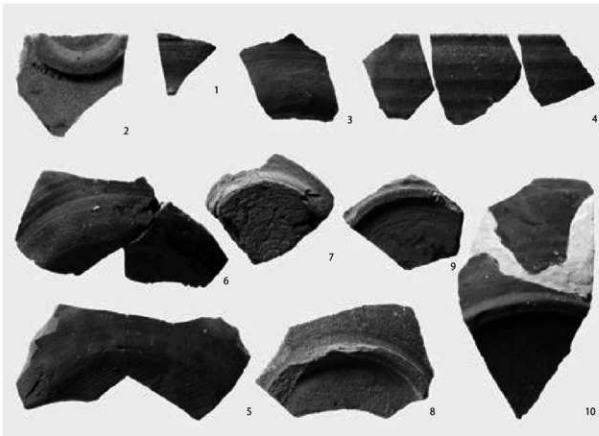
1．C 区　礫敷遺構出土須恵器（第 37 図）



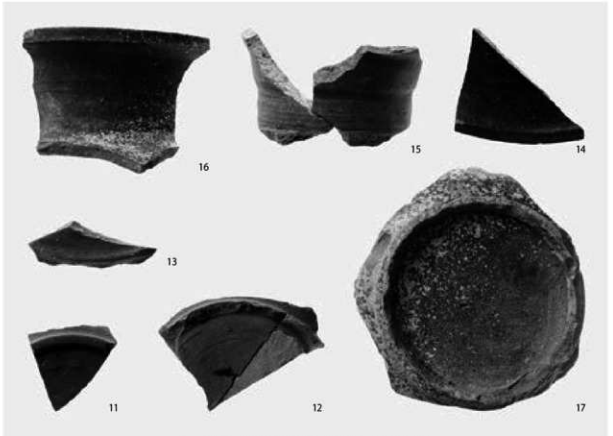
2．C 区　礫敷遺構出土遺物（第 38 図）



1．C区　礫敷遺構出土石器（第 38 図）

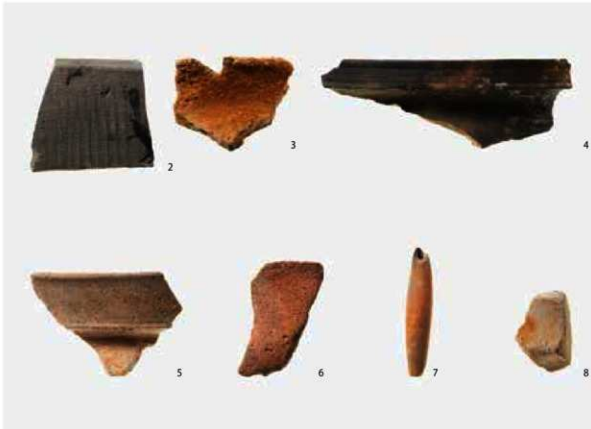


2．C区　包含層 1 出土須恵器（第 40 図）



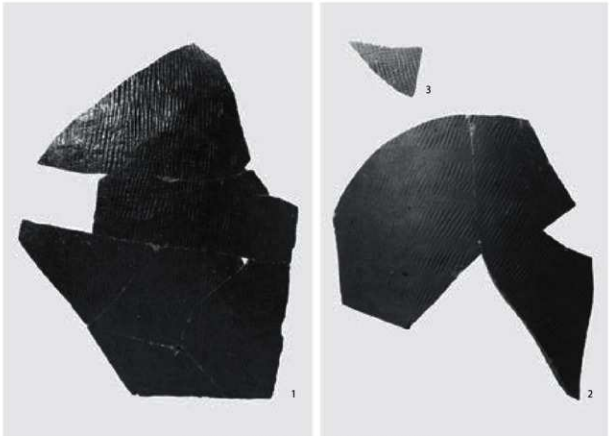
1．C 区　包含層 1 出土須恵器（第 40 図）

2．C 区　包含層 1 出土須恵器（第 41 図）

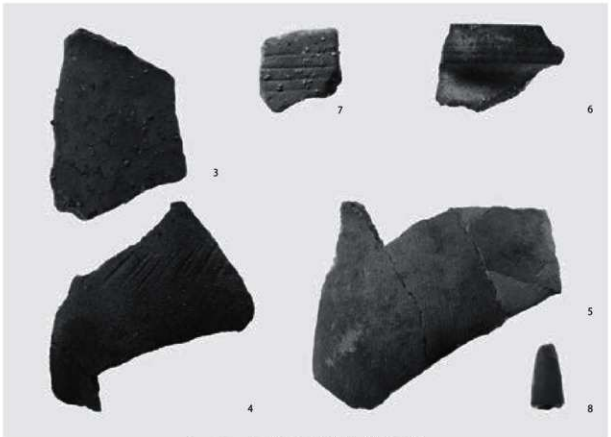


1．C区　包含層 1 出土遺物（第 41 図）

2．C区　包含層 1 出土陶磁器（第 41 図）



1．C 区　包含層 2 出土須恵器（第 44 図）

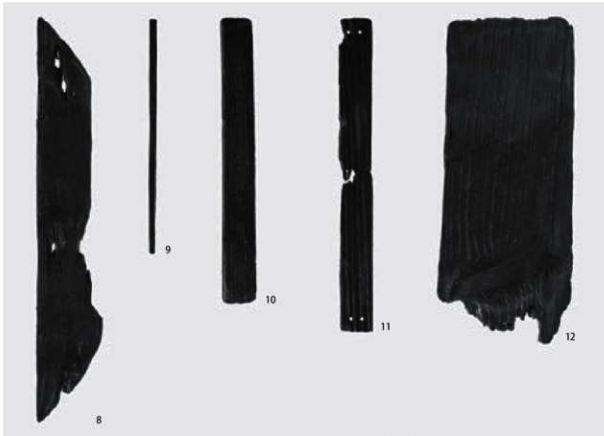


2．C 区　包含層 2 出土遺物（第 45 図）

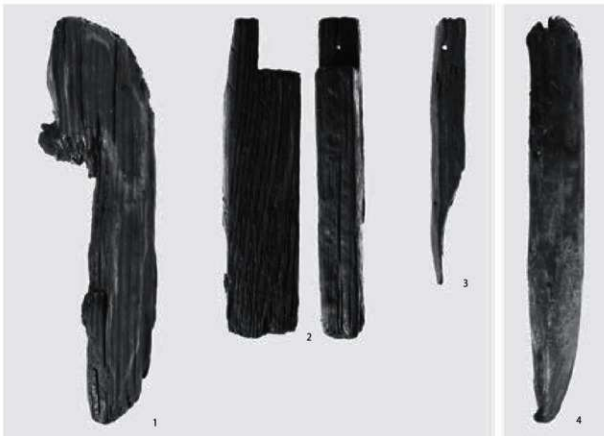
1．C 区　礫敷遺構出土杭・木製品（第 39 図）

1．C 区　包含層 1 出土木製品（第 42 図）

2．C 区　包含層 1 出土木製品（第 42 図）

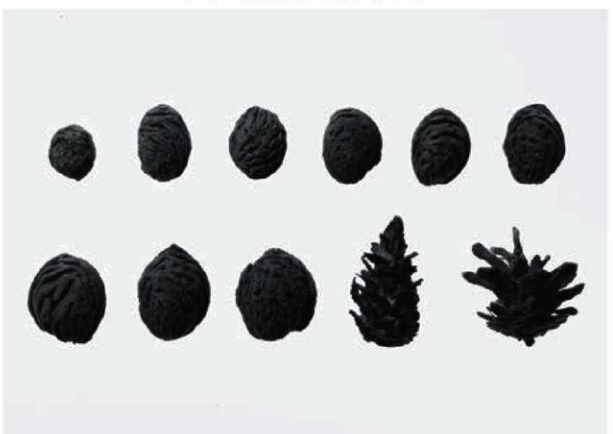


1．C区　包含層 1 出土木製品（第 42 図）

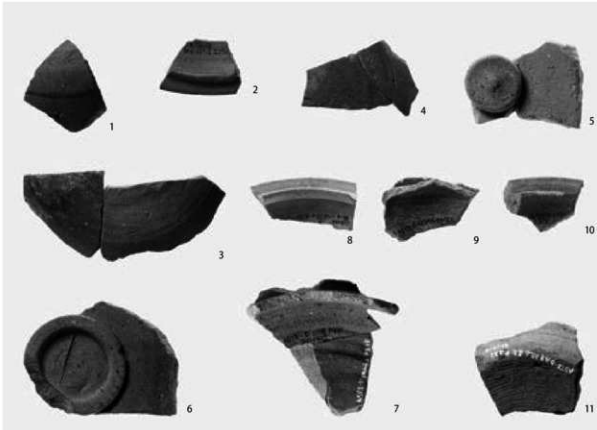


2．C区　包含層 1 出土木製品（第 43 図）

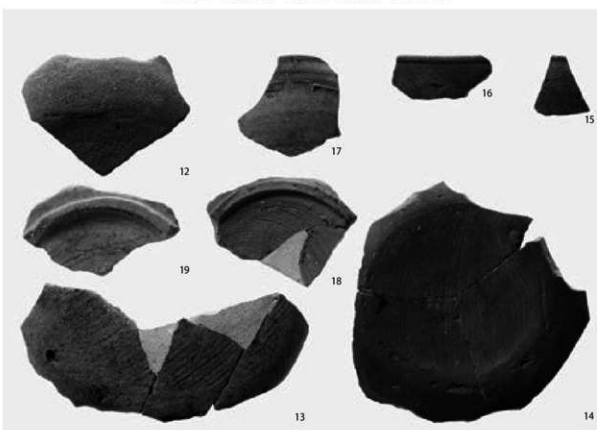
1. C 区　包含層 2 出土木製品（第 46 図）



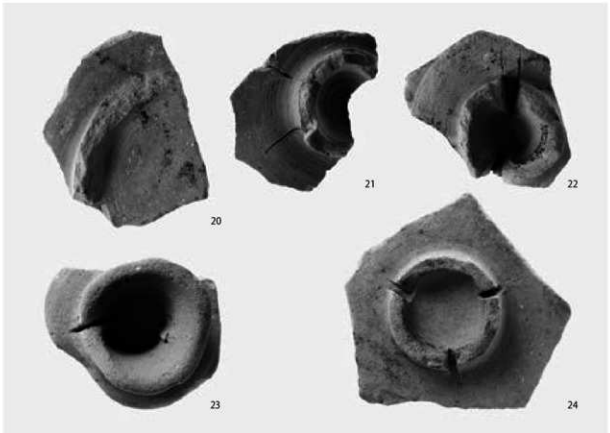
2. C 区　礫敷遺構出土種子



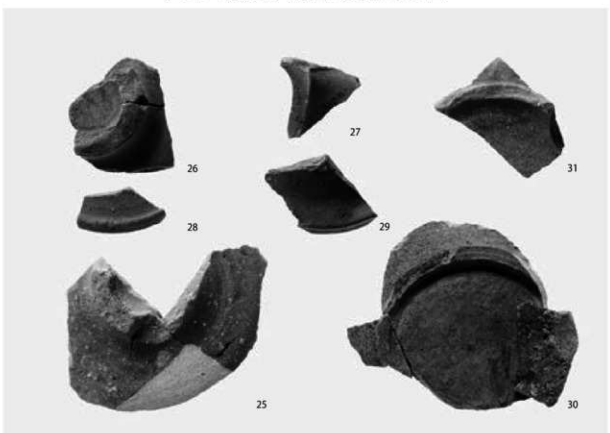
1．D 区　礫敷遺構・礫層出土須恵器（第 54 図）



2．D 区　礫敷遺構・礫層出土須恵器（第 54 図）

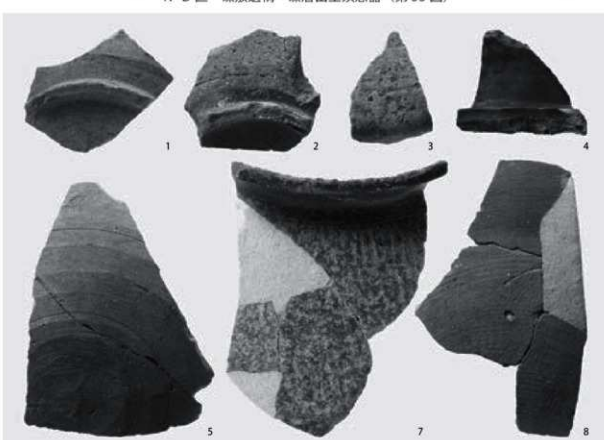


1．D 区　礫敷遺構・礫層出土須恵器（第 54 図）

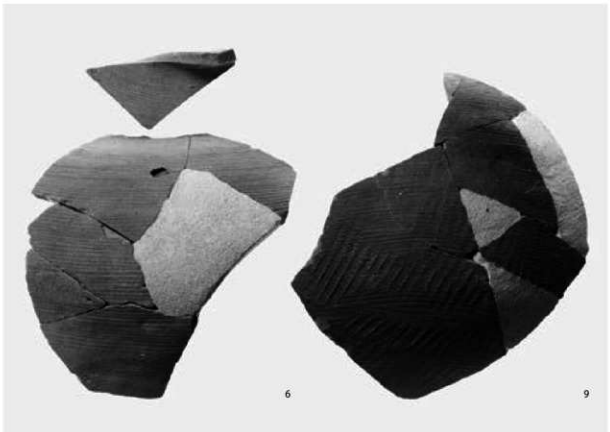


2．D 区　礫敷遺構・礫層出土須恵器（第 54 図）

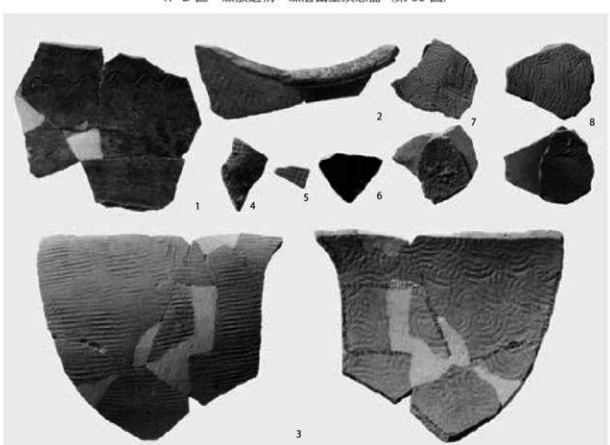
1．D 区　礫敷遺構・礫層出土須恵器（第 55 図）



2．D 区　礫敷遺構・礫層出土須恵器（第 55 図）



1．D 区　礫敷遺構・礫層出土須恵器（第 55 図）

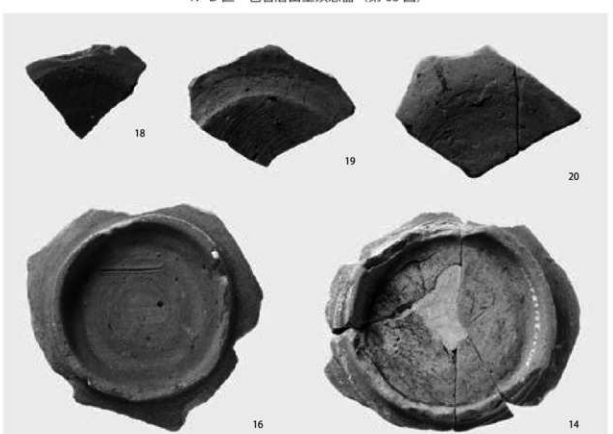


2．D 区　礫敷遺構・礫層出土須恵器（第 56 図）

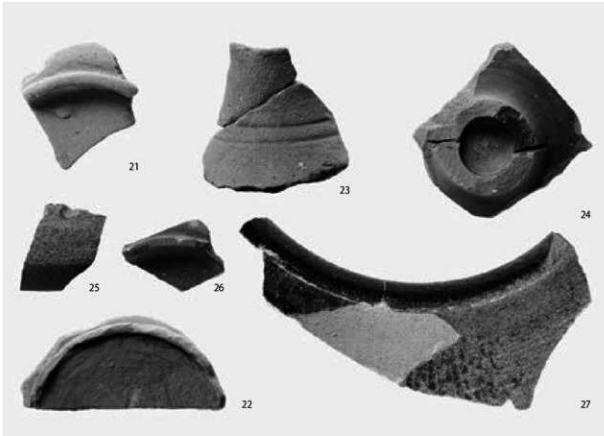
1．D 区　礫敷遺構・礫層出土須恵器（第 56 図）

2．D 区　礫敷遺構・礫層出土遺物（第 57 図）

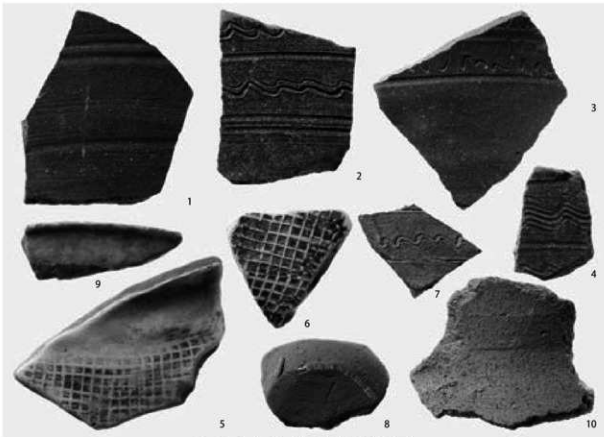
1．D区　包含層出土須恵器（第 63 図）



2．D区　包含層出土須恵器（第 63 図）



1. D区　包含層出土須恵器（第 63 図）



2. D区　包含層出土土器（第 64 図）

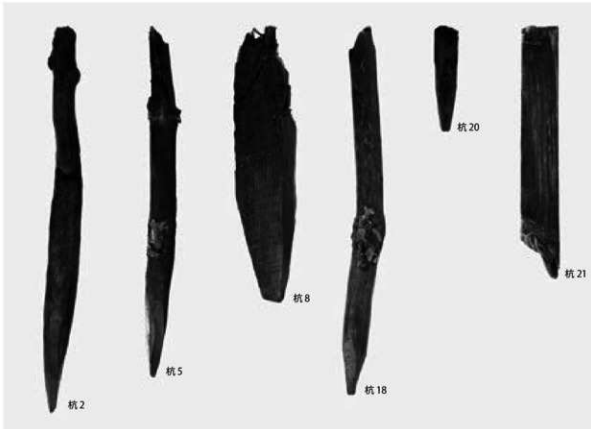
1．D 区　包含層出土遺物（第 64 図）

2．D 区　包含層出土陶磁器（第 65 図）

1. D 区　包含層出土陶磁器（第 65 図）

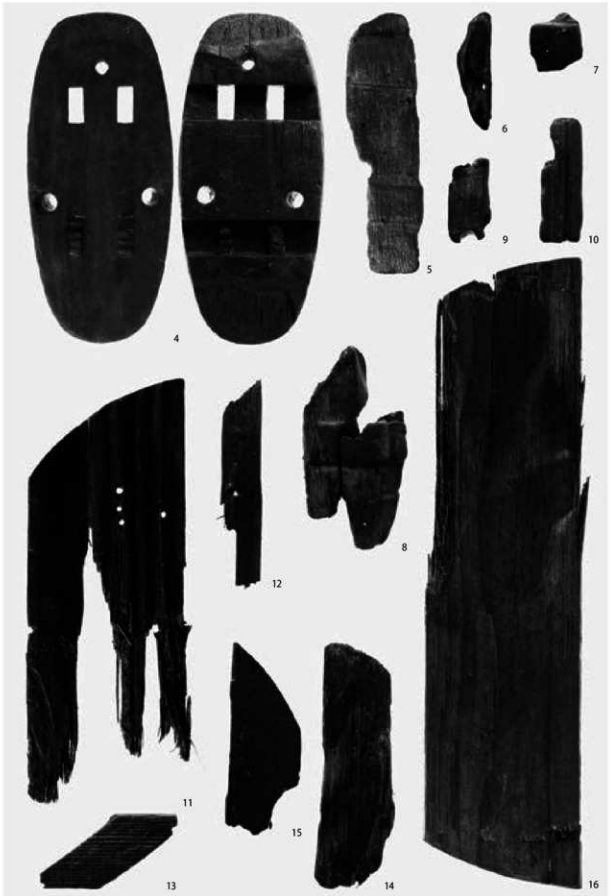
2. D 区　包含層出土陶磁器（第 65 図）

1．D区　礫敷遺構・礫層出土木製品（第 58 図）



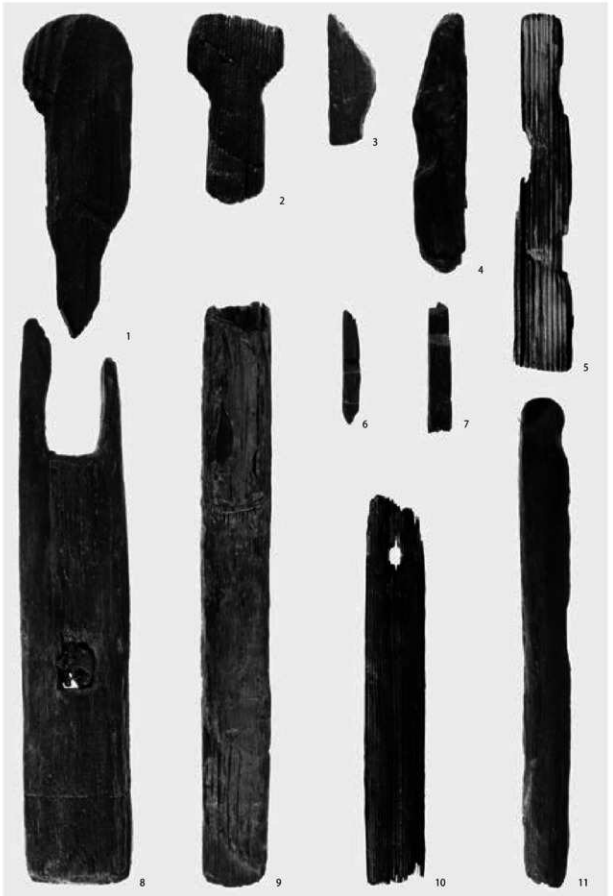
1. D区　杭（第 60 図）

2. D区　包含層出土木製品（第 66 図）

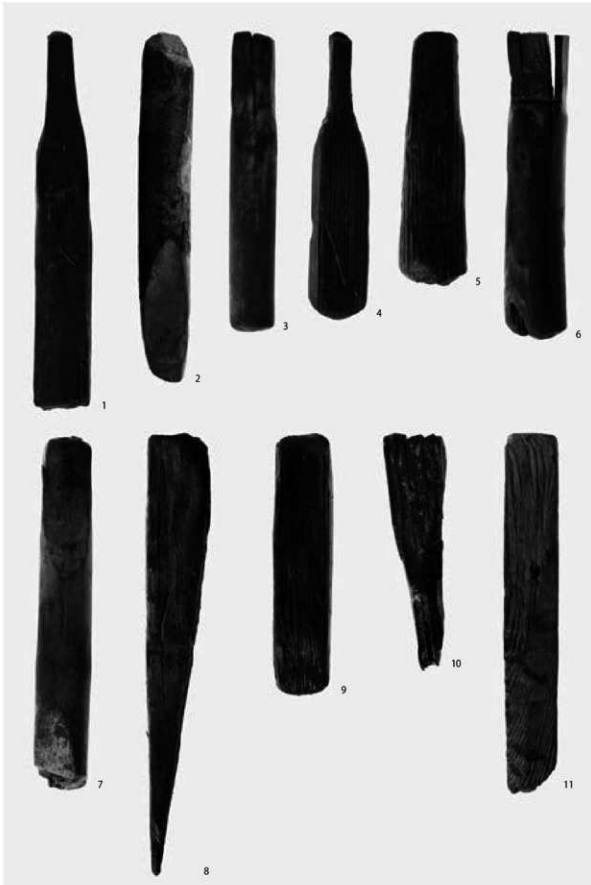


1．D区　包含層出土木製品（第 66 図）

1．D 区　包含層出土木製品（第 67 図）



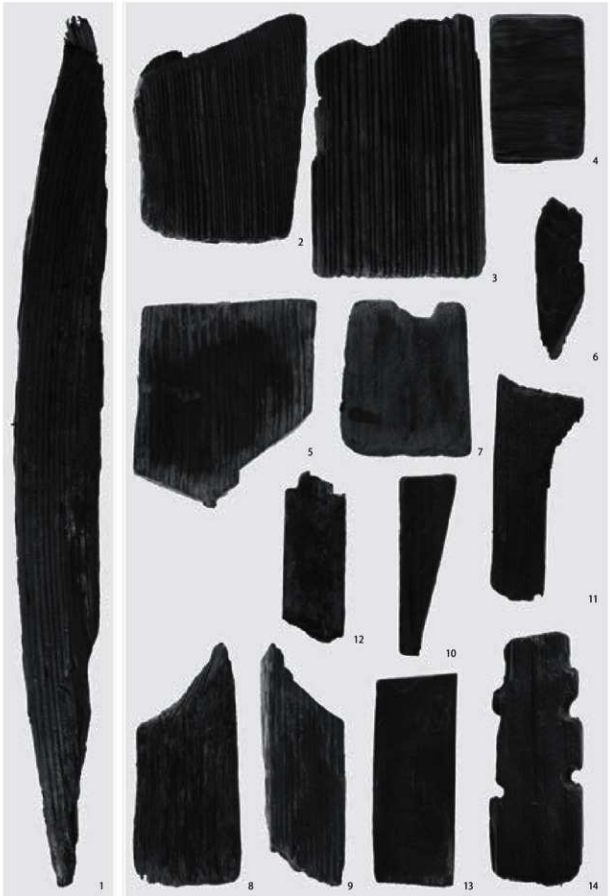
1．D区　包含層出土木製品（第 68 図）



1．D 区　包含層出土木製品（第 69 図）

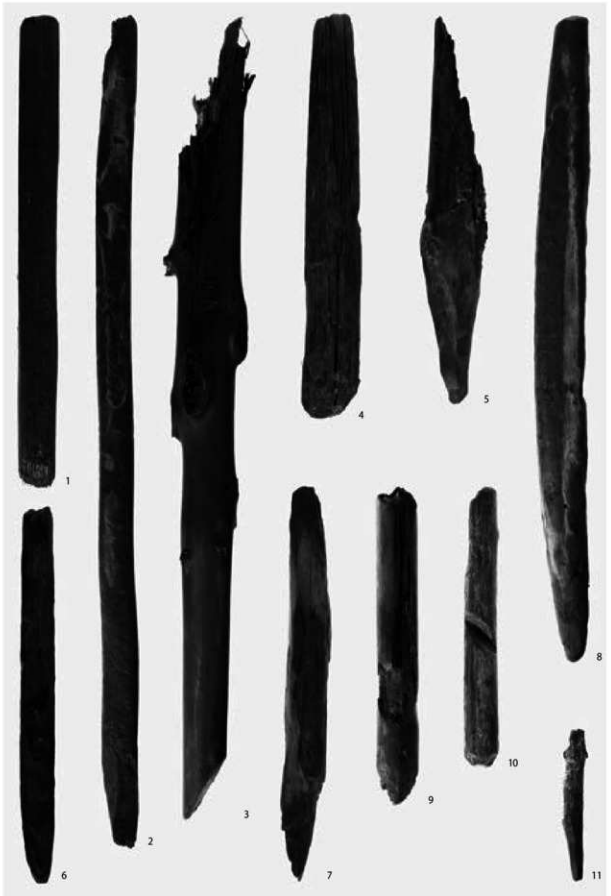
1．D 区　包含層出土木製品（第 69 図）

1. D 区　包含層出土木製品（第 70 図）



1．D区　包含層出土木製品（第 71 図）

1．D 区　包含層出土木製品（第 72 図）



1．D区　包含層出土木製品（第 73 図）

報 告 書 抄 録

ふりがな	あさくみやだにいせき
書　　名	朝酌矢田Ⅱ遺跡（A～D区）
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	斐伊川水系大橋川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	3
編 著 者 名	岩崎孝平（編）　廣江耕史　渡辺正巳　酒井哲弥
編 集 機 関	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
所 在 地	〒690-0131　島根県松江市打出町33番地　　TEL：0852-36-8608　FAX：0852-36-8025 E-mail：maibun@pref.shimane.lg.jp　　https://www.pref.shimane.lg.jp/maizobunkazai/
発 行 機 関	島根県教育委員会
発行年月日	2022（令和4）年8月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
あさくみやだにいせき 朝酌矢田Ⅱ遺跡	しまねけん 島根県 まつえし 松江市 あさくみちょう 朝酌町	32201	D1199	35°27′12″	133°06′11″	20190617 ～1129 20200610 ～1218	2,602㎡	記録保存調査 （河川改修）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
朝酌矢田Ⅱ遺跡	古墳 交通	古墳時代 ～ 奈良時代	方墳2基 礫敷遺構	須恵器・土師器 木製品・陶磁器	『出雲国風土記』に記載される「朝酌渡」と関連する礫敷遺構を検出。

要　　約	朝酌矢田Ⅱ遺跡は、大橋川が最も河川幅員を狭める北岸に位置し、北側には低丘陵が迫る。『出雲国風土記』島根郡条に「朝酌促戸」として登場する地域である。奈良時代においては、出雲国庁から隠岐国へ至る古代官道「枉北道」が縦断し、水陸両交通の要衝であったことが知られている。遺跡北方の低丘陵上では小規模な方墳が2基検出され、河川に面する低地では古代の礫敷遺構が2箇所で確認された。後者は、『出雲国風土記』記載の渡し場「朝酌渡」に関連する施設である可能性が高いことが明らかとなった。古代官道に伴う渡し場の発見は全国的にも希少であり、古代の交通や土木技術を考える上で注目される。またこうした成果は、考古学・古代史研究に大きく寄与するだけでなく、古代出雲の実態を把握する上でも重要な成果といえる。

朝酌矢田Ⅱ遺跡
（A ～ D区）
斐伊川水系大橋川河川改修に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書3

発　行　2022（令和4）年8月
発行者　島根県教育委員会
編　集　島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
〒690-0131　島根県松江市打出町33番地
TEL 0852-36-8608
印　刷　株式会社谷口印刷
島根県松江市東長江町902-59